

仙台市文化財調査報告書第 312 集

川内 A 遺跡

— 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書 I —

2007年2月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第312集

川内 A 遺跡

—仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書 I—

2007年2月

仙台市教育委員会



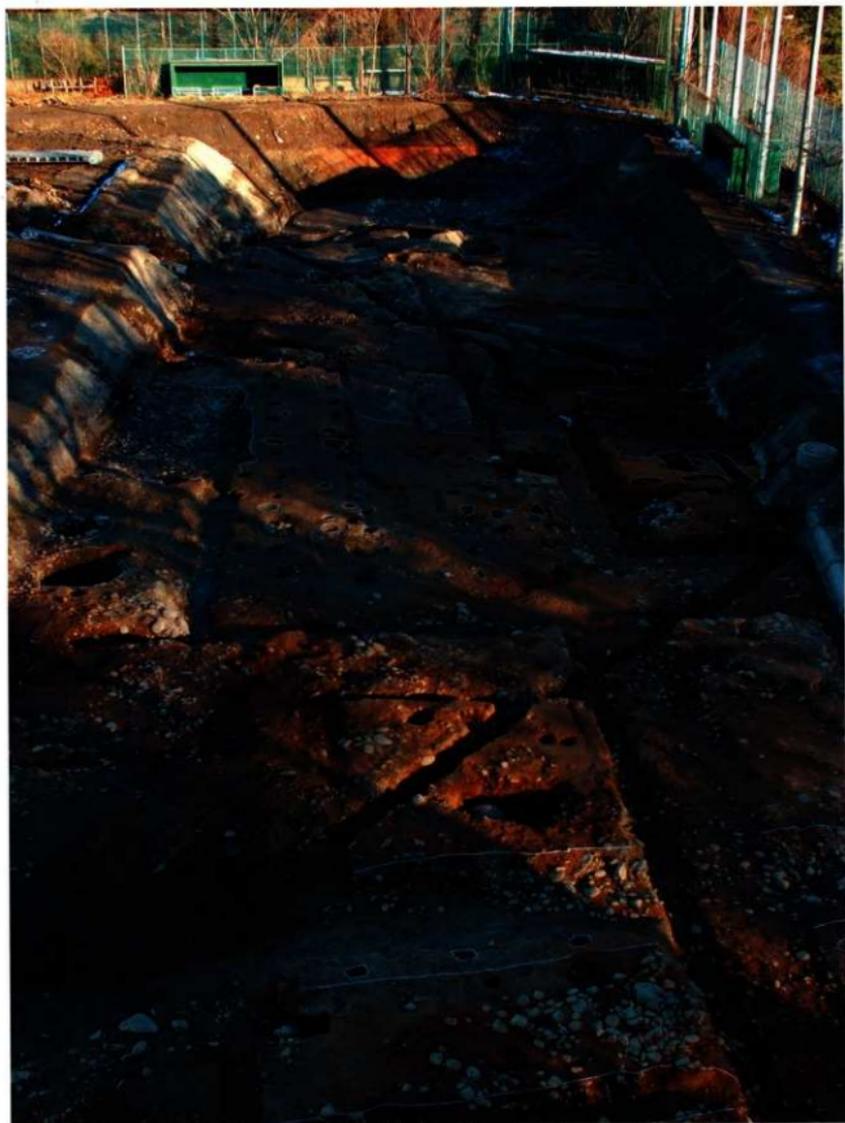
明治元年現狀仙台城市之圖（⇒は調査区）



沢跡 (SR1) 検出全景 (北西より)



沢跡 (SR1) 完掘全景 (北より)



III～IV層（近世面）全景（西より）



SB1 コンクリート床面検出状況（北より）



SB1 コンクリート床下玉石検出状況（北より）



出土した陶器（基本層Ⅰ～Ⅲ層）



出土した陶器（左から SX30、SD4、Ⅰ～Ⅱ層）



出土した陶器 (SX4 出土の土瓶)



出土した陶器 (SX4 出土の産地不明陶器)

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろから多大なご協力を賜り、まことに感謝にたえません。

さて、当市では、暮らしやすく環境にやさしい新しい都市づくりを進めるため、軌道系交通機関を機軸とした、まとまりのある集約型の市街地形成への転換を図っており、その主要な施策として、高速鉄道東西線プロジェクトを進めております。

この計画路線内には、仙台城の関連遺跡があり、また、未発見の遺跡も予測されることから、仙台市教育委員会では、施工主体者仙台市交通局との協議を重ね、平成16年度より確認・試掘調査を行ってまいりました。川内A遺跡は、仙台城二の丸跡の東側に位置し、平成16年度の試掘調査により、仙台城の関連遺跡として新たに遺跡登録され、翌平成18年に、1年間にわたる本格的な発掘調査を実施しました。その結果、近世を主とする貴重な資料が得られております。本書は、この両年度における川内A遺跡の発掘調査成果の本報告書であり、高速鉄道東西線関係の本報告書としては、第1冊目に当るものとなります。

先人の残した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私たちの大きな責務であると考えております。また、文化財の保護につきましては、地域の皆様の深いご理解とご協力が必要となります。その意味でも、今回の調査成果が地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、多くの方々に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際しまして、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成19年2月

仙台市教育委員会
教育長 奥山 恵美子

例言

1. 本書は高速鉄道東西線建設事業の建設に伴い実施された、川内 A 遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国際航業株式会社から仙台市教育委員会の委託を受け、仙台市教育委員会の指導のもとに行った。
3. 本書の作成・編集・執筆は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 佐藤甲二の指導のもとに、国際航業株式会社 竹内俊之・十橋尚起・守谷健吾・小林孝彰が担当した。本文の執筆分担については文末に記した。
4. 本調査の実施及び報告書の作成に際し、次の諸氏・機関よりご指導、ご教示、さまざまな御協力を賜った。記して謝意を表す次第である（敬称略順不同）。

藤沢 敦・高木鶴亮・柴田恵子（東北大学埋蔵文化財調査研究センター） 松本秀明（東北学院大学）

野中奈津子（東北大学大学院） 佐藤 洋（仙台市博物館） 斎藤鋭雄（宮城県農業短期大学）

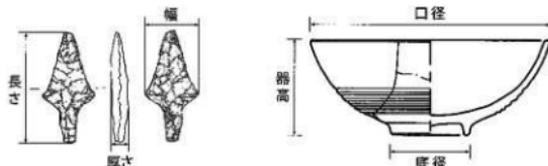
鈴木 啓（福島県考古学会） 西 和夫（神奈川大学） 田中則和（仙台市富沢遺跡保存館）

仙台市交通局 仙台市建設局 （財）仙台観光コンベンション協会 仙台市戦災復興記念館

5. 発掘調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡例

1. 本書の土色は、新版標準土色帳（農林水産省農林水産技術会議事務局 1998 年版）に準拠している。
2. 本書中の第 1 図は国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「仙台」と 1 万分の 1 地形図「青葉山」「仙台駅」を合成した。
3. 図中の座標値は日本測地系座標を使用した。
4. 本文図版等で使用した方位は真北を基準としている。
5. 標高値は、海拔高度（TP）を示している。
6. 遺構図は 1/60 縮尺を基本とした。その他については各国のスケールを参照されたい。
7. 基本層の表記は、表上層からローマ数字を用い、遺構堆積上についてはアラビア数字で表記した。
8. 遺構名の略称として SA：柱穴跡、SB：建物跡、SD：溝跡、SE：井戸跡、SK：土坑、P：ピット、SX：性格不明遺構を使用した。
9. 遺構図において、（スクリーンパターン）で礎を示している。
10. 遺物の登録・整理及び報告書での表示には、以下の分類と略号を使用した。
A：縄文土器、F：丸瓦・軒丸瓦、G：平瓦・軒平瓦、H：その他の瓦、I：陶器・瓦質土器・土師質土器
J：磁器、K：石器・石製品、N：金属製品、O：自然遺物、P：土製品、X：その他の遺物
11. 遺物実測図は原則として縮尺 1/3 としたが、古銭は原寸で表示した。
12. 遺物実測図において、外形線・中心線・稜線は実線、推定線は破線で、釉薬部の境は一点鎖線で表した。中心線が一点鎖線の場合は、展開し図上復元したものである。
13. 遺物観察表で陶磁器類の成形技法は、大部分がロクロ形成であるために、他の技法を記載した。
14. 写真図版の星印（★）については近現代の参考資料として掲示したものであり、実測図は作成していない。



本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2
第2章 遺跡概要	3
第1節 立地と歴史的環境	3
(1) 立地	3
(2) 近世から近代	4
(3) 近代から現代	4
第2節 調査方法	8
(1) 調査方法	8
(2) 調査区グリッドの設定	8
(3) 遺構名称及び欠番と変更	8
第3節 調査区基本層序	10
第4節 調査概要	12
(1) 現地調査	12
(2) 整理作業	13
第3章 検出遺構と遺物	14
第1節 V層上面	14
1. 沢跡	15
(1) SR1a・b・c 沢跡	15
第2節 N b層上面	20
1. 井戸跡	21
(1) SE3 井戸跡	21
第3節 III層上面	22
1. 柱穴遺構	23
(1) SA1 柱穴列	23
2. 溝跡	23
(1) SD1 溝跡	23
(2) SD2 溝跡	25
(3) SD5 溝跡	25
3. 井戸跡	26
(1) SE2 井戸跡	26
(2) SE5 井戸跡	29
4. 柱跡	30
5. 性格不明遺構	32
(1) SX 4 性格不明遺構	32
(2) SX 6 性格不明遺構	50
(3) SX20 性格不明遺構	50
(4) SX24 性格不明遺構	51
(5) SX25 性格不明遺構	51
(6) SX26 性格不明遺構	52
(7) SX27 性格不明遺構	52
(8) SX28 性格不明遺構	53
(9) SX30 性格不明遺構	54
6. 整地層出土遺物	55
第4節 II b層上面	57
1. 建物跡	58
(1) SB 1 建物跡	58
(2) SB4 建物跡	62
(3) 擁壁跡	62
2. 土坑	63
(1) SK2 土坑	63
(2) SK3 土坑	63
(3) SK4 土坑	63

3. 溝跡	64
(1) SD4 溝跡	64
4. 井戸跡	67
(1) SE1 井戸跡	67
(2) SE4 井戸跡	69
(3) SE6 井戸跡	70
5. 暗渠跡	71
6. 道路状遺構	71
7. 性格不明遺構	72
(1) SX1 性格不明遺構	72
(2) SX7、8、12～17 性格不明遺構	73
(3) SX22 性格不明遺構	75
第5節 遺構外の遺物	76
1. 基本層 Va 層	76
2. 基本層 I～IIc 層	78
第4章 出土遺物・検出遺構についての見解とまとめ	92
第1節 出土遺物について	92
1. 陶器・磁器	92
(1) 陶器	92
(2) 磁器	98
2. 陶器と磁器のまとめ	102
3. その他の遺物	103
(1) 土師質土器	103
(2) 瓦質土器	103
(3) 金属製品	103
(4) 木製品	103
(5) 瓦	104
第2節 検出遺構について	105
1. 近世以前	105
(1) 沢跡	105
2. 近世	105
(1) 柱列跡と溝跡	106
(2) 井戸跡	107
(3) 柱跡	107
(4) 性格不明遺構	108
(5) 沢跡	109
(6) 各遺構の時期区分	109
3. 近代	110
(1) 建物跡	110
(2) 沢跡	111
第5章 まとめ	112
付 章 その他近代の出土遺物	113
(1) 土管	113
(2) 銃弾	113
(3) 間知石	113
参考文献	115

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	1	第36図	SX4 性格不明遺構出土遺物 6	38
第2図	河岸段丘分布図	3	第37図	SX4 性格不明遺構出土遺物 7	39
第3図	絵図・古地図における調査区の位置	5	第38図	SX4 性格不明遺構出土遺物 8	40
第4図	周辺遺跡分布図	6	第39図	SX4 性格不明遺構出土遺物 9	41
第5図	仙台城跡と川内 A 遺跡	7	第40図	SX4 性格不明遺構出土遺物 10	42
第6図	グリッド設定図	9	第41図	SX4 性格不明遺構出土遺物 11	43
第7図	基本層序柱状図	10	第42図	SX4 性格不明遺構出土遺物 12	44
第8図	調査区北壁断面図	11	第43図	SX4 性格不明遺構出土遺物 13	45
第9図	土層断面図作成位置図	12	第44図	SX4 性格不明遺構出土遺物 14	46
第10図	V 層上面遺構配置図	14	第45図	SX4 性格不明遺構出土遺物 15	47
第11図	SR1c 沢跡 平面図	15	第46図	SX4 性格不明遺構出土遺物 16	48
第12図	IVc 層分布範囲	16	第47図	SX4 性格不明遺構出土遺物 17	49
第13図	SR1b 沢跡及びIVb 層分布範囲	17	第48図	SX6 性格不明遺構 平・断面図及び出土遺物	50
第14図	SR1a 沢跡及びIVa 層分布範囲	17	第49図	SX20 性格不明遺構 平・断面図	50
第15図	SR1c ~ a 沢跡 断面図	18	第50図	SX24 性格不明遺構 平・断面図	51
第16図	IVa 層出土遺物	19	第51図	SX25 性格不明遺構 平・断面図	51
第17図	IVb 層上面遺構配置図	20	第52図	SX26 性格不明遺構 平・断面図	52
第18図	SE3 井戸跡 平・断面図	21	第53図	SX27 性格不明遺構 平・断面図	52
第19図	III 層上面遺構配置図	22	第54図	SX28 性格不明遺構 平・断面図及び出土遺物	53
第20図	SA1 柱穴列跡 平・断面図	23	第55図	SX30 性格不明遺構 平・断面図及び出土遺物	54
第21図	SD1 溝跡 平・断面図及び出土遺物	24	第56図	整地層出土遺物 1	55
第22図	SD2 溝跡 平・断面図	25	第57図	整地層出土遺物 2	56
第23図	SD5 溝跡 平・断面図	25	第58図	II b 層上面遺構配置図	57
第24図	SE2 井戸跡 平・断面図及び立面図	26	第59図	SBI 建物跡 平面図及び基礎断面図	59
第25図	SE2 井戸跡 断面図及び出土遺物	27	第60図	SBI 建物跡 基礎及び主体部断面図	59
第26図	SE2 井戸跡 出土遺物	28	第61図	SBI 建物跡 コンクリート床除去後 平・断面図	60
第27図	SE5 井戸跡 平・断面図及び出土遺物	29	第62図	SBI 建物跡 コンクリート地中梁基礎 平面図	60
第28図	柱跡 平・断面図	30	第63図	SBI 建物跡 掘り方 平面図	61
第29図	柱跡 断面図及び出土遺物	31	第64図	SBI 建物跡出土遺物	61
第30図	SX4 性格不明遺構 平・断面図	32	第65図	SB4 建物跡 平・断面図	62
第31図	SX4 性格不明遺構出土遺物 1	33	第66図	擁壁跡 平・断面図	62
第32図	SX4 性格不明遺構出土遺物 2	34	第67図	SK2 ~ SK4 土坑 平・断面図	63
第33図	SX4 性格不明遺構出土遺物 3	35			
第34図	SX4 性格不明遺構出土遺物 4	36			
第35図	SX4 性格不明遺構出土遺物 5	37			

第68図	SD4 溝跡 平・断面図及び出土遺物 1	64	第98図	陶器・磁器の比率	93
第69図	SD4 溝跡出土遺物 2	65	第99図	肥前	94
第70図	SD4 溝跡出土遺物 3	66	第100図	瀬戸・美濃	94
第71図	SE1 井戸跡 平面図及び立面図	67	第101図	萬古	95
第72図	SE1 井戸跡 断面図及び出土遺物 1	68	第102図	備前	95
第73図	SE1 井戸跡 出土遺物 2	69	第103図	大瀬相馬	95
第74図	SE4 井戸跡 平・断面図	69	第104図	小野相馬	96
第75図	SE6 井戸跡 平・断面図及び立面図	70	第105図	堤	96
第76図	暗渠跡 平・断面図	71	第106図	岸	96
第77図	道路状遺構 平・断面図	71	第107図	輪人陶器	97
第78図	SX1 性格不明遺構 平・断面図及び出土遺物	72	第108図	産地不明	97
第79図	SX7、8、12～17 性格不明遺構 平面図	73	第109図	磁器の年代別比率	98
第80図	SX7、8、12～17 性格不明遺構 断面図	74	第110図	肥前磁器年代別比率	98
第81図	SX7、13、17 性格不明遺構 出土遺物	74	第111図	17世紀の肥前磁器	99
第82図	SX22 性格不明遺構 平・断面図及び出土遺物	75	第112図	18世紀の肥前磁器	100
第83図	基本層 Va 出土遺物 1	76	第113図	19世紀の肥前磁器	100
第84図	基本層 Va 出土遺物 2	77	第114図	瀬戸・美濃磁器	101
第85図	基本層 I～IIc 層出土遺物 1	78	第115図	切込	101
第86図	基本層 I～IIc 層出土遺物 2	79	第116図	土師質土器	103
第87図	基本層 I～IIc 層出土遺物 3	80	第117図	瓦質土器	103
第88図	基本層 I～IIc 層出土遺物 4	81	第118図	金属製品	103
第89図	基本層 I～IIc 層出土遺物 5	82	第119図	木製品	103
第90図	基本層 I～IIc 層出土遺物 6	83	第120図	瓦	104
第91図	基本層 I～IIc 層出土遺物 7	84	第121図	近代の遺構配置図	105
第92図	基本層 I～IIc 層出土遺物 8	85	第122図	絵図に見る SD1・2 の推定位置	107
第93図	基本層 I～IIc 層出土遺物 9	86	第123図	建物配置想定図	108
第94図	基本層 I～IIc 層出土遺物 10	87	第124図	近代の遺構配置図	110
第95図	基本層 I～IIc 層出土遺物 11	88	第125図	調査区と沢跡・近代建物跡	111
第96図	基本層 I～IIc 層出土遺物 12	89	第126図	土管分類図	114
第97図	陶器・磁器の比率	92	第127図	出土した銃弾	114
			第128図	間知石	114

写真図版目次

図版 1	遺跡周辺航空写真(昭和20年5月25日・米軍撮影) 及び第二師団建造物との照合図	118	図版 5	IVb 層上面 2・III層上面 1	122
図版 2	沢跡	119	図版 6	III層上面 2	123
図版 3	沢跡及び整地層 IV 層	120	図版 7	III層上面 3	124
図版 4	IVb 層上面 1	121	図版 8	III層上面 4	125
			図版 9	III層上面 5	126

図版10	Ⅲ層上面6	127	図版38	SX4出土遺物9	157
図版11	Ⅲ層上面7	128	図版39	SX4出土遺物10	158
図版12	Ⅲ層上面8	129	図版40	SX4出土遺物11	159
図版13	Ⅲ層上面9	130	図版41	SX4出土遺物12	160
図版14	Ⅲ層上面10	131	図版42	SX4出土遺物13	161
図版15	Ⅲ層上面11	132	図版43	SX4出土遺物14	162
図版16	Ⅱb層上面1	133	図版44	SX6及びSB1出土遺物	163
図版17	Ⅱb層上面2	134	図版45	SD1出土遺物1	164
図版18	Ⅱb層上面3	135	図版46	SD4出土遺物2	165
図版19	Ⅱb層上面4	136	図版47	SD4出土遺物3	166
図版20	Ⅱb層上面5	137	図版48	SE1出土遺物	167
図版21	Ⅱb層上面6	138	図版49	SX1及びSX7出土遺物	168
図版22	Ⅱb層上面7	139	図版50	SX13・SX17出土遺物 及びSX22出土遺物1	169
図版23	Ⅱb層上面8	140	図版51	SX22出土遺物2及びSX28・SX30 出土遺物	170
図版24	Ⅱb層上面9	141	図版52	Ⅲ層整地層出土遺物	171
図版25	SR1出土遺物及びSD1出土遺物1	144	図版53	基本層Va層出土遺物	172
図版26	SD1出土遺物2及びSE2出土遺物1	145	図版54	基本層I～II層出土遺物1	173
図版27	SE2出土遺物2	146	図版55	基本層I～II層出土遺物2	174
図版28	SE2出土遺物3	147	図版56	基本層I～II層出土遺物3	175
図版29	SE5出土遺物及び P17・P18・P20・P23出土遺物	148	図版57	基本層I～II層出土遺物4	176
図版30	SX4出土遺物1	149	図版58	基本層I～II層出土遺物5	177
図版31	SX4出土遺物2	150	図版59	基本層I～II層出土遺物6	178
図版32	SX4出土遺物3	151	図版60	基本層I～II層出土遺物7	179
図版33	SX4出土遺物4	152	図版61	基本層I～II層出土遺物8	180
図版34	SX4出土遺物5	153	図版62	基本層I～II層出土遺物9	181
図版35	SX4出土遺物6	154	図版63	基本層I～II層出土遺物10	182
図版36	SX4出土遺物7	155	図版64	基本層I～II層出土遺物11	183
図版37	SX4出土遺物8	156			

表目次

第1表	遺跡地名表	7	第2表	出土遺物総数表	90～91
-----	-------	---	-----	---------	-------

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

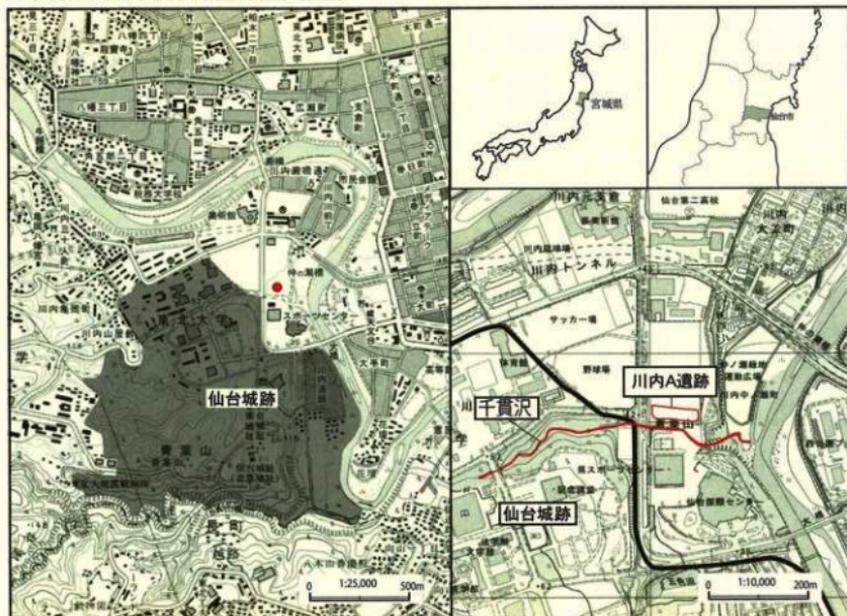
平成11年5月、仙台市教育委員会と当時事業主管局であった仙台市都市整備局との間で、高速鉄道東西線建設事業に伴う遺跡の取り扱いについての第1回目の協議が持たれた。その後、事業主管局は仙台市交通局に移され、平成15年度より仙台市教育委員会との本格的な協議が開始された。

高速鉄道東西線事業計画予定路線内における、周知の遺跡及び遺跡外の状況把握のため確認調査及び試掘調査をまず実施し、その結果を踏まえ本調査を実施する箇所を決定し、これを基に発掘調査を順次、事業計画に沿いながら進めていくことが両者間で確認された。

以上の協議事項に基づき、平成16年度より確認調査及び試掘調査を開始した。平成16年度の対象地域は、高速鉄道東西線予定路線西部の川内地区、青葉山地区、西公園地区で、18箇所の調査区、総面積448㎡の調査を実施した。

この内、仮称国際センター駅部（この対象地域の確認・試掘調査での便宜的区割りのA区）は、平成16年6月14日から6月25日までの間、6箇所、180㎡の試掘調査が実施された。その結果、近世を主とする遺構・遺物の存在が確認され（註1）、駅舎を中心とする範囲が平成16年7月15日付で、「川内A遺跡」とする新たな遺跡として登録された（宮城県遺跡登録番号01558）。

これを受け、仙台市教育委員会と仙台市交通局との協議の末、平成17年度に本調査を実施する運びとなり、平成17年6月13日より本調査を開始した。（佐藤）



第1図 調査区位置図

註1：仙台市文化財調査報告書209集「仙台市高速鉄道東西線開通路線発掘調査(1)無形報告書」仙台市教育委員会2005

第2節 調査要項

遺跡名	: 仙台城川内 A 遺跡
所在地	: 仙台市青葉区青葉山二丁目地内
調査主体	: 仙台市教育委員会 (生涯学習部文化財課)
調査担当	: 調査係主査 佐藤甲二 : 調査係主査 京野裕彦
調査機関	: 国際航業株式会社 主任調査員 竹内俊之 調査員 山崎良二・土橋尚起・守谷健吾 調査補助員 小林孝彰 計測員 佐々木亨 計測補助員 諸熊和彦・佐藤和己
調査面積	: 1973 m ²
調査期間	: 平成 17 年 6 月 13 日～平成 18 年 1 月 27 日



作業風景写真

第2章 遺跡概要

第1節 立地と歴史的環境

(1) 立地

川内 A 遺跡は仙台市青葉区川内 2 丁目に所在する。本遺跡は仙台市西部に張り出す広瀬川流域の河岸段丘上に位置し、仙台城二の丸跡（東北大学川内キャンパス）の北東、国際センターの北にあたる。仙台市の河岸段丘は上位より青葉山段丘・台ノ原段丘・仙台上町段丘・仙台中町段丘・仙台下町段丘の順で5面に区分される（註1）。段丘面の形成時期は、関東平野の成立過程と対比して考察されており、台ノ原段丘：下末吉期（13～12万年前）、仙台上町段丘：武蔵野期（10万～5万年前）、仙台中町段丘：立川期（3万年前）、仙台下町段丘は有楽町期に比定され、数千年前程度と考えられる（註2）。本遺跡はもともと広瀬川に近い仙台下町段丘面上にあり、標高40m前後に位置している。東は桜の小径を挟んで段丘崖となっており、約12mの比高差をもち広瀬川が流



第2図 河岸段丘分布図（註3）

註1：仙台市庁『仙台市写真集集一巻の巻のいまむかし』仙台市観光局、2001
 註2：中川久夫他『仙台付近の地形および地形史』地質研究 1,196

註3：(1:5000)地形図 仙台および建設省国土院発行の5万分の1地形図を使用

れる。また、南側は千貫沢が流れ、ともに急峻な崖が形成されている。

周辺の遺跡には、南約800mに仙台城本丸跡がある。仙台城は慶長5年(1600)、伊達政宗により築城が開始された山城である。本丸の北面に置かれた二の丸は二代藩主伊達忠宗により、寛永15年(1638)に着工、翌年に完成した。東西310メートル、南北200メートルの規模をはかる。江戸時代を通して藩政の中心であり、数度の地震や火災で建物を失うが、その都度再建された。明治2年(1869)に勤政庁、明治4年(1871)に東北鎮台が置かれた。明治15年(1882)には火災で二の丸の建物は全焼し失われている。明治21年(1888)には師団制が施行され、仙台鎮台に替わって(明治6年に東北鎮台から名称変更)陸軍第二師団司令部が置かれる。二の丸を中心に、現在の国際センター周辺、東北大学川内北キャンパス、川内郵便局の付近、川内住宅を含めた範囲まで広く第二師団の敷地となる。二の丸跡は現在川内南キャンパスにあたり、二の丸の北側に広がる武家屋敷地は東北大学川内北キャンパスとなっている。仙台城は平成15年8月27日に国指定文化財史跡名勝天然記念物に指定されている。その範囲は本丸を中心に三の丸と、二の丸の一部を含む(第5図)。その他の近世の遺跡としては南東約1.4kmに伊達家の墓所である経ヶ峰伊達家廟が、西約4kmには郡六城、葛岡城、郡六御殿などがある。また、近世以外の遺跡としては、南西約3.5キロメートルに旧石器時代の青葉山A遺跡がある。

(2) 近世から近代

江戸時代に描かれた絵図には、本遺跡の場所は武家屋敷または御炭藏と記載されており、周辺は仙台城に隣接する重臣・家臣団クラスの武士が住まう地域であった。土地利用の変遷を絵図から追ってみると、まずはじめに正保3年(1646)の大地震(註1)の前後に描かれたと推測される『奥州仙台城絵図』(正保2~3年)では、当遺跡部分は「侍屋敷」と記されている。寛文4年(1664)の『仙台城下絵図』、延宝・天和年間(1673~1683)の『仙台城下絵図』では「小国七右衛門(家禄600石。小国七右衛門重康。家格は平土。寛永9年に伊達忠宗の小姓・坊主頭・目付役となる)」と記されており引き続き武家屋敷が営まれていたことが分かる(註2)。享保9年(1724)の『仙台城下絵図』になると「御炭藏」の記載となり、敷地利用に変化が見られる。これ以降近世を通して当遺跡部分は御炭藏として記されている。御炭藏は御修復帳(作事方の台帳で藩が管理する施設を記録しているもの)に記載が見られる施設で、三の丸に置かれた御米藏などと同様に仙台城にとっての生活基盤として重要な位置を占めていたものと考えられる。また、御炭藏の北側の敷地には、代々大條家(家禄4000石。家格は一家。享保9年の絵図に見られる大條家は大條道頼の時で、若老、後に奉任職を勤める)が居住していた(註1)。これは現在の青葉山駐車場ゲート付近から仙台二高プールの辺である。

また、遺跡の周辺では、元禄年間(1688~1703)頃に二の丸大改修があり、また享保2年(1717)には大地震が起こっており、土地利用・居住する武士などに大きな変革があった時期と推測される。1988年度の発掘調査で仙台城二の丸跡において、上層遺構群、整地層、下層遺構群が確認されており、整地層は元禄年間の二の丸大改修の際に普請されたものと考えられている(註3)。それらのことから当遺跡のある場所においても17世紀代は重臣屋敷、18世紀以降は御炭藏と変化しており、二の丸とはほぼ同じ時期に大規模な造成工事がなされた可能性がある。

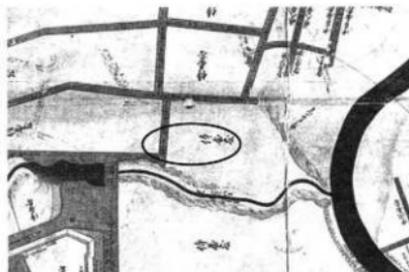
(3) 近代から現代

御炭藏は幕末に作成された『安政補正改革仙府絵図』(安政3~6年(1856~1859))に記載が見られるのが最後となる。その後、明治元年(1867)の眷属図に建物の形を見ることができる。その後藩廃置限により仙台藩は宮城県となり、明治4年(1871)に仙台城二の丸は東北鎮台となる。明治6年(1873)には東北鎮台は仙台鎮台、明治21年(1888)には師団制が施行され仙台鎮台は陸軍第二師団となる。その後、終戦まで当遺跡部分には第二師団兵器廠が置かれる。

註1: 寛文4年(1664)「仙台城下絵図」内田吉次、1996
 註2: 『仙台城下絵図』内田吉次、1996
 註3: 『仙台城下絵図』内田吉次、1996

註1: 『仙台城下絵図』内田吉次、1996
 註2: 『仙台城下絵図』内田吉次、1996
 註3: 『仙台城下絵図』内田吉次、1996

陸軍第二師団建物配置図では、当遺跡内は兵器庫・荷造場などと記載されている。太平洋戦争が起こり、昭和20年(1945)7月10日には仙台空襲の爆撃により兵器庫は全て失われたものと思われる。仙台市戦災復興記念館蔵の「炎上する第二師団」と銘された写真には当遺跡付近が炎上しているものがあり、昭和22年(1947)に米軍により撮影された航空写真にも建物などは見られない。戦後は米軍駐留地となる。現在の東北大学川内キャンパスは、このころ米軍の川内キャンプ(キャンプセンダイ)が置かれ、約2万人が住んでいたとも言われている。当遺跡も川内キャンプの敷地内にあり、当時の電気線配置図、水道管配置図などで米軍施設の建物が確認できる。昭和32年(1957)に返還された後、昭和37年(1962)に仙台商業高等学校の校地となる。同校ではグラウンドとして活用されたが、平成11年(1999)に泉区に移転となったため、その跡地として現在に至っている。(土橋)



1. 正保二・三年(1645・46)奥州仙台城絵図



2. 寛文四年(1654)仙台城下絵図



3. 延宝・天和年間(1673~1683)仙台城下絵図



4. 享保九年(1724)仙台城下絵図



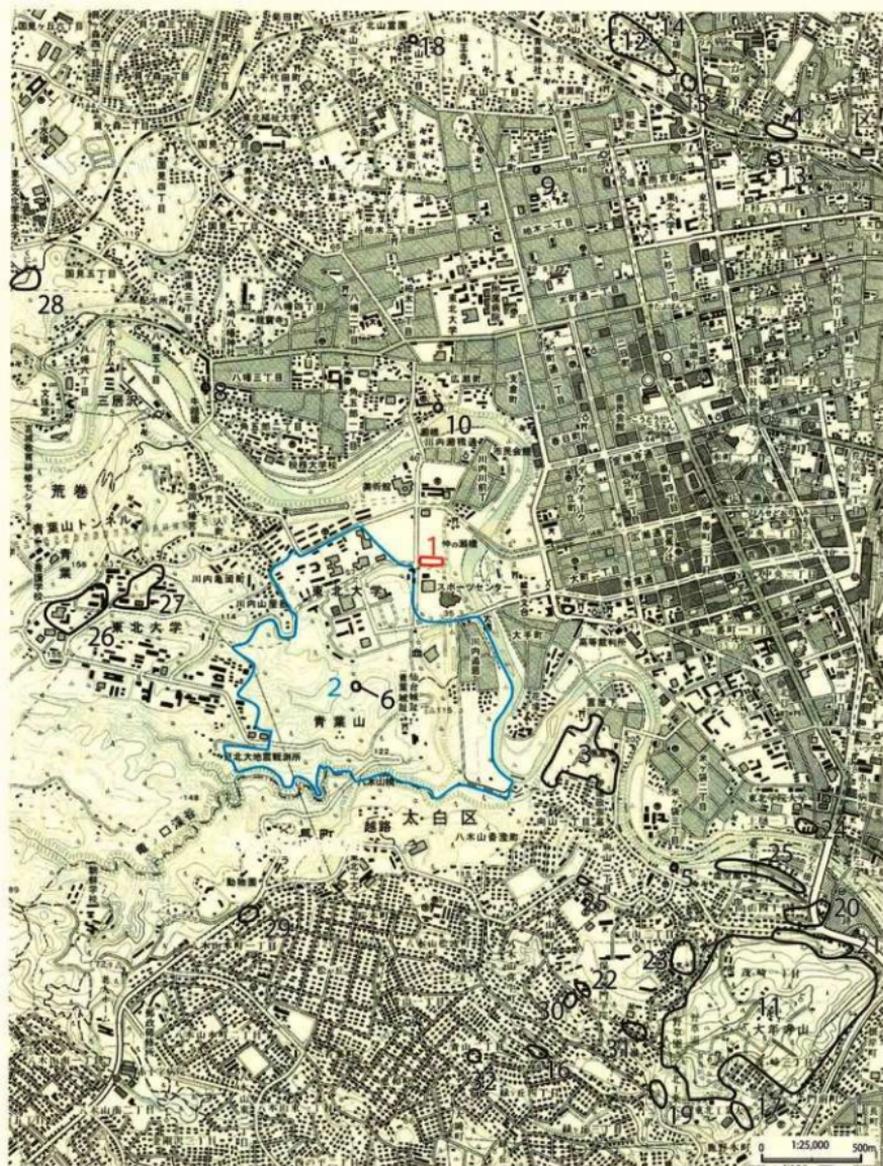
5. 安政三~六年(1856~1859)安政補正改革仙台府絵図



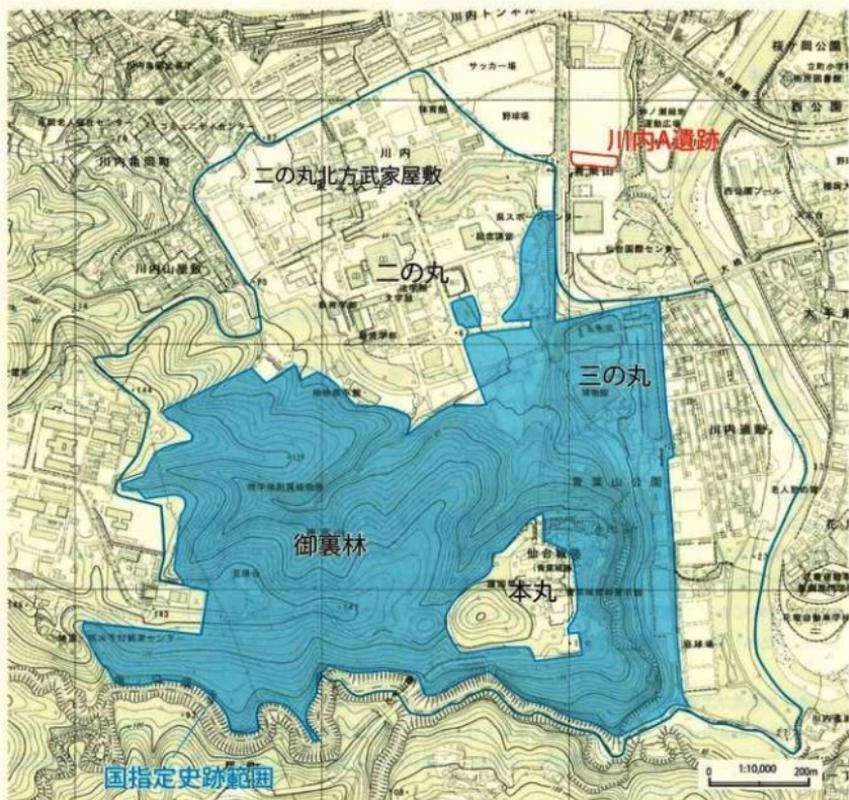
6. 旧帝國陸軍第二師団用地図

第3図 絵図・古地図における調査区的位置(○が調査区)(註1)

註1：高倉守は『仙台・奥州で見る戦国 第一巻』今野清雄株式会社、2004
高倉守は『仙台・奥州で見る戦国 第二巻』今野清雄株式会社、2005



第4図 周辺遺跡分布図



第5図 仙台城跡と川内A遺跡

番号	遺跡名称	時代	所在地	性格	番号	遺跡名称	時代	所在地	性格
1	川内A遺跡	近世・近代	青葉区青葉山2丁目	武家屋敷・敷布地	19	二ツ沢横穴墓群	古墳	太白区二ツ沢	横穴墓群
2	仙台城	近世	青葉区川内・荒巻	城跡	20	愛宕山横穴墓群	古墳	太白区向山4丁目他	横穴墓群
3	経ヶ崎伊達家墓所	近世	青葉区荒巻下	墓所	21	大年寺山横穴墓群	古墳	太白区向山4丁目	横穴墓群
4	妙法寺遺跡	近世	青葉区向山2丁目	板碑	22	八木山横穴墓群	古墳	太白区八木山横穴町	敷布地
5	長徳寺板碑	中世	青葉区川内	板碑群	23	萩ヶ丘遺跡	縄文晩期・奈良・平安	太白区萩ヶ丘	敷布地
6	川内古碑群	鎌倉	青葉区川内・荒巻	板碑群	24	土樋遺跡	縄文晩期	青葉区土樋1丁目	敷布地
7	片平仙台大神宮の板碑	鎌倉	青葉区片平1丁目	板碑	25	向山高麗遺跡	縄文中期	太白区向山2丁目・八木山横穴町	敷布地
8	延元2年板碑	中世	青葉区八幡5丁目	板碑	26	青葉山B遺跡	縄文早・晩・弥生・奈良・奈良	青葉区荒巻字青葉	敷布地
9	六地藏	室町	青葉区本町	地蔵	27	青葉山B遺跡	縄文早・中・弥生・平安・古代	青葉区荒巻字青葉	敷布地
10	慶長御尊文永十年板碑	鎌倉	青葉区広瀬町	板碑	28	坊主門遺跡	縄文早・前・奈良	青葉区八幡6丁目	敷布地
11	茂ヶ崎城跡	中世	太白区茂ヶ崎1丁目他	城跡	29	萩ヶ丘遺跡	縄文	太白区八木山本町1丁目	敷布地
12	堤町瓦葺跡	平安	青葉区堤町1丁目他	漆跡	30	二ツ沢遺跡	縄文	太白区八木山弥生町	敷布地
13	上杉6丁目遺跡	平安	青葉区上杉6丁目	敷布地	31	萩ヶ丘B遺跡	縄文	太白区萩ヶ丘・長瀬	敷布地
14	山田団地東南遺跡	平安・近世	青葉区地町2丁目他	漆跡	32	青山2丁目B遺跡	旧石器・縄文	太白区青山2丁目	敷布地
15	荒巻妙法遺跡	平安・近世	青葉区地町1丁目他	漆跡					
16	青山2丁目遺跡	奈良・平安	太白区青山2丁目	敷布地					
17	茂ヶ崎横穴墓群	古墳・奈良	太白区二ツ沢	横穴墓群					
18	妙法寺古墳	古墳晩期	青葉区北山1丁目	円墳					

第1表 遺跡地名表

第2節 調査方法

(1) 調査方法

調査方法は仙台商業高等学校のグラウンド整地土（1a層）と瓦礫、鉄屑を多量に含む盛土層（1b層）を重機により徐々に除去し、以下は人力により調査を実施した。計測作業は日本測地系座標に基づいて既知点を利用し、また使用可能な箇所に基準点を新設し、グリッドを設置した。遺構の図化においては、遺構平面図、遺構断面図はすべてトータルステーションとデジタル写真を使用してのデジタル図化を行った。写真撮影に使用した機器は、35mm版と6×7版カメラ、およびデジタルカメラ（500万画素以上）を併用した。調査前、遺構検出状況、土層断面、完掘、調査区全景等をカラーボジ、モノクロの2種類で撮影した。また、デジタルカメラでは同様の調査写真のカットを撮影した他、作業状況なども撮影し、調査日誌に添付するなどして、日々変化する遺跡の状況を積極的に記録した。その他、調査区全景撮影においては、調査期間中に4回、20mの高所作業車を使用し、6×7版カメラを主に北、東、西の3方向から撮影を行った。

出土遺物は出土年月日順に番号を付け、遺構別、グリッド別、層別に取り上げ、登録を行った。出土遺物の内、報告書掲載資料及び観察資料に関しては、新たに遺物登録番号を付記した。遺物の実面に関しては、手実測と正射投影のデジタル画像を併用して実測図の作成を行った。（守谷）

(2) 調査区グリッドの設定

高速鉄道東西線予定路線に係わる川内地区、青葉山地区、西公園地区の全域を網羅するグリッドを設定した。川内A遺跡の北西部に原点（日本測地系・X=-193400m、Y=23000m）を求め、グリッドの単位は10m×10mとした。グリッドの名称は原点から、Y軸は北方向をN、南方向をSとし、X軸は東方向をE、西方向をWとし、原点からの方向と距離によりN1-E1グリッド（北へ0m～10m、東へ0m～10m）、S2-W2グリッド（南へ10m～20m、西へ10m～20m）等とし、表記した。

(3) 遺跡名称及び欠番と変更

遺構番号は遺構の種類毎に、検出順に通し番号を付した。遺構の種類を表す記号は例示に示した通りである。また、記号を設定していない遺構として、擁壁跡、暗渠跡、道路状遺構は漢字で表記した。また、以下のものは遺構を欠番とし、また、遺構名を変更した。

・欠番：SB3・SD3・SD6・SD7・SK1・SX2・SX3・SX5・SX9・SX10・SX11・SX18・SX19・SX23。

これらは調査中・調査後、昭和20年以降の遺構、攪乱等と判断されたものである。

・変更：SX21→SE5、SB2→擁壁跡

第3節 調査区基本層序

調査区の基本層序は大別ではI～V層の5層、細別では15層が確認された。

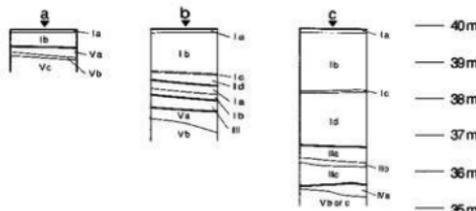
I層は仙台商業高等学校のグラウンド整地層から戦後のGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）による盛土・整地までに形成された層でa・b・c・dの4層に細別される。Ia層はオリブ色の砂からなる仙台商業高等学校グラウンド整地層である。調査区全域に堆積し、層厚は10cm～15cm程度である。Ib層は暗オリブ褐色の砂質シルト層で、礫、レンガ片、コンクリート塊、鉄屑、ガラス片、炭化物を多量に含む。Ia層整地以前の仙台商業高等学校造成時の盛上と考えられる。調査区全域に堆積し、層厚は厚いところで100cmほど認められる。Ic層は暗褐色の硬化した砂質シルト層で、褐色砂、細礫、炭化物ブロックを多量に含む。第二次世界大戦終戦後のGHQの施工した整地層と考えられる。調査区中央部より東側に堆積し、層厚は約10cm程度である。Id層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、径約10cmの礫、多量の焼土ブロック、コンクリート塊を含む。Ic層を施工する為にGHQにより盛土された層と考えられる。調査区中央より東側に堆積し、層厚は60cm～90cmである。

II層は第二師団の施設した整地・盛土層および炭化物層で、a・b・cの3層に細別される。IIa層は灰オリブ褐色の粘土質シルト層で、径5mm～1cmの炭化材を多量に含む。仙台空襲時の廃材処理に伴う堆積と考えられる。調査区中央部より東側に堆積し、層厚は10cm～20cm認められる。IIb層は褐色の粘土質シルト層で、径1mm～5mmの炭化物ブロックを多量に含む。第二師団による整地層と考えられる。調査区東側に堆積が見られ、層厚は10cm～30cm堆積する。近代の遺構はIIb層上面で検出される。IIc層は黒褐色の粘土質シルト層で、径1mm～5mmの炭化物、細礫を多量に含む。第二師団によるIIb層造成に伴う盛土層と考えられる。調査区東側に堆積が見られ、層厚は10cm～80cm認められる。調査区東端で沢（SR1）を埋め立てている。

III層は近世の盛土・整地層と考えられる層で、1層のみ確認された。オリブ褐色の粘土質シルト層で、細礫、鉄分を多量に含む。近世の遺構はIII層上面で検出される。第二師団により著しく削平を受けており調査区中央付近のみに堆積が見られ、層厚は15cm～30cm認められる。

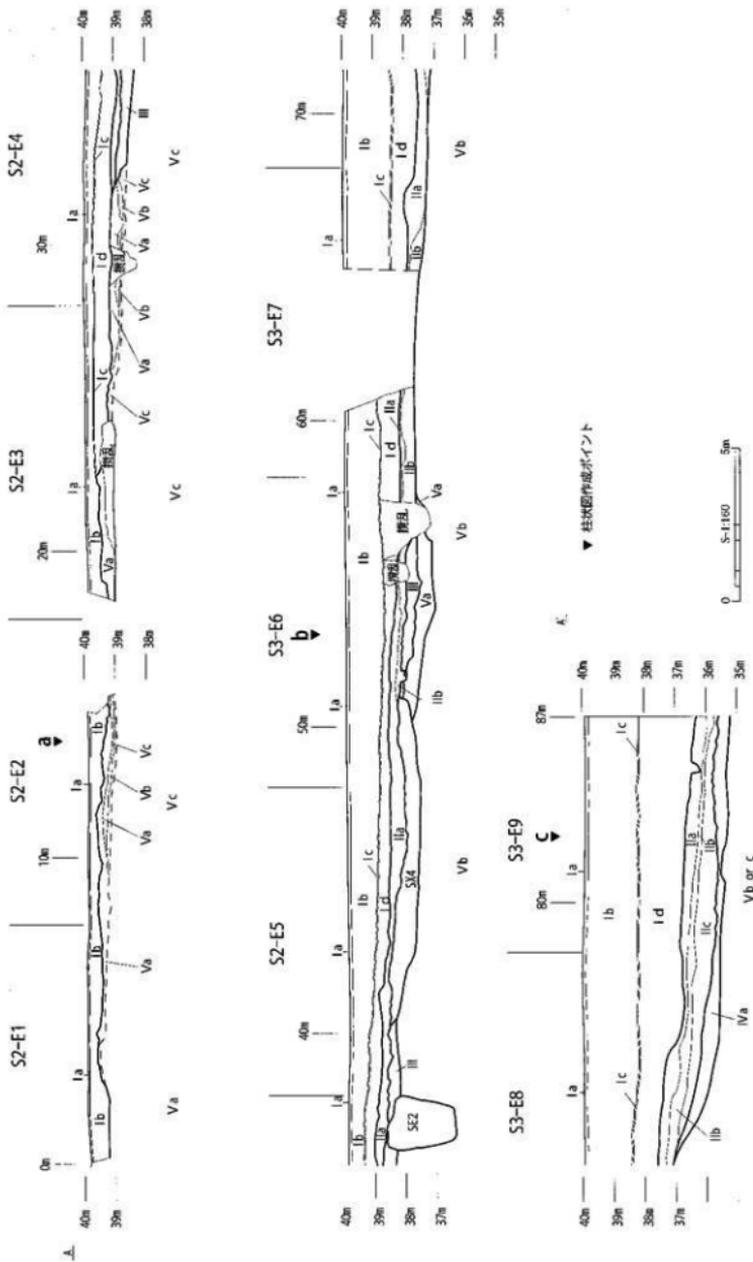
IV層は近世の盛土・整地層で、a・b・cの3層に細別される。V層面での東割沢跡を埋め立てた層で、IVa層はオリブ黄色～褐色の粘土質シルト層で、礫を含む。18世紀代の遺物が出土しており、それ以降の盛土・整地による堆積と考えられる。層厚は30cm～60cm認められる。IVb層は黒褐色の粘土質シルト層で、礫を多量に含む。層厚は25cm～60cm認められる。IVc層は砂礫を多量に含む粘土質シルトと自然礫からなる上留めで構成される。沢跡を埋め立てた盛土層と考えられる。層厚は最大約175cm、最小約50cmを測る。なお、III層とIV層については、掘削による削平等の条件により上下関係を確認できなかったため、便宜的に検出順序から層名をふっている。

V層は自然堆積層で、a・b・cの3層に細別される。Va層は褐色の砂礫層で、多量の鉄分やマンガン、縄文土器を含む。調査区西側から中央部にかけて部分的に確認され、層厚は10cm～20cm認められる。IVa層は上石流などにより形成された二次堆積と層と考えられる。Vb層はオリブ褐色の砂礫層で、鉄分・マンガンを微量に含む。調査区全面で確認された。層厚は10cm～20cm認められる。Vc層は黒色の粘土質シルト層で、径5cm～10cmの黄褐色シルトブロックを少量、マンガンを多量に含む。調査区全面で確認された。（土構）



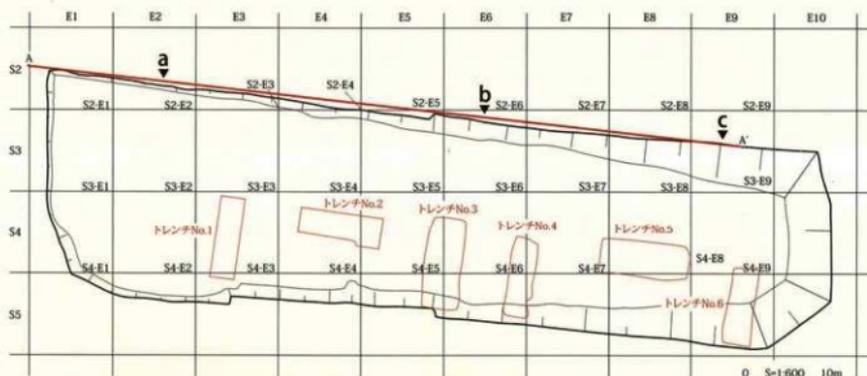
第7図 基本層序柱状図

I a	仙台商業高等学校グラウンド整地層
I b	仙台商業高等学校の盛土層
I c	GHQによる整地層
I d	GHQによる整地層
II a	空襲による炭化物層
II b	陸軍第二師団の盛土・整地層
II c	陸軍第二師団の盛土・整地層
III	近世の盛土・整地層
IV a	近世の整地層
IV b	近世の整地層
IV c	近世の盛土層
V a	自然堆積層
V b	自然堆積層
V c	自然堆積層



第 8 図 調査区北壁断面図

第4節 調査概要



第9図 土層断面図作成位置図（※トレンチNo.1～6は平成16年試掘調査時のものを示している）

基本層土層註記

層別土層記号	色調	土質	粘性	混入物・備考
I a	5Y5/6	オリーブ色	砂	なし
I b	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質シルト	なし
I c	10YR3/2	暗褐色	砂質シルト	なし
I d	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	あり
II a	5Y5/2	灰オリーブ褐色	粘土質シルト	あり
II b	7.5YR4/3	褐色	粘土質シルト	あり
II c	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり
III	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	あり
V a	7.5YR4/4	褐色	砂礫	なし
V b	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂礫	なし
V c	10YR2/1	黒色	粘土質シルト	あり

第4節 調査概要

(1) 現地調査

試掘調査は平成16年6月14日から6月25日までの期間に実施した（試掘調査時の地区名称A区）。3m×10mのトレンチを6ヶ所（No.1～No.6トレンチ 第9図）入れ、調査面積は合計180㎡であった（註1）。この結果を受け本調査を平成17年6月13日から平成18年1月27日まで実施した。調査実働日数102日間で、調査面積は1973㎡である。

調査は、6月17日から事務所を設置し、基本層を確認しつつ重機掘削に着手した。重機掘削においてはコンクリート廃材、鉄屑、瓦礫が堆積土中に大量に混在しており、これら廃棄物の分別作業に時間を要した。作業の安全を確保しつつ、重機掘削と同時に並行で人力による遺構精査に着手できたのは、6月28日からとなった。

E-3グリッドライン以西では、Ib層を除去した段階で直接V層となり、削平が顕著であった。近代（明治～第二次世界大戦中）の第二師団による整地層である。IIb層上面では建物跡3基（SB1、SB2、SB4）、土坑3基（SK2～4）、溝跡1条（SD4）、井戸跡3基（SE1、SE4、SE6）、暗渠跡、道路状遺構、性格不明遺構10基（SX1、SX7、SX8、SX12～17、SX22）の22基の遺構を検出した。また、堤焼の土管を用いた排水網なども検出されている。IIb層の検出面は、鉄屑、炭化物、廃材、コンクリート片等に覆われており、GHQ以降の著しい攪乱を受けている。その

註1：仙台市文化財調査報告書第289集「仙台市高瀬地区東西線跡地発掘調査（Ⅱ）調査報告書」 仙台市教育委員会、2005

ため検出した遺構の上面は、ほとんど削平されており、遺構の層属層位、年代の決定には困難を要した。また、IIb層上面検出遺構の出土遺物には17世紀中頃～19世紀中頃の陶器、磁器が多量に出土しているが、著しく攪乱された検出面、削平された遺構堆積土の状況から、二次的な堆積と判断した。III層上面では柱列跡1条(SA1)、溝跡3条(SD1、SD2、SD5)、井戸跡2基(SE2、SE5)、柱跡28基(P12～P14、P17、P18、P20～P23、P25、P26、P28～P44)、性格不明遺構9基(SX4、SX6、SX20、SX24～SX30)、沢跡1条(SR1a)の16基の遺構が検出された。このIII層上面は上層のIIb層と同様に、第二師岡以降の著しい攪乱と削平を受けていた。そのために、近世の整地面と考えられるこの層も壊滅的な状況で、遺構の層属層位の決定には困難を要した。

IVb層上面では井戸跡1基(SE3)、沢跡1条(SR1b)を検出した。IVb層とIVc層をV層(上面)まで掘り下げるためには土量は膨大であり、期間的、作業量的にも人力では不可能と判断し、調査員立ち会いのもと重機で慎重に掘削を行った。

V層上面では、沢跡1条(SR1c)を検出した。V a層中より縄文土器が出土したため、V a層の調査を実施したが、沢跡以外の遺構は検出されなかった。

いずれの検出面も上層の遺構や整地により大規模に攪乱され、遺構層属層位の判定が困難な調査であったが、平成18年1月17日に重機による井戸跡遺構の断ち割り調査、底面の検出作業を実施し、本遺跡の調査を終了した。(守谷)

(2) 整理作業

遺物はコンテナ(内法54.5cm×33.6cm×15cm)にして53箱である。近世～近現代の陶器、磁器、瓦、瓦質土器が主で、少量ながら縄文土器も含まれる。その他に近世、近現代の木製品等も含まれる。遺物は取り上げた翌日には大まかに泥土を洗い落とし(第一次洗浄)、後日に軟毛なブラシで細かい部分の洗浄を行った(第二次洗浄)。洗浄の終了したものは十分な乾燥の後に、接合関係を確認し註記を行った。註記は、遺跡名(川内A)、日付(例050717)、遺構名(例SE1)、出土層位(例1層)、取り上げ番号の記述を基本とした。なお、基本層出土の遺物については出土グリッドを記入している。

接合にはバラロイドB72を使用した。脆弱な土器はバインダーを用いての強化を行った後、同様の作業を行った。これらの作業後、時期の判別可能な破片など主要な遺物は選別し遺物の登録を行った。登録した資料は、モビニール、エレホン、アラルタイト6504などを用いて欠損部の充填、復元を行い、写真撮影および遺物実測図に耐えうるようにした。これら復元材は遺物の胎土に合わせて選択した。

遺物写真は1000万画素級のデジタル一眼レフを用いて撮影した。陶器、磁器は、見込み、高台内文様、高台の形態の撮影を行った。撮影した遺物の点数は個別写真で500カットにおよんだ。

図面は発掘調査中に作成した遺構図、遺構断面図等と、整理作業で作成した遺物実測図等がある。遺構平面図は現地で計測したデータを福井コンピュータ社製のブルートレンド上で編集して、DXFデータ形式で保存した。DXFデータを「Illustrator」形式に変換した後に、変換で生じる線種の不具合などを修正した上で、編集を行った。手実測、写真計測による土層断面図は、それぞれアドビシステムズ社製のアプリケーション「Illustrator」でトレース図化した。

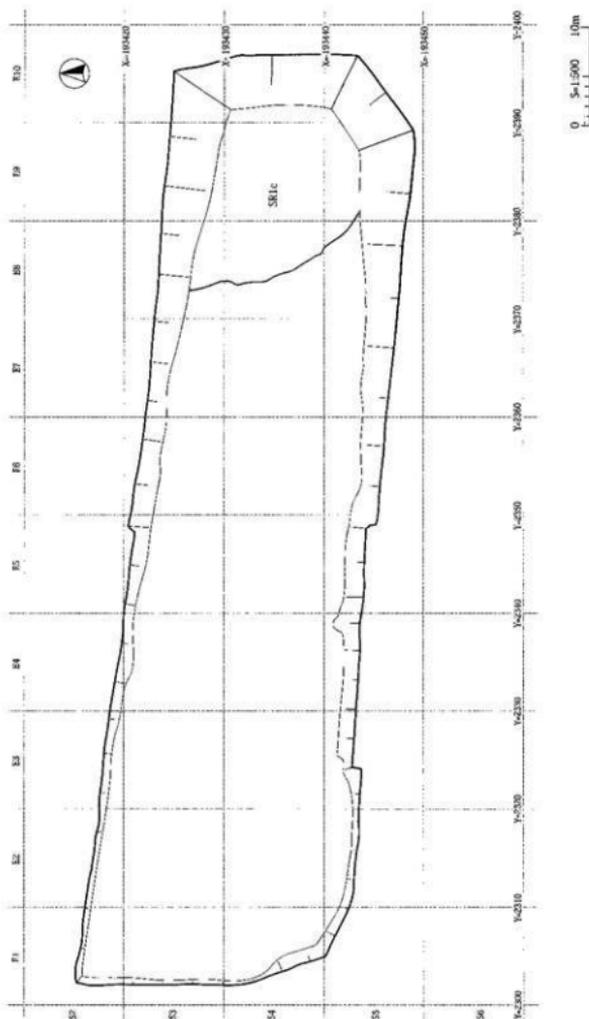
実測図にはオルソイメージャー(正射投影写真撮影機)で撮影したデジタル写真を用いて実測図を作成した。また、アドビシステムズ社製のアプリケーション「Photoshop」を用いてデジタル正射投影写真から、文様を抽出した。トレース作業には「Illustrator」を用いたデジタルトレースを実施し、同時に「Photoshop」で抽出した文様を貼り込む作業を行った。

レイアウト作業は同社のアプリケーション「InDesign」を用いた。(守谷)

第3章 検出遺構と遺物

第1節 V層上面

V層上面では沢跡(SR1)1条が検出されている。このSR1はV層上面ではSR1cとして検出されるが、IV層により盛土され、IVb層上面ではSR1b、III層上面ではSR1aと、沢幅を縮小されながら検出されている。検出層は異なるが、本節においてSR1c～SR1aまでの変遷を記述する。



第10図 V層上面遺構配置図

1 沢跡

(1) SR1a, b, c 沢跡 (第11～16図、図版2～3)

調査区東側、S3-E8～S5-E10グリッドにおいて崖状の段差を伴う沢跡SR1を検出した。IV層はこの崖線より東側に堆積しており、沢跡の埋め立てに伴う層位であることが判明した。SR1は、埋め立ての過程により3時期に区分できる。SR1cが最も古く、近世のIV層による盛土・整地前の旧地形を示している。その後、近世に入り二度にわたって盛土・整地がなされ、近世占段階がSR1b、新段階がSR1aである。沢幅は徐々に狭まっていく。調査区の東端で検出されたが、沢の東岸は調査区外にあり、全体の規模は不明である。SR1bはIV層、SR1aはIII層が検出面であるが、沢跡としてV層にまとめて記載した。

上層のIIb層の除去には、土量が増大するため重機を使用して掘削を行った。SR1a、SR1b、IVa層、IVb層の範囲については上部が攪乱により消失していることに加え、重機により掘りすぎた部分もあり、調査区東壁・セクションベルトの上層等から平面図を復元している。また、安全を考慮して、調査区東端ではIVc層下部は掘り上げておらず、そのためSR1c底面は一部確認を行っていない。

〈SR1c〉検出したSR1cの規模は長さ14.5m、幅12.7m、深さ120cm～175cm、傾斜角度45度～60度を測る。SR1cはIVc層・IVb層により埋め立てられる以前の、本来の沢の形状を示している。

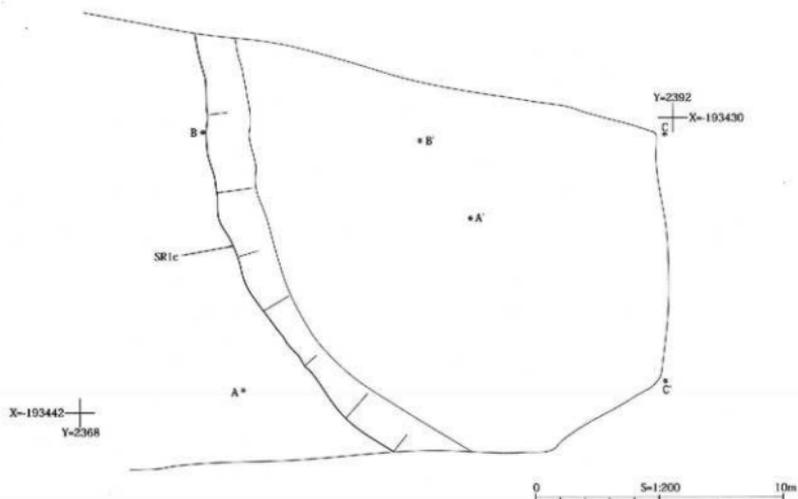
〈SR1b〉推定されるSR1bの規模は長さ約10m、幅約4m、深さ約1m、傾斜角10度を測る。SR1bはSR1cがIVb層、IVc層によって埋め立てられ、沢幅が縮小した段階のものである。IVc層は盛土の単位から、さらに6単位(IVc1層～IVc2層)に細分される。この層は砂礫を多量に含む粘土質シルトの盛土とそれを安定させる土留めで構成される。土留めは長さ20cm～40cm、幅15cm～25cm、厚さ15cm～20cm程のやや扁平な楕円形の自然礫を利用し、この石材を平積みすることによって盛土の崩落を防ぎその安定を図っている。また、観察の結果、盛土は原則的に土留めの石材を積み上げた毎に埋められている。土留めと盛り土を数回に繰り返し徐々に平面の拡張を行ったものと思われる。層厚は最大135cm、最小50cmを測る。IVc層は沢跡の南半に分布する。

IVb層は近世の整地層と考えられ、東側に緩やかに傾斜するテラス状の面を形成している。IVb層はさらにIVb1層とIVb2層に細分される。IVb1層は10cm～15cmの礫を多量、炭化物粒を微量含む黒褐色粘土質シルトである。層厚は30cm程認められる。IVb2層はIVb1層に似ているが、マンガン粒を少量含んでいる。層厚は10cm～25cm認められる。IVb層はIVc層のさらに北側に分布する。

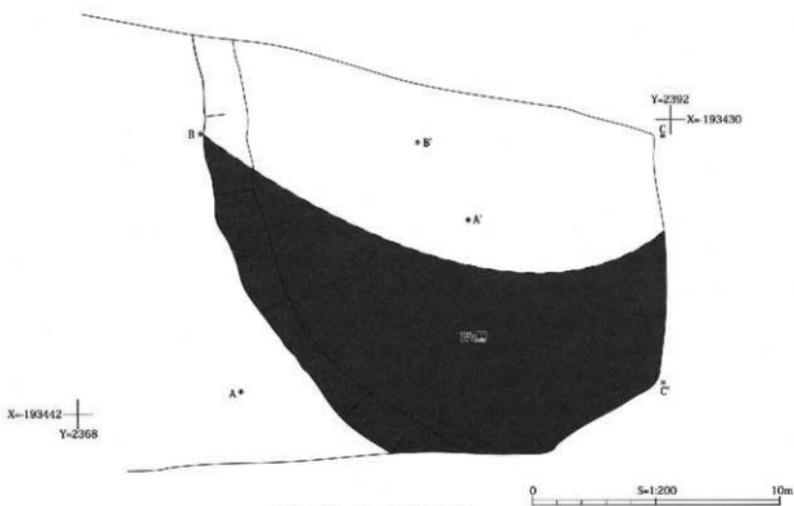
〈SR1a〉推定されるSR1aの規模は長さ約5m、幅約3m、深さ約50cm、傾斜角25度～30度を計る。SR1aはSR1bがIVa層によってさらに埋め立てられ、沢幅が縮小した段階のものである。IVa層は近世の整地層と考えられ、東側に緩やかに傾斜する。IVa層はさらにIVa1層とIVa2層に細分される。IVa1層は、径2cm～3cmの礫を少量、径10cm程の円礫を微量含むオリブ黄色粘土質シルトである。IVa2層は、径10cm～20cmの礫、マンガン粒を多量、5cm程度の礫を少量含む褐色粘土質シルトである。IVa層は沢跡の北半に分布する。SR1aの堆積土は3層からなり、1層は炭化物粒を微量含む青灰色粘土質シルト、2層は明黄褐色シルト粒を少量含む暗褐色粘土質シルト、3層は炭化物粒、明黄褐色シルト粒を微量含む黒色粘土質シルトである。

SR1aはさらにIIc層・IIb層により最終的に埋め立てられ、調査区内でその形状を確認することはできなかった。〈遺物〉遺物はいずれもSR1bを埋め立てたIVa層から、17世紀初頭から18世紀代の陶磁器などが出土している。陶器片17点、磁器片7点、土師質土器片1点、瓦の小片5点、瓦質土器1点、合計31点が出土し、5点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。第16図の1が17世紀初頭の志野の丸皿、2が18世紀代の肥前磁器の鉢である。土師質土器では、第16図の4が17世紀後半以降の在地産焼壺壺、3が17世紀から18世紀の在地系のかわらげが出土している。(土橋)

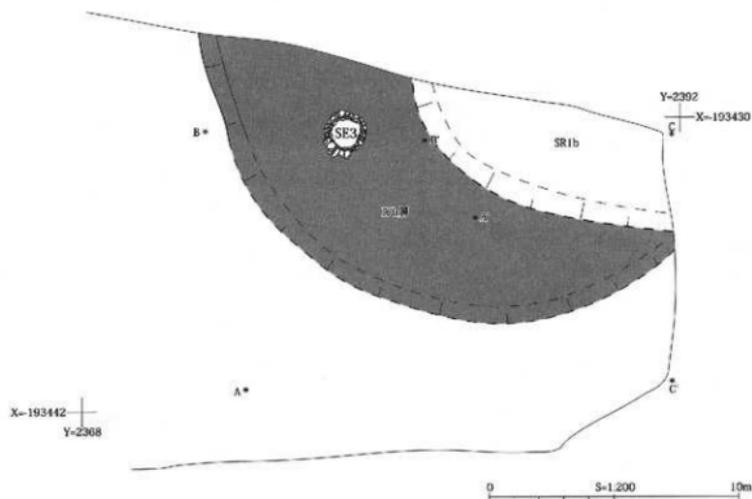
第1節 V層上面



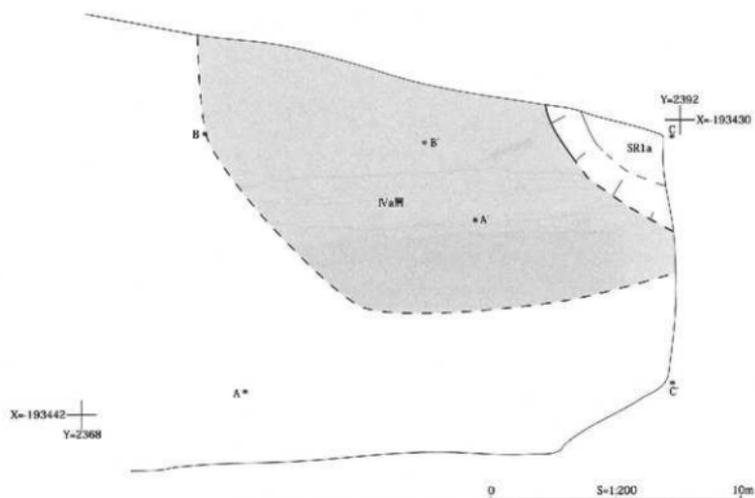
第11圖 SR1c 沉跡 平面圖



第12圖 IVc 層分布範圍

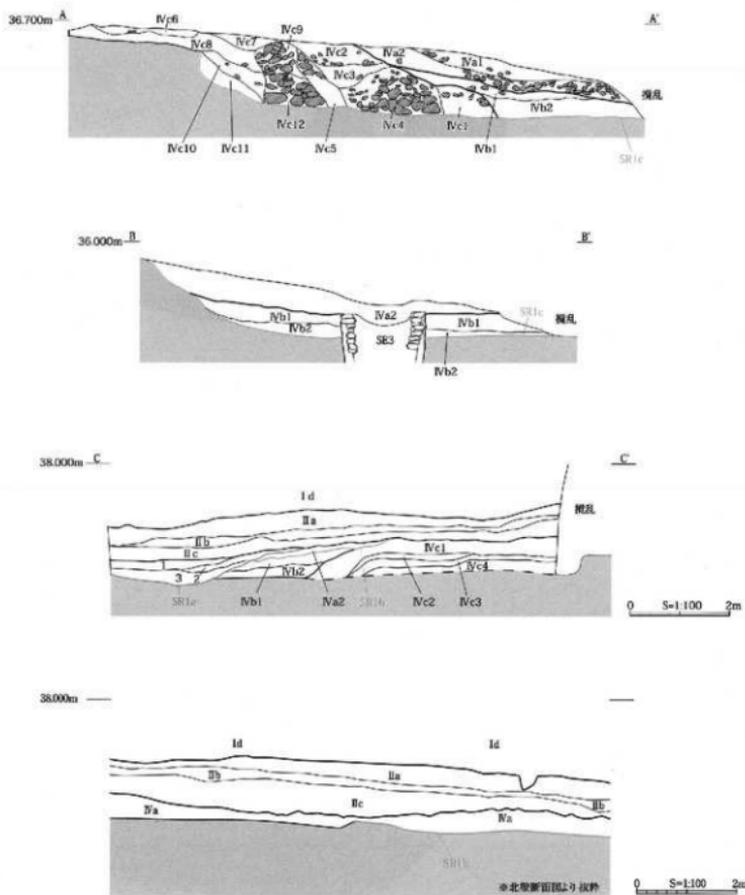


第13図 SR1b 沢跡及びIV b層分布範囲



第14図 SR1a 沢跡及びIV a層分布範囲

第1節 V層上面



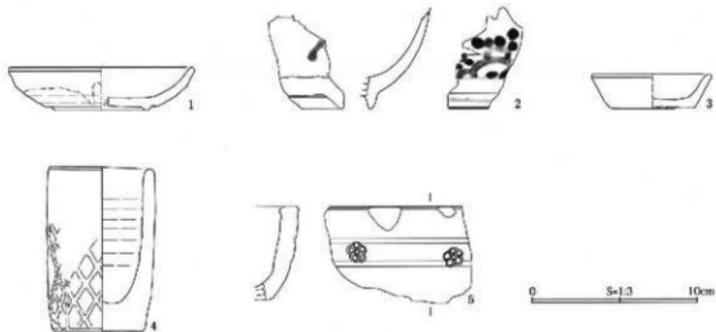
第15圖 SR1c ~ a 沢跡 断面図

IV層土層誌記

層別土 層別土	色調	土質	粘性	混入物・備考	
N a1	5Y6/3	オリーブ黄褐色	粘土質シルト	あり	径2cm~3cmの礫少量。径10cm程の円礫少量。
N a2	7.5YR4/3	褐色	粘土質シルト	あり	径5mm以下のマンガン粒。径10cm~20cmの礫少量。径5cmの礫少量。
N b1	7.5YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	10cm~15cmの礫少量。径1cm程の炭化物粒少量。
N b2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	10cm~15cmの礫少量。マンガン粒少量。礫質は粘土質。
N c1	N3/1	暗灰色	砂質シルト	なし	径5cmの礫少量。暗灰色砂質土を塊状に含む。
N c2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	あり	径10cmの礫少量。径2cmの礫少量。
N c3	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	あり	砂粒少量。径2cm~3cmの礫少量。
N c4	7.5YR5/6	明褐色	粘土質シルト	あり	シルト。径20cm~30cmの円礫少量。礫質は粘土か灰泥。
N c5	N3/1	暗灰色	砂質シルト	なし	径5cmの礫少量。暗灰色砂質土を塊状に含む。
N c6	5Y5/2	灰オリーブ色	粘土質シルト	あり	長軸25cm~40cm。短軸10cm~15cmの楕円形の平礫を積み重ねる層。礫の裏は粘土。
N c7	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	径3cm程度の礫を少量含む。
N c8	5Y5/2	灰オリーブ色	粘土質シルト	あり	径5cmの礫少量。径1mm以下の砂粒少量。
N c9	5Y5/2	灰オリーブ色	粘土質シルト	あり	長軸25cm~40cm。短軸10cm~15cmの楕円形の平礫を積み重ねる層。礫の裏は粘土。
N c10	7.5YR4/2	灰褐色	粘土質シルト	あり	径3mm~5mmの砂粒少量。
N c11	5Y5/2	灰オリーブ色	粘土質シルト	あり	径5cmの礫少量。径1mm以下の砂粒少量。
N c12	5Y5/2	灰オリーブ色	粘土質シルト	あり	長軸25cm~40cm。短軸10cm~15cmの楕円形の平礫を積み重ねる層。礫の裏は粘土。

SR1層土層誌記

層別土 層別土	色調	土質	粘性	混入物・備考	
1	5BG5/1	青灰色	粘質シルト	あり	径1mm程度の炭化物粒を散見含む。
2	10YR2/2	暗褐色	粘質シルト	あり	径5mm程度の明黄褐色シルト粒を少量含む。
3	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	径3mm以下の炭化物粒。径5mm程度の明黄褐色シルト粒を散見含む。



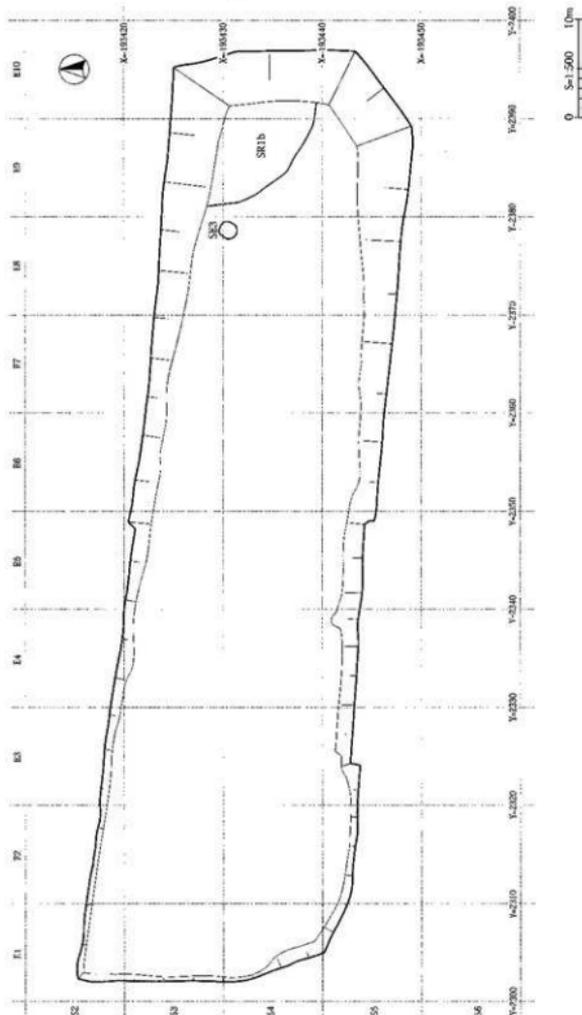
SR1出土遺物観察表

調査 番号	発掘 番号	ブロッコ 遺構・層位	種類	器種	部位	残存率	外形	寸法 (cm)			産地	時期	備 考	
								口径	底径	器高				
16-1	153	S4-32	陶器	丸壺	口縁-奥縁	20%	長石輪	長石輪	109	5.6	2.5	瀬戸・美濃	18C	割り出し高台。志野丸壺。
		S4-32 N a												
16-2	J-168	S3-R10	磁器	鉢?	口縁-底縁	-	染付	染付	-	-	6.3	肥前	18C	-
		S3-R10 N a												
16-3	194	S3-E10	土師質土器	罎	口縁-底縁	80%	49x7x7	-	7.1	4.8	2.1	在池	17C~18C	ヘラケズリ調整。
		S4-E3 N a												
16-4	197	S4-E3	土師質土器	焼土版	口縁-底縁	70%	帯子押目	-	6.3	5.3	10.1	在池	17C 前半 以降	ろくろ形成あり。 縁内縁部斜削の形で帯子の押目。
		S4-E3 N a												
16-5	196	S4-E9	瓦質土器	香炉	口縁- 底縁	-	押瓦文	-	-	-	-	在池	不明 17C前半?	外面に二条の化粧。
		S4-E9 N a												

第16図 IVa層出土遺物

第2節 IVb層上面

IVb層上面では井戸跡（SE3）が1基、沢跡（SR1b）が1条検出された。なお、沢跡については前節で詳しい記載をしたので、当節では配置図のみにとどめた。



第17図 IVb層上面遺構配置図

1 井戸跡

(1) SE3井戸跡 (第18図、図版4～5-1)

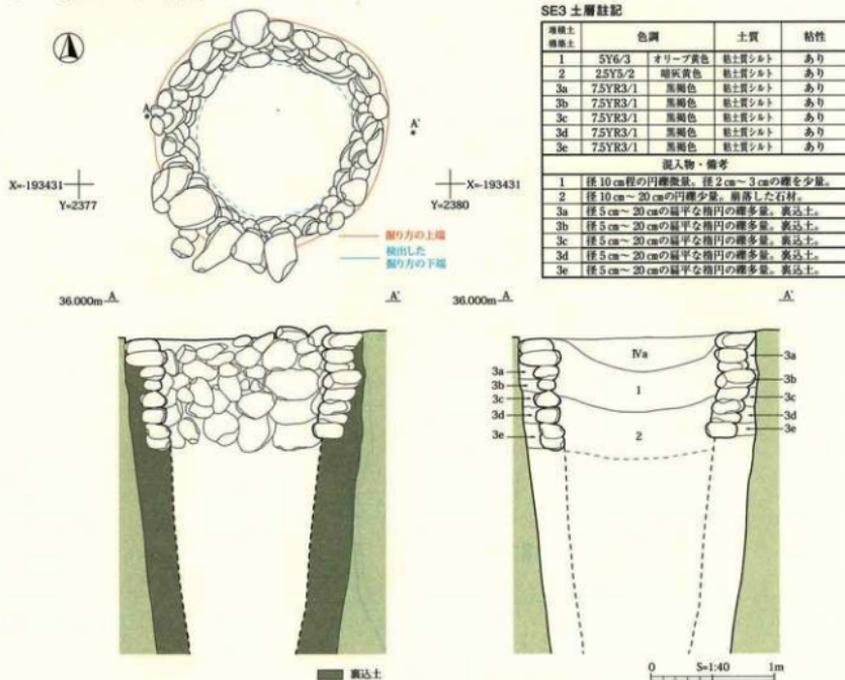
〈遺構状況〉調査区北東側、S4-E8グリッドに位置する。IVb層上面で検出された石組の井戸で平面形は円形を呈する。規模は内径120cmを測る。検出面より150cmまでは人力で掘り下げ、さらに下層においては、安全を考慮して重機により260cmまで掘り下げた。だが、著しい湧水のため、底面の検出には至らなかった。遺物は出土していない。

〈掘り方〉底面が検出されていないため全体の形状は不明であるが、検出部分においては上端部がやや広がる円筒形を呈している。壁面の傾斜角は80度～82度を測る。鑿井時の足場等は検出されなかった。

〈井側構造〉井側は石組のもので、石材を円筒形に積んで構築している。石材は長軸15cm～40cm、幅10cm～30cm、厚さ10cm～25cmの扁平な楕円形の自然礫を利用している。積み方は石材を放射状に並べたいわゆる乱石積みである。大型の石材の隙間に小型の石材を楔状に打ち込み石組の安定を図っている。上部内径は190cm、最下部外形は140cmを測る。壁面の傾斜角は85度を測る。

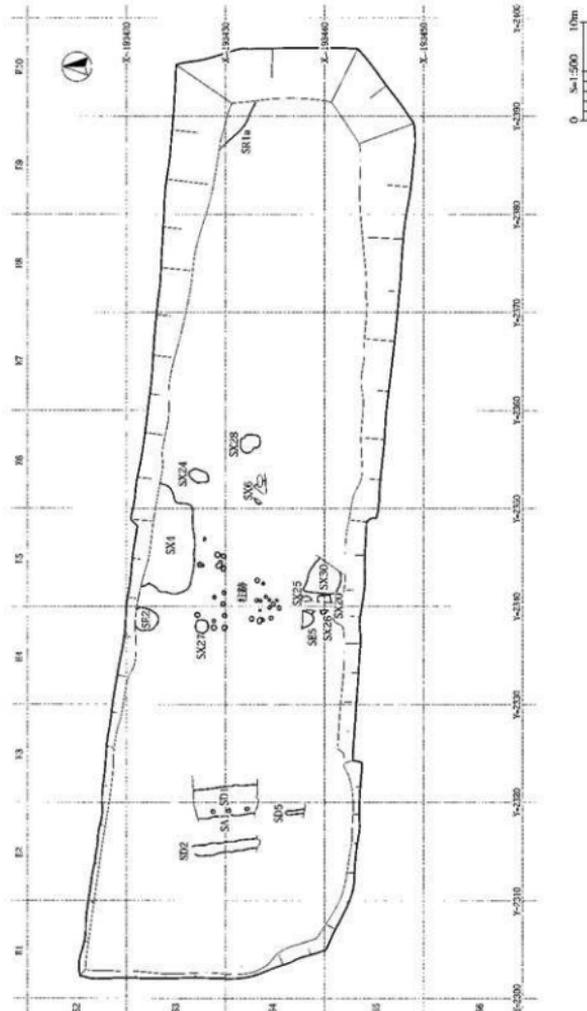
〈裏込土〉裏込土は石を一段ないし二段積む毎に石の高さだけ埋められている。土色、土質はいずれも同様で、各層ともに砂礫が多く混入している。3a～3e層まで観察可能であった。

〈堆積土〉堆積土は2層からなり、1層は10cm程の円礫、小礫を少量含んだ粘土質シルトで、2層はマンガン粒、小～中礫を含んだ粘土質シルトであり、崩落した石材が多量に検出された。SR1の埋め立てに伴い人為的に埋められたものと考えられる。(守谷)



第3節 Ⅲ層上面

Ⅲ層では柱列跡1列(SA1)、溝跡3条(SD1、SD2、SD5)、井戸跡2基(SE2、SE5)、柱跡28基(P12～P14、P17、P18、P20～P23、P25、P26、P28～P44)、性格不明遺構9基(SX4、SX6、SX20、SX24～SX28、SX30)、沢跡1条(SR1a)を検出した。検出した遺構の多くはⅤ層上面で検出しているが、これは、Ⅲ層が著しい攪乱を受けており部分的にしか検出されなかったためである。これらの遺構に関しては、出土遺物の年代、周辺の状況などを考慮したうえでⅢ層上面検出遺構と判断した。なお、沢跡については第1節に詳しい記載をしている。

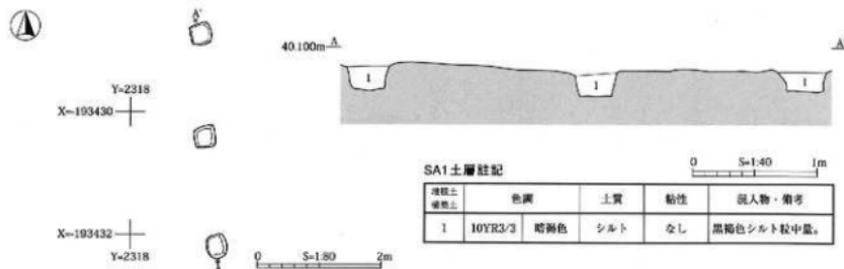


第19図 Ⅲ層上面遺構配置図

1 柱穴列

(1) SA1 柱穴列跡 (第20図、図版5-2)

調査区西側、S3-E2～S4-E2グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された。SD1と方向軸がほぼ一致し、南北方向を軸に約150cm間隔でビット3基が整列する。南北方向の伸びは攪乱されており、これ以上の柱穴列の展開は検出されなかった。いずれの柱穴も、平面形は隅丸方形で、上端径約40cm、下端径約30cm、深さ約20cmを測る。壁面は80度～85度の傾斜をもつ。底面はやや凹凸が観察され、柱痕、根石等は検出されなかった。堆積土は同一で、炭化物を少量、砂礫を多量に含むシルトの単層である。遺物は出土していない。(守谷)



第20図 SA1柱穴列跡 平・断面図

2 溝跡

(1) SD1 溝跡 (第21図、図版6～7-1、8)

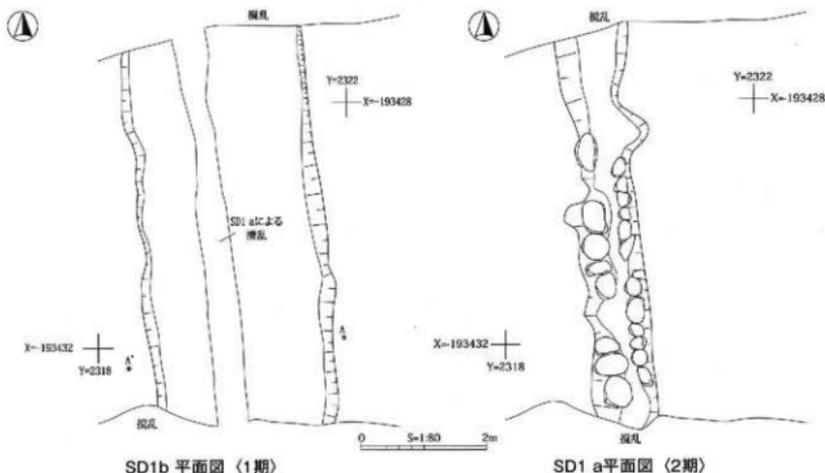
〈遺構状況〉調査区東側、S3-E2～S4-E3グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された。ほぼ南北方向に伸び、遺構両端を攪乱に削平される。検出状況から素掘りの溝と石組を有する溝の2時期が考えられる。

〈SD1b (素堀の溝)〉上端幅は約200cm～240cmの間で広狭をもち、残存長640cmを測る。南に向かって緩やかに下り傾斜し、浅い所では深さ約10cm、最深部では約20cmを測る。SD1aに中央部を切られる。水流の痕跡等は観察できなかった。堆積土はシルトの単層である。

遺物は堆積土中から18世紀中頃を主体とし、17世紀後半から19世紀中頃の陶器片43点、磁器片35点、瓦質土器片7点、瓦の小片5点、計90点が出土し、7点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。陶器と磁器は肥前産、瀬戸美濃産、美濃産、大塚相馬産、小野相馬産などが出土している。第21図1～4は18世紀を主とした陶器類、5は18世紀後半以降の大塚相馬産と考えられる陶器の掛け分け碗である。6は18世紀から明治時代以降の磁器、7は年代不明の在産土と考えられる瓦質土器である。

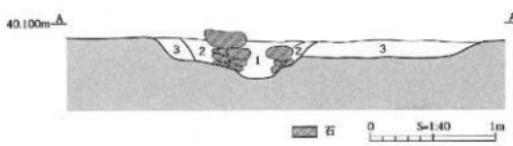
〈SD1a (石組を有する溝)〉上端規模は80cm～100cmの間で広狭をもち、残存長640cmを測る。南側に向かい緩やかに下り傾斜し、浅い所では深さ約20cm、最深部では35cmを測る石組を有する溝である。水流の痕跡等は観察できなかった。石組は上部の長さ50cm～60cm、幅40cm～50cm、厚さ30cm～45cmを測る大型の自然礫と下部の長さ20cm～30cm、幅15cm～20cm、厚さ8cm～15cmを測る扁平な自然礫で構築される。これは、下部の自然礫を台石として、裏込土と共に上部の大型自然礫の安定を図る構造と考えられる。溝の東側は下部構造の台石のみを検出した。上部の石材は攪乱により消失したものと考えられる。堆積土は炭化物と小礫を少量含むシルト層と裏込土の砂礫を多量に含む粘土質シルト層からなる。SD1aの堆積土中から遺物は出土していない。(守谷)

第3節 III層上面



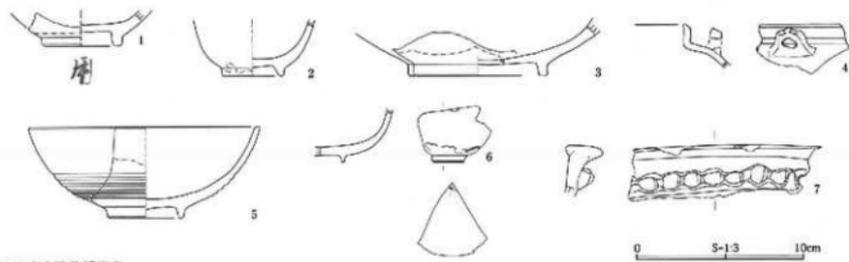
SD1b 平面図 (1期)

SD1 a平面図 (2期)



SD1土層註記

層別土層番号	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	10YR3/4	暗褐色	シルトあり	径5mm~10mmの炭化物、 軽多量。(2期)
2	10YR3/2	黒褐色	粘土質 シルト	径5mm~10mmの軽多量。 (2期炭化)
3	10YR3/3	暗褐色	シルトあり	径5mm~10mmの砂礫 多量。(1期)

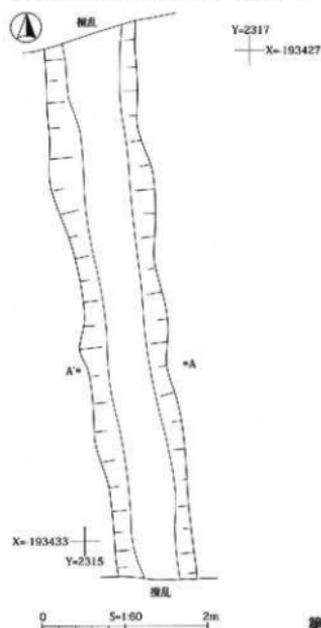


SD1出土遺物観察表

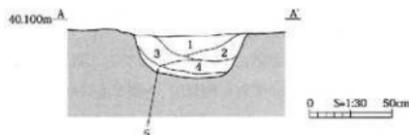
調査番号	図録番号	グロッド 分類・部位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (mm)			産地	時期	備 考	
									口径	底径	器高				
21-1	I-8	S3E3 SD1 3層	陶器	碗	底部片	—	鉄軸	鉄軸	—	5.0	2.3	美濃	18C	高台内器蓋「用」?	
21-2	I-9	S4E3 SD1 3層	陶器	碗	底縁	—	灰釉	白海輪	—	3.6	3.5	小野相馬	18C後半	—	
21-3	I-7	S3E3 SD1 3層	陶器	香炉	底部片	—	鉄軸 5び輪	—	—	8.2	3.5	神戸・美濃	18C後半	白海輪と鉄軸の掛け分け。	
21-4	I-6	S3E3 SD1 3層	陶器	土瓶	口縁部片	—	白海輪	—	—	3.4	—	大塚相馬	18C後半 2段階	—	
21-5	I-8B	S3E3 SD1 3層	陶器	碗	口縁~底	30%	鉄軸 白海輪	白海輪	13.6	4.3	5.7	大塚相馬	18C後半2段階 4093C	白海輪と鉄軸の掛け分け。	
21-6	J-14	S4E4 SD1 3層	磁器	小碗	底部片	—	染付	染付	—	—	—	(3.4)	肥前	17C後半~ 18C前半	見込みに草花文?
21-7	I-10	S4E4 SD1 3層	瓦質土器	鉢	口縁部片	—	—	—	—	—	—	—	3.9	在池	不明

第21図 SD1溝跡 平・断面図及び出土遺物

(2) SD2 溝跡 (第22図、図版7-2・3・8)



調査区東側、S3-E2～S4-E2グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された。SD1に並走する形で、ほぼ南北方向に伸びる素掘りの溝である。南北両端の伸びは擾乱によって削平される。規模は残存長650 cm、上端幅96 cm～110 cmの間で広狭をもち、南に向かってゆるやかに下り傾斜し、浅い所では深さ34 cm、最深部では40 cmを測る。断面形は「U」字状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。水流の痕跡は観察できなかった。堆積土は1～5層からなり、1層は明褐色ブロックを多量に含んだ粘土質シルト、2、3層は径1 mm以下の砂粒と小礫を多量に含んだ砂礫層、4層は上層2層と良く似た粘土質シルト、5層は細礫を多量に含んだ粘土質シルトである。遺物は出土していない。(小林)



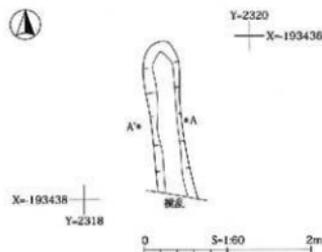
SD2 土層誌記

層数 土層誌記	色調	土質	特性	混入物・備考
1	75YR3/1	黒褐色 粘土質シルト	あり	径1 mm以下のシルト、1 mm～3 cmの明褐色シルトブロック多量。
2	75YR4/1	褐色 粘土質シルト	なし	径1 mm以下の砂、径3 cm～5 cmの礫多量。
3	75YR4/1	褐色 砂礫	なし	径1 mm以下の砂、明褐色シルトブロック、径3 cm～5 cmの礫多量。
4	75YR2/1	黒褐色 粘土質シルト	あり	シルト微量、2層に類似。
5	75YR5/1	褐色 粘土質シルト	あり	径5 mm～10 mmの礫多量、暗褐色シルト少量。

第22図 SD2 溝跡 平・断面図

(3) SD5 溝跡 (第23図、図版7-4・5)

調査区南東側、S4-E2グリッドに位置する。Ⅲ層上面層で検出された。ほぼ南北方向に伸びる素掘りの溝である。南側の伸びは擾乱によって削平される。規模は残存長195 cm、上端幅56 cm、深さ25 cmを測り、底面は平坦で比高差は認められない。断面形は開いた「U」字状を呈する。水流の痕跡は観察できなかった。堆積土は単層で炭化物粒を多量に含んだシルトの単層である。遺物は出土していない。(小林)



SD5 土層誌記

層数 土層誌記	色調	土質	特性	混入物・備考
1	10YR2/3	黒褐色 シルト	あり	炭褐色シルト粒、炭化物粒多量。

第23図 SD5 溝跡 平・断面図

3 井戸跡

(1) SE2 井戸跡 (第24～26図、図版9)

〈遺構状況〉調査区中央部北側、S3-E4グリッドに位置する。III層上面で検出された。石組の井戸で、平面形は円形を呈する。規模は上部内径約120cm、底部内径約80cmを測り、深さは270cmを測る。検出面より130cmまでは人力で掘り下げ、さらに下層においては安全を考慮して井戸底まで重機による掘り下げを行った。その際、石組みが崩落し、その構成や堆積土などの状況を詳細に把握することができなかった。

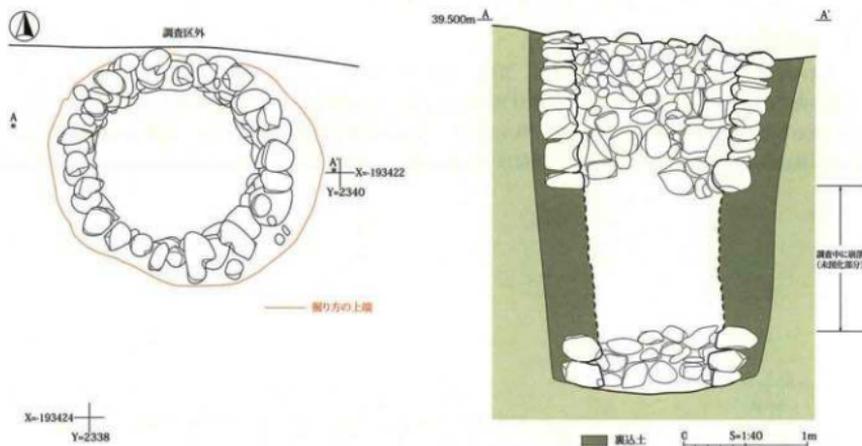
〈掘り方〉検出部分については下部から上部にかけて緩やかに広がる円筒状を呈する。規模は、上部径210cm、底部径110cmを測る。壁面の傾斜角は80度～85度を測る。鑿井時の足場等は検出されなかった。

〈井側構造〉井側は石組で、石材を円筒形に積んで構築している。石材は長さ20cm～40cm、幅10cm～25cm、厚さ20cm～45cmの扁平な楕円形の自然礫を利用している。積み方は石材を放射状に並べた、いわゆる乱石積みである。大型の石材の間に小型の石材を詰めている。底部から上部まで石の積み方に変化はなかったと思われ、上部外径180cm、底部外径140cmを測る。

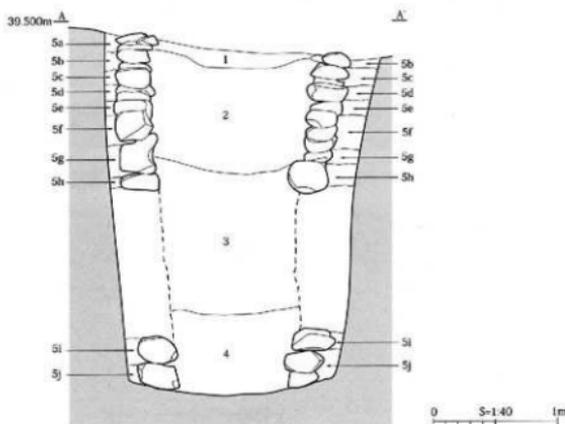
〈裏込土〉裏込の土は原則的に石を一段ないし二段積み毎に石の高さだけ埋められている。下層部はグライ化しているものの土質・土色はいずれも同様で、各層ともに砂礫が多く混入している。5a～5j層までを観察することができた。

〈堆積土〉4層からなり、1層は細礫、炭化物を含む砂層で、2層は水分を多量に含んだ砂質シルトである。3層、4層ともにグライ化した粘土質シルトである。また、2層以下の堆積土中から、崩落した石材が多量に検出された。1層については炭化物の混入や廃材等の混入があるため人為的に埋められたものと考えられる。

〈出土遺物〉遺物は堆積土中から、18世紀中頃から19世紀前半の陶器片36点、磁器片52点、土師質土器7点、瓦質土器片5点、瓦小片39点、木製品8点、合計147点が出土し、20点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。陶器と磁器は、肥前産、大瀬相馬産、堤産等が出土した。第26図の12は18世紀中頃の肥前産と考えられる青磁染付の龍文輪花皿である。第25図の1～6は陶器、5は18世紀後半から19世紀前半の大瀬相馬産と考えられる鉄絵染付の土瓶である。第26図の7は19世紀代と考えられる堤産の軟質灰軸陶器の焙烙、8～14は磁器、15・16は在地系の土師質土器、17～19は木製品で曲物の底である。20は漆器碗の破片である。(守谷)

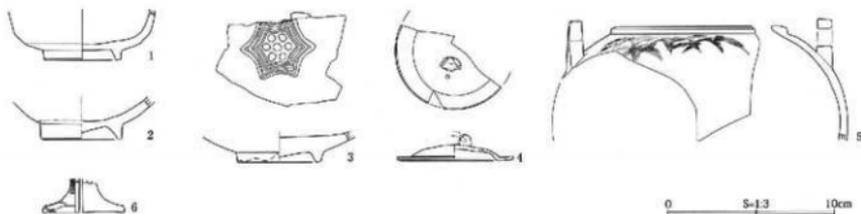


第24図 SE2 井戸跡 平・断面図及び立面図



SE2土層誌記

層番号	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	S5Y3/3	緑オリーブ褐色	粘土質シルト	網礫多量。炭化物微量。
2	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり 径10cmの礫多量。崩落した大粒径石を少量。
3	SB3/1	暗青灰色	粘土質シルト	あり 径3cm~10cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。崩落した大型石片を多量。
4	SU2/1	青黒色	粘土質シルト	あり 径3cm~10cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。
5a	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。炭込土。
5b	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。炭込土。
5c	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。炭込土。
5d	10YR2/1	黒色土	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。炭込土。
5e	10YR2/1	黒色土	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。炭込土。
5f	SU2/1	青黒色	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。炭込土。
5g	SU2/1	青黒色	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。炭込土。
5h	SU2/1	青黒色	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径1mm以下のシルト粒多量。炭込土。
5i	SU2/1	青黒色	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径10cm~径15cmの礫を多量。炭込土。
5j	SB3/1	暗青灰色	粘土質シルト	あり 径1cm~5cmの礫、径10cm~径15cmの礫を多量。炭込土。

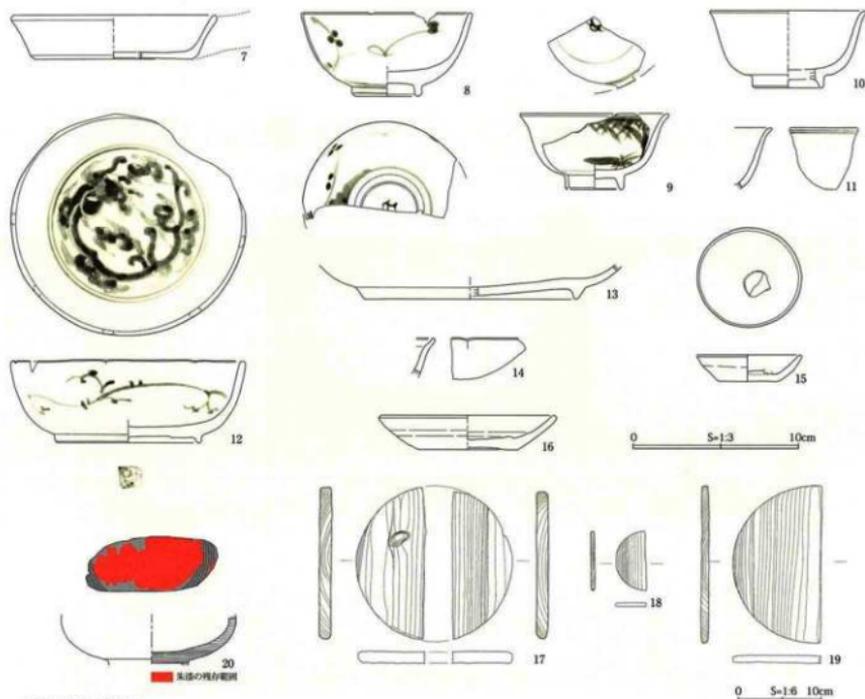


SE2出土遺物観察表

図録番号	登録番号	グリップ遺構・層位	種類	器種	部位	残存率	外周	内面	造景 (cm)			発地	時期	備考
									口径	底径	器高			
25-1	1-30	S3-E4	陶器	碗	縁部~底面	90%	白滑輪	白滑輪	—	40.7	3.0	大塚相馬	18C後半以降	—
		SE2 2層												
25-2	1-25	S3-E4	陶器	碗	底部分	—	淡青色釉	淡青色釉	—	43.8	2.6	小野相馬	18C	—
		SE2 2層												
25-3	1-28	S3-E4	陶器	蓋?	底部分	90%	灰緑	印花文	—	5.0	1.7	大塚相馬	18C前半以降	見込に摺押による印花文。
		SE2 2層												
25-4	1-22	S3-E4	陶器	急須	蓋片	—	白滑輪	—	—	7.0	1.6	大塚相馬	19C	つまみに白滑輪。
		SE2 2層												
25-5	1-21	S3-E4	陶器	土甕	口縁~底面	30%	鉄輪	灰緑	9.6	—	7.5	大塚相馬	18C後半~19C前半	鉄輪による管文。
		SE2 2層												
25-6	1-32	S3-E4	陶器	仏教具	底部	—	鉄輪	—	—	5.0	2.1	大塚相馬	18C~19C	—
		SE2 2層												

第25図 SE2井戸跡 断面図及び出土遺物

第3節 III層上面



SE2 出土遺物観察表

図録 番号	タリッド 番号	遺構・層位	種別	器種	部位	残存率	外面	内面	寸法 (cm)			産地	時期	備 考
									口径	底径	器高			
26-7	I-29	S3-E4 SE2 2層	陶器	焙焼	口縁- 底部片	—	鉛輪	鉛輪	12.2	9.5	2.6	焼焼	19C	軟土施輪陶器。
26-6	J-35	S3-E4 SE2 2層	磁器	碗	口縁-底部	50%	染付 染付	透明釉	10.1	3.9	5.1	肥前	18C	底面見取。くらわんか子。草花文。 見込みにて目録調査。
26-9	J-39	S3-E4 SE2 2層	磁器	小形碗片	口縁-底部	20%	染付	染付	8.8	3.3	4.7	肥前	19C前半	藍文?
26-10	J-40	S3-E4 SE2 2層	磁器	小形碗片	口縁-底部	40%	環状輪	透明釉	9.4	4.0	4.7	肥前	19C	—
26-11	J-38	S3-E4 SE2 2層	磁器	環状小片	口縁- 底部下縁	20%	染付	—	—	—	3.5	肥前?	17C中頃	口縁二重線飾。
26-12	J-37	S3-E4 SE2 2層	磁器	輪花皿	口縁-底部	80%	染付	染付	14.1	8.8	5.2	肥前	18C中頃	内面：藍文。青磁色付文輪花皿。底の目録調査。 高台内に銅線あり。二重飾文。目録あり。
26-13	J-36	S3-E4 SE2 2層	磁器	皿	底部片	—	灰輪	灰輪	—	8.2	2.5	肥前	18C以降	白磁?
26-14	J-34	S3-E4 SE2 2層	磁器	輪花鉢	口縁部片	—	—	—	—	—	2.8	肥前	17C	色合い的には波佐見の可能性あり。
26-15	I-26	S3-E4 SE2 2層	土師質土器	灯明皿	完形	100%	油煙付着	—	6.2	3.6	2.1	在地?	18C-19C	—
26-16	I-27	S3-E4 SE2 2層	土師質土器	灯明皿	口縁-底部	20%	—	—	10.5	6.0	2.1	在地?	18C-19C	—
26-17	L-5	S3-E4 SE2 2層	木製品	曲物	底部?	60%	—	—	18.0	—	—	在地	19C	厚さ1.3cm。板目取り。
26-18	L-6	S3-E4 SE2 2層	木製品	曲物	底部?	50%	—	—	8.0	—	—	在地	19C	厚さ0.4cm。板目取り。
26-19	L-7	S3-E4 SE2 2層	木製品	曲物	底部?	50%	—	—	29.0	—	—	在地	19C	厚さ0.8cm。板目取り。
26-20	L-8	S3-E4 SE2 2層	木製品	漆器碗	底部-底面	20%	漆	赤漆	—	5.0	3.0	在地	19C?	漆器の碗で内面に赤漆。縦木取り。

第26図 SE2井戸跡 出土遺物

(2) SE5 井戸跡 (第27図、図版10)

〈遺構状況〉調査区中央南側、S4-E4グリッドに位置する。V層上面で検出された。北側半分がSB1の掘り方により削平されている石組の井戸で、平面形は円形を呈すると考えられる。SX25を切り、北側をSB1の掘り方に切られる。上部内径約90cm、底部内径約80cmを測り、深さ96cmを測る。井戸としては非常に浅い。

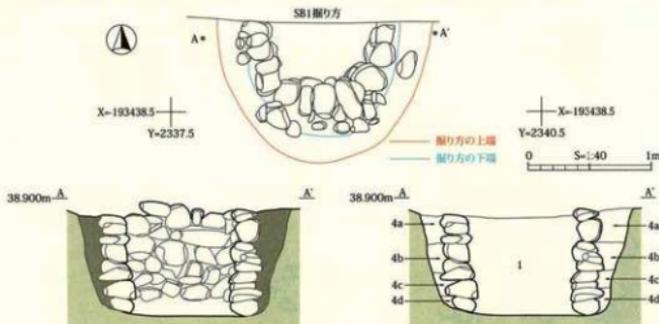
〈掘り方〉南半分しか残存しないが、検出部分においては上端部分がやや広がる円筒形を呈している。規模は、上部径170cm、下部径133cmを測る。壁面の傾斜角は80度～82度を測る。

〈井側構造〉井側は石組のもので、石材を円筒形に積んで構築している。石材は長さ15cm～40cm、幅15cm～20cm、厚さ15cm～20cmの扁平な楕円形の自然礫を利用している。積み方は石材を放射状に並べた、いわゆる乱積であり、大型の石材の間に小型の石材を詰めている。底部から上部までの石の積み方に変化はなかったと思われ、上部外径は120cm、底部外径110cmを測る。

〈裏込土〉崩落が著しく詳細な観察ができなかったが、いずれの層も砂礫が多量に混入する砂質シルトである。明確ではないが、石を一段ないし二段積む毎に石の高さだけ埋められたものと推測できる。4a～4d層を観察した。

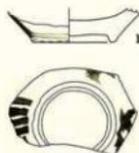
〈堆積土〉炭化物を多量に含んだ褐色のシルト層からなり、崩落した石材が多量に検出された。SB1を建築する際に埋め立てられたものと考えられる。

〈出土遺物〉遺物は堆積土中から、17世紀末から18世紀前半と考えられる肥前の染付碗が1点出土した。(守谷)



SE5 土層誌記

層別土 層別土	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	10YR4/4	褐色シルト	あり	炭化物多量。崩落した石材が多量。
2a	7.5YR4/4	褐色シルト	あり	炭化物少量。径1cm～3cmの砂礫多量。裏込土。
2b	7.5YR4/4	褐色シルト	あり	炭化物少量。径1cm～3cmの砂礫多量。裏込土。
2c	7.5YR4/4	褐色シルト	あり	炭化物少量。径1cm～3cmの砂礫多量。裏込土。
2d	7.5YR4/4	褐色シルト	あり	径1cm～3cmの砂礫を多量。径10cmの礫少量。裏込土。



SE5 出土遺物観察表

図版 番号	登録 番号	グリッド 座標・層位	種別	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)		産地	時期	備 考
									口径	底径			
27-1	J-41	SS-E5 SE5-1層	磁器	碗	底部	80%	染付	—	—	4.9 2.2	肥前	17C末～ 18C前半	波佐見産? 灰輪だがやや青い。

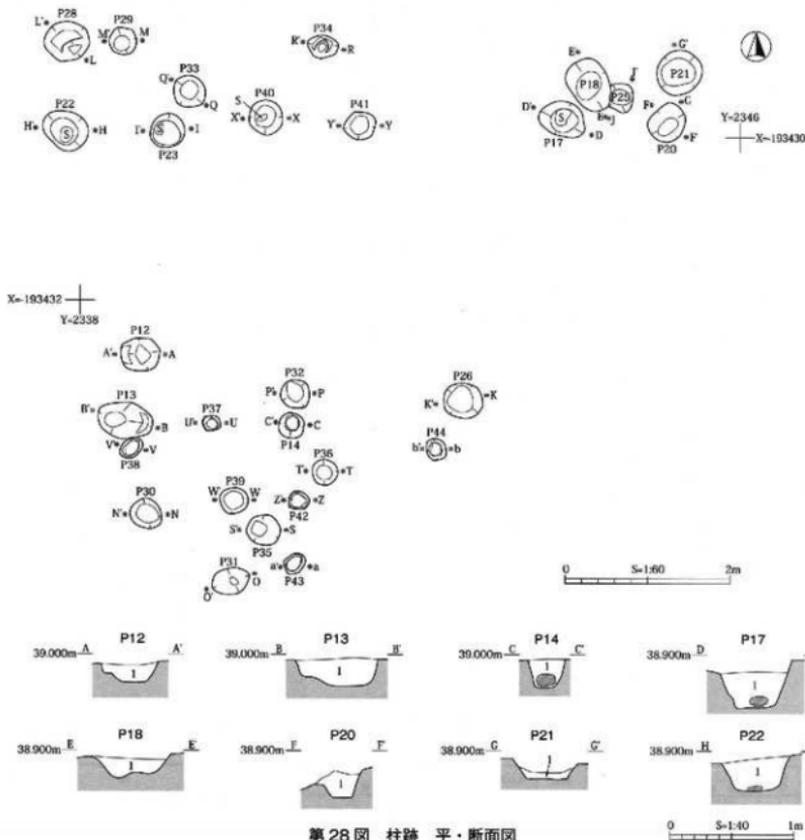
第27図 SE5 井戸跡 平・断面図及び出土遺物

4 柱跡 (第28～29図、図版11)

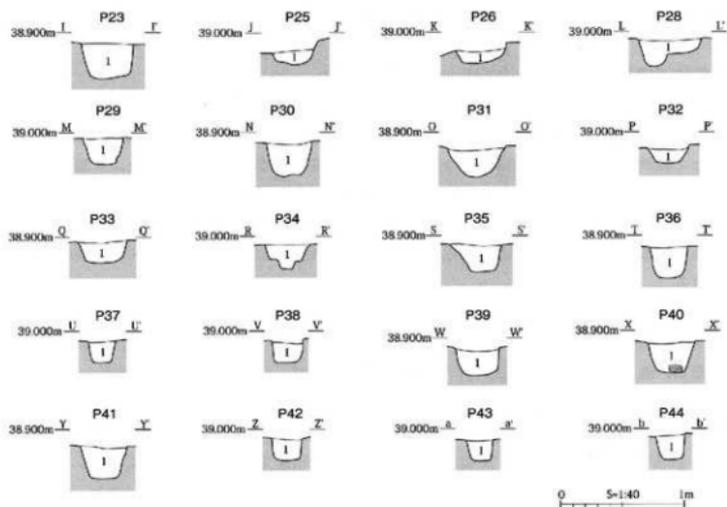
調査区中央、S3-E5～S4-E5グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された。P12～14、P17、P18、P20～23、P25、P26、P28～44の28基のピットを数え、P18はP25を切る。いずれの柱穴も第二師団による盛土整地で上部が著しく削平されており、明確に組むものは検出できなかった。

いずれも平面形は円形ないし楕円形を呈し、上端径は20cm～25cm、下端径は15cm～20cm、深さは15cm～30cmを測り、堆積土は単層で同一の土壌が検出された。また、P14、P17、P22、P40には径15cm～20cm、厚さ7cm～10cm程の自然礫を用いた根石が検出された。

遺物は磁器がP17より1点、P18より2点、P20より1点出土している。瓦質土器はP18より1点、土製品はP23より1点出土している。第29図の1は18世紀の肥前産と考えられる染付碗、2は18世紀前半の肥前産の小碗、3は18世紀の波佐見産の小碗、4は18世紀代の在地産と考えられる瓦質土器の獣面蚊造りの脚部である。(土橋)

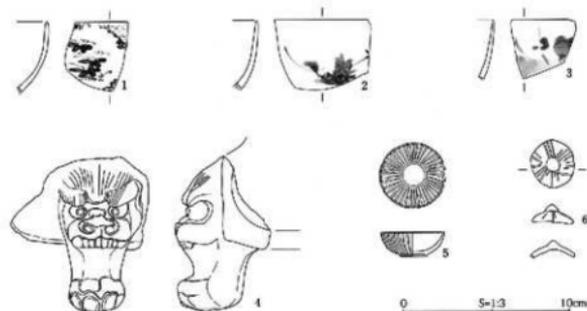


第28図 柱跡 平・断面図



柱跡土層柱記

遺構名	層別土 柱跡上	色調	土質	材質	混入物・備考
P22～24, P28～44	I	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	女L 黒褐色シルト粒中量。最下1cmは暗灰褐色に変色。
P25	I	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	女L 黒褐色シルト粒中量。



柱跡出土遺物観察表

図面 番号	登録 番号	グリッド 遺構・層位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	重量 (cm)			産地	時期	備 考
									口径	底径	器高			
29-1	J-42	S3 E5 - S4 E5	磁器	染付碗	体部片	-	染付	-	-	-	4.3	肥前	18C	外面: 地文水鏡文、空輪内に草花文。
		P17 1層												
29-2	J-43	S3 E5	磁器	小碗	口縁- 体部片	-	刷目 草花文	-	-	4.4	肥前	18C前半	外面: コンニャク印判。	
		P18 1層												
29-3	J-44	S3 E5	磁器	小碗	口縁- 体部片	-	染付	-	-	3.7	肥前	18C	液色見染。外面: 草花文。	
		P18 1層												
29-4	I-35	S3 E5	瓦質土器	鉢	脚部	30%	-	-	-	5.4	9.5	在地	18C	断面較通り。
		P18 1層												
29-5	I-6	S3 E5 - S4 E5	磁器	紅藍	口縁- 底部	完形	印花唐草	-	4.0	1.6	1.5	肥前	19C	製作リ。
		P20 1層												
29-6	I-7	S3 E4 - S4 E4	土製品	不明	完形	略定形	沈凝	-	2.8	-	1.2	在地	19C	人形の一部か。
		P23 1層												

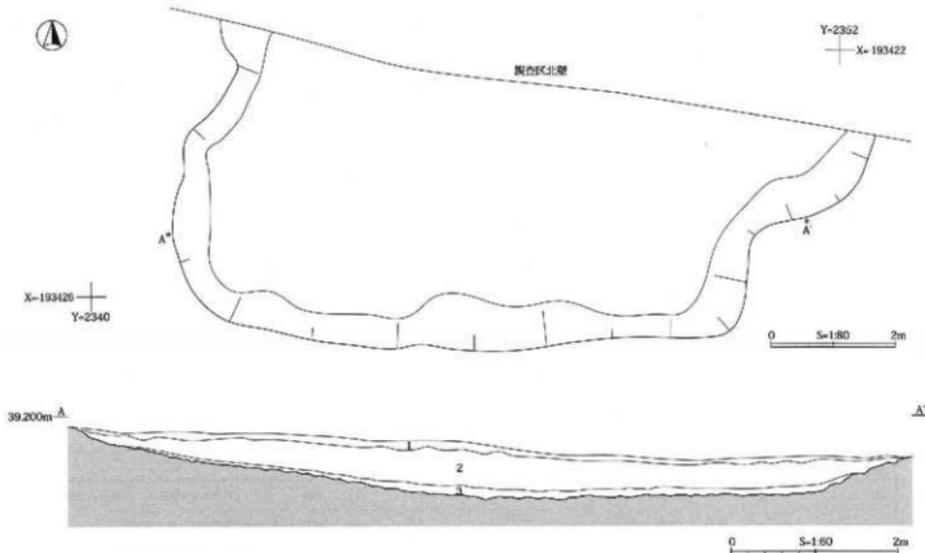
第29図 柱跡 断面図及び出土遺物

5 性格不明遺構

(1) SX4 性格不明遺構 (第30～47図、図版12～13)

〔遺構状況〕 調査区中央北側、S3-E5～S3-E6グリッドに位置する。III層上面で検出された。北側は調査区外に伸び、南側をSD4に切られる。平面形は不定形を呈する。上端規模は長軸1000cm、短軸440cm、深さ45cmから65cmを測り、北側に向かって傾斜が認められる。壁は緩やかに立ち上がり、底面は起伏を持つ。堆積土は3層の砂質シルトからなり、1層は炭化物、細礫を多量に含む。2層は炭化物、細～中礫を多量に含み、鉄分の沈着と一部にグライ化が認められる。3層は小礫、大礫を多量に含んでいる。遺構の形状や堆積土の状況から、近世～近代初頭のゴミ穴とも考えられる。堆積土1～2層からは遺物とともに礫が多量に検出されているが、これらも投げ込まれ廃棄されたものと思われる。

〔出土遺物〕 遺物は堆積土中より、17世紀後半から19世紀中頃の陶器片591点、磁器片728点、土師質土器片88点、瓦質土器片8点、瓦小片139点、合計1554点が出土し127点を図化した。その他のものは細片のため図化し得なかった。陶器は肥前、瀬戸・美濃、大塚相馬、萬古、堤、在地のもので、いずれも17世紀後半から19世紀中頃に生産されたものである。磁器は肥前、瀬戸・美濃、切込のもので、17世紀末から19世紀中頃に生産されたものである。第29図の12～19はいずれも19世紀に生産された大塚相馬産の土瓶である。12は外面全体に瑠璃釉が施される。13はイッチン技法による文様描出、14～16は外面に色絵が施され山水文、色絵菊文等施文される。SX4では土瓶の出土量が多い。第33図の28は17世紀に生産されたと考えられる献上手の備前産の徳利であり、外面に火燗が見ら

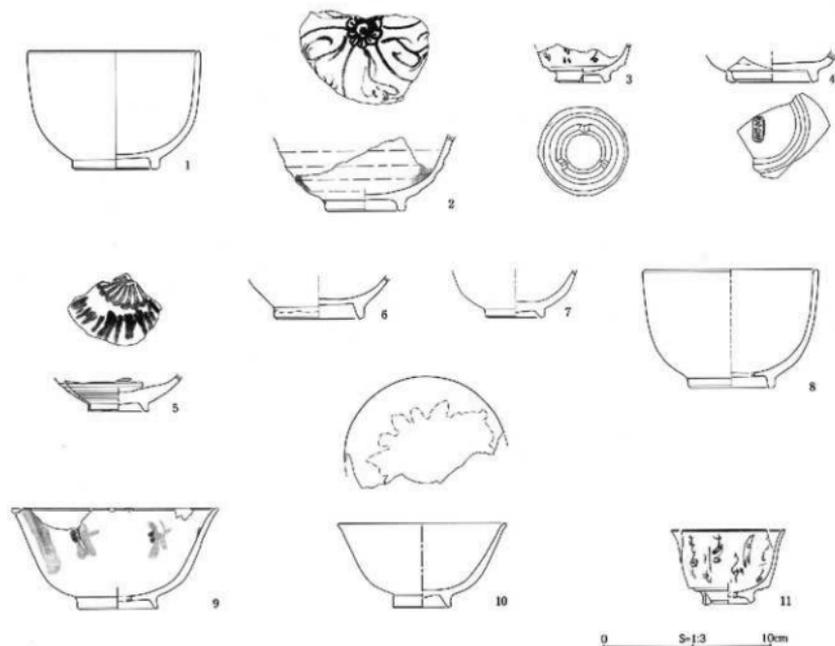


SX4 性格不明遺構土層註記

層別土 構成土	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	7.5YR3/1	黒褐色 砂質シルト	なし	炭化物粒、細礫多量。
2	2.5Y3/1	黒褐色 砂質シルト	あり	1cm以下の炭化物中量、細～中礫多量。鉄分の沈着が見られ、ややグライ化する。
3	10YR3/4	暗褐色 砂質シルト	なし	小～大礫多量。

第30図 SX4 性格不明遺構 平・断面図

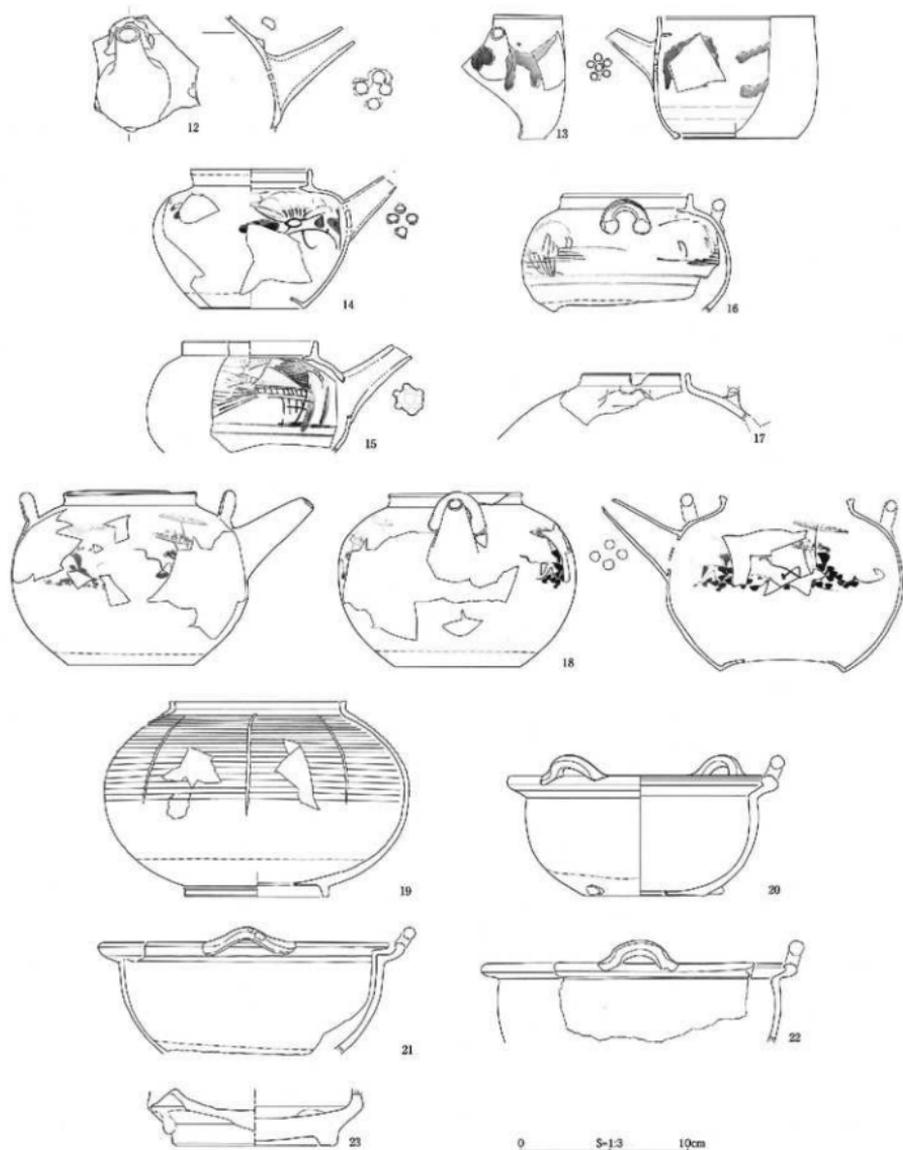
れる。第34図の33は萬古焼で外面に「萬古陽楓軒千秋」と押印され森与平千秋の作と思われる急須の把手から受部の破片である。第40図～第45図の86～109はいずれも幕末から明治にかけて生産されたと思われる瀬戸・美濃産の磁器の皿で胎土色、呉須の色合い等は様々だが、相似した文様が施文される。第46図の119は切込焼の徳利であり、外面に精緻な筆使いで竹文が描出される。(守谷)



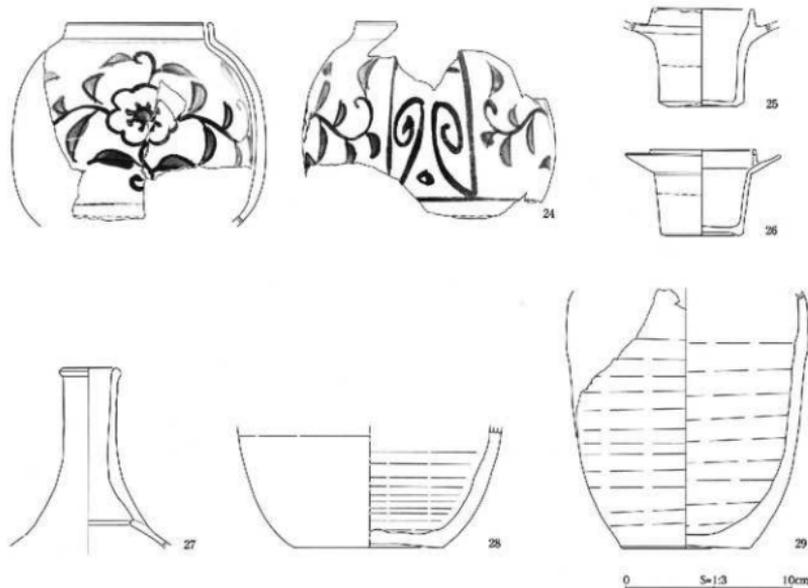
SX4 性格不明遺構出土遺物群表

図表番号	発見 年	グリップ 遺構・層位	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)			産地	時期	備考	
								口径	表径	器高				
31-1	174	SPB5 SX4 2層	陶器	柄	口縁~底部	50%	灰釉	灰釉	10.2	5.0	7.2	信楽?	18C 以降	胎土に黒い粒子が混入。
31-2	149	SPF5 SX4 2層	陶器	碗	底破片	-	青緑釉 撥け脱し	鉄絵	-	(4.6)	(4.7)	美濃	19C	呉須・鉄絵による表文? ろくろ形底面あり。
31-3	156	SB5 SX4 2層	陶器	碗	底部	100%	鉄絵	白濁釉	-	2.6	(2.4)	大瀬相馬	19C	文字文。
31-4	160	SPB5 SX4 2層	陶器	碗	底破片	-	染付	染付	-	(5.0)	(1.9)	不明	19C	高台内に「まひこ」の影印印。 外面：鉄絵・鉄絵。内面：鉄絵・鉄絵。 器材状の磁器。撥け付残。
31-5	150	SB5 SX4 2層	陶器	碗 or 小鉢	底破片	-	鉄絵	鉄絵	-	(3.6)	(2.3)	大瀬相馬	18C 後半~ 19C 前半	法量みに劣る内面。 器材状の磁器。撥け付残。
31-6	139	SPB5 SX4 2層	陶器	碗	底部~身部	80%	灰釉 一部白濁釉	-	-	5.0	(2.6)	肥後?	19C	唐津?
31-7	140	SPB5 SX4 2層	陶器	碗	底破片	50%	白濁釉	白濁釉	-	3.3	(2.9)	大瀬相馬	18C 後半	—
31-8	167	SB5 SX4 2層	陶器	丸碗	口縁~底部	20%	灰釉	灰釉	10.3	5.0	7.2	信楽?	18C?	—
31-9	166	SPB5 SX4 2層	陶器	湯反碗	口縁~底部	90%	灰釉	白濁釉	(12.3)	4.7	6.2	不明	不明	唐絵文。撥け脱し。染付は鉄絵。
31-10	170	SB5 SX4 2層	陶器	碗反碗	口縁~身部	50%	青釉	白濁釉	9.9	3.1	5.6	大瀬相馬	18C 後半~ 19C 前半	撥け分け。閉り出し高台。
31-11	168	SPB5 SX4 2層	陶器	小杯	口縁~底部	40%	濃い緑色釉 文字は鉄絵	白濁釉	(6.7)	(2.6)	4.5	大瀬相馬	19C 前出	裏面に唐書。

第31図 SX4性格不明遺構 出土遺物 1



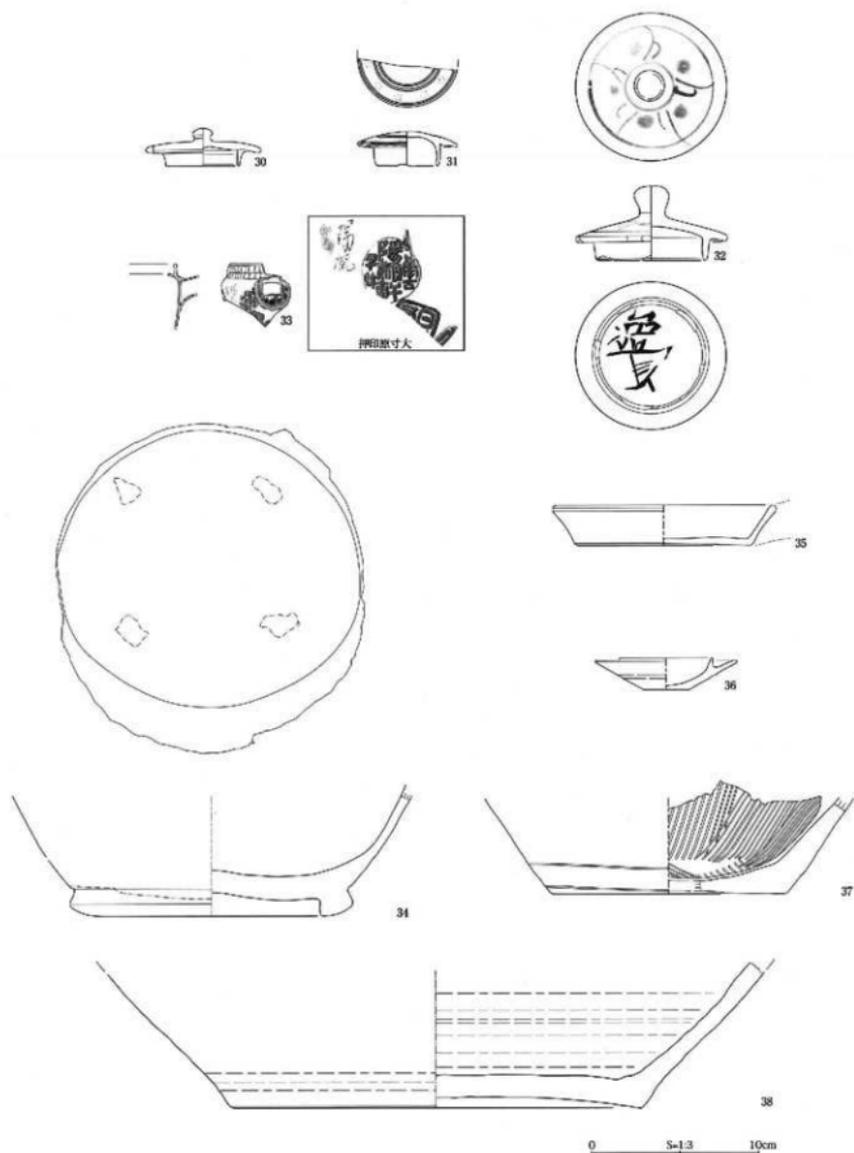
第32图 SX4 性格不明遺構 出土遺物 2



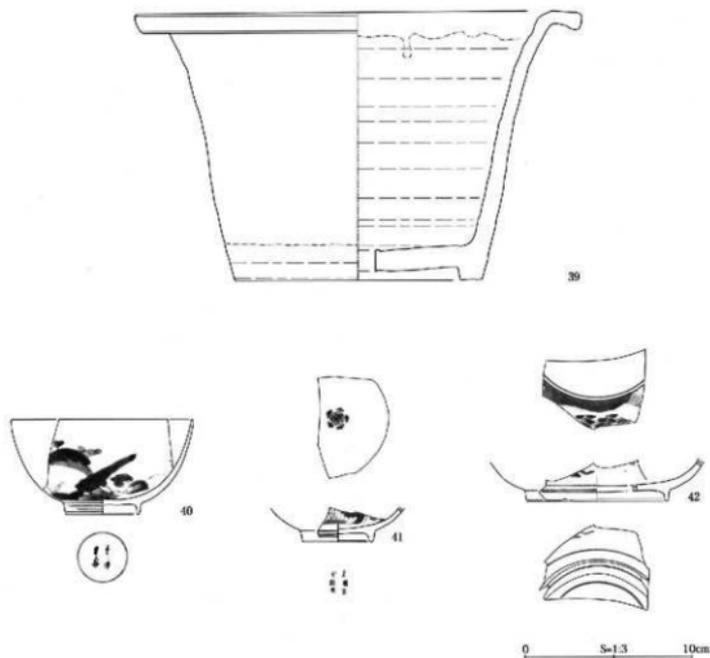
SX4 性格不明遺構出土遺物観察表

調査 番号	登録 番号	グリップ 遺構・部位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)			産地	時期	備 考
									口径	底径	器高			
32-12	154	SP5 SX4 2層	陶器	土瓶	注口片	-	磨瑯	一部施釉	1.4	-	7.1	大塚相馬	19C 前半 以降	—
32-13	141	SP5 SX4 2層	陶器	急須	口縁～注口	30%	白濁釉	透明釉?	8.0	(4.8)	(8.1)	大塚相馬	19C	白濁釉を流し掛ける。
32-14	153	SP5 SX4 2層	陶器	急須	口縁～胴部	40%	赤褐色	-	(7.0)	(6.0)	8.5	大塚相馬	19C 前半 以降	白い化粧土によるイッチン掛き。
32-15	177	SP5 SX4 2層	陶器	土瓶 or 急須	口縁～胴部	40%	色絵 山水文	-	(7.8)	-	(6.8)	大塚相馬	19C 前半～ 中頃	外面：色絵風景文。
32-16	148	SP5 SX4 2層	陶器	土瓶	口縁～胴部	40%	色絵	-	7.6	-	(7.3)	大塚相馬	19C 前半 終末	外面：山水文。
32-17	181	SP5 SX4 2層	陶器	土瓶	口縁～ 胴部下流	40%	色絵	-	8.0	7.2	11.0	大塚相馬	19C	外面：色絵寄文。
32-18	J-130	SP5 SX4 2層	陶器	土瓶	口縁～ 胴部片	-	白濁釉	白濁釉	(6.3)	-	(4.0)	大塚相馬	19C 前半 19C 後半	外面：色絵寄文。
32-19	165	SP5 SX4 2層	陶器	鉢	口縁～胴部	20%	灰緑	灰緑	10.6	8.4	12.0	大塚相馬	19C 末 19C	横紋比類を縦比類で区画。
32-20	172	SP5 SX4 2層	陶器	土瓶	口縁～胴部	30%	鉄釉	鉄釉	-	-	8.5	堤	19C 前半	底部に蓮が付着。
32-21	158	SP5 SX4 2層	陶器	鉢	口縁～ 胴部片	-	鉄釉	鉄釉	(18.4)	-	(6.6)	瀬戸灰焼?	19C	—
32-22	143	SP5 SX4 2層	陶器	鉢	口縁部	20%	鉄釉	鉄釉	(18.4)	-	(6.3)	堤	19C	—
32-23	152	SP5 SX4 2層	陶器	甕?	底部	40%	黒釉	-	-	(9.4)	3.5	堤	19C	釉薬が厚く施される。
32-24	182	SP5 SX4 2層	陶器	甕	口縁～胴部	10%	色絵	施釉	8.4	-	(12.0)	?	19C	外面：異原絵はたん? 内面：白濁釉。
32-25	163	SP5 SX4 2層	陶器	湯受け皿	口縁～胴部	70%	灰緑	灰緑	(6.0)	4.1	(6.0)	堤?	19C	全体に二次焼成をうける。
32-26	144	SP5 SX4 2層	陶器	湯受け皿	口縁～底部	95%	鉄釉 鉄釉	鉄釉 鉄釉	6.2	4.4	5.3	大塚相馬	19C 前半	内面は絵のための光沢がある。
32-27	169	SP5 SX4 2層	陶器	徳利	口縁～胴部	100%	白濁釉 白濁釉	白濁釉	3.2	-	(1.0)	大塚相馬	19C 前半 19C 中頃	—
32-28	164	SP5 SX4 2層	陶器	徳利	底部片	-	-	-	-	8.9	7.4	堤	19C 前半	ろくろ形成品あり。小型葉?
32-29	157	SP5 SX4 2層	陶器	甕	胴部～底部	30%	黒褐色釉	黒褐色釉	-	7.6	15.8	堤	19C 以降	ろくろ形成品あり。小型葉?

第 33 図 SX4 性格不明遺構 出土遺物 3



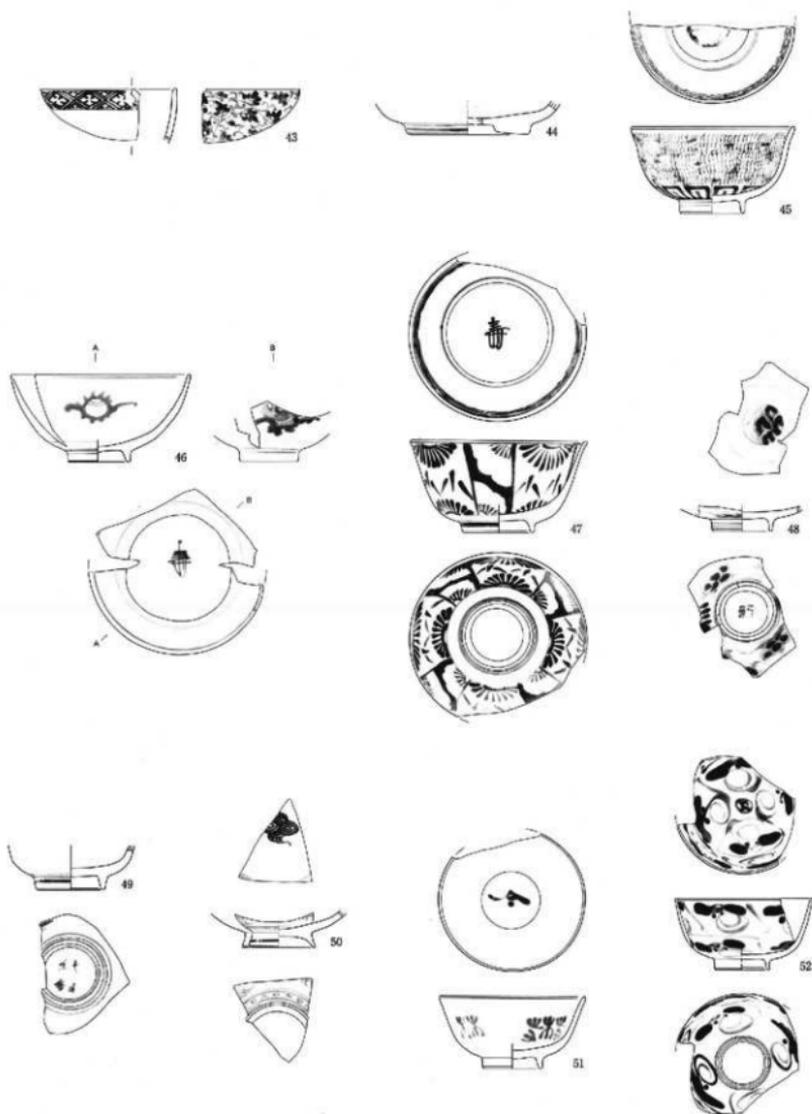
第34図 SX4 性格不明遺構 出土遺物 4



SX4 性格不明遺構出土遺物観察表

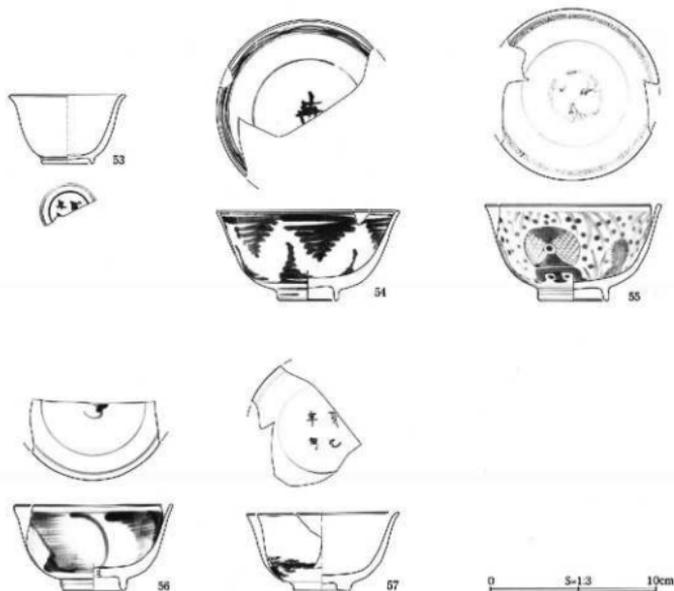
図記 番号	発跡 番号	グリッド 遺構・層位	類別	器種	部位	残存率	外面	内面	寸法 (cm)			産地	時期	備 考	
									口径	口径	器高				
34-30	I-76	SB E5 SX4 2層	陶器	鳥原 or 土原の蓋	つまみ一 受?	80%	白海輪	-	つまみ 径 1.2	4.4	2.4	大塚相馬	18C-19C 前半	—	
34-31	I-51	SB E5 SX4 2層	陶器	蓋	林部-鳥原	40%	象嵌花文	-	3.6	-	2.1	不明	19C?	白化粧土の象嵌。	
34-32	I-62	SB E5 SX4 2層	陶器	急須	口縁一 注口縁	-	色絵 緑文字	-	-	-	-	(39)	高古焼	19C 中頃	落葉軒千伏、落葉、日本高古の印あり。 19C 前半-中期 外蓋：山吹文。
34-33	I-59	SB E5 SX4 2層	陶器	土原の蓋	蓋	50%	色絵	-	(2.0)	6.3	4.5	大塚相馬	19C 前半-中期	裏面に特殊不明な文字あり。 外蓋：山吹文。	
34-34	I-45	SB E5 SX4 2層	陶器	受 or 鉢	底部	100%	鉄輪	鉄輪 目取あり	-	17.4	7.0	瀬戸・楽焼	19C?	見張4箇所あり。	
34-35	I-46	SB E5 SX4 2層	土原瓦土器	焙烙	口縁-底縁	50%	鉛輪	鉛輪	13.3	10.4	2.5	埴	19C 前半	把手部欠損。	
34-36	I-78	SB E5 SX4 2層	土原瓦土器	灯明皿	底部片	-	-	-	-	(5.4)	(2.0)	瀬戸?	不明	—	
34-37	I-47	SB E5 SX4 2層	陶器	摺鉢	外部下縁一 底面内	20%	鉄輪	鉄輪	不明	(14.6)	5.8	瀬戸・楽焼	17C-18C	—	
34-38	I-80	SB E5 SX4 2層	土原瓦土器	鉢?	外部-底縁	-	-	-	-	13.4	1.7	空地	19C?	ろくろ形成痕あり。	
35-39	I-42	SB E5 SX4 2層	陶器	植木鉢	口縁-底縁	70%	-	-	26	14.6	1.7	埴	19C 明治以前	ろくろ形成痕あり。口縁内部に鉄輪。	
35-40	J-74	SB E5 SX4 2層	磁器	碗	口縁-底縁	60%	染付の裏文 鳥輪	-	(10.8)	4.3	5.8	肥前	17C 末- 18C 初め	高台内に大明年製もどきの銘あり。	
35-41	J-111	SB E5 SX4 2層	磁器	碗	底部	60%	染付	染付	-	4.0	2.1	肥前	17C 末- 18C 初め	高台内に「天明或は年製」の裏あり。 見張：草書体。	
35-42	J-114	SB E5 SX4 2層	磁器	皿	底部片	-	染付	染付	-	(8.4)	(2.6)	肥前	17C 末- 18C 前半	外面：草文?	

第35図 SX4 性格不明遺構 出土遺物 5



0 S=1:3 10cm

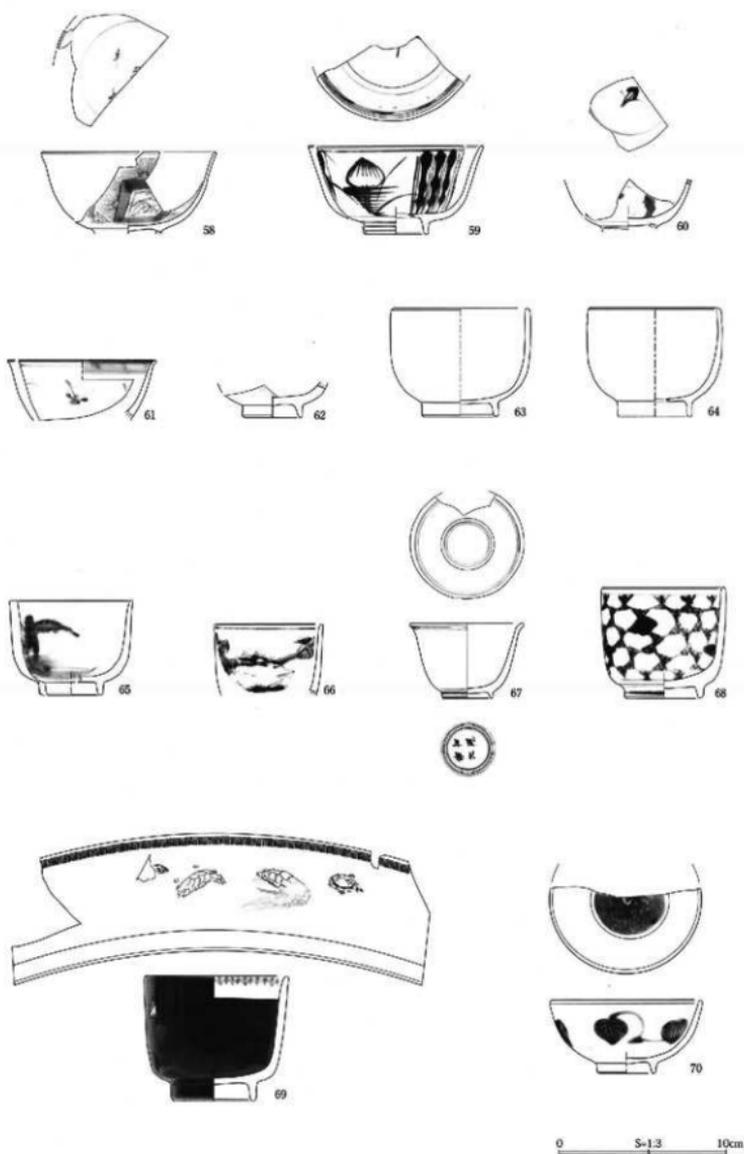
第36圖 SX4 性格不明遺構 出土遺物6



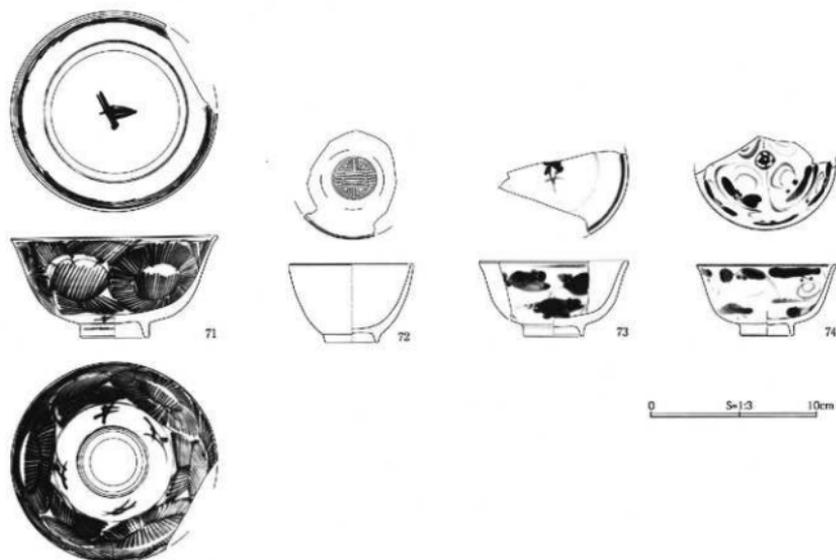
SX4 性格不明遺構出土遺物観察表

図録番号	発掘番号	グリップ遺物・部位	編別	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)			断面	時期	備考
									口径	表径	器高			
36-43	J-54	SP25 SX4 2部	磁器	碗?	口縁一 底部分	-	染付	染付	-	-	(3.3)	肥前	17C 末 - 18C 初期	魚まつぎの痕あり。 外面：牡丹文、内面：四方唐文。
36-44	J-118	SP25 SX4 2部	磁器	碗	底部分	-	染付	-	-	(7.2)	(2.0)	肥前	17C?	蛇の目高台。
36-45	J-103	SP25 SX4 2部	磁器	碗	口縁一 底部分	50%	染付	染付	9.8	3.7	5.3	肥前	19C 中頃	染付唐草文の痕。 外面：みじん唐草文唐文、内面：四方唐文。
36-46	J-96	SP25 SX4 2部	磁器	碗	口縁一 底部分	80%	染付	染付	10.4	4.1	5.7	瀬戸・美濃	19C	外面：大雲文、見込：唐文。
36-47	J-128	SP25 SX4 2部	磁器	碗	口縁一 底部分	70%	染付	染付	10.5	3.6	5.4	肥前	18C 代	外面：半雲、笹、見込：唐文。
36-48	J-93	SP25 SX4 2部	磁器	碗	底部分	-	染付	染付	-	2.0	1.7	肥前	19C 前半	高台内に「唐」字文。
36-49	J-116	SP25 SX4 2部	磁器	碗	底部分	80%	染付	-	-	4.0	(2.7)	肥前	18C?	高台内に「大明年製」の銘あり。
36-50	J-124	SP25 SX4 2部	磁器	碗?	体部一 体部分	-	染付	染付	-	4.4	2.2	肥前	19C 前半	外面：○×文、見込：抽象文。 18C 前半 - 中頃
36-51	J-71	SP25 SX4 2部	磁器	高反碗	口縁一 底部分	90%	染付	染付	8.6	3.4	4.4	瀬戸・美濃	19C 後半	うすく口縁が入る。 外面：唐文・牡丹文、内面：唐文?
36-52	J-65	SP25 SX4 2部	磁器	高反碗	口縁一 底部分	40%	染付	染付	8.1	3.2	4.5	瀬戸・美濃	19C 後半	口縁、重宝花文。外面：崩れた唐文。
37-63	J-139	SP25 SX4 2部	磁器	碗口?	口縁一 体部分	-	染付	染付	6.7	2.9	4.2	肥前	18C	高台内に「成化年製」の銘あり。
37-64	J-99	SP25 SX4 2部	磁器	高反碗	口縁一 底部分	30%	染付	染付	10.8	3.4	5.6	肥前	18C 前半?	口縁内無：格子文、見込：唐文。
37-65	J-108	SP25 SX4 2部	磁器	高反碗	口縁一 底部分	30%	染付	染付	10.4	4.0	5.9	肥前	19C 前半	見込：唐文唐文。 外面：唐文・牡丹文? 内面：唐文。
37-66	J-127	SP25 SX4 2部	磁器	高反碗	口縁一 底部分	40%	染付	染付	9.2	3.4	5.3	瀬戸・美濃	19C 前半 - 中頃	洋風類による染付。
37-67	J-138	SP25 SX4 2部	磁器	高反碗	口縁一 底部分	30%	染付	染付	9.0	3.3	4.8	肥前	19C	蛇の目高台。 外面：唐文? 見込：「成化年製」の銘あり。

第37図 SX4 性格不明遺構 出土遺物 7



第38圖 SX4 性格不明遺構 出土遺物B



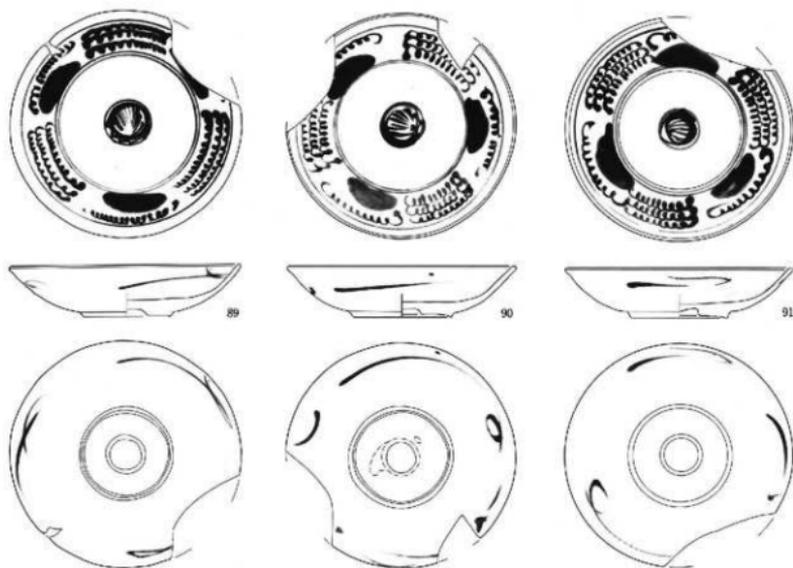
SX4 性格不明遺構出土遺物観察表

遺構番号	目録番号	アソップ遺構・部位	器種	器標	部位	残存率	外面	内面	寸法 (cm)		産地	時期	備考	
									口径	底径				
38-58	J-113	SP85 SX4 2層	磁器	鶏反網	底部分	-	染付	染付	10.4	(4.0)	(5.0)	肥前	19C 前半～中頃	見込：○○○半製の跡あり。
38-69	J-112	SP85 SX4 2層	磁器	鶏反網	口縁～身部	30%	染付	染付	8.8	-	4.7	瀬戸・美濃	19C 前半～中頃	外面：藍染文。洋具類による染付。
38-60	J-148	SP85 SX4 2層	磁器	網	底部分	-	染付	染付	-	(3.4)	(3.1)	肥前	19C	見込：花文。
38-61	J-129	SP85 SX4 2層	磁器	鶏反網	口縁～身部	-	染付	染付	8.8	-	3.7	瀬戸・美濃	19C 前半～中頃	外面：横文。
38-62	J-131	SP85 SX4 2層	磁器	網	底部	100%	染付	-	-	3.4	2.2	肥前	19C 前半	外面：二重格子目文。
38-63	J-128	SP85 SX4 2層	磁器	筒形網	口縁～底面	40%	-	-	8.0	4.4	6.6	肥前	不明	青磁。
38-64	J-122	SP85 SX4 2層	磁器	筒形網	口縁～底面	40%	染付	-	7.2	3.5	5.8	肥前	18C 以降	外面：山水文？ 焼ばさの痕あり。
38-65	J-133	SP85 SX4 2層	磁器	筒形網	口縁～底面	30%	白磁	-	7.6	-	6.7	肥前	18C?	外面：風景文？
38-66	J-137	SP85 SX4 2層	磁器	小筒茶碗	口縁～身部	20%	染付	染付	6.2	-	4.4	瀬戸・美濃	19C	内面：口縁部二重網目。 外面：秋の木、山並。
38-67	J-120	SP85 SX4 2層	磁器	筒反小瓶	口縁～底面	90%	染付	染付	6.7	2.9	4.6	肥前	18C 前半?	存在内に「風化半割」の痕あり。 見込：口縁内側に二重網目。
38-68	J-62	SP85 SX4 2層	磁器	筒形網	口縁～底面	30%	染付	染付	7.4	4.7	6.8	肥前	18C	外面：水梨文・花文、内面：二重網目。
38-69	J-121	SP85 SX4 2層	磁器	筒形網	口縁～身部	-	染付	染付	8.4	4.7	7.9	肥前	19C 前半	器中で鳥文の跡が残っている。 染付による網目。
38-70	J-68	SP85 SX4 2層	磁器	網	口縁～底面	50%	染付	染付	8.8	3.2	4.5	瀬戸・美濃	19C 前半～明治	外面：横文。見込：実年支？ 見込：網目による染付。
38-71	J-88	SP85 SX4 2層	磁器	筒形網	口縁～底面	90%	染付	染付	12.2	4.0	6.2	瀬戸・美濃	18C 前半以降	外面：花文、洋具類による染付。
38-72	J-117	SP85 SX4 1層	磁器	小瓶	口縁～底面	50%	-	彫刻	(7.2)	3.1	(4.8)	瀬戸・美濃	19C 中頃 前半～明治	白磁。口縁。見込：寿字文。
38-73	J-66	SP85 SX4 1層	磁器	筒形網	口縁～底面	20%	染付	染付	(8.8)	(3.5)	4.8	瀬戸・美濃	19C 前半～明治	洋具類による染付。見込：花文。
38-74	J-73	SP85 SX4 1層	磁器	筒形網	口縁～底面	40%	染付	染付	(8.2)	3.2	4.4	瀬戸・美濃	19C 前半～明治	外面：鶴文・松文。内面：雲文・松文。 洋具類による染付。

第39図 SX4 性格不明遺構 出土遺物 9



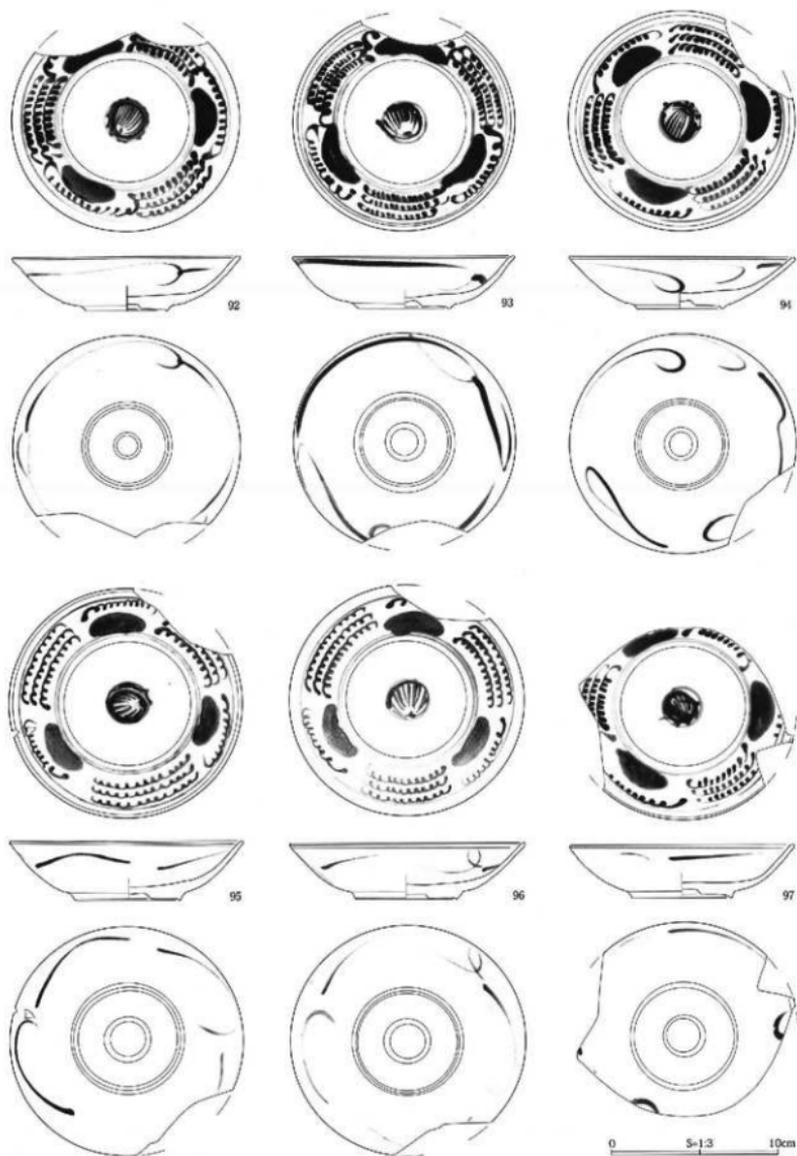
第40圖 SX4 性格不明遺構 出土遺物 10



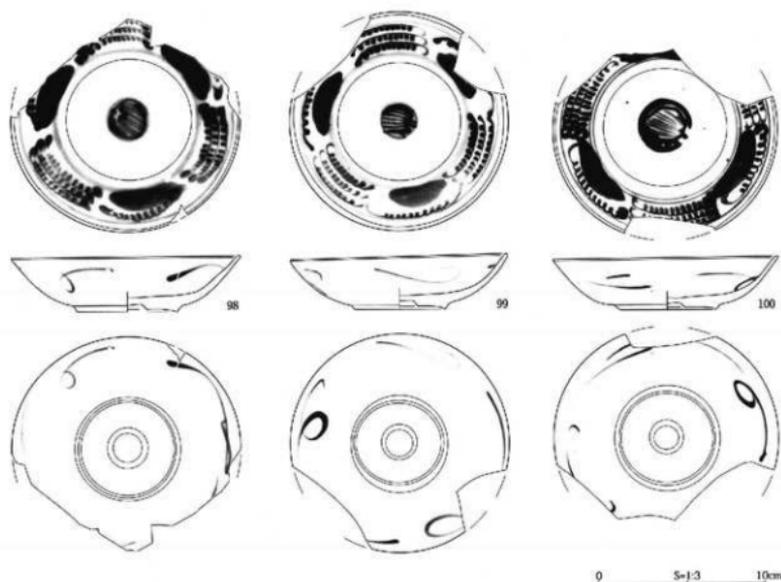
SX4 性格不明遺構出土遺物観察表

調査番号	発掘番号	グリップ 遺構・部位	種別	器種	部位	残存率	外面	内面	寸法 (mm)		産地	時期	備考	
									口径	底径				器高
4075	J-63	SP-E5 SX4 1層	磁器	碗	口縁→底唇	30%	染付	上縁部の文字あり	10.3	(3.9)	(3.2)	瀬戸・美濃?	18C 明治初期	外縁：梵文。底面に「天保年間」の染付あり。 器内の器底面に「天保年間」の文字あり。 器内面に「天保年間」の文字あり。
4076	J-135	SP-E5 SX4 1層	磁器	瓏反碗	口縁→底唇	30%	染付	染付	10.8	3.4	3.2	瀬戸・美濃	18C 明治以前?	外縁：春花文。内面：梵文。 伴具類による染付。
4077	J-98	SP-E5 SX4 1層	磁器	瓏反碗	口縁→底唇	70%	染付	染付 見込	(8.4)	2.8	4.1	瀬戸・美濃	19C末	外縁：浮気草。 口縁：浮気草による染付。
4078	J-72	SP-E5 SX4 1層	磁器	湯呑	口縁→底唇	80%	染付	染付	8.6	3.5	4.1	瀬戸・美濃	18C 明治一時期	外縁：輪文。内面：輪文。底面に「天保」の文字あり。
4079	J-64	SP-E5 SX4 2層	磁器	小杯	口縁→底唇	20%	染付	-	(7.0)	3.1	4.3	肥前	19C前半	外面：鉄。
4080	J-55	SP-E5 SX4 2層	磁器	蓋口	唇部片	-	染付	染付	-	-	(4.2)	肥前	18C末～ 19C前半	広東瓏風蓋口。
4081	J-106	SP-E5 SX4 2層	磁器	小杯	口縁→底唇	40%	-	-	(6.2)	3.1	3.3	瀬戸・美濃	19C	白磁。
4082	J-136	SP-E5 SX4 2層	磁器	蓋付き鉢	口縁→底唇	20%	染付	-	9.1	4.6	4.9	肥前	18C前半	外面：梵文。
4083	J-115	SP-E5 SX4 2層	磁器	碗	口縁→底唇	-	染付	染付	-	-	(4.6)	肥前	18C後半	外面：鳥? 器内面：梵文。
4084	J-140	SP-E5 SX4 1層	磁器	小杯	口縁→底唇	40%	白濁輪	白濁輪	6.7	3.6	3.3	瀬戸・美濃	18C 明治以前?	洋鉄類による染付。
4085	J-75	SP-E5 SX4 2層	磁器	蓋	口縁→底唇	-	染付	染付	(13.6)	(7.4)	2.9	肥前	18C	器中のくろわんか手。底の白濁輪。
4086	J-89	SP-E5 SX4 1層	磁器	蓋	口縁→底唇	20%	染付	染付	(13.6)	5.5	3.3	瀬戸・美濃	18C 明治一時期	器内：梵文。外縁：梵文。内面：赤七人。器底：梵文。器内面に「天保」の文字あり。
4087	J-141	SP-E5 SX4 1層	磁器	蓋	口縁→底唇	40%	染付	染付	13.4	5.8	3.2	瀬戸・美濃	18C 明治一時期	器内：梵文。外縁：梵文。内面：赤七人。器底：梵文。器内面に「天保」の文字あり。
4088	J-148	SP-E5 SX4 1層	磁器	蓋	口縁→底唇	45%	染付	染付	(13.6)	(6.4)	2.9	瀬戸・美濃	18C 明治一時期	器内：梵文。外縁：梵文。内面：赤七人。器底：梵文。器内面に「天保」の文字あり。
4189	J-59	SP-E5 SX4 1層	磁器	蓋	口縁→底唇	90%	染付	染付	13.8	5.4	3.2	瀬戸・美濃	18C 明治一時期	器内：梵文。外縁：梵文。内面：赤七人。器底：梵文。器内面に「天保」の文字あり。
4190	J-77	SP-E5 SX4 1層	磁器	蓋	口縁→底唇	90%	染付	染付	13.8	5.9	3.0	瀬戸・美濃	18C 明治一時期	器内：梵文。外縁：梵文。内面：赤七人。器底：梵文。器内面に「天保」の文字あり。
4191	J-78	SP-E5 SX4 1層	磁器	蓋	口縁→底唇	90%	染付	染付	13.4	5.7	3.0	瀬戸・美濃	18C 明治一時期	器内：梵文。外縁：梵文。内面：赤七人。器底：梵文。器内面に「天保」の文字あり。

第41図 SX4性格不明遺構出土遺物11



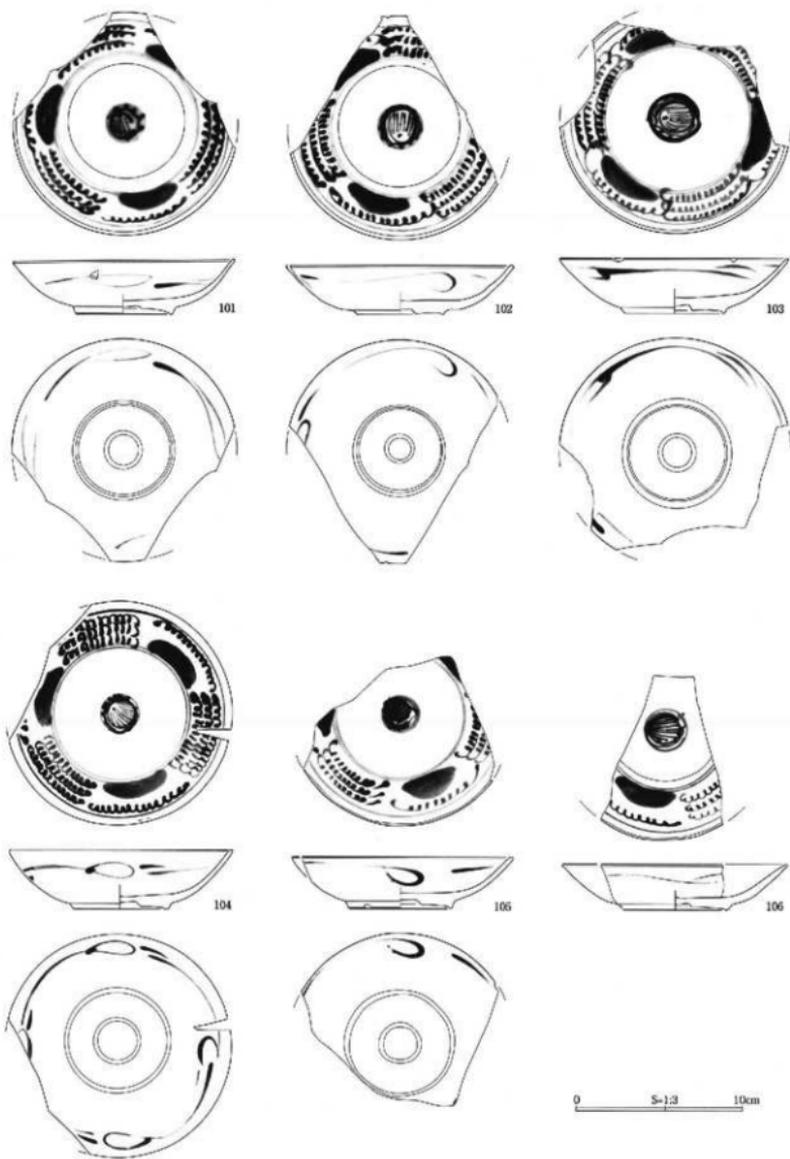
第42図 SX4 性格不明遺構 出土遺物 12



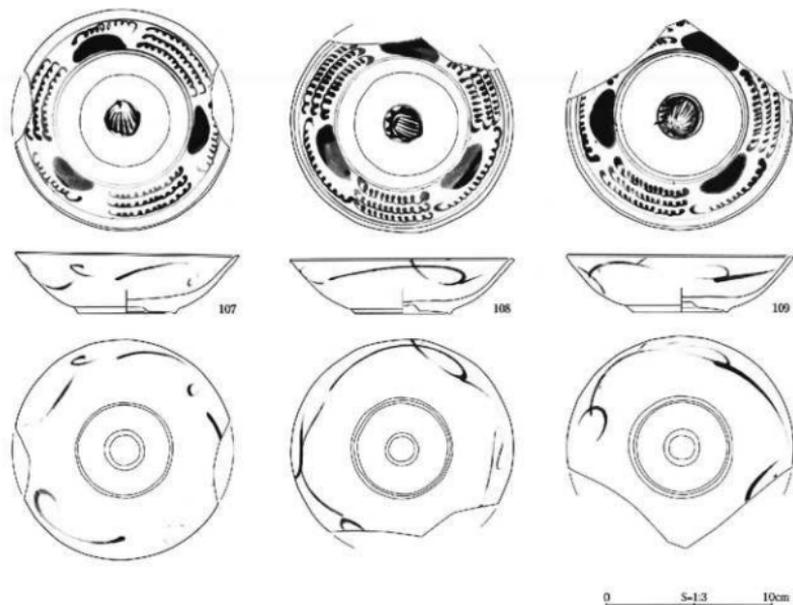
SX4 性格不明遺構出土遺物観察表

図号 番号	登録 番号	グリップ 遺構・層位	種別	器種	部位	残存率	外面	内面	径長 (cm)			産地	時期	備 考
									L径	底径	器高			
42-92	J79	S3-E5 SX4 1層	磁器	皿	口縁→底縁	80%	染付	染付	13.6	4.6	3.4	瀬戸・美濃	19C	見込：寛政文。外面：草文。内面：赤七人轡等。 裾：目四高台。洋鉄類による染付。
42-93	J80	S3-E5 SX4 1層	磁器	皿	口縁→底縁	70%	染付	染付	13.2	5.4	3.2	瀬戸・美濃	19C	見込：寛政文。外面：草文。内面：赤七人轡等。 裾：目四高台。洋鉄類による染付。
42-94	J81	S3-E5 SX4 1層	磁器	皿	口縁→底縁	90%	染付	染付	13.5	5.2	3.2	瀬戸・美濃	19C	見込：寛政文。外面：草文。内面：赤七人轡等。 裾：目四高台。洋鉄類による染付。
42-95	J82	S3-E5 SX4 1層	磁器	皿	口縁→底縁	80%	染付	染付	14.1	6.2	3.6	瀬戸・美濃	19C	見込：寛政文。外面：草文。内面：赤七人轡等。 裾：目四高台。洋鉄類による染付。
42-96	J83	S3-E5 SX4 1層	磁器	皿	口縁→底縁	95%	染付	染付	14.0	6.0	3.4	瀬戸・美濃	19C	見込：寛政文。外面：草文。内面：赤七人轡等。 裾：目四高台。洋鉄類による染付。
42-97	J85	S3-E5 SX4 1層	磁器	皿	口縁→底縁	50%	染付	染付	13.4	6.0	3.3	瀬戸・美濃	19C	見込：寛政文。外面：草文。内面：赤七人轡等。 裾：目四高台。洋鉄類による染付。
43-98	J86	S3-E5 SX4 1層	磁器	皿	口縁→底縁	80%	染付	染付	13.6	6.0	3.4	瀬戸・美濃	19C	見込：寛政文。外面：草文。内面：赤七人轡等。 裾：目四高台。洋鉄類による染付。
43-99	J87	S3-E5 SX4 1層	磁器	皿	口縁→底縁	90%	染付	染付	12.8	5.5	3.4	瀬戸・美濃	19C	見込：寛政文。外面：草文。内面：赤七人轡等。 裾：目四高台。洋鉄類による染付。
43-100	J90	S3-E5 SX4 1層	磁器	皿	口縁→底縁	70%	染付	染付	13.4	5.8	3.25	瀬戸・美濃	19C	見込：寛政文。外面：草文。内面：赤七人轡等。 裾：目四高台。洋鉄類による染付。

第43図 SX4 性格不明遺構 出土遺物 13



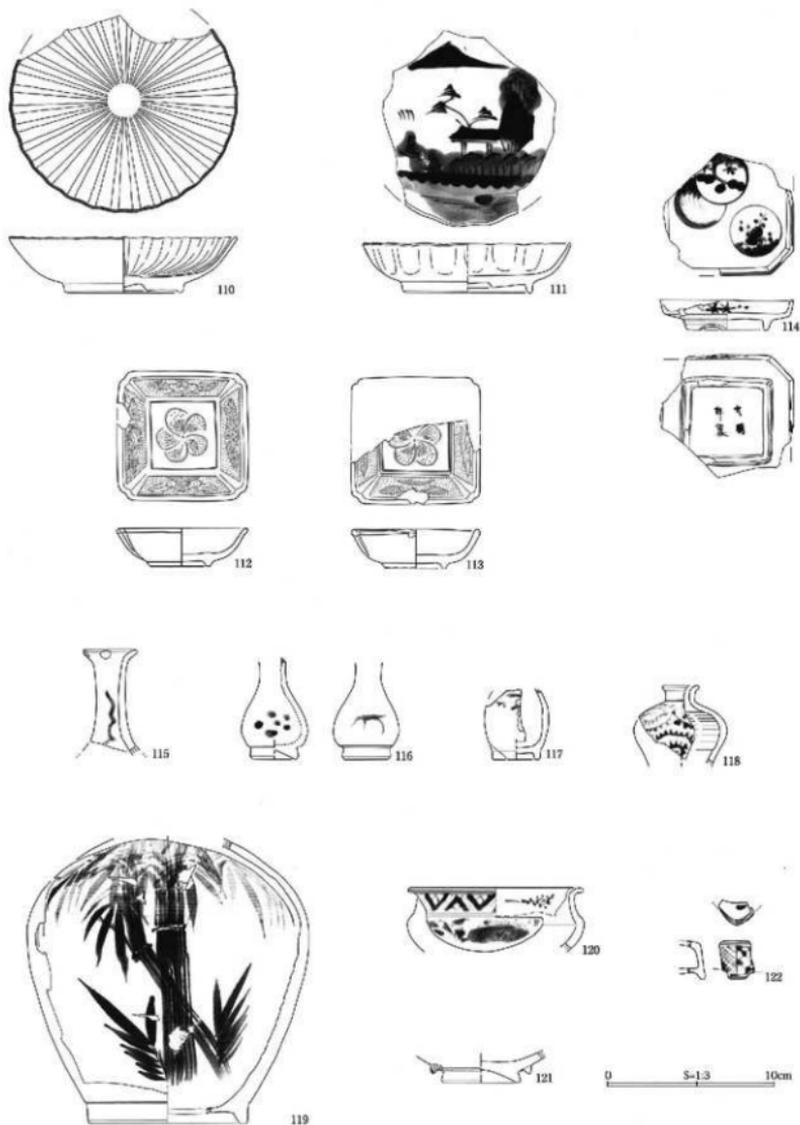
第44図 SX4性格不明遺構 出土遺物 14



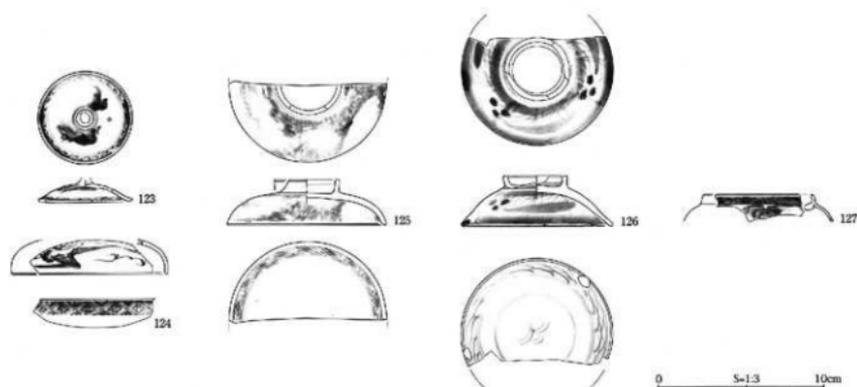
SX4 性格不明遺構出土遺物観察表

調査 番号	発掘 番号	クワッド 位置・層位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	法尺 (cm)			発地	時期	備 考
									口径	底径	器高			
44-101	J94	S3 S5	磁器	皿	口縁-底縁	60%	染付	染付	(113)	5.8	3.3	瀬戸・美濃	19C	瓦貼・染織文、内面：赤文、内面：赤七人唐草、 底ノ目四角布、浮気類による染付。
		SX4 1層												
41-102	J95	S3 S5	磁器	皿	口縁-底縁	60%	染付	染付	(118)	5.1	2.95	瀬戸・美濃	19C	瓦貼・染織文、内面：赤文、内面：赤七人唐草、 底ノ目四角布、浮気類による染付。
		SX4 1層												
44-103	J100	S3 S5	磁器	皿	口縁-底縁	70%	染付	染付	13.7	6.0	3.4	瀬戸・美濃	19C	瓦貼・染織文、内面：赤文、内面：赤七人唐草、 底ノ目四角布、浮気類による染付。
		SX4 1層												
44-104	J142	S3 S5	磁器	皿	口縁-底縁	80%	染付	染付	13.2	5.8	3.6	瀬戸・美濃	19C	瓦貼・染織文、内面：赤文、内面：赤七人唐草、 底ノ目四角布、浮気類による染付。
		SX4 1層												
44-105	J60	S3 S5	磁器	皿	口縁-底縁	60%	染付	染付	13.6	6.2	3.3	瀬戸・美濃	19C	瓦貼・染織文、内面：赤文、内面：赤七人唐草、 底ノ目四角布、浮気類による染付。
		SX4 1層												
44-106	J91	S3 S5	磁器	皿	口縁-底縁	20%	染付	染付	(134)	(6.0)	2.9	瀬戸・美濃	19C	瓦貼・染織文、内面：赤文、内面：赤七人唐草、 底ノ目四角布、浮気類による染付。
		SX4 1層												
45-107	J56	S3 S5	磁器	皿	口縁-底縁	90%	染付	染付	13.6	6.0	3.8	瀬戸・美濃	19C	瓦貼・染織文、内面：赤文、内面：赤七人唐草、 底ノ目四角布、浮気類による染付。
45-108	J57	S3 S5	磁器	皿	口縁-底縁	80%	染付	染付	13.5	5.7	3.3	瀬戸・美濃	19C	瓦貼・染織文、内面：赤文、内面：赤七人唐草、 底ノ目四角布、浮気類による染付。
		SX4 1層												
45-109	J58	S3 S5	磁器	皿	口縁-底縁	70%	染付	染付	13.6	5.8	3.3	瀬戸・美濃	19C	瓦貼・染織文、内面：赤文、内面：赤七人唐草、 底ノ目四角布、浮気類による染付。

第45図 SX4性格不明遺構 出土遺物 15



第46圖 SX4 性格不明遺構 出土遺物 16



SX4 性格不明遺構出土遺物観察表

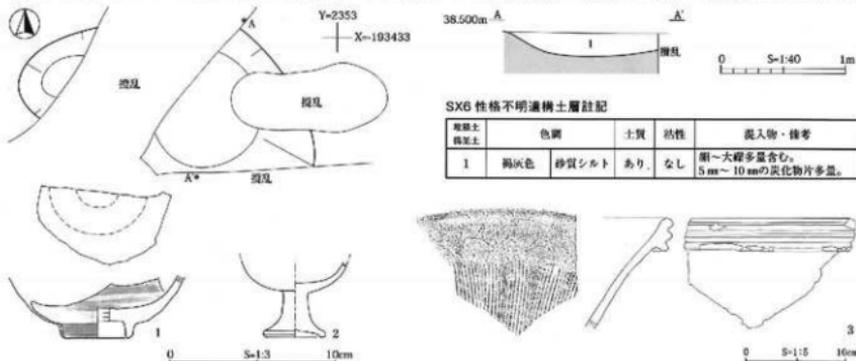
図録番号	登録番号	フリット遺構・層位	種別	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)			産地	時期	備考
									口径	底径	器高			
46-110	J-61	SP-E5 SX4 2層	磁器	青花皿	口縁~底縁	80%	-	-	13.8	6.9	3.4	瀬戸・美濃	19C 以降	白磁と口縁。磨押し。底の目皿高台。
46-111	J-70	SP-E5 SX4 2層	磁器	梅花皿	口縁~底縁	60%	-	染付	(12.4)	7.6	3.0	肥前	19C 前半	蛇の目皿高台。内面：山水文。
46-112	J-151	SP-E5 SX4 2層	磁器	角小皿	口縁~底縁	10%	-	磨押し 五草文	7.7	3.8	2.4	肥前	19C 後半	青磁? 隅入り角小皿。磨押。
46-113	J-101	SP-E5 SX4 2層	磁器	角小皿	口縁~底縁	40%	-	磨押し 五草文	7.6	3.6	2.4	肥前	19C 後半	青磁? 隅入り角小皿。磨押。
46-114	J-52	SP-E5 SX4 2層	磁器	角小皿	口縁~底縁	60%	染付	染付	(8.0)	4.8	1.85	肥前	19C 後半?	外面：口縁、丸文松竹梅。高台内に基。
46-115	J-109	SP-E5 SX4 2層	磁器	小皿	口縁~底縁	100%	染付	-	3.0	-	(6.4)	肥前	17C 末~ 19C 前半	白磁。底縁として脚部が残る。
46-116	J-97	SP-E5 SX4 2層	磁器	新井原煎茶碗	胴部~底縁	80%	染付	-	2.6	(6.2)	瀬戸・美濃	19C	外面：花文。	
46-117	J-104	SP-E5 SX4 2層	磁器	新井原煎茶碗	胴部~底縁	40%	染付	-	2.7	(4.2)	肥前	19C	外面：花文。	
46-118	J-125	SP-E5 SX4 2層	磁器	新井原煎茶碗	口縁~胴部	50%	染付	-	(1.9)	-	(4.9)	肥前	19C 末~ 19C 後半	外面：磨押草文。内面：胴部の内縁のみ磁器。染子肌。
46-119	J-55	SP-E5 SX4 2層	磁器	徳利	体部片	-	染付	-	-	-	(15.4)	切込焼?	19C?	外面：竹文。
46-120	J-69	SP-E5 SX4 1層	磁器	新井原香炉	口縁~胴部	20%	染付	染付	(10.2)	-	4.0	瀬戸・美濃 新井原一徳利	19C	外面：磨押草文花文、内面：墨草文?
46-121	J-119	SP-E5 SX4 2層	磁器	新井原香炉	底部	100%	-	-	(4.4)	(1.8)	肥前	19C 末~ 19C 後半	白磁。底縁として脚部が残る。	
46-122	J-76	SP-E5 SX4 2層	磁器	水漏?	胴部片	-	染付	-	-	-	-	肥前	17C ~ 19C	磨付き水漏? 格子文。
47-123	J-110	SP-E5 SX4 2層	磁器	蓋	つまみ~受け	90%	染付	磨押アズメ 物ハヤ	5.7	5.4	(1.3)	肥前	19C	外面：雲山? 急須の蓋。
47-124	J-105	SP-E5 SX4 2層	磁器	蓋	受け部片	-	染付	染付	(9.2)	-	(2.1)	肥前	19C 前半	外面：磨。 磨押草文。底縁磨。
47-125	J-143	SP-E5 SX4 2層	磁器	蓋	つまみ~胴部	40%	染付	染付	(3.6)	(9.4)	2.8	肥前	18C 後半	外面：草文、内面：四方釋文。
47-126	J-53	SP-E5 SX4 2層	磁器	蓋	口縁~体部	30%	染付	染付	(3.7)	8.9	(3.1)	肥前	19C 後半	外面：草花文、内面：草花文。
47-127	J-132	SP-E5 SX4 1層	磁器	蓋	受け部片	-	染付	-	(6.6)	-	(1.7)	瀬戸・美濃 新井原?	19C 新井原?	外面：山水文。 底縁部による染付。急須の蓋?

第 47 図 SX4 性格不明遺構 出土遺物 17

(2) SX6 性格不明遺構 (第48図、図版14-1・2)

調査区中央、S4-E6 グリッドに位置する。III層上面で検出された。中央と南側の伸びがヒューム管設置により削平されて、平面形は不明である。上端規模は東西120cm、深さ約20cmを測る。壁は開いて立ち上がり、底面は平坦をなす。堆積土は単層で、細～大礫、炭化物粒を多量に含んだ褐灰色の砂質シルト層からなる。遺構の形状から、ゴミ穴もしくは抜根後に整地した跡とも考えられる。

遺物は堆積土中から17世紀後半から19世紀中頃の陶器片4点、磁器片が5点、土師質土器片が1点、計10点が出土し、3点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。第48図の1は17世紀後半から18世紀前半の肥前産の陶器の碗、2は19世紀の堤産の播鉢、3は17世紀後半から18世紀前半の肥前産の白磁の仏飯器である。(小林)



SX6 性格不明遺構土層註記

発掘土 層記号	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	褐色色	砂質シルト	あり	なし 細～大礫多量含む。 5mm～10mmの炭化物片多量。

SX6 性格不明遺構出土遺物観察表

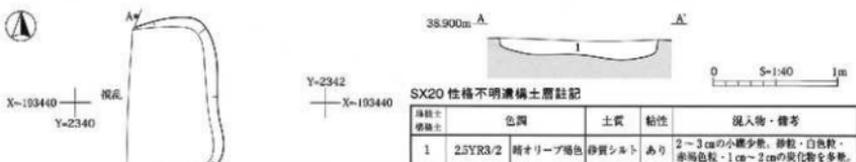
調査 番号	発掘 番号	グリッド 遺構・層位	類別	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)			産地	時期	備 考
									口径	底径	器高			
48-1	F84	S4-E6 SX6 1層	陶器	碗	底部～ 底脚片	-	縦目文	縦目文	-	(3.8)	(3.8)	肥前	17C 後半～ 18C 前半	高台に砂付着。底の目輪消失。
48-2	J-152	S4-E6 SX6 1層	磁器	仏飯器	底部～底脚	50%	-	-	-	(3.4)	(4.6)	肥前	17C 後半～ 18C 前半	白磁。
48-3	I85	S4-E6 SX6 1層	陶器	播鉢	口縁～ 底脚片	-	鉄軌	鉄軌	16.3	-	11.5	堤	19C	-

第48図 SX6 性格不明遺構 平・断面図及び出土遺物

(3) SX20 性格不明遺構 (第49図、図版14-3・4)

調査区中央南側、S4-E5～S5-E5 グリッドに位置する。V層上面で検出された。西側をSB1の掘り方に削平される。平面形は隅丸方形を呈する。上端規模は東西130cm、南北54cm、深さ12cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏を持つ。堆積土は単層からなり、小礫を少量含み、砂粒・白色粒・赤褐色粒・炭化物を多量に含んだ暗オリーブ褐色の砂質シルト層である。遺構の形状や堆積土の状況から、抜根後に整地した跡とも思われる。

遺物は堆積土中から19世紀前半から後半の陶器片が7点、磁器片が7点、土師質土器片が4点、計18点が出土したが、いずれも細片のため図化し得なかった。(小林)



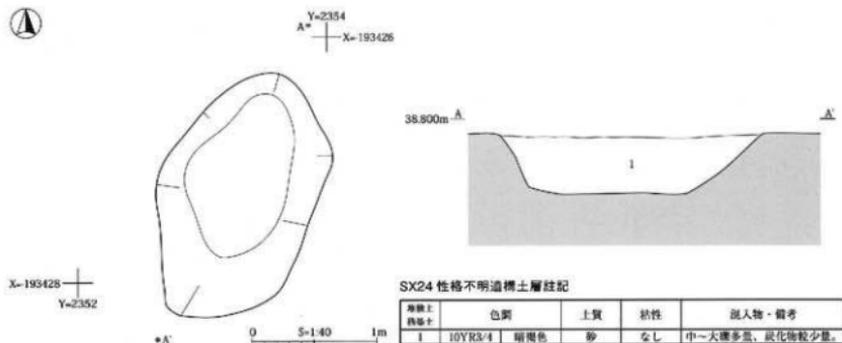
SX20 性格不明遺構土層註記

発掘土 層記号	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	2.5YR3/2	暗オリーブ褐色 砂質シルト	あり	2～3cmの小礫少量、砂粒・白色粒・ 赤褐色粒・1cm～2cmの炭化物を多量。

第49図 SX20 性格不明遺構 平・断面図

(4) SX24 性格不明遺構 (第50図、図版14-5・6)

調査区中央北側、S3-E6 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈する。上端規模は長軸 210 cm、短軸 130 cm、深さ 31 cm を測る。堆積土は単層からなり、中～大礫多量、炭化物を少量含んだ砂層である。遺構の形状や堆積土の状況から、抜根後に整地した跡とも思われる。遺物は出土していない。(小林)

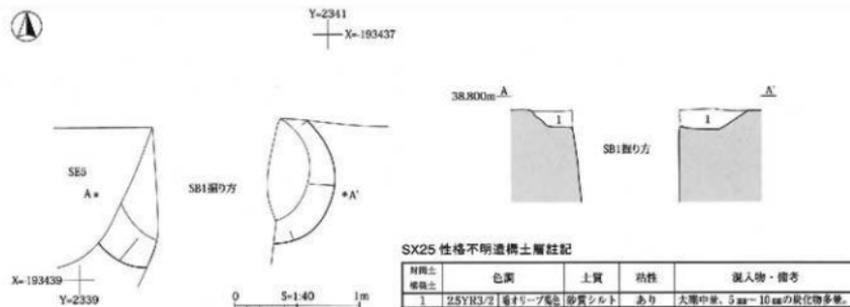


第50図 SX24 性格不明遺構 平・断面図

(5) SX25 性格不明遺構 (第51図、図版14-7・8)

調査区中央南側、S4-E4 ~ S4-E5 グリッドに位置する。V層上面で検出された。北側と中央部をSB1の掘り方、西側をSE5に切れ、平面形は不明である。上端規模は東西約 100 cm、南北約 50 cm、深さ 16 cm を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦をなす。堆積土は単層からなり、大礫を中量、炭化物を多量に含んだ砂質シルト層である。遺構の形状や堆積土の状況から、抜根後に整地した跡とも思われる。

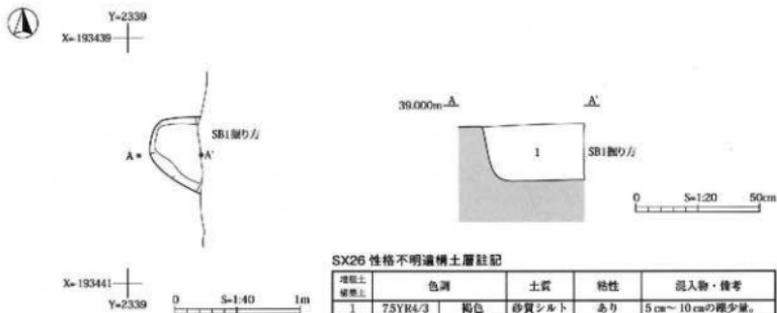
遺物は堆積土中から 18 世紀後半から 19 世紀中頃の陶器片が 3 点、磁器片が 2 点、土師質土器片が 2 点、計 7 点が出土しているが、いずれも細片のため図化し得なかった。(守谷)



第51図 SX25 性格不明遺構 平・断面図

(6) SX26 性格不明遺構 (第52図、図版15-1・2)

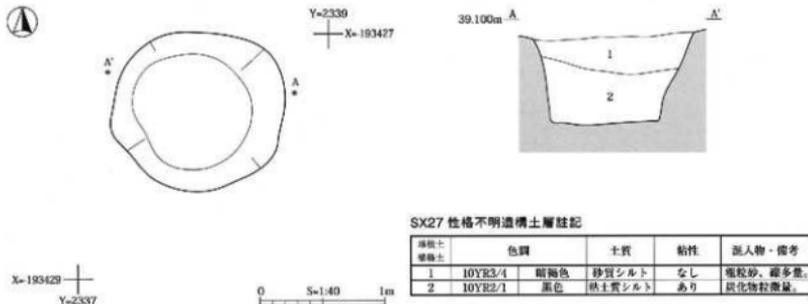
調査区中央南側、S4-E4～S5-E4 グリッドに位置する。V層上面で検出された。東側をSB1の掘り方に切られ、平面形は不明である。上端規模は東西55cm、南北45cm、深さ22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦をなす。堆積土は単層からなり、中礫を少量含んだ砂質シルト層である。遺構の形状や堆積土の状況から、抜根後に整地した跡とも思われる。遺物は出土していない。(小林)



第52図 SX26 性格不明遺構 平・断面図

(7) SX27 性格不明遺構 (第53図、図版15-3・4)

調査区中央部、S3-E4 グリッドに位置する。III層上面で検出された。平面形は円形を呈する。上端規模の直径136cm、深さ72cmを測る。断面形は方形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦をなす。堆積土は2層からなり、1層は褐色の砂質シルトで多量の礫が投げこまれていた。2層は暗赤褐色の軟質の粘土質シルトである。遺物は出土していない。(小林)

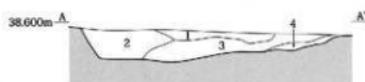
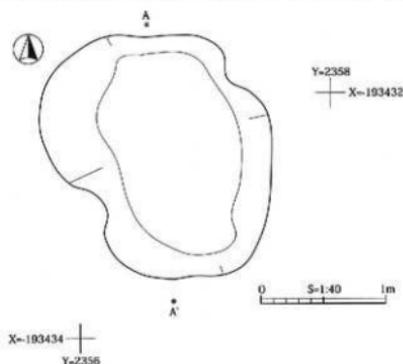


第53図 SX27 性格不明遺構 平・断面図

(B) SX28 性格不明遺構 (第54図、図版15-5・6)

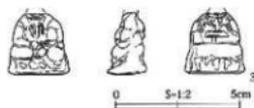
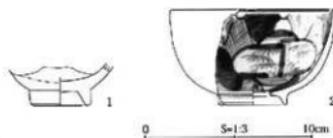
調査区中央部、S4-E6 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈する。上端規模は長軸216 cm、短軸約140 cm、深さ26 cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦をなす。堆積土は4層からなり、1層は炭化物を含む暗褐色の砂質シルト、2層は炭化物を多量に含む黒色の砂質シルトで1層の土を斑状に少量含んでいる。3層は炭化物粒を多量に含む黒色の砂質シルト、4層は炭化物粒を少量含む暗オリーブ褐色の粘土質シルトである。遺構の形状や堆積土の状況から、近世以降の、扱積後に整地した跡とも思われる。

遺物は17世紀から19世紀の陶器片が7点、磁器片が5点、土師質土器片が11点、瓦の小片が2点、土製品1点、計36点が出土し3点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。第54図の1は17世紀の唐津産の陶器、2は18世紀前半の肥前産の磁器、3は19世紀代と考えられる堤産の土製の型押し人形である。(守谷)



SX28 性格不明遺構土層註記

堆積土層	色調	土質	粘性	混入物・備考	
1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	なし	1 cm ~ 3 cmの炭化物少量、5 mm程度の炭化物多量。
2	10YR2/1	黒色	砂質シルト	なし	3 mm ~ 1 cmの炭化物を多量、斑状に1層の土を少量。
3	10YR2/1	黒色	砂質シルト	なし	2層の上に比べ粒子の細い炭化物粒多量。
4	2.5YR3/2	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	あり	炭化物粒子を少量。



SX28 性格不明遺構出土遺物観察表

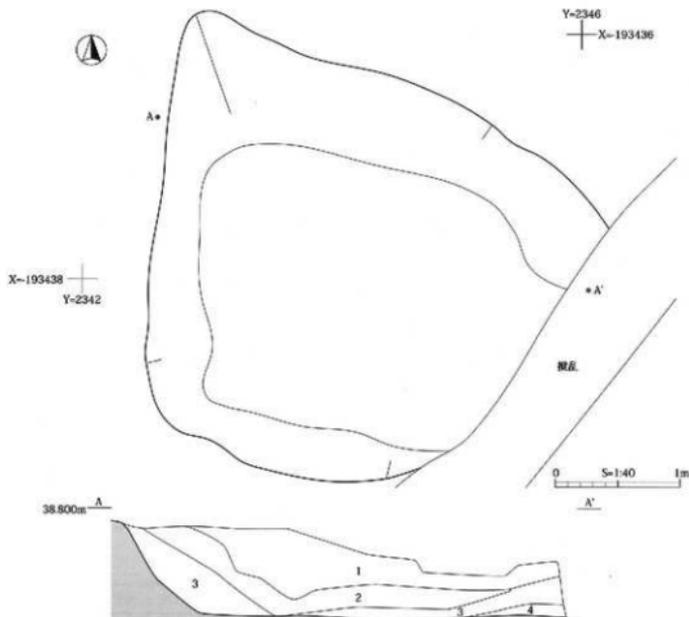
図版番号	遺物番号	グリッド	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)			産地	時期	備考
									口径	底径	器高			
54-1	I-90	S4-E6	陶器	小碗	底部	100%	焼物	裏面	-	3.3	(2.7)	肥前	17C	唐津。
		SX28 3層												
54-2	J-160	S4-E6	陶器	碗	口縁~底部	30%	傘付	-	(9.6)	(4.0)	5.8	肥前	18C前半	外面：竹等。平底碗。
		SX28 3層												
54-3	P-2	S4-E6	土製品	土人形	体部	90%	薄く鉋輪	-	2.5	2.4	1.45	堤	19C	型押し。胴部欠損。大黒天人形像？
		SX28 2層												

第54図 SX28 性格不明遺構 平・断面図及び出土遺物

(9) SX30 性格不明遺構 (第55図、図版15・7・8)

調査区中央部南側、S4-E5 ~ S5-E5 グリッドに位置する。V層上面で検出された。平面形は不整形を呈する。上端規模は長辺約370 cm、短辺約330 cm、深さ約70 cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏を持つ。堆積土は4層からなる。1層はマンガンを多量に含む暗赤褐色の粘土質シルト、2層は礫を多量に含む暗赤褐色の粘土質シルト、3層は小礫を多量に含む灰褐色の砂、4層は小礫を多量に含む灰褐色の砂質シルトで下部はグライ化し青灰色に変色している。遺構の形状や堆積土の状況から近世の抜根後に整地した跡とも思われる。

遺物は堆積土中から16世紀末から19世紀前半の陶器片2点、瓦の小片2点、計5点が出土し、2点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。第55図の1は16世紀末から17世紀初頭の瀬戸・美濃の志野丸皿、2は19世紀以降の堤産と考えられるの堯の蓋と思われる。(守谷)



SX30 性格不明遺構土層註記

層序	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	7.5YR4/3 暗赤褐色	粘土質シルト	あり	マンガン多量。
2	10YR5/2 暗赤褐色	粘土質シルト	あり	径5cm~10cmの礫多量。
3	10YR5/1 灰褐色	砂	あり	小礫多量。
4	10YR5/1 灰褐色	砂質シルト	あり	径2cm~3mmの小礫多量。下部はグライ化し青灰色。



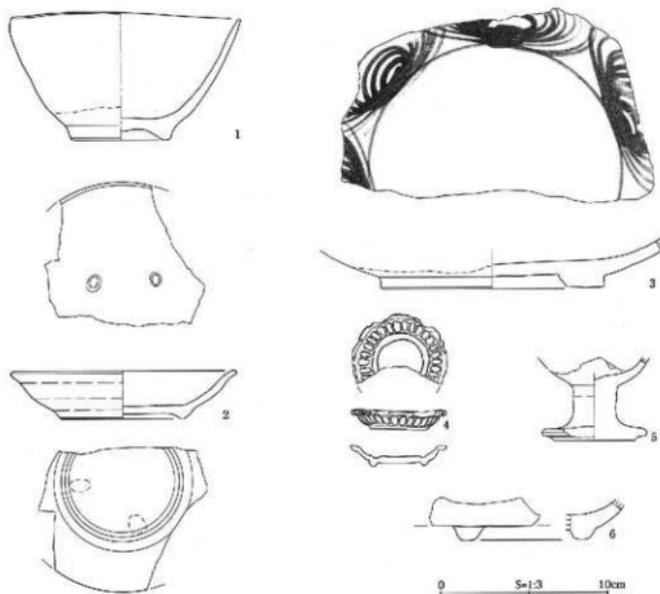
SX30 性格不明遺構出土遺物観察表

図版番号	発掘番号	グリッド 遺構・層位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	度量 (cm)			産地	時期	備考
									口径	口径	器高			
55-1	I-91	S4-E5 ~ E6 SX30 2層	陶器	皿	13層~ 破縁	95%	長石釉	長石釉	11.2	6.8	2.4	瀬戸・美濃	16C末~ 17C初頭	円形に3脚 3点あり。志野丸皿。
55-2	P-3	S4-E5 SX30 2層	陶器	蓋?	つばA~ 受け皿	100%	-	-	10.4	4.8	3.4	産	19C以降	下面に回転糸切り痕あり。

第55図 SX30 性格不明遺構 平・断面図及び出土遺物

6 整地層出土遺物 (第56～57図)

III層整地層は上面からの著しい攪乱をうけており、調査区中央部に小範囲で残存しているのみである。この整地層からは17世紀後半から18世紀中頃を主体とし、17世紀から19世紀中頃の陶器片16点、磁器片28点、土師質土器片7点、瓦の小片12点、合計63点が出土し、このうち陶器6点、磁器6点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。図化した遺物はいずれも17世紀後半から18世紀中頃に生産されたものである。第56図の1は肥前の碗、2は肥前産の皿、3は瀬戸・美濃の馬目文の皿、4は中西草南三彩の緑釉小皿、5は堤焼の仏飯器、6は在地産の香炉の脚部と思われる。第57図の11は肥前産の蓋付碗の蓋、7は肥前産の碗、8は見込みに吹墨技法が見られる肥前産の皿、9は見込みに墨弾き技法が見られる肥前産の皿、10は蛸唐草文の長角皿、12は外面に青磁釉が施された肥前産の香炉である。(守谷)

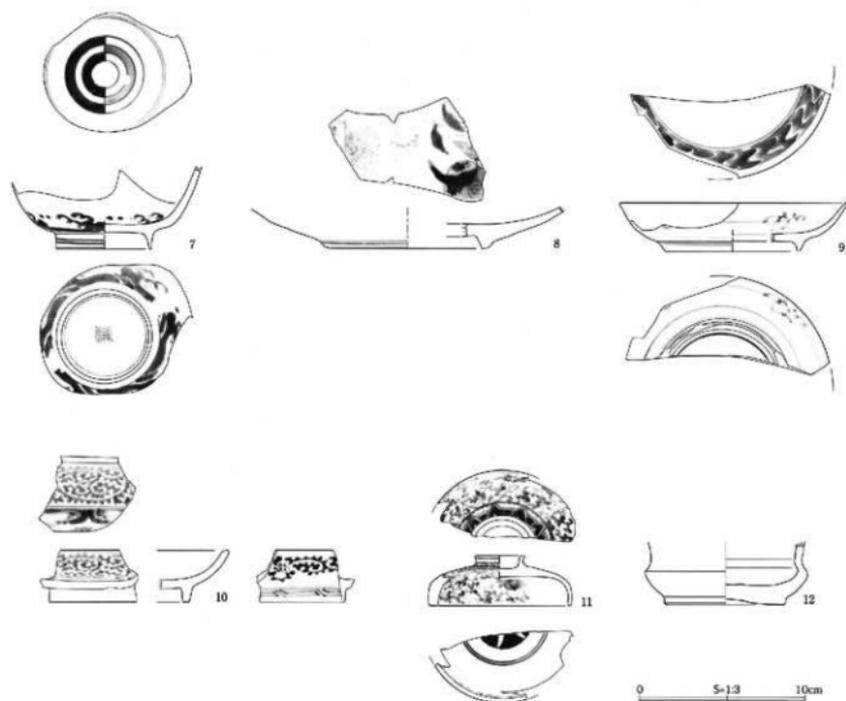


整地層出土遺物観察表

調査番号	発見 番号	グッド 遺物・層位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	寸法 (cm)			産地	時期	備考
									口径	底径	器高			
56-1	I-108	S3E9-10 皿	陶器	碗	口縁～底部	50%	灰釉 黒石粉 or フラ灰	灰釉	7.3	6.0	7.9	肥前	18C末～ 17C	清浄。
56-2	I-113	S3E8 皿	陶器	楕円皿	口縁～底縁	40%	灰釉	灰釉	12.8	7.8	4.7	肥前	18C末～ 17C前期	研摩、みくろ彫成痕あり。 見込：内縁ともに目影文あり。
56-3	I-2	S4E3 皿	陶器	大皿	底部	60%	—	黒鉛 馬目文	—	13.4	3.0	瀬戸・美濃	18C前半～ 19C	蛇/目高台。
56-4	I-146	S4E3 皿	陶器	型押皿	口縁～底縁	60%	緑釉	緑釉	5.6	3.2	1.2	中国	18C末～ 17C前期	草唐三彩。緑釉小皿(型押)。明末～清初。
56-5	I-92	S3E8 皿	陶器	仏飯器	口縁～底縁	60%	鉄釉	鉄釉	—	5.0	(5.2)	瀬	18C前半?	—
56-6	I-99	S9E2 皿	土師質土器	香炉	外縁～ 内縁部	—	1.5'*	—	—	9.0	3.0	在地	19C	脚部が一部残存する。

第56図 整地層出土遺物1

第3節 III層上面



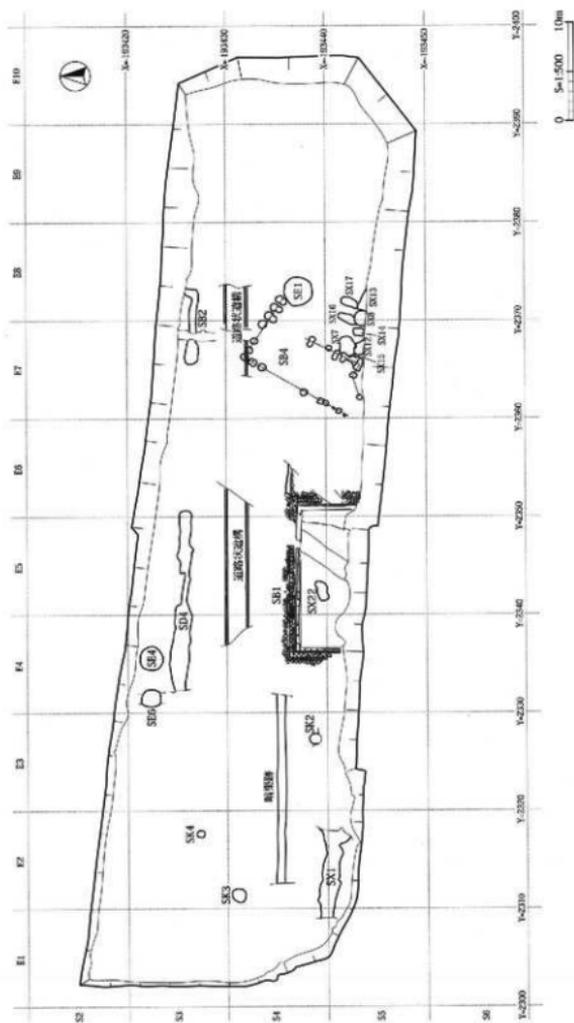
整地層出土遺物観察表

図録 番号	図録 番号	クワッド 遺跡・層位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)			底地	時期	備 考
									口径	底径	器高			
57-7	J-247	S4-28-2 II	磁器	碗	皿部-半部	40%	染付	染付	-	5.8	5.1	肥青	18C 後半	外側：線文、内側：雲り文、 鉄の跡が認められる。高台内に認められる。
57-8	J-240	S4-28-1 II	磁器	皿	底部分	-	染付	染付	-	-	2.7	肥青	17C 後半	内面：ぎくろ文。 底面に出がらみがある。
57-9	J-213	S3-E8 - E9-10 II	磁器	皿	口部-残部	20%	染付	絵付	(13.5)	(8.0)	3.1	肥青	17C 後半	呉漆器技法による施文。
57-10	J-238	S4-E4 II	磁器	長角皿	口部- 残部	-	染付	染付	5.8	4.5	3.5	肥青	17C 後半- 18C 前半	外面：踏貫草。内面：踏貫草。
57-11	J-179	S3-E2-6 II	磁器	蓋	半部-残部	20%	染付	染付	-	-	2.0	肥青	18C 前半	外側：花文、内側：足高？字文。 裏面に鉄の跡。
57-12	J-175	S3-E3-4 II	磁器	筒筒香炉	底部分	40%	青磁焼	-	-	7.4	4.0	肥青	17C 後半	絶の目高台。高台に彫り付着。鉄化跡。

第57図 整地層出土遺物 2

第4節 IIb層上面

建物跡2軒 (SB1、SB4)、擁壁跡1列、土坑3基 (SK2、SK3、SK4)、溝跡1条 (SD4)、井戸跡3基 (SE1、SE4、SE6)、暗渠跡1条、道路状遺構1条、性格不明遺構10基 (SX1、SX7、SX8、SX12、SX13、SX14、SX15、SX16、SX17、SX22) が検出されている。また、本報告では掲載していないが、第二師団敷設の埋設管網が検出された。



第58図 IIb層上面遺構配置図

1 建物跡

(1) SB1 建物跡 (第59図～第64図、図版16～17)

〈遺構状況〉調査区中央部南側、S4-E4～S5-E6グリッドに位置し、北側に広がる。遺構の南側は調査区域外であるため未調査である。IIb層上面で検出され、遺構の下層東側にはIIc層による盛土整地が検出されている。周囲に間知石と布石を使用した雨落ち溝を有する。検出した建物規模は桁行約1700cm、梁行約560cmを測る。なお、この遺構は仙台師管区経理部「各部隊配置図・国庫財産台帳付図」の口座番号2「仙台遠征区司令部第二師団兵器部庫下倉庫」に見られる「荷造場」に相当する。上屋構造は昭和20年7月10日の空襲で焼失した可能性が極めて強い。

〈掘り方〉検出した掘り方の規模は、東西方向に1600cm、南北方向に600cmを測る。掘り方は幅110cm、検出面から深さ130cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれる。加えて、東西を2:1に分ける間仕切りが掘られて平面形は「U」の形を呈する(第63図)。

〈地中梁〉地中梁は掘り方の中に施設され、断面観察により下部構造と上部構造に分かれる。下部構造には根石の役割を担う石敷が3層検出された。この石敷は長さ20cm～25cm、幅10cm～15cm、厚さ5cm～9cmの扁平な自然礫を使用している。さらに、石敷の間隙には厚さ3cm～10cm程度の厚さで山砂が敷かれる。上部構造はコンクリート(註1)と切石から構成される。コンクリートは下部構造の敷石の上に直接流し込まれ、コンクリートの側面に木目等が観察できることから、木型等が用いられたと思われる。コンクリートは幅80cm、厚さ約35cmを測る。この上に切石が配置され「U」の形に外周する。切石は長さ50cm～180cm、幅30cm、厚さ35cmを測る。また、切石とコンクリートは強固に接着されている。間仕切りも同様の順序、構造でコンクリートが流し込まれる。

〈床〉上部構造と、下部構造に分かれる。上部構造は厚さ5cm～10cm程度のコンクリートで構築されている。このコンクリートは均一な硬度を保っておらず脆弱な箇所が点在しており、良質な資材を使用したとは考えがたい。また、被熱を受けている箇所が多く、炭化物の付着も多く検出されている。下部構造は東西を2:1に分ける間仕切りを隔て様相が大きく異なる(第61図)。東側は最下部から山砂、2層の石敷、山砂の4段階にわたる施工過程が見られる。最下部の山砂は3cm～5cmの厚さを測り、2層に渡った石敷は長さ20cm、幅10cm、厚さ5cmの扁平な自然礫を使用している。下層は石を横置きに、上層は石を縦置きに敷き詰めている。検出された敷設面積は約24㎡である。石敷上面の山砂は3cm～5cmほどの厚さを測る。これに対し、西側は長さ35cm～40cm、幅25cm～3cm、厚さ20cmを測る自然礫が50cmの間隔(2間×3間以上)で配置されていた。これらは何らかの基礎と考えられ、コンクリート床に作り替えられたものと考えられるが、詳細は不明である。

〈雨落ち溝〉雨落ち溝は壁面に間知石と布石を用いた一段の石組みの溝である。検出した規模は、東西方向に1650cm、南北方向に660cm、幅約30cm、深さ約25cmを測る。間知石は、いずれも内側に面を揃えて配置されている。溝の下には深さ10cm程度の掘り方があり粘土質シルトが充填されている。間知石は平均すると小口横長約30cm、小口縦長約36cm、控え長約42cmを測る。間知石間には、補強の為に、コンクリートで接着している箇所が多く検出され、隙間には安定の為に径10cm程の楕円形の自然礫が詰め込まれている。これらで構築された溝の曲角には長さ40cm、幅20cm、厚さ40cmの布石が配置されている。これらで構築された溝の底面は長さ15cm～20cm、幅

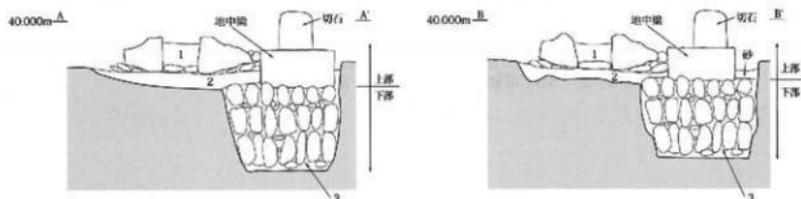
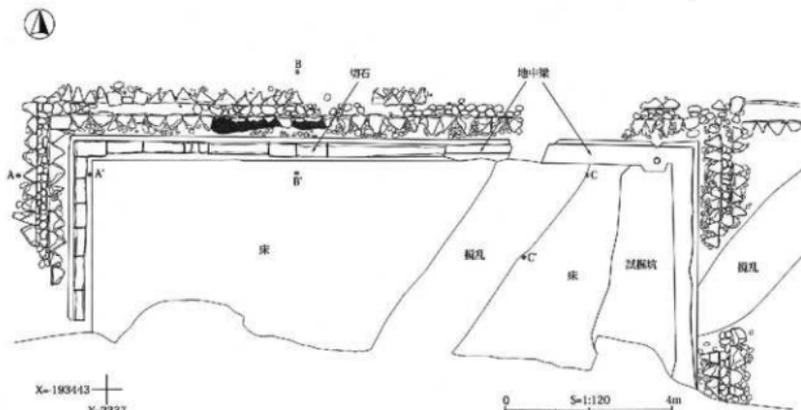


註1:コンクリートとモルタルの違いについて
コンクリートはセメントと砂利を1:3:6の割合で混ぜ、モルタルはセメントと砂利を1:1の割合で混ぜる。成分割合を記載していないため、本図では統一してコンクリートと称した。

10 cm～15 cm、厚さ3 cm～5 cmの扁平な楕円形の自然礫が敷き詰められていた。この石敷に特に高低差は見られない。雨落ち溝の溝内には多量の炭化物や揚げた鉄材、溶解したガラス片が検出された。このことから、上部施設が火災を受けた可能性が考えられる。

〔出土遺物〕床（東側下部構造）より明治時代以降の磁器片が3点出土した。この他に細片のため図化はしていないが、掘り方の最下層からガラス瓶の小破片が1点出土している。第64図の1は瀬戸・美濃産と考えられる小型の端反碗、2は肥前産と考えられる皿、3は肥前産と考えられる小皿である。（守谷）

Y=2351
X=193433

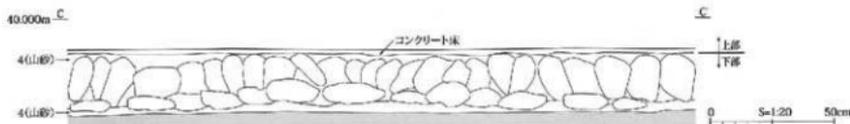


SB1-A,B 土層註記

層別土 層別土	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	なし	径5mm～1cmの炭化物多量、溶解したガラス片等多量。
2	10YR5/1 褐色	粘土	あり	径1mmの砂礫少量。
3	2.5YR5/6 明赤褐色	山砂	なし	—

0 S=1:40 1m

第59図 SB1建物跡 平面図及び基礎断面図

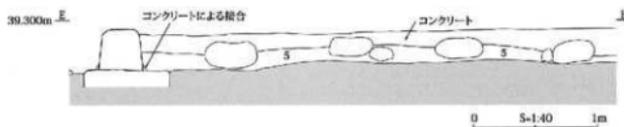
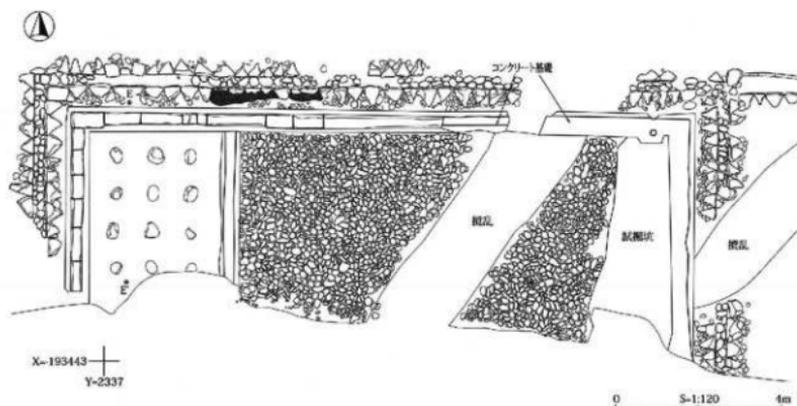


SB1-C 土層註記

層別土 層別土	色調	土質	粘性	混入物・備考
4	10YR4/2 灰黄褐色	山砂	あり	コンクリートの平石が埋りこんである。石を外すとスタンプ痕に埋る層に打ち込まれている。

第60図 SB1建物跡 基礎及び主体部断面図

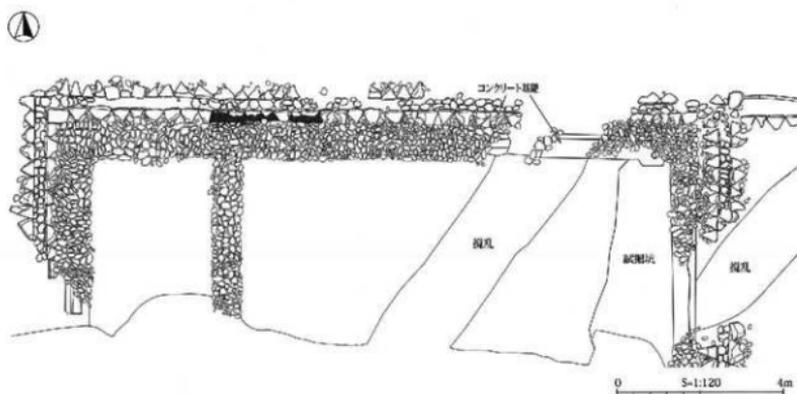
Y=2351
+ X=193433



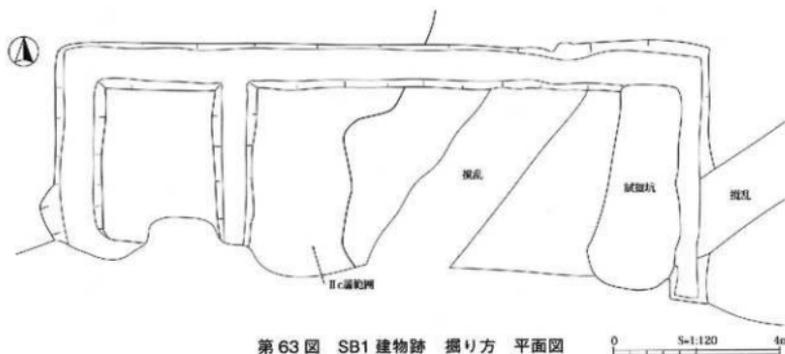
SB1-E 土層誌記

階層上 隣地土	色調	土質	粘性	遺入物・備考
S	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	あり	10YR8/6の土と10YR4/2の土を±*に混入する。

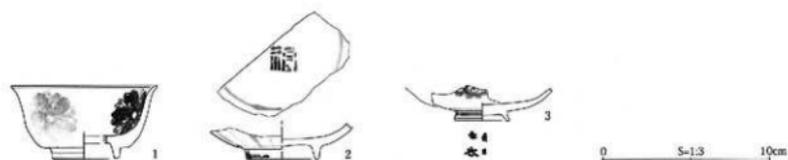
第61図 SB1建物跡 コンクリート床除去後 平・断面図



第62図 SB1建物跡 コンクリート地中梁基礎 平面図



第63図 SB1 建物跡 掘り方 平面図



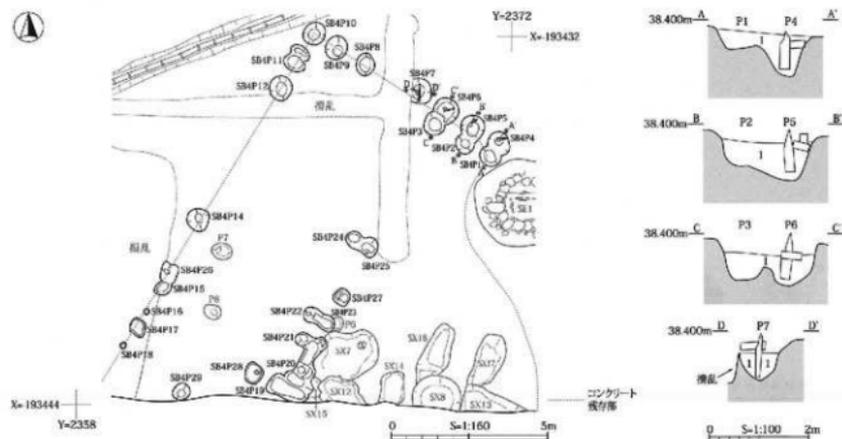
SB1 建物跡遺構出土遺物観察表

調査 番号	発見 番号	グリップ 遺構・層位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	寸法 (cm)			産地	時期	備 考
									口径	底径	器高			
64-1	J-8	209-1 掘戻層位 SB1	磁器	小形博底碗	口縁～底縁	40%	印判 在文	-	8.0	4.0	4.5	瀬戸・尾張	1K 明治13期	銅版転写による色絵の 花文。
64-2	J-7	209-1 掘戻層位 SB1	磁器	皿	底縁片	-	上絵付	印判	-	3.5	1.8	肥前?	1K 明治13期	見込みに印判による「福」の 語。
64-3	J-6	209-1 掘戻層位 SB1	磁器	小皿	口縁～ 底縁片	-	色絵上絵付	印判	-	-	2.1	肥前	1K 明治13期	裏合内に裏面不要の 色絵上絵付が写る。

第64図 SB1 建物跡 出土遺物

(2) SB4 建物跡 (第65図、図版18-1~3)

調査区東側、S4-E7 ~ S4-E8 グリッドに位置する。IIb層上面で不整形のコンクリート床面が検出された。規模は東西約17m、南北約14mを測る。コンクリート床下層には、部分的に木材を残す29基のピットが検出された。南側でSX7、SX15を切る。検出した規模は東西1500cm、南北2940cmを測る。各々のピットの平面形は楕円形~不整形を呈し、規模は径54cm~80cm、深さ22cm~54cmを測る。木材はコンクリートを流し込む枠組と考えられる。堆積土はいずれも同一で砂質シルトの単層である。遺物はピットの堆積土中から磁器片が11点出土したが、細片のため図化し得なかった。(土橋)



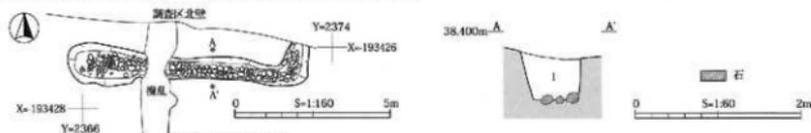
SB4 建物跡土層注記

層数・土層	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	7JYR4/4	褐色	砂質シルト	あり 皮化層粒、燃土粒、3mm程の白く黄褐色粘土質シルトブロック多量。

第65図 SB4 建物跡 平・断面図

(3) 擁壁跡 (第66図、図版18-4)

調査区北東、S3-E7 ~ S3-E8 グリッドに位置する。IIb層上面で検出された。北側は調査区外に広がる。西側では基礎のコンクリートが一部残る。検出した基礎の掘り方の規模は東西長1520cm、南北長150cm、上端幅は150cm~175cmの狭帯をもち、深さ65cmを測る。掘り方の断面形は台形で、平面形はL字状を呈する。掘り方の底面に長さ20cm、幅10cm、厚さ5cm程の礫を敷き詰め、その上にコンクリート流し込んでいる。簡略化されているが、SB1と類似した工法をとる。堆積土は黄褐色の粘土ブロックを少量含んだ粘土質シルト層の単層である。遺物は磁器片が1点出土したが、細片のため図化し得なかった。(土橋)



SB2 擁壁跡土層注記

層数・土層	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	10YR3/1	黄褐色	粘土質シルト	あり 4~5cmの黄褐色粘土ブロック少量。

第66図 擁壁跡 平・断面図

2 土坑

(1) SK2 土坑 (第67図、図版19-1・2)

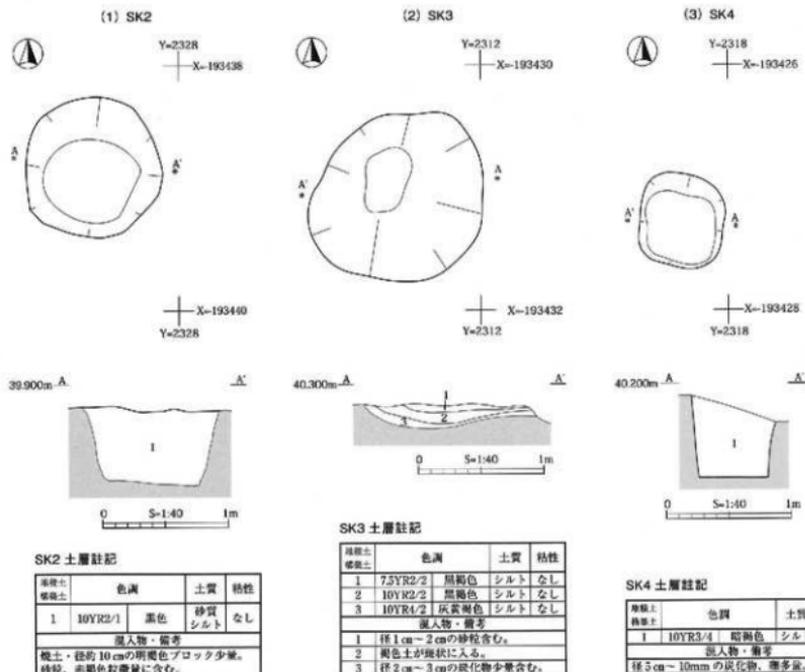
調査区南西側、S4-E3グリッドに位置する。IIb層上面で検出された。平面は円形を呈する。規模は上端の径55cm、深さ約60cmを測る。壁は緩やかに直線的に立ち上がり、底面は平坦をなす。堆積土は単層からなる。遺物は出土していない。(守谷)

(2) SK3 土坑 (第67図、図版19-3)

調査区西側、S4-E2グリッドに位置する。IIb層上面で検出された。平面は不整形円形を呈する。規模は上端の径130cm、深さ約20cmを測る。断面形は開いた「U」字状を呈する。堆積土は3層からなる。遺物は出土していない。(小林)

(3) SK4 土坑 (第67図、図版19-4)

調査区西側中央、S3-E2グリッドに位置する。IIb層上面で検出された。平面は隅丸方形を呈する。規模は上端の長辺74cm、短辺約60cm、深さ58cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦をなす。堆積土は単層からなる。遺物は出土していない。(小林)



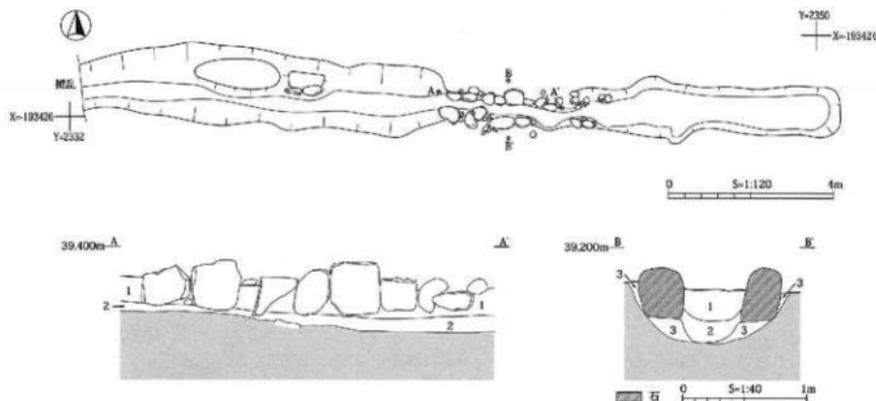
第67図 SK2~SK4土坑 平・断面図

3 溝跡

(1) SD4 溝跡 (第 68～70 図、図版 19-5・6)

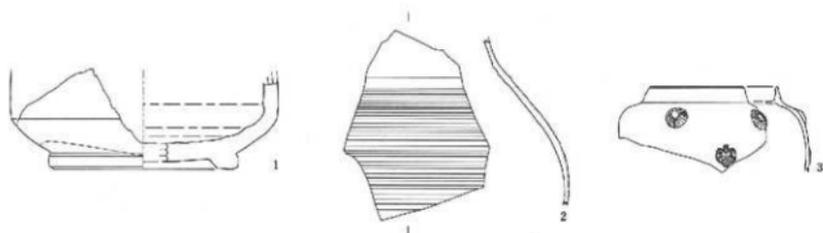
調査区中央北側、S3-E4～S3-E5 グリッドに位置する。IIb 層上面で検出された。ほぼ東西方向に伸びる中央部のみ石組を有する溝である。西側の伸びは攪乱に削平される。規模は全長約 1840 cm、上端幅 50 cm～170 cm、深さ 40 cm～50 cm を測り、掘り方の断面形は「U」字状を呈し、石組部分の壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦をなし、東方向にゆるやかに傾斜する。石組みは長さ 40 cm～60 cm、幅 10 cm～30 cm、厚さ 35 cm～40 cm の自然礫と SB1 の切石と同じもので構築される。堆積土は 3 層からなる。

遺物は堆積土中より陶器片 43 点、磁器片 118 点、土師質土器片 4 点、瓦質土器 2 点、瓦の小片 14 点が出土しており、23 点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。陶器、磁器は肥前産、瀬戸美濃産、志野産、大塚相馬産等である。ただし近世の遺物は SX4 を掘り込んだ為の巻き上がりと考えられる。第 69 図の 6 は 17 世紀以降の志野産と考えられる陶器の四方鉢である。第 70 図の 22・23 は発産か在地産と考えられる三引両の軒丸瓦である。(小林)



SD4 溝跡土層註記

層位上 層位上	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	5YR3/2 暗赤褐色	砂質シルト	なし	径 2 cm～3 cm の礫、木片、クサなど含む。
2	5YR3/2 暗赤褐色	砂質シルト	なし	—
3	5YR3/2 暗赤褐色	砂質シルト	なし	径 5 mm 程度のロームブロック、径 5 mm～1 cm の炭化物ブロック多量。



第 68 図 SD4 溝跡 平・断面図及び出土遺物 1

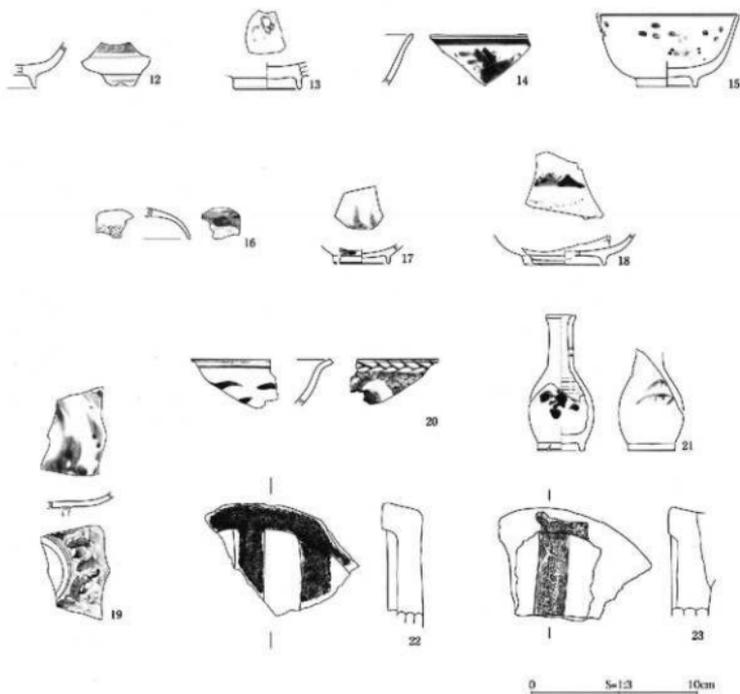


SD4 溝跡出土遺物観察表

原研 番号	記録 番号	グリッド 透視・層位	種別	器種	部位	残存率	外面	内面	口径 (cm)			原産地	時期	備 考
									口径	底径	器高			
68-1	I-14	SB75 SD4 3層	陶器	鉢 or 甕	底部分	—	—	—	(10.8)	(6.1)	不明	18C 以降	—	
68-2	I-11	SB84 SD4 3層	陶器	瓶	胴部・ 肩部片	—	長石釉	—	—	10.3	不明	19C	外面：磨鏡工具による調整？	
68-3	I-15	SB75 SD4 3層	陶器	急須	口縁・胴部	20%	陽刺	—	—	5.2	瀬戸・美濃	19C	陽刺。垂文付帯と桐文付帯、厚く灰積。	
69-4	I-12	SB75 SD4 3層	陶器	土瓶	口縁部片	—	青釉	—	—	3.2	大塚相馬	19C	—	
69-5	I-16	SB75 SD4 3層	陶器	豆甕	底部	—	陰刺	胎釉	—	2.5	2.5	大塚相馬	19C	江戸 or 明治。陶板承切痕。
69-6	I-18	SB75 SD4 3層	陶器	四方鉢	口縁・底面	90%	長石釉	長石釉	12.8	3.5	5.9	瀬戸・美濃	17C	鼠志野。
69-7	J-18	SB84 SD4 3層	磁器	鉢	口縁部片	—	染付	染付	—	—	3.0	肥前	17C 中頃	外面：草花文。内面：波瀾。
69-8	J-17	SB84 SD4 3層	磁器	皿	底部	20%	染付	染付	—	—	2.7	肥前	17C 後半	内面：花唐草。
69-9	J-16	SB81 SD4 3層	磁器	皿	底部片	—	—	染付	—	—	1.2	肥前	17C 後半	内面：芙蓉手？
69-10	J-21	SB95 SD4 3層	磁器	碗	胴部・底部	20%	染付	染付	—	(4.2)	(3.8)	肥前	19C	—
69-11	J-24	SB75 SD4 3層	磁器	碗	口縁・底面	20%	染付	染付	(11.0)	4.4	5.9	肥前	18C - 19C 前半	外面：五弁花文 草木文。

第 69 図 SD4 溝跡 出土遺物 2

第4節 IIb層上面



SD4 溝跡出土遺物観察表

図記番号	グリッド 番号・層位	類別	器種	部位	残存率	外面	内面	寸法 (cm)			施地	時期	備考
								口径	底径	高さ			
70-12	J-20 S3E5 SD4 3層	磁器	碗	底部	—	染付	—	—	—	2.3	不明	不明	高台貼附跡あり。
70-13	J-28 S3E4 SD4 3層	磁器	高台付碗	底部分	—	—	染付	—	3.9	1.4	肥前	18C	見込：花文？
70-14	J-20 S3E5 SD4 3層	磁器	小形碗状鉢	口縁部片	—	染付	染付	—	—	3.2	瀬戸・美濃	19C前半	外面：色絵五片花？
70-15	J-23 S3E5 SD4 3層	磁器	小形碗	口縁～底部分	90%	色絵	—	(8.4)	3.4	4.5	肥前	19C代 瀬戸・美濃	上面色絵付五片花。
70-16	J-27 S3E4 SD4 3層	磁器	小碗	口縁～底部分	—	染付	染付	—	—	2.2	瀬戸・美濃	19C	外面：四方押文。
70-17	J-15 S3E4 SD4 3層	磁器	東 or 小形	底部分	—	染付	染付	—	(3.2)	1.2	肥前	18C - 19C	高台内に跡 朱書「蘭十八」？
70-18	J-25 S3E5 SD4 3層	磁器	皿	縁部～底部分	—	染付	染付	—	4.8	1.9	肥前	17C - 18C	見込：風景文。
70-19	J-19 S3E4 SD4 3層	磁器	皿	底部分	—	染付	染付	—	—	1.2	肥前	18C	外面：胡蝶による草木文？
70-20	J-26 S3E5 SD4 3層	磁器	長皿	口縁部片	—	染付	染付	—	—	2.8	肥前	18C以降	外面：草木文、内面：草文？
70-21	J-22 S3E5 SD4 3層	磁器	薄形碗状鉢	縁部～底部分	50%	染付	—	1.7	2.8	(4.6)	肥前	19C前半	外面：五片花文？

図記番号	グリッド 番号・層位	類別	器種	寸法 (cm)			時期	備考
				径	高	厚さ		
70-22	F-2 S3E5 SD4 3層	瓦	軒瓦	(6.8)	(6.0)	2.1	江戸	境？ 三引割。
70-23	F-3 S3E6 SD4 3層	瓦	軒瓦	(6.5)	(8.0)	2.6	江戸	瓦当面 / 三引割の軒巴。

第70図 SD4 溝跡 出土遺物 3

4 井戸跡

(1) SE1 井戸跡 (第71～73図、図版20)

〔遺構状況〕 調査区東側、S4-E8グリッドに位置する。IIb層上面で検出された。石組の井戸で、平面形は円形を呈する。上部内径210cm、最下部内径120cmを測る。この井戸は検出面より330cmの深さまで調査したが、著しい湧水のために底面は検出されなかった。

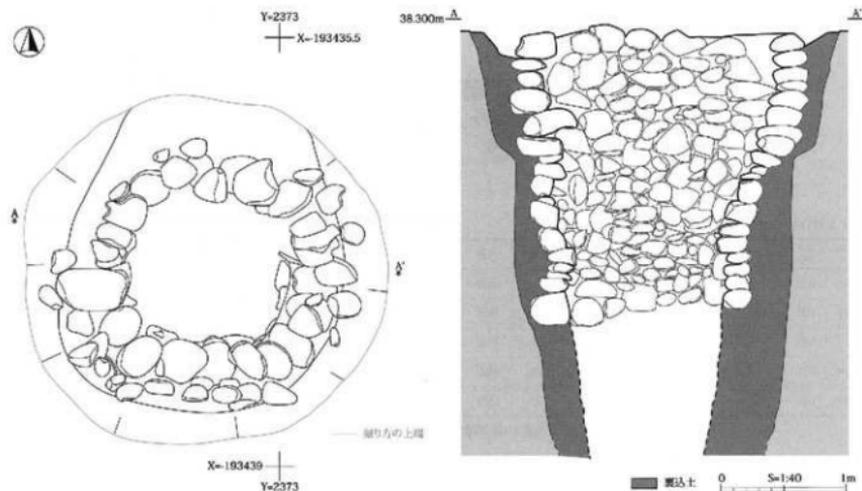
〔掘り方〕 底面が検出されていないため全体の形状は不明であるが、検出部分においては上部部が広がる円筒形を呈している。規模は、上部径約300cm、検出した最下部径180cmを測る。検出面より、100cmの深さで一旦段を持ち、狭くなり径約200cm程となる。鑿井時の足場等は検出されなかった。

〔井側構造〕 井側は石組のもので、石材を円筒形に積んで構築している。石は長さ30cm～40cm、幅30cm～40cm、厚さ20cm～40cmの扁平な楕円形の自然礫を利用している。積み方は石材を放射状に円形に並べた、いわゆる乱石積みであり、大型の石材の間には小型の石材を詰めている。下部から上部までの石の積み方に変化はなく、検出した上部外径230cm、最下部外径170cmを測る。

〔裏込土〕 裏込土は石を一段積む毎に石の高さだけ埋められている。各層とも15cm～25cm程の楕円の礫が石材の安定のために詰め込まれている。6a～6h層まで確認できた。

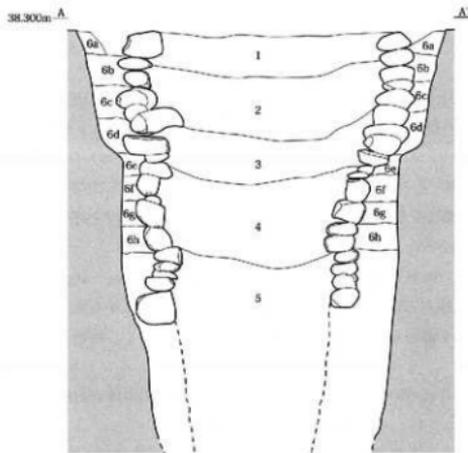
〔堆積土〕 検出堆積土は5層からなり、1層は中礫を多量に含む砂質シルト、2層は小礫を多量に含む砂質シルト、3層は砂礫を少量含むシルト、4層は崩落した石材を多量に含む砂質シルト、5層は水分を多量に含むグライ化した粘土である。1層～3層についてはSB4を造成するために人為的に埋められたものと考えられる。

〔出土遺物〕 遺物はいずれも堆積土5層より陶器片8点、磁器片32点、瓦の小片59点、木製品4点、計103点が出土しており、7点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。第72図の1・2は19世紀以降の陶器、3～5は明治時代以降の磁器、第73図の6・7は木製品で明治時代以降と考えられる曲物の底部である。写真図版48・8は明治時代以降と考えられる用途不明の木製品で、写真のみの参考掲載にとどめた。また、細片のため図化し得なかったが、革靴片やガラス瓶の破片なども出土している。(守谷)



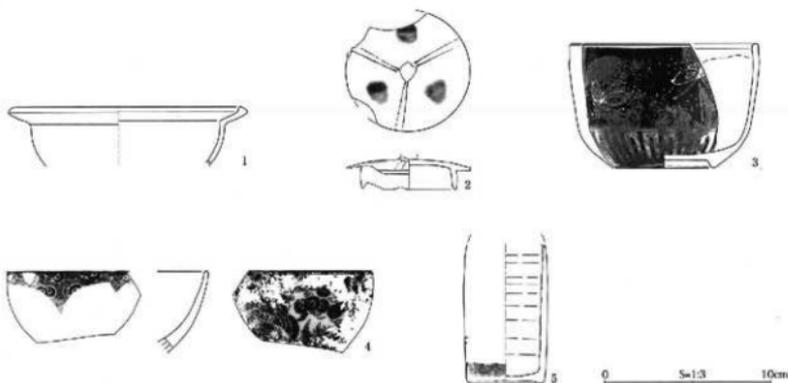
第71図 SE1 井戸跡 平面図及び立面図

第4節 IIb層上面



SE1 井戸跡土層柱記

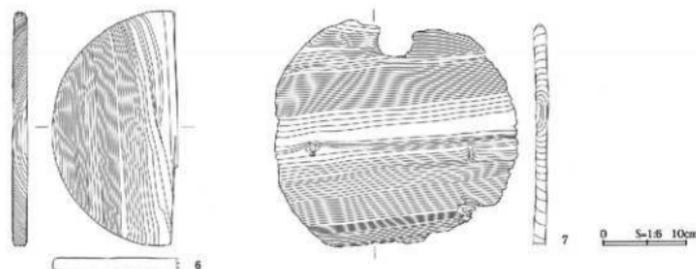
層番号	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	10YR3/1	黒褐色 砂質シルト	あり	径10cm大の礫を多く含む。
2	10YR2/2	黒褐色 砂質シルト	なし	径5cm大の礫を多く含む。径5mm大の礫土質。炭化植物を多く含む。
3	10YR3/1	黒褐色 シルト	あり	径1cm-2cmの砂礫少量。
4	10YR3/1	黒褐色 シルト	なし	崩壊した石材が多量に含まれる。径1cm-2cmの砂礫少量。
5	10YR3/3	黒褐色 粘土	あり	崩壊した石材が多量に含まれる。水分を多く含む。
6a	10YR3/1	黒褐色 粘土質シルト	あり	径1cm-5cmの礫。径1mm以下のシルト粒多量。裏込土。
6b	10YR3/1	黒褐色 粘土質シルト	あり	径1cm-5cmの礫。径1mm以下のシルト粒多量。裏込土。
6c	10YR3/1	黒褐色 粘土質シルト	あり	径1cm-5cmの礫。径1mm以下のシルト粒多量。裏込土。
6d	10YK2/1	黒色土 粘土質シルト	あり	径1cm-5cmの礫。径1mm以下のシルト粒多量。裏込土。
6e	10YK2/1	黒色土 粘土質シルト	あり	径1cm-5cmの礫。径1mm以下のシルト粒多量。裏込土。
6f	5B2/1	青黒色 粘土質シルト	あり	径1cm-5cmの礫。径1mm以下のシルト粒多量。裏込土。
6g	5B2/1	青黒色 粘土質シルト	あり	径1cm-5cmの礫。径1mm以下のシルト粒多量。裏込土。
6h	5B2/1	青黒色 粘土質シルト	あり	径1cm-5cmの礫。径1mm以下のシルト粒多量。裏込土。



SE1 井戸跡出土遺物観察表

調査番号	図録番号	グリップ 遺物・層位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	造量 (cm)			産地	時期	備 考
									L径	底径	器高			
72-1	J-19	S4-B8 SE1	陶器	土製	口縁-唇部	-	鉄線	-	12.4	-	3.6	大塚相馬	19C 前半- 中期	-
72-2	J-30	S4-F8 SE1	陶器	土製・甍	つまみ- 受け	90%	染付	-	5.6	-	1.9	大塚相馬	19C	外面：青釉。
72-3	J-33	S4-B8 SE1	陶器	甍	口縁-唇部	20%	色絵	-	5.5	3.2	7.7	肥前	19C 明治以降	色絵兼付き鉢。イッチン積みの様。
72-4	J-32	S4-F8 SE1	陶器	甍	口縁-唇部	20%	染絵	描絵	-	-	5.0	不明	明治	染付。印紙。
72-5	J-31	S4-B8 SE1	陶器	甍	口縁-唇部	30%	印判	-	4.6	-	8.6	備前・美濃	明治・大正	銅版転写による文様。

第72図 SE1 井戸跡 断面図及び出土遺物 1



SE1 井戸跡出土遺物観察表

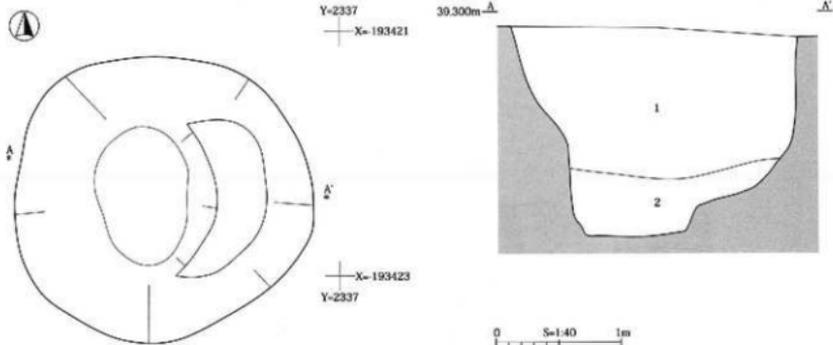
採集 番号	登録 番号	グリッド 遺構・層位	種別	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)		産地	時期	備 考	
									直径	底径				器高
736	L-1	S4E8 SE1 5層	木製品	曲物	底部	50%	-	-	20.0	-	-	在地	明治以降	厚さ1.3cm。板目取り。
737	L-3	S4E8 SE1 5層	木製品	曲物 or 漆器	底部	90%	-	-	28.0	-	-	在地	明治以降	厚さ0.8cm。板目取り。

第73図 SE1 井戸跡 出土遺物 2

(2) SE4 井戸跡 (第74図、図版21-1、22-1)

〈遺構状況〉調査区北西側、S3-E4グリッドに位置する。Ⅱb層上面で検出された素掘の井戸である。平面形は円形を呈する。規模は上部内径240cm、底部内径約80cmを測り、深さ170cmを測る。検出面からの深さ130cm付近の西片に底面幅120cm、奥行き約40cmのテラス状を呈する場所がある。ここは鑿井時の足場と考えられる。浅い位置で底面が検出された状況から、鑿井を中断した可能性も考えられる。遺物は出土していない。

〈堆積土〉堆積土は2層からなり、1層は小礫、シルトを多量に含んだ粘土で、2層は浅黄褐色のブロック、水分を多量に含んだ粘土である。鑿井を中断した可能性があることから、1、2層ともに人為的に埋められたものと考えられる。(守谷)



SE4 井戸跡土層註記

層位	色調	土質	粘性	混入物・備考	
1	10YR2/3	赤褐色	粘土	あり	径10cm程度の礫・シルト多量。黄褐色ブロックを少量含む。
2	10YR2/3	赤褐色	粘土	あり	浅黄褐色のブロック多量に含む。水分を多く含む。

第74図 SE4 井戸跡 平・断面図

(3) SE6 井戸跡 (第75図、図版21-2、22-2・3)

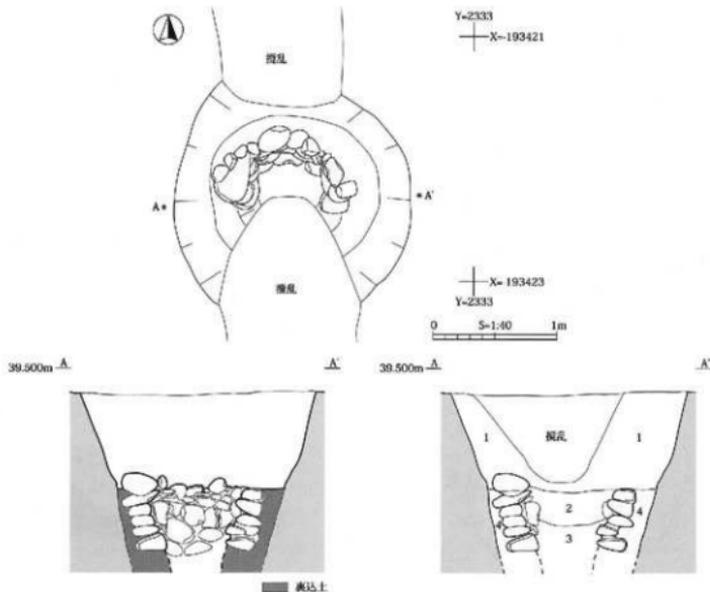
〈遺構状況〉調査区北東側、S3-E4 グリッドに位置する。IIb層上面で検出された。石組の井戸で、鉄管埋設の掘り方により石組の上部構造と南側半分が削平される。平面形は円形と推定される。残存部の上部内径約70cm、最下部内径50cmを測る。この井戸は検出面より150cmの深さまで調査したが、著しい湧水のため底面は検出できなかった。遺物は出土していない。

〈掘り方〉底面が検出されていないので全体の形状は不明である。規模は上部径190cm、最下部径105cmを測る。壁面の傾斜角は70度～75度を測る。

〈井側構造〉井側は石組のもので、石材を円筒形で積んで構築している。石は長さ15cm～40cm、幅5cm～10cm、厚さ5cm～15cmの扁平な楕円形の自然礫を利用している。積み方は石材を放射状に円形に並べたいわゆる乱石積みである。下部から上部までの石の積み方に変化はなかったと思われ、上部外径120cm、最下部外径約90cmを測る。

〈裏込〉攪乱で壊されているため崩落が著しく、裏込の詳細は把握出来なかったが、砂礫とシルトを多量に含んだ粘土質シルトが石材の安定のために詰め込まれている。

〈堆積土〉堆積土は3層からなり、1層は砂礫を多量に含む砂質シルト、2層は小礫を多量に含んだ砂質シルト、3層は浅黄橙色のブロックを多量に含んだ、砂質シルトである。1～3層は自然堆積と考えられるが、それより上部については削平されているため判断ができなかった。(守谷)

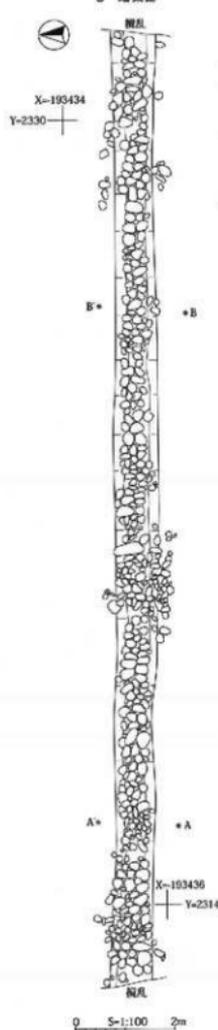


SE6 井戸跡土層柱記

埋積土 層別土	色調	土質	粘性	裏込物・備考
1	10YR3/4 黒褐色	砂質シルト	あり	径1cm～3cm程度の砂礫シルト多量。
2	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	あり	シルト多量、黄褐色ブロックを少量。
3	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	あり	浅黄橙色のブロック多量に含み、水分多量。
4	10YR2/2 暗褐色	砂質シルト	あり	径1cm～3cm程度の砂礫を多量。裏込土。

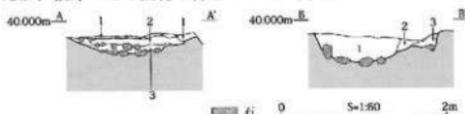
第75図 SE6井戸跡 平・断面図及び立面図

5 暗渠跡



5 暗渠跡 (第76図、図版22-4)

調査区南西側、S4-E2～S4-E4グリッドに位置する。IIb層上面で検出された第二師団施工による暗渠施設跡である。東西方向に伸び、東西の端部は擾乱によって削平される。規模は残存長19.2m、上端幅はやや広狭をもち50cm～70cmを測る。西側から東側に向かって緩やかに傾斜し、15cm～50cmの深さを測る。底面には長さ15cm～25cm、幅10cm～15cm、厚さ5cm～10cmを測る楕円形で扁平な自然礫を敷き詰めてある。また、石敷の下層には配水管が埋設されている。堆積土は3層からなる。遺物は堆積土中から18世紀代の磁器が1点出土したが、細片のため図化し得なかった。(守谷)



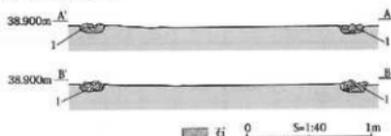
暗渠跡土層註記

層番号	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	7.5YR4/3 褐色	砂質シルト	なし	
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	なし	
3	10YR5/6 黄褐色	砂	なし	
混入物・備考				
1	砂粒、炭化植物、径1cm～3cmの黄褐色土ブロック、塵少量。			
2	1cm～2cmの炭化物ブロック少量。砂粒微量。			
3	黒褐色砂ブロック多量。鉄分の浸着が少量見られる。			

第76図 暗渠跡 平・断面図

6 道路状遺構 (第77図、図版23-1)

調査区中央部、S3-E7～S4-E8グリッドに位置する。IIb層上面で検出された。自然礫を配した2条の溝が東西方向に平走する。中央部、東西両端部は擾乱により削平されている。規模は残存長36.7m、2条の溝の間隔は2.2mを測る。溝はいずれも上端幅11cm～20cmの狭さを測り、深さは15cm～20cmを測る。溝内には長さ10cm～15cm、幅5cm～10cm、厚さ5cm～10cmの楕円形の自然礫が突き込まれていた。堆積土は同一の単層からなる。遺物は堆積土中から陶器片2点、磁器片2点、瓦の小片1点が出土したが、いずれも細片のため図化には至らなかった。(守谷)



道路状遺構土層註記

層番号	色調	土質	粘性	混入物・備考
1	10YR2/2 暗褐色	砂質シルト	なし	褐色砂、黒・大礫、1cm～2cmの炭化物ブロック多量。

第77図 道路状遺構 平・断面図

6 道路状遺構

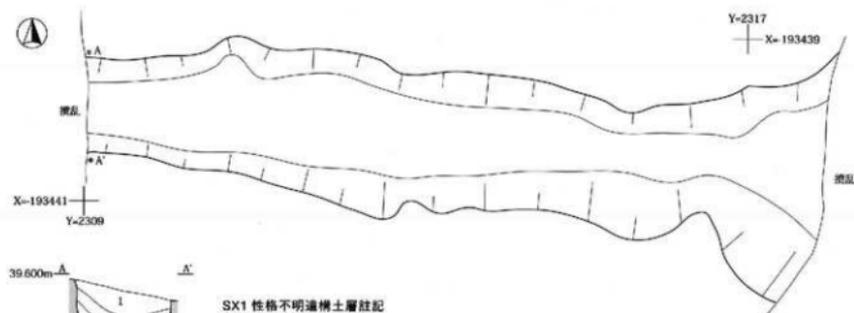


7 性格不明遺構

(1) SX1 性格不明遺構 (第78図、図版23-2)

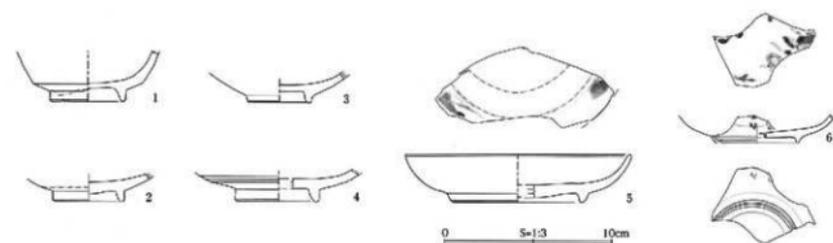
調査区東側、S4-E1～S5-E2グリッドに位置する。IIb層上面で検出された。東西方向に伸び、平面形は溝状を呈する。東西両端は擾乱によって大幅に削平される。規模は残存長850cm、上端幅は140cm～180cmの間で狭広をもち、深さ約80cm～100cmを測り、東に向かって下り傾斜が認められる。堆積土は3層に分層され、近代の廃棄物が多量に含まれていた。

近世の遺物は陶器片38点、磁器片30点、土師質土器片6点、瓦の小片7点が出土しており、6点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。第78図の1は産地、時期不明の陶器の碗、2は18世紀代の大瀬相馬産と考えられる陶器の碗、3～6は18世紀代と考えられる磁器である。(守谷)



SX1 性格不明遺構土層註記

層別土 構成土	色調	土質	粘性	混入物・備考	
1	10YR4/1	褐色	砂質シルト	なし	細～大礫多量含む。
2	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	なし	炭化物粒微量。
3	7.5YR4/6	褐色	砂質シルト	あり	1cm以下のシルトストーン、1cm以下の褐色シルトブロック多量。



SX1 性格不明遺構出土土物観察表

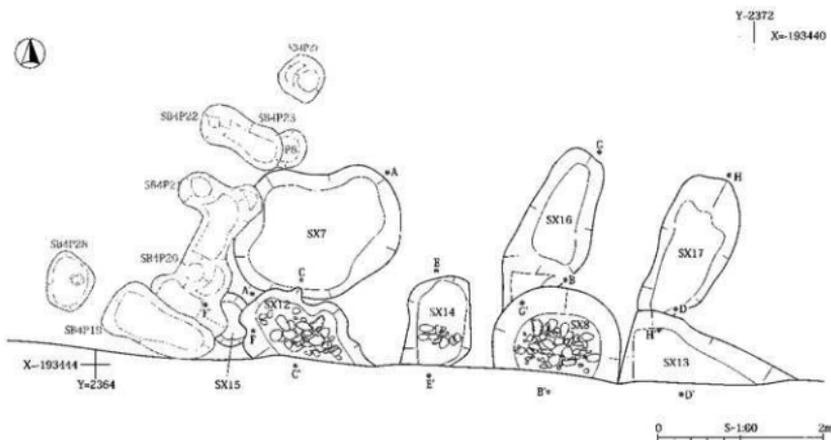
図版 番号	図録 番号	グリッド 遺構・層位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	重量 (cm)		産地	時期	備 考	
									口径	底径				器高
78-1	1-37	S3-E2 SX1 1層	陶器	碗	底部・ 縁部片	-	青釉	-	-	(4.4)	(5.1)	不明	不明	-
78-2	1-38	S2-E2 SX1 1層	陶器	碗	底部・ 縁部片	-	灰釉	灰釉	-	(4.1)	(1.7)	大瀬相馬	18C	-
78-3	1-48	S5-E2 SX1 1層	磁器	碗	底部片	-	灰釉	灰釉	-	(3.8)	(2.8)	大瀬相馬	18C	丸底。ウラ灰釉現在?
78-4	1-19	S3-E2 SX1 2層	磁器	碗	底部・ 縁部片	-	灰釉	灰釉	-	4.9	(1.9)	大瀬相馬	18C	掛け分け碗。
78-5	1-50	S5-E2 SX1 2層	磁器	皿	口縁・底縁	20%	-	染付	(12.4)	4.0	3.0	肥前	18C	鎌倉産。内縁・口縁、くらわんがず、縁の浮彫刺す。
78-6	1-51	S5-E2 SX1 2層	磁器	皿	底部	20%	染付	染付	-	(5.0)	(1.7)	肥前	18C 前半	外面：草花。内面：鶴に草花。

第78図 SX1 性格不明遺構 平・断面図及び出土土物

(2) SX7、8、12～17 性格不明遺構 (第79～81図、図版24-1～3)

〔遺構状況〕調査区中央北側、S3-E5～S5-E8グリッドに位置する。IIB層上面で検出された。西側に位置するSX7、SX15はSB4に切られる。いずれも平面形は不整形円および不整形等で、深さは10cm～20cmを測り、底面には起伏をもつ。堆積土は同一の砂質シルトの単層である。また、SX8、SX12、SX14は堆積土中に10cm～15cm程の隙が多量に突き込まれていた。これらの遺構は、形状や堆積土の状況から、抜根後に整地した跡とも思われる。

〔出土遺物〕出土遺物はSX7・12・13・16・17より陶器片、磁器片、土師質土器片、瓦の小片、計18点が出土し、5点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。第81図の1はSX7より出土した明治時代以降の大塚相馬産と考えられる陶器の土瓶の壺、2は18世紀の肥前産と考えられる磁器の皿、3は18世紀から19世紀前半の肥前産の磁器の小鉢、4はSX13より出土した19世紀前半以降の埴産と考えられる用途不明の陶器、5はSX17より出土した18世紀前半の肥前産の輪花皿である。(小林)

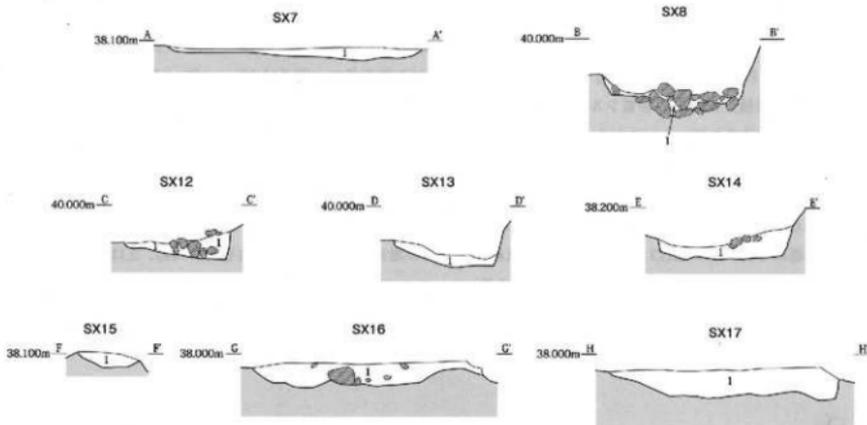


第79図 SX7、8、12～17 性格不明遺構 平面図

SX7、8、12～17 性格不明遺構土層記

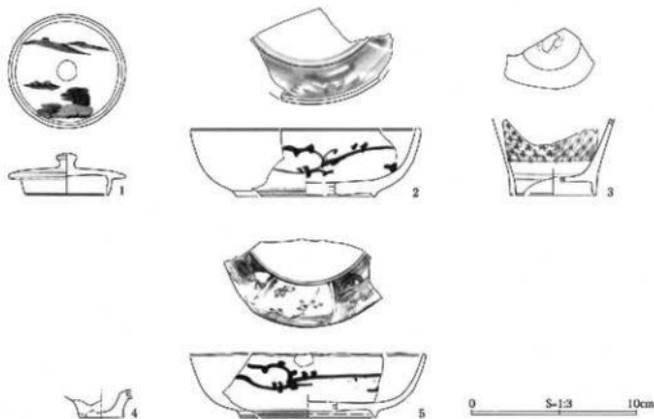
遺構名	層上 深さ	色調	土質	粘性	混入物・備考
SX7	1	25Y2/1	黒色 砂質シルト	なし	褐色シルト粒多量。炭化物粒、大層少量。
SX8	1	25Y2/1	黒色 砂質シルト	あり	炭化物粒、大層多量。
SX12	1	25Y2/1	黒色 砂質シルト	あり	炭化物粒、大層多量。
SX13	1	10YR3/1	黒褐色 砂質シルト	なし	炭化物粒多量。
SX14	1	10YR3/1	黒褐色 粘土質シルト	あり	炭化物粒、褐色シルト粒多量。
SX15	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色 粘土質シルト	なし	径1mm以下のシルト少量。径1cm～2cmの暗褐色シルトブロック多量。
SX16	1	10YR4/2	灰黄褐色 砂質シルト	なし	5mm～10mmの炭化物ブロック中量。1mm～1mm以下の炭分少量。炭分の位置が見られる。
SX17	1	10YR4/3	にがい黄褐色 砂質シルト	なし	径1cm以下の炭化物ブロック、赤褐色シルトブロック、黄褐色シルトブロック多量。

第4節 IIb層上面



第80図 SX 7、8、12～17 性格不明遺構 断面図

0 S-1:40 1m



SX7、13、17 性格不明遺構出土遺物観察表

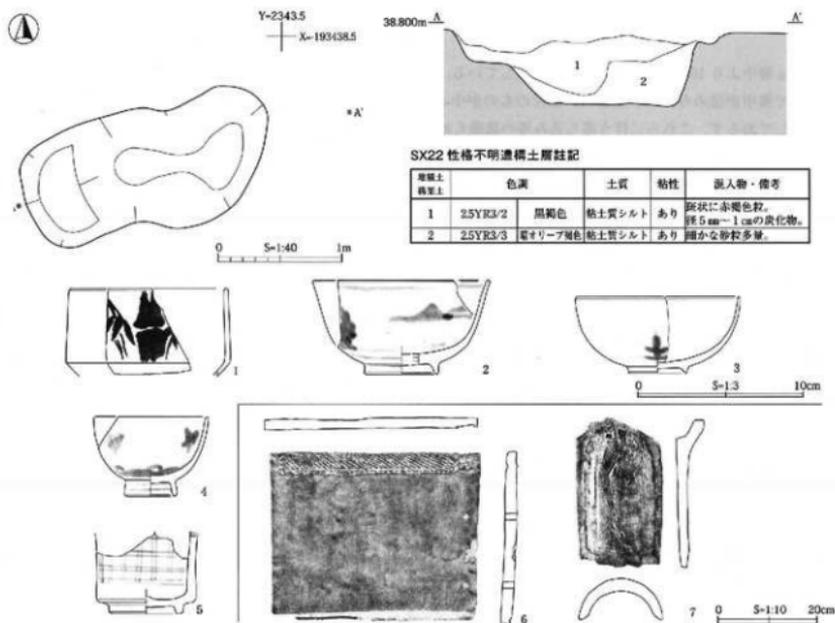
遺構名	10層 番号	25層 番号	グリップ 遺構・部位	種別	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)		産地	時期	備 考	
										L径	器高				
SX7	81-1	187	SS E7 SX7 1層	陶器	土敷産	つまみ- 受地	100%	色絵	-	つまみ径 15	49	2.5	大瀬粗馬	明治以降	上面：色絵山水文。
SX7	81-2	J-153	SS E7 SX7 1層	磁器	重	口縁- 高部分	30%	染付	染付	(136)	(8.4)	4.2	肥前	18C	外面：豪華文。 内面：草文、編織。
SX7	81-3	J-154	SS E7 SX7 1層	磁器	小鉢	底唇- 底部	40%	染付	染付	-	(5.0)	(4.8)	肥前	18C	外面：草文？ 裏面：草文？ 側面：？
SX13	81-4	191	SS E7 SX13 1層	土器	不明	底部	80%	鉄線	鉄線	-	2.7	1.6	埴	19C	全面に薄い鉄線が施される。
SX17	81-5	J-155	SS E7 SX17 1層	磁器	輪花皿	口縁- 底部	20%	染付	染付	(148)	(8.0)	3.9	肥前	18C	外面：草木文、内面：梅・竹。

第81図 SX7、13、17 性格不明遺構 出土遺物

(3) SX22 性格不明遺構 (第82図、図版24-4・5)

調査区中央南側、S4-E5～S5-E5グリッドに位置する。東側はⅡc層上面、西側はⅤ層上面で検出された。平面形は不定形を呈する。規模は上端の長さ204cm、幅約90cm、深さ58cmを測る。底面はやや凹凸をなす。堆積土は2層からなる。近代の整地の際の抜根跡とも考えられる。

遺物は、陶器片18点、磁器片9点、土師質土器片5点、瓦質土器片2点、瓦片30点、計64点が出土し、7点を図化した。その他は細片のため図化し得なかった。第82図の1は大塚相馬産と思われる碗で外面に鉄絵が施文される。2、3は肥前産の磁器、4は瀬戸・美濃産の磁器、5は19世紀後半の肥前産と考えられる磁器で火入れである。6、7は近代の瓦である。(守谷)



SX22 性格不明遺構出土遺物観察表

図版番号	登録番号	グリッド 区画・層位	類別	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)		産地	時期	備 考		
									口径	底径				器高	
82-1	I-89	SS-E5 SX22 1層	陶器	碗	口縁～ 底部分	-	鉄絵	-	(9.4)	-	(5.4)	大塚相馬?	19C 前半	外面: 竹文?	
82-2	J-156	SS-E5 SX22 1層	磁器	碗	口縁～ 底部分	30%	染付	染付	(10.6)	(4.4)	5.7	肥前	18C	外面: 山水文。	
82-3	J-157	SS-E5 SX22 1層	磁器	碗	口縁～ 底部分	-	染付	-	(9.8)	(3.4)	4.7	肥前	18C 前半	外面: 松文、半球網。	
82-4	J-158	SS-E5 SX22 2層	磁器	小片	口縁～ 底部分	50%	染付	-	(6.6)	3.0	4.9	瀬戸・ 美濃?	19C 前半	外面: 波に千鳥。	
82-5	J-159	SS-E5 SX22 2層	磁器	火入れ	口縁～ 底部分	-	刷毛 染付文	-	-	-	(4.2)	(5.0)	肥前	19C 江戸後期	高台に砂付着。

図版番号	登録番号	グリッド 区画・層位	類別	器種	法量 (cm)			時期	備 考
					総 長	幅	厚さ		
82-6	G-7	SS-E5 SX22 2層	瓦	棧瓦	38.5	29.0	2.4	江戸以降	-
82-7	F-4	SS-E5 SX22 2層	瓦	丸瓦	27.0	15.3	1.8- 3.1	江戸以降	棒状仕渡。コビキ瓦。

第82図 SX22 性格不明遺構 平・断面図及び出土遺物

第5節 遺構外の遺物

基本層Ⅰ層からⅤ層の各層より、縄文土器、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、剥片石器、石製品、占鏡、金属製品等が合計4427点出土している(表2)。多くは小さな破片資料であるが、最も出土量が多かったのが、全体の約45%を占める磁器で、次いで約31%の陶器となる。

なお、基本層Ⅳ層及びⅢ層の出土遺物に関しては、それぞれ第1節Ⅴ層上面(14頁)、第3節Ⅲ層上面(22頁)で取り上げたので、本節からは外した。

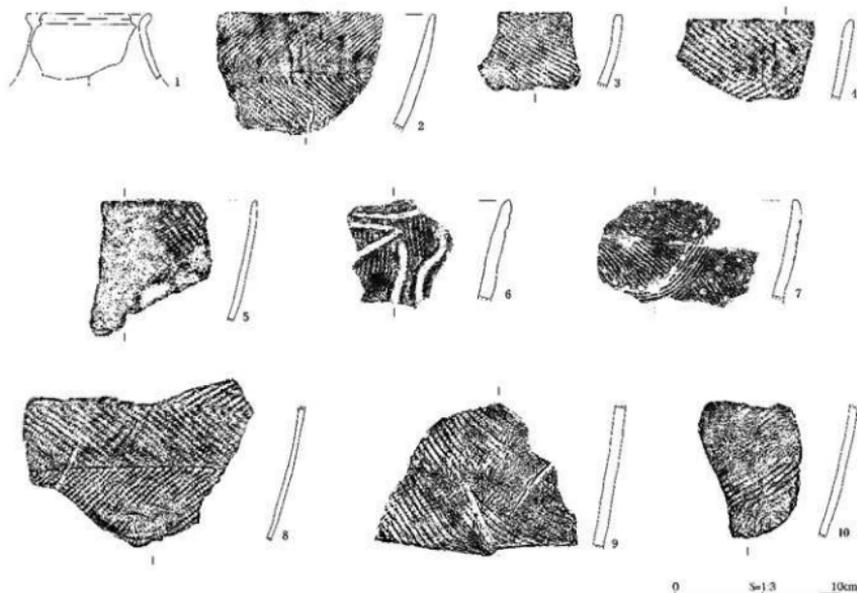
1 基本層Ⅴa層

Ⅴa層中より106点の縄文土器片が出土している。これらの出土地点はE7グリッド以西で、特にS5-E3グリッド地点で集中が認められた。土器は、細片のものが中心で、内外面とも摩滅したものが多く。出土状況は一定の規則性を示しておらず、これらに伴う落ち込み等の遺構も検出されなかった。

これら縄文土器片は集中性が認められたものの、遺存状況、出土状況及び基本層Ⅴa層の成因より、土石流等による二次堆積遺物と判断した。

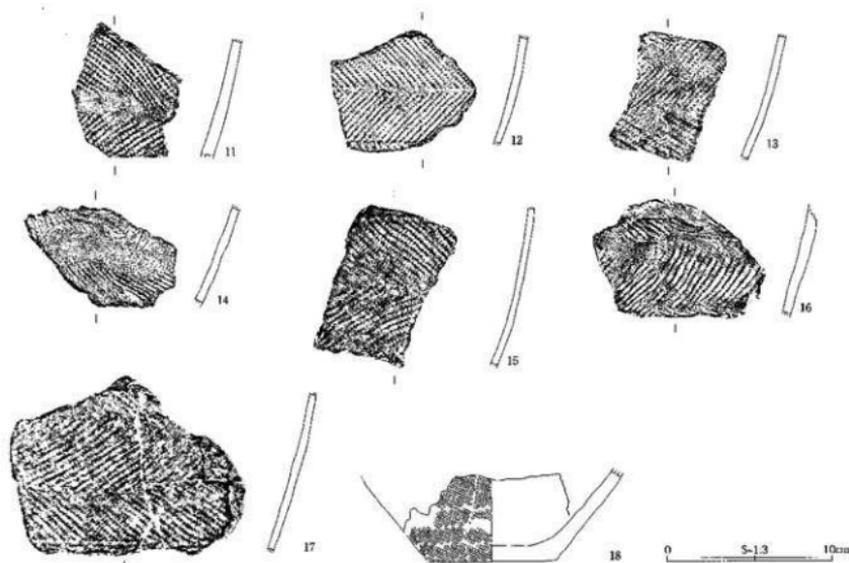
所属時期はいずれも縄文後期の南境式期に比定される(註1・2)。

なお、上層で出土した縄文土器片及び剥片石器も、上層の遺構や攪乱により、Ⅴa層より巻き上げられた可能性が極めて強い。



第83図 基本層Ⅴa層出土遺物 1

註1: 宮城県教育委員会『縄文文化と第三紀新巻地層—鹿島五層—』1968
 註2: 宮城県教育委員会『1/1内巻—H10地層—』『1/1内巻—H10地層—』『1/1内巻—H10地層—』1996



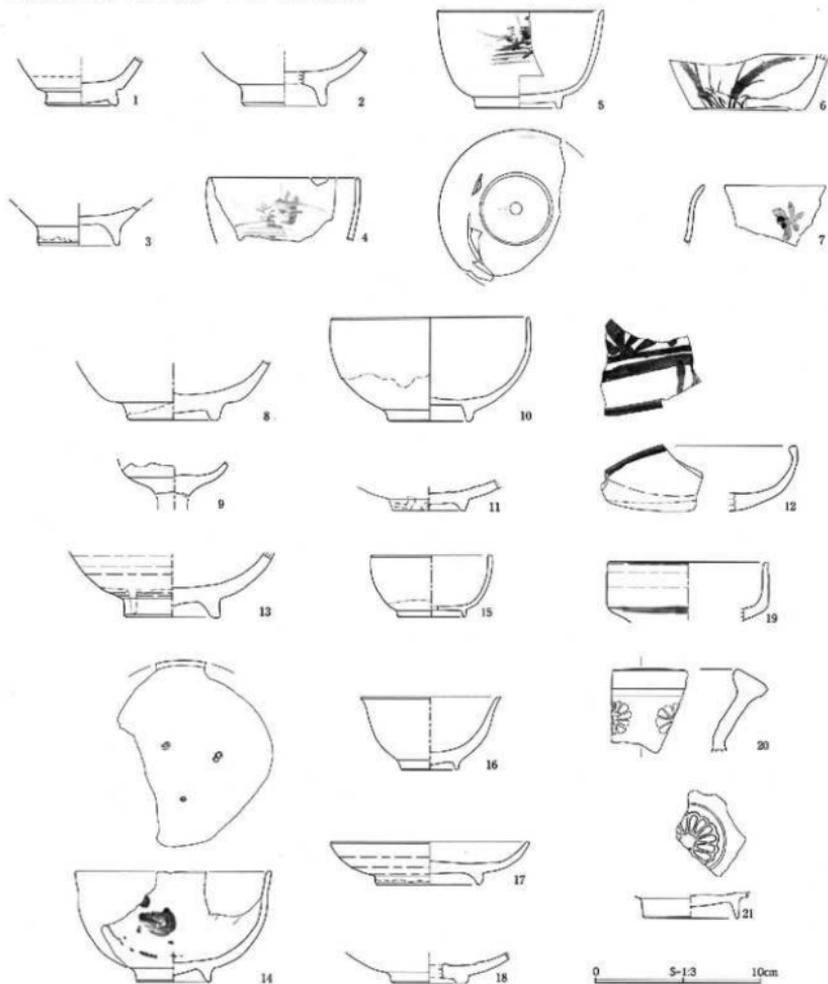
基本層Va層出土遺物観察表

図号	CM 番号	グリップ 形状・部位	種類	器種	部位	時期	施文調整	備考
83-1	A-74	S4E3 Va	縄文土器	蓋	口縁	縄文後期	ヘラ状工具によるナメ調整。	口縁直下へヘラ状工具痕あり。
83-2	A-63	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	口縁	縄文後期	LR→RL羽状縄文。	内面ミガキ。
83-3	A-78	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	口縁	縄文後期	RL縄文。	—
83-4	A-73	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	口縁	縄文後期	LR→RL羽状縄文。	内面ミガキ。
83-5	A-70	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	口縁	縄文後期	RL縄文。	内面ミガキ。
83-6	A-46	S4E3 Ic	縄文土器	深鉢	口縁部片	縄文後期	R捻余文→沈雑文。	内面ミガキ。
83-7	A-39	S4E3 Ic	縄文土器	深鉢	口縁部片	縄文後期	RL縄文。掘削状工具による砥雑文。	砥雑文に列点文が沿う。内面ミガキ。
83-8	A-66	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	LR→RL→LR羽状縄文。	内面ミガキ。
83-9	A-67	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	RL縄文。	内面ミガキ。
83-10	A-69	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	LR→RL→LR羽状縄文。	内面ミガキ。
84-11	A-58	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	RL→LR羽状縄文。	内面に炭化物付着。
84-12	A-61	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	RL→LR羽状縄文。	内面に炭化物付着。
84-13	A-68	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	LR→RL羽状縄文。	—
84-14	A-71	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	RL縄文。	内面ミガキ。
84-15	A-72	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	RL→LR羽状縄文。	内面に炭化物付着。
84-16	A-75	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	RL→LR羽状縄文。	内面ミガキ。
84-17	A-76	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	胴部	縄文後期	RL→LR→RL羽状縄文。	—
84-18	A-77	S4E3 Va	縄文土器	深鉢	底部	縄文後期	RL縄文。	—

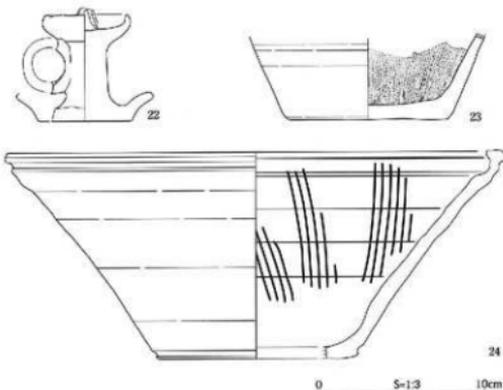
第84図 基本層Va層出土遺物2

2 基本層 I ~ IIc層

主に19世紀以前の資料で、図化可能なものを掲載した。内訳は縄文土器2点、陶器33点（肥前16点、瀬戸美濃4点、埴1点、大塚相馬5点、小野相馬2点、岸2点、輸入陶器1点、不明が1点、合計23点）、磁器21点（肥前14点、瀬戸美濃7点、不明1点、合計21点）、土師質土器4点、瓦質土器は6点、瓦6点、剥片石器4点、石製品5点、金属製品1点、銭貨5点、ハブラシ1点である。



第85図 基本層 I ~ IIc層出土遺物 1

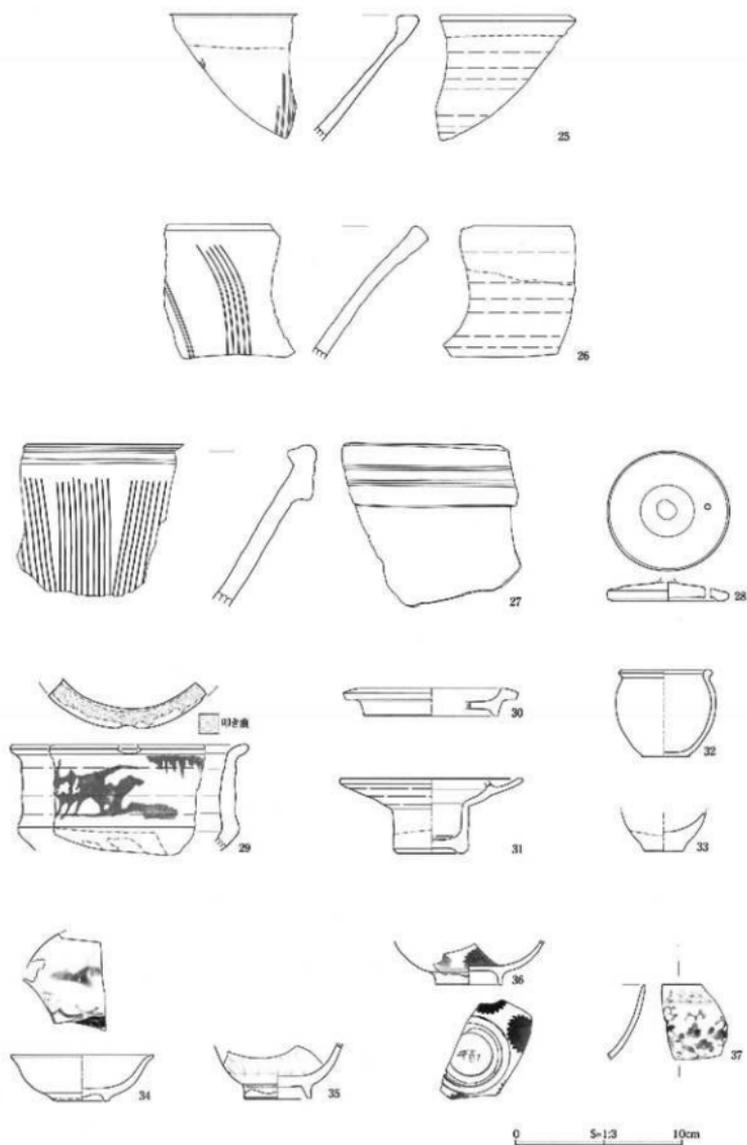


基本層 I ~ II c 層出土遺物観察表

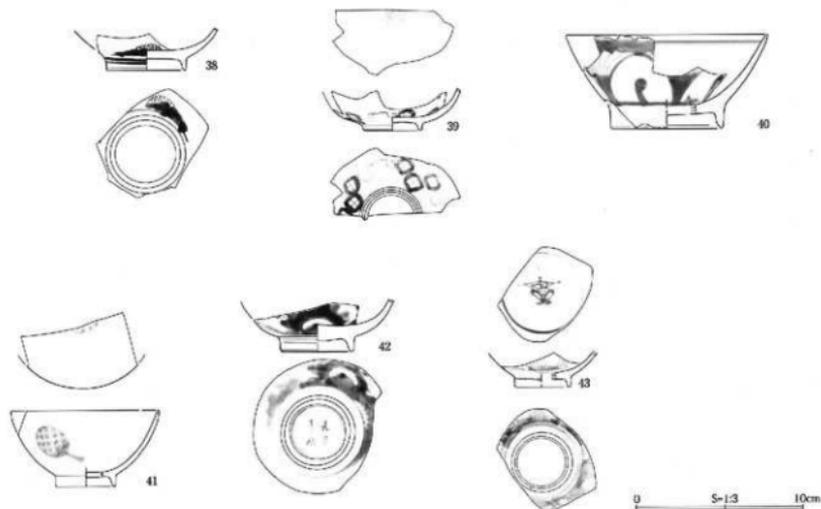
調査 番号	発見 多り	グリッド 遺座・層位	類別	器種	部位	残存率	外面	内面	注量 (cm)			産地	時期	備 考	
									口径	底径	器高				
85-1	I-166	S4E0-1 II a	陶器	天目茶碗	底部	100%	鉄軸	鉄軸	-	4.7	3.0	瀬戸・美濃	17C 後半	袋付。供湯。	
85-2	I-141	S4E2-15 I b	陶器	碗	底部	80%	灰軸	灰軸	-	4.5	3.5	肥前	17C 後半	兵器手。唐津。	
85-3	I-129	S3E9-S3E10 II c	陶器	碗	非部一 底部片	-	灰軸	灰軸	-	(4.8)	(2.4)	肥前	17C 後半	兵器手。唐津。	
85-4	I-116	S3E9-9 II c	陶器	碗	口縁一非部	20%	染付	-	(7.9)	-	(4.0)	肥前	17C 後半	唐津陶器。唐津。 山吹文。	
85-5	I-125	S5E8 II b	陶器	碗	口縁一底部	60%	山吹文	-	10.0	5.0	6.0	肥前	17C 後半	唐津陶器。唐津。 山吹文。底部に唐津。	
85-6	I-164	S5E3 II b	陶器	徳利	底部	100%	鉄軸 底石軸	-	-	7.0	3.5	美濃	17C	唐津。家文 or 沢田文。	
85-7	I-197	S3E7 II b	陶器	碗	口縁部片	-	白濁軸	灰軸	-	-	3.7	不明	18C - 19C	白濁軸による糖輪文。	
85-8	I-172	S3E3 I b	陶器	碗	非部手一 底部	80%	-	-	-	5.7	3.8	肥前	17C 後半 - 末	唐津。	
85-9	I-130	S3E10 II c	陶器	仏飯器	体部片	-	灰軸	灰軸	-	2.5	和ノ・美濃	18C 後半	18C 中葉	内面：目跡あり。	
85-10	I-207	S6E2-2 I b	陶器	碗	非部一底部	60%	灰軸 鉄軸	灰軸	-	5.0	6.5	大塚相馬	18C 中葉	割け分付軸。	
85-11	I-167	S5E7-1 II b	陶器	皿	底部	60%	-	青緑釉	-	4.4	1.8	肥前	17C 後半	見込：蛇ノ目輪刺。唐津。	
85-12	I-283	S3E9-16 II c	陶器	皿	口縁部片	-	長石軸	長石軸	-	4.5	-	肥前	18C 末 - 17C 初期	唐津。変形皿。	
85-13	I-143	S4E3-2 I d	陶器	碗	底部	100%	灰軸	灰軸	-	5.5	(2.4)	肥前	17C 後半 - 末	唐津。唐津に唐津。ろくろ形成あり。	
85-14	I-126	S3E8-S3E9-2 II c	陶器	碗	口縁一底部	30%	淡青色釉	淡青色釉	12.5	4.7	6.8	小野相馬	18C	高台に唐色。唐口の盛り上がり。 見込：目跡。	
85-15	I-149	S4E4-1 II a	陶器	小杯	口縁一底部	30%	灰軸	灰軸	3.2	(4.2)	4.0	大塚相馬	18C 後半 以降	---	
85-16	I-157	S4E8-4 II a	陶器	小杯	口縁一底部	50%	白濁軸	白濁軸	(9.1)	3.4	4.25	大塚相馬	19C 前半	高台内に宛巾が見られる。	
85-17	I-134	S1E2 I b	陶器	皿	口縁一 底部片	-	灰軸	灰軸	-	2.7	-	肥前	17C	唐津。ろくろ形成あり。	
85-18	I-102	S3E3 I d	陶器	皿	底部片	-	青緑釉	青緑釉	-	-	-	肥前	17C 後半	見込：加の目輪刺。 唐津。	
85-19	I-136	S4E2 I b	陶器	鉢	口縁一 非部片	-	灰軸	灰軸	12.0	-	3.4	肥前	17C	唐津。陶付。一部鉄軸が見られる。	
85-20	I-1	S4E5 II b	瓦質土器	香炉?	口縁部片	-	印花電	-	-	-	-	5.2	産地	18C - 19C	---
85-21	I-165	S5E7-9 II b	陶器	皿	底部片	-	-	淡青釉	-	-	1.5	小野相馬	18C	目跡あり。見込：唐印花文。	
85-22	I-105	S3E5 I d	陶器	白濁真鍮鍍	口縁一非部	70%	鉄軸	鉄軸	5.3	5.0	6.6	堀	19C 前半	炭化物の付着などなし。	
85-23	I-3	S4E5 II b	陶器	摺鉢	底部	60%	鉄軸	鉄軸	-	9.0	4.5	渠?	18C?	屈折糸切痕あり。ろくろ形成あり。	
85-24	I-117	S3E8 II c	陶器	摺鉢	口縁一 非部片	-	無軸	-	-	-	-	(10.6)	華 or 明石	19C 前半	ろくろ形成あり。

第 86 図 基本層 I ~ II c 層出土遺物 2

第5節 遺構外の遺物



第87図 基本層I～IIc層出土遺物3

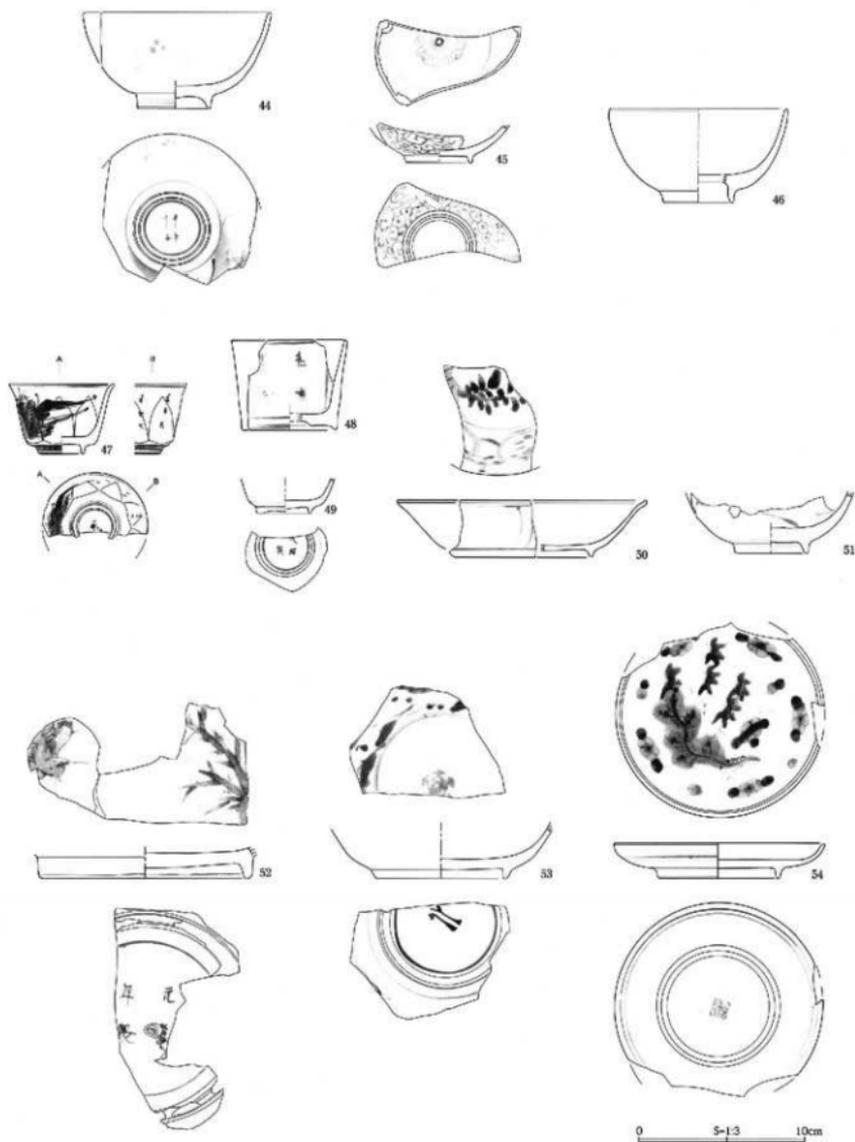


基本層 I ~ II c 層出土遺物観察表

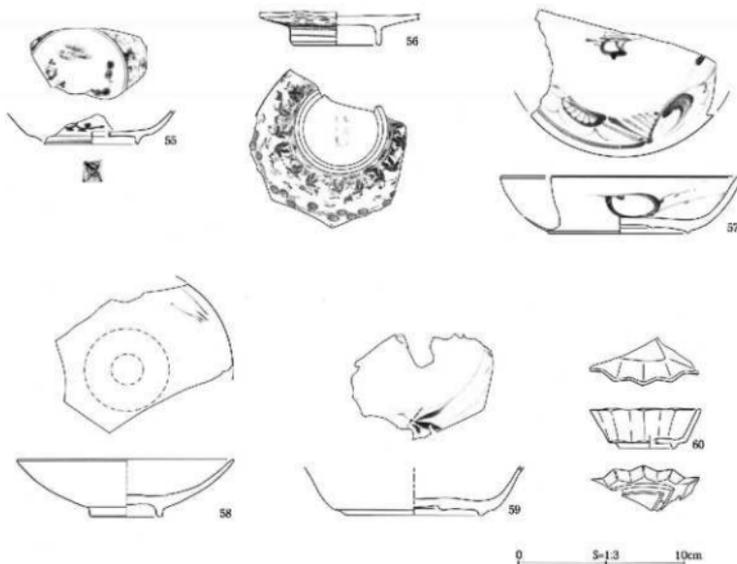
調査 番号	発見 番号	アソッド 遺跡・層位	類別	器種	部位	残存率	外面	内面	寸法 (cm)			産地	時期	備 考
									口径	口径	器高			
87-25	I-151	S424 II a	陶器	椀鉢	口縁- 唇部片	-	鉄釉 土曜以外の焼	鉄釉 土曜以外の焼	300	-	7.4	厚	17C 後半	口縁の口外に筋線。ろくろ形成形あり。
87-26	I-147	S423 II a	陶器	椀鉢	口縁- 唇部片	-	鉄釉	-	300	-	8.0	厚	17C 中頃	ろくろ形成形あり。
87-27	I-117	S328 II c	陶器	椀鉢	口縁- 唇部片	-	無釉	-	-	-	(10.5)	赤 or 明石	18C 前半	-
87-28	I-115	S288 II b	陶器	土敷の盥	つまみ- 受け	90%	灰釉	灰釉	7.3	-	(1.0)	大塚相馬	18C 後半 以降	-
87-29	I-140	S422 I d	陶器	香炉	口縁-唇部	20%	鉄釉	鉄釉	-	-	6.8	美濃	17C	縁が異形で形物を示す。 研究資料と見做しとして扱った。ろくろ形成形あり。
87-30	J-162	S326 II a	陶器	甕	受け	-	黒釉	黒釉	-	-	1.7	大塚相馬?	18C- 19C	-
87-31	I-101	S322 I a	陶器	油受け皿	口縁-底部	40%	黒釉	黒釉	-	4.4	4.8	大塚相馬?	19C	-
87-32	I-163	S522-S523 I d	陶器	豆壺	口縁-唇部	50%	鉄釉	鉄釉	6.0	2.8	5.3	疑?	18C 以降	全周筋飾。
87-33	I-111	S247 II b	陶器	豆壺	唇部-底部	70%	鉛釉	鉛釉	-	2.6	2.9	大塚相馬	18C 前半- 中頃	回転糸切痕あり。
87-34	J-199	S328-4 II b	磁器	小皿碗状皿	口縁-底部	20%	風景文	染付	-	3.5	2.7	肥前	17C 中頃	外面：風景文。内面：山水文。 裾伊万里?
87-35	J-263	S523-6 I d	磁器	染付碗	唇部-底部	30%	細目文-風	-	-	(4.0)	(3.3)	肥前	17C 中- 後半	巻付・高台縁に砂付着。
87-36	J-270	S247-2 II b	磁器	碗	底部	50%	2049印模 花文	-	-	3.9	3.0	肥前	17C 中- 18C 前半	高台内に「福」の銘あり。
87-37	J-203	S328-10 I c	磁器	碗	口縁- 唇部片	-	染付	-	-	-	(1.9)	肥前	17C 中- 18C 前半	外面：丸台年支。 口縁に七宝文? 花の部分には管輪の可能性も。
88-38	J-216	S229-3 I c	磁器	碗	体部	70%	染付	-	-	4.6	2.6	肥前	18C 前半?	-
88-39	J-174	S323 I d	磁器	碗	唇部-底部	40%	染付	見込	-	-	2.5	肥前	18C 中- 19C 前半	外面：七宝文の草文。見込：雲巻状文飾。 絞線の痕。
88-40	J-165	S425 II b	磁器	碗	口縁-底部	25%	染付	染付	-	4.7	6.0	肥前	19C 中- 18C 前半	広縁碗。
88-41	J-172	S247-6 I b	磁器	碗	口縁-底部	20%	染付	染付	-	-	4.6	肥前	18C	外面：丸文。見込：丸文。
88-42	J-222	S421-3 I b	磁器	碗	唇部-底部	40%	染付	-	-	8.6	3.4	肥前	18C	胎色反転。 くろわん中平。裏面内に「天明年製」の銘あり。
88-43	J-2	S425 II a	磁器	中碗	唇部-底部	45%	染付	透明釉	-	(3.6)	(2.2)	肥前	18C 後半- 18C 前半	外面：丸台年支。裏面：丸文。 87年頃 17 年頃製造の可能性がある。

第 88 図 基本層 I ~ II c 層出土遺物 4

第5節 遺構外の遺物



第89回 基本層I～IIc層出土遺物5

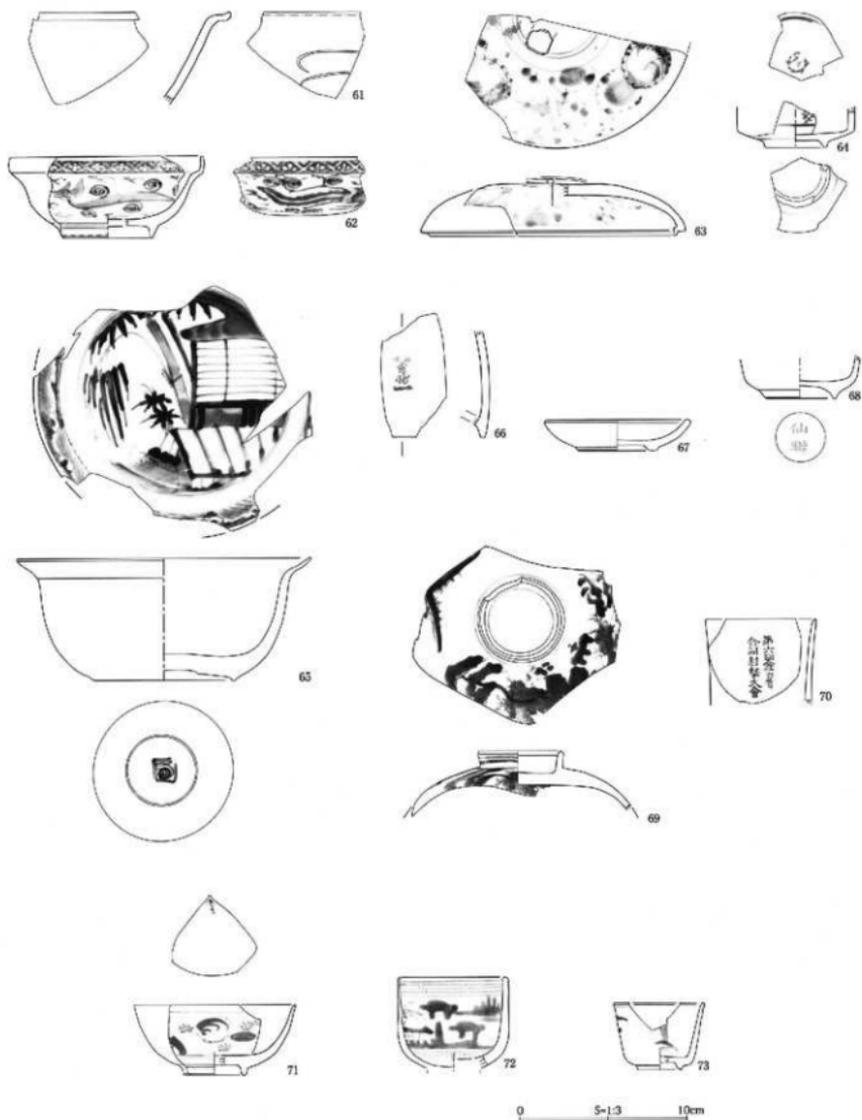


基本層 I ~ II c 層出土土物観覧表

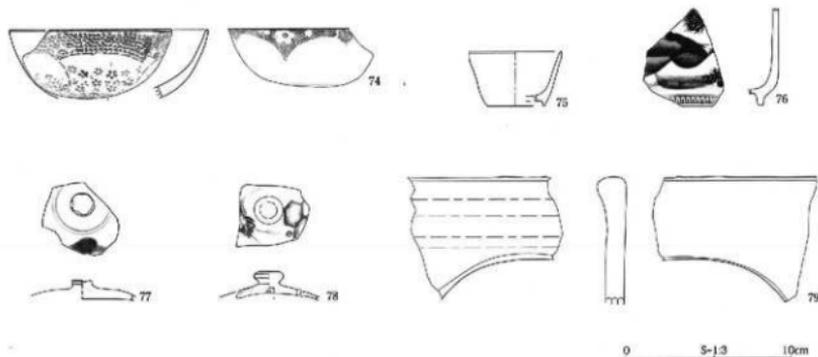
調査 番号	発見 番号	グリップ 遺構・形状	種別	器種	部位	残存率	外面	内面	口径 (cm)			器底	時期	備 考
									口径	口径	器底			
89-44	J-200	S3-E8 II c	磁器	碗	口縁~底面	60%	染付	-	(11.2)	4.4	6.0	肥前	18C	染付見取。 外面：草文。高台内に筋あり。くわわいみ手。
89-45	J-192	S3-E6 II b	磁器	碗	外縁~底面	20%	染付	染付	-	3.9	3.5	肥前	19C前半	外面：花に草草。内面：花文。
89-46	J-233	S4-E3-10 II b	磁器	碗	口縁~底面	20%	青磁釉	-	-	-	5.0	瀬戸・美濃	19C	外面：内面：青けり白。 磁器見取。
89-47	J-238	S5-E2 ~ S5-E3 II b	磁器	楕円小碗	口縁~底面	50%	染付	-	6.6	2.5	4.3	瀬戸・美濃	19C前半 中世	外面：草文。高台内に筋あり。 底縁の一帯に草文。
89-48	J-282	S4-E8 II b	磁器	落口?	口縁~底面	1/3	染付	染付	-	5.8	5.6	肥前	19C前半	総の目四高台。
89-49	J-169	S3-E2-2 II c	磁器	小杯	外縁~底面	70%	染付	-	-	-	(3.8)	肥前	18C?	高台内に「大黒半郎」の義あり。
89-50	J-223	S4-E1-4 II b	磁器	皿	口縁~底面	-	染付	染付	15.0	8.4	3.5	肥前	17C後半	見取・明山手を模倣したものと思われる。
89-51	J-167	S3-E6 II b	磁器	碗	外縁~底面	40%	染付	総の目磁釉	-	4.7	(2.3)	肥前	19C前半 中世	染付見取?
89-52	J-1	S4-E2 II b	磁器	中皿	底面	65%	染付	透明釉	-	(12.8)	(20)	肥前	17C後半~ 18C前半	内面：竹葉図。「元龜半郎」の跡あり。 18C前半 中世
89-53	J-5	S4-E8 II b	磁器	小皿	外縁~底面	40%	染付	透明釉	-	(3.5)	(8.3)	肥前	17C後半~ 18C前半	磁器見取。外面：竹葉。内面：草文。生活・59号。 底縁に筋あり。くわわいみ手。半切立に似る磁器見取。
89-54	J-177	S3-E5 II a	磁器	皿	口縁~底面	90%	染付	染付	12.8	7.3	2.1	肥前	19C中頃	高台内に筋あり。磁器見取の跡あり。
90-55	J-239	S4-E4-5 II a	磁器	皿	外縁~底面	20%	染付	染付	-	5.4	1.9	肥前	18C前半	外面：草文。見取：総の目磁釉。 高台内に「二尊圖」の跡あり。
90-56	J-215	S3-E9 II c	磁器	皿	外縁~底面	70%	滑焼	-	-	5.4	2.1	肥前	19C中頃 以降	高台内に筋あり。硝子。枝割と総。
90-57	J-236	S4-E4-2 II a	磁器	皿	口縁~底面	40%	染付	染付	(14.6)	8.5	3.58	肥前	19C前半	内面：高草文? 総の目四高台。
90-58	J-201	S3-E8-6 II c	磁器	皿	口縁~底面	30%	染付	見取	12.5	4.0	3.5	肥前	17C後半	染付見取。見取：総ノ目磁釉。
90-59	J-274	S3-E8-4 II b	磁器	皿	口縁~底面	40%	染付	染付	13.0	6.2	2.9	肥前	19C前半	総ノ目磁釉。
90-60	J-218	S3-E9 ~ S3-E10 II b	磁器	皿	口縁~底面	-	青磁釉	青磁釉	-	-	2.4	瀬戸・美濃	18C中頃	型押の成形品。扇形。

第90図 基本層 I ~ II c 層出土土物 6

第5節 遺構外の遺物



第91図 基本層I～IIc層出土遺物7

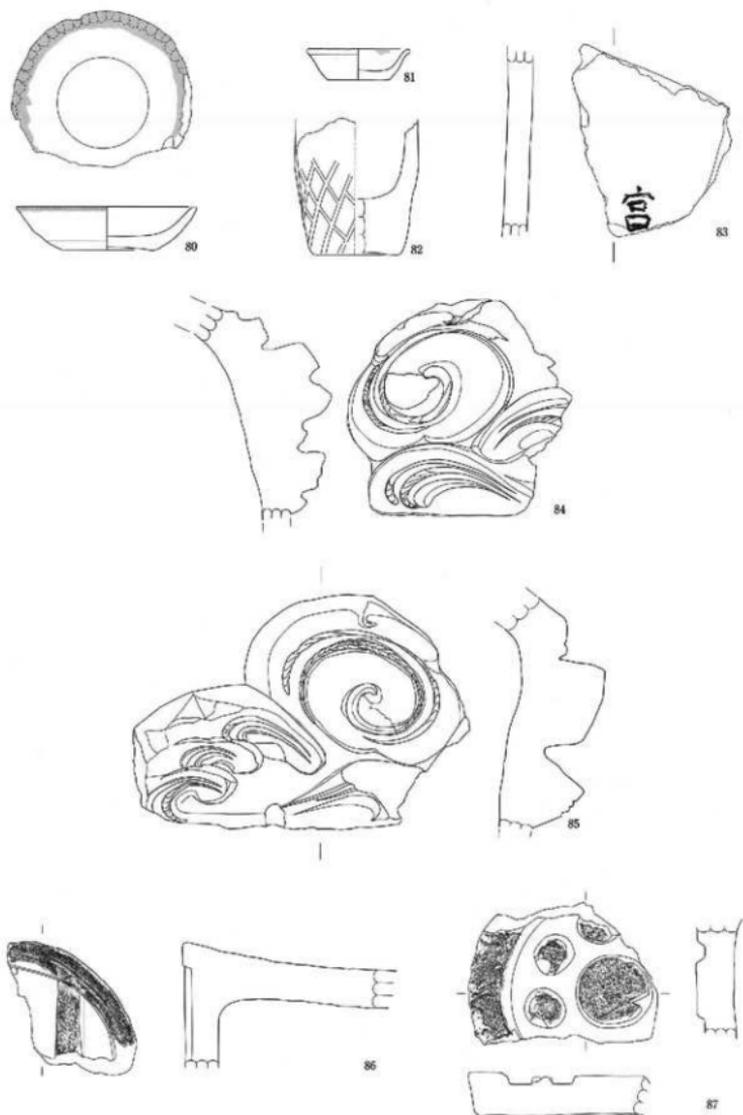


基本層 I ~ II c 層出土遺物観察表

調査 番号	発掘 番号	グリップ 遺構・部位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	法量 (cm)			産地	時期	備考
									口径	底径	器高			
91-61	J-189	SS-E52 II b	磁器	鉢	口縁~ 外縁内	-	青磁釉	青磁釉	-	-	7.0	肥前	17C 中頃~ 後半	底面瓦葺。高縁鉢。 内面に此種による文様。
91-62	J-205	SS-E58 I a	磁器	鉢	口縁~ 外縁内	20%	染付	染付	-	-	5.0	肥前	18C 前半~ 中頃	内面・外面：蓮、口縁部：四方摩文。 蓮の目地。
91-63	J-221	S4-E12 I b	磁器	蓋	鉢形~ 受け	30%	染付	-	14.8	-	3.1	肥前	18C 前半	列石：牡丹、雲龍文。 蓮の目地。
91-64	J-6	S4-E28 II c	磁器	小瓶	底縁~ 胴部	40%	染付	透明釉	-	(2.7)	(3.6)	肥前	18C 後半~ 19C 前半	白磁。内面：牡丹文、足口：五弁文。 外周縁 17 年肥前製成産物。
91-65	J-188	SS-E66 II b	磁器	鉢	口縁~ 底縁	70%	青磁釉	染付	16.6	8.8	7.5	肥前	18C 後半	内面：蓮文。 四角縁付。底の目地瓦合。底内面に蓮あり。 「金剛」といふ経緯の印痕。 18C~19C 明治初年文 物として製造された。
91-66	J-212	SS-E68 ~ E94 II a	磁器	圓形鏡	外縁~ 裏面片	-	指輪	-	-	-	(6.7)	瀬戸・美濃	18C ~ 19C	明治初年文 物として製造された。
91-67	J-281	S4-E8 II c	磁器	小皿	輪郭部分	4/5	染付	染付	8.7	4.8	1.8	不明	19C 以降	高台内に黒線しあり。
91-68	J-245	S4-E7 II a	磁器	筒型茶碗	底部	100%	白磁?	白磁?	-	4.4	2.5	瀬戸・美濃	18C ~ 19C	高台内「仙傳」の銘あり。
91-69	J-235	S4-E9 II a	磁器	蓋	つまみ~ 外縁	60%	絵付	-	-	4.5	(3.1)	瀬戸・美濃	18C ~ 19C	大型傘付鉢の蓋。銅版転写。
91-70	J-173	SS-E33 I c	磁器	圓鏡	口縁~ 外縁	20%	朱文字	-	7.0	-	5.0	瀬戸・美濃	19C ?	朱書：第六回金台台官一合町射撃大會
91-71	J-165	S4-E5 II a	磁器	広底碗	口縁部~ 底縁	20%	染付	染付	(12.2)	(6.6)	(5.8)	肥前	18C 後半~ 19C 前半	色絵付。
91-72	J-163	S4-E5 II a	磁器	小瓶	口縁~ 底縁	20%	色絵付	色絵付	-	-	4.6	肥前	18C 瀬戸・美濃	口縁部に雲文。
91-73	J-161	S4-E5 II a	磁器	筒型碗	口縁~ 杯下縁	30%	風草文	染付	(3.4)	-	(5.5)	肥前	18C 前半?	口縁：雲文、杯部下縁：蓮弁文。
92-74	J-229	S4-E2 I b	磁器	碗	口縁部片	-	指輪	指輪	10.6	-	4.2	瀬戸・美濃	18C 明治初年	外面：白磁。蓮。 内面：あじ丸縁。蓮文。
92-75	J-2	S4-E5 ~ S5-E5 II a	磁器	小瓶	口縁部~ 底縁	30%	-	-	(5.6)	(3.4)	3.4	肥前	19C 前半	鉢型傘付蓋。
92-76	J-4	S4-E4 II c	磁器	筒型碗	杯下縁~ 底縁	20%	染付	-	-	-	6.0	肥前?	19C	洋具類による染付。
92-77	J-3	S4-E5 ~ S5-E5 II c	磁器	鉢・華	つまみ~ 杯部片	-	染付	-	-	-	1.1	肥前	18C ?	二葉筒縁。
92-78	J-161	S4-E5 II a	磁器	蓋	つまみ~ 杯部片	-	白磁	白磁	(1.7)	-	(1.8)	瀬戸	19C	島野堂?
92-79	J-168	S5-E7 II b	瓦質土器	鉢類	口縁部片	-	-	-	-	-	7.5	在池?	19C ?	楕円? ろくろ形成坑あり。

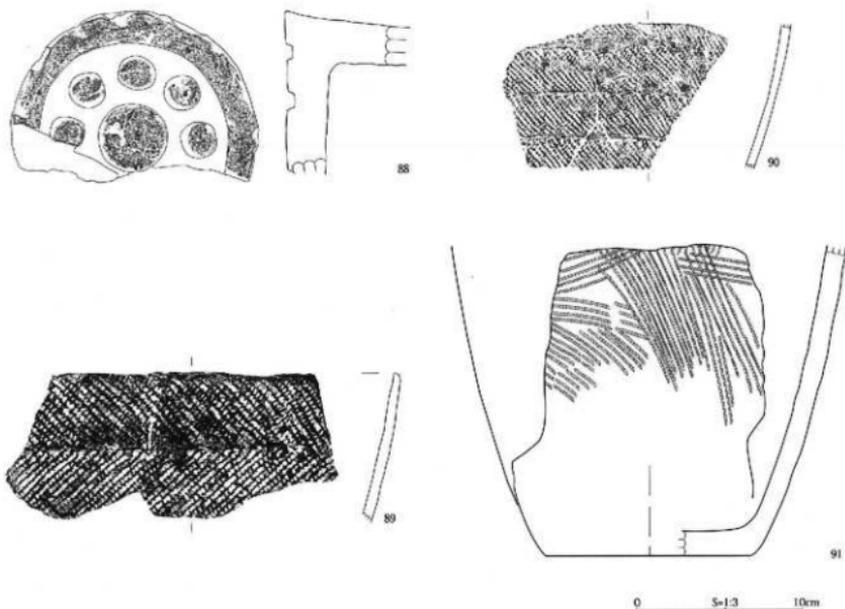
第 92 回 基本層 I ~ II c 層出土遺物 8

第5節 遺構外の遺物



0 5-1:3 10cm

第93図 基本層I~IIc層出土遺物9



基本層Ⅰ～Ⅱc層出土遺物類表

発掘 番号	登録 番号	グリッド 遺構・層位	種類	器種	部位	残存率	外面	内面	法藍 (cm)			産地	時期	備 考
									口径	口径	器高			
93-80	I-120	S3-F8 Ⅱc	土甎質	杯	口縁-底端	60%	1端部に 灰化跡	1端部に 灰化跡	10.9	6.1	2.5	在地	18C以降	灰吹きに転用?
93-81	I-119	S3-F8 Ⅱc	土甎質	小杯	口縁-底端	90%	一部灰化跡 付着	一部灰化跡 付着	5.8	3.7	1.8	在地	18C以降	内外面ともに灰化物付着。
93-82	I-131	S4-F1 Ⅰd	土甎質	浅地皿	縁部-底端	20%	???	-	3.6	8.2	-	堤?	18C以降	みくみろ形成あり。 縁部縁線跡の形で底の???

発掘 番号	登録 番号	グリッド 遺構・層位	種 別	器種	法藍 (cm)			時 期	備 考
					縦	横	厚さ		
93-83	G-11	S4-F8 Ⅱb	瓦	枕瓦	12.0	8.5	1.5	18C以降→ 明治以降	「宮」の印刷。
93-84	G-12	S5-F3 Ⅰd	瓦	鬼瓦	-	14.0	-	江戸時代	在地産? 洪州付着。
93-85	G-13	S5-F3 Ⅰd	瓦	鬼瓦	-	14.0	-	江戸時代	在地産?
93-86	F-13	S3-F5 Ⅱa	瓦	軒瓦	10.0	13.0	3.1-4.0	江戸?	三引瓦。瓦当面。
93-87	F-15	S4-F9 Ⅱa	瓦	軒瓦	7.0	11.0	2.5	江戸?	九曜文。瓦当面。
94-88	F-7	S4-F8 Ⅱa	瓦	軒瓦	9.8	15	2.4	江戸?	九曜文。瓦当面。

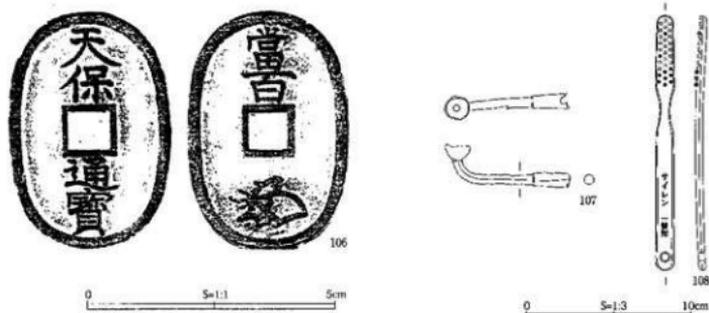
発掘 番号	登録 番号	グリッド 遺構・層位	種別	器種	部位	時期	法文調査	備 考
94-89	A-44	S4-F7 Ⅱa	縄文土器	円鉢	口縁部片	縄文後期	RL→LR羽状縄文。	—
94-90	A-1	S4-F3 Ⅱa	縄文土器	円鉢	胴部片	縄文後期	RL縄文。	—
94-91	A-38	S3-F7 Ⅱa	縄文土器	円鉢	年部-底端	縄文後期	R熟赤文。	内面に灰化物付着。

第94図 基本層Ⅰ～Ⅱc層出土遺物 10

第5節 遺構外の遺物



第95図 基本層I～IIc層出土遺物11



基本層 I～IIc 層出土遺物観察表

図版番号	発掘層	グリッド 通称・層位	種別	石質	法量 (cm)			備考
					高さ	幅	厚さ	
96-02	K-10	S3E3～S3E9 V a	石鏝	珪質頁岩	3.3	1.6	102	—
96-03	K-29	S4E3 V a	石鏝	石英?	2.8	1.3	0.5	—
96-04	K-16	S3K5 V a	石鏝	頁岩	2.0	0.7	3.1	—
96-05	K-28	S4F8 V a	測片	珪質頁岩	3.4	—	0.9	左縁縁に使用痕とみられる微細網線あり。
96-06	K-13	S4E1 W a	刷片石器	頁岩	4.3	3.2	0.6	左縁縁に使用痕とみられる微細網線あり。

図版番号	発掘層	グリッド 通称・層位	種別	石質	法量 (cm)			備考
					高さ	幅	厚さ	
96-07	K-24	S3E9 II b	砥石	凝灰岩	6.3	5.4	2.2	表面に炭化物の付着。表裏面、左右側面に磨痕あり。
96-08	K-18	S3G3 II b	砥石	凝灰岩	7.5	2.0	1.5	表裏面、左右側面、上面に磨痕あり。
96-09	K-22	S3H8 II b	砥石?	凝灰岩 (69)	3.8	0.6	—	表裏面、左右側面に縦方向の磨痕あり。
96-10	K-31	S3E2 II b	鏡	粘板岩	11.5	5.5	1.0	鏡石から刷石への転用? 両面使用。
96-101	K-14	S3E1 II b	砥石	凝灰岩	3.2	4.0	1.3	表面に糸刷状の痕と束を伴う凹形の窪み。下面、左右側面に磨痕あり。

図版番号	発掘層	グリッド 通称・層位	種別	銘文	法量 (cm)			時期	初録年	備考
					外形	縦形	厚さ			
96-102	N-12	S3E3 II a	鏡貨	一銭	2.2	0.15	—	大正	—	新一銭白銅貨「大日本十年」。
96-103	N-7	S3F6 II a	鏡貨	一銭	1.7	0.2	—	昭和	—	ガラス一銭銅貨「昭和十五年」。
96-104	N-35	S4E7 II a	鏡貨	十銭	2.2	0.15	—	昭和	—	「昭和十一年」。
96-105	N-37	S3E3～S3E10 II a	鏡貨	寛永通宝	2.5	—	—	江戸	1636～1699	—
96-106	N-28	S4E3 II a	鏡貨	天保通宝	3.2	0.15～0.25	—	江戸	1838～1861	—

図版番号	発掘層	グリッド 通称・層位	種別	種別	部位	法量 (cm)			時期	備考
						口径	喉+口	長さ		
96-107	N-22	S3E3～S3E9 II a	金属製品	キセル	唇首	1.4	0.9	7.5	17C?	小口瓶底。

図版番号	発掘層	グリッド 通称・層位	種別	法量 (cm)			時期	備考	
				外形	縦形	厚さ			
96-108	X-7	S3E3～S3E9 II a	その他	ブラシ	15.7	1.2	0.5	20C?	台座側面によるあわせ型、「サイレン一旋形」。

第96図 基本層 I～IIc 層出土遺物 12

出土遺物総数量表

Ⅳb層上面遺構出土遺物

遺構名	出土層	縄文 土器	丸丸・ 軒丸瓦	平丸・ 軒平瓦	陶器	土師瓦 土器	瓦質 土器	磁器	石製品	石器	木製品	金属 製品	銭貨	自然 遺物	土製品	その他	合計
SE3	塚1				1												1
	塚2																
合計					1												1

Ⅳ層上面遺構出土遺物

遺構名	出土層	縄文 土器	丸丸・ 軒丸瓦	平丸・ 軒平瓦	陶器	土師瓦 土器	瓦質 土器	磁器	石製品	石器	木製品	金属 製品	銭貨	自然 遺物	土製品	その他	合計
SD1	塚1			5	37	6	6	35									89
	塚2																
	塚3				6		1										7
SU2	塚1		5	34	29	5	5	45			4						127
	塚2				7	2		7			4						20
	塚3																
	塚4																
SF5	塚1							1								1	
PI7	塚1							1								1	
PI8	塚1						1	2				2				5	
P20	塚1						1	1							1	3	
P23	塚1														1	1	
SX4	塚1		36	103	555	85	8	649	20			4				4	1455
	塚2				36	3		88									127
	塚3																
SX6	塚1				4	1		5								10	
SX20	塚1				7	4		7									18
SX23	塚1	1															1
	塚2																
	塚3																
	塚4																
SX25	塚1			2	3	2		2								9	
SX28	塚1		1	1	6	11		4								1	24
	塚2														1		1
	塚3				1			1									2
	塚4																
SX30	塚1		1	1	3			1				3			15		24
	塚2				2												2
	塚3																
	塚4																
合計		1	43	146	696	119	22	840	20		8	9		18	5	1927	

第2表 出土遺物総数量表

Bb層上面遺構出土遺物

遺構名	出土層	縄文土器	丸瓦・軒丸瓦	平瓦・軒平瓦	陶器	土師質土器	瓦質土器	磁器	石製品	石器	木製品	金属製品	銭貨	自然遺物	土製品	その他	合計
SB1	層1			37	59	2	1	98			1					3	201
	層2																
	層3																
	層4																
	層5																
SR2	層1				1			4									5
SB4	層1							11									11
SD4	層1		5	7	37	4	2	103				2					160
	層2																
	層3			2	6			15									23
SE1	層1																
	層2																
	層3																
	層4																
	層5		2	57	8			32	2		8					20	129
縮帳跡	層1	4		2	6			14								3	29
	層2																
	層3																
道路状遺構	層1			1	2			2									5
SX1	層1		3	4	38	6		30				1					82
	層2																
	層3																
SX7	層1		1	2			3										6
SX8	層1			4	2	3		1							1		11
SX12	層1				3			1									4
SX13	層1				1	3											4
SX14	層1			1													1
SX16	層1				2			1									3
SX17	層1							1									1
SX22	層1		3	27	16	5	2	7									60
	層2				2			2									4
合計		4	14	142	185	23	5	325	2		9	3			1	26	739

基本層出土遺物

層位名	縄文土器	丸瓦・軒丸瓦	平瓦・軒平瓦	陶器	土師質土器	瓦質土器	磁器	石製品	石器	木製品	金属製品	銭貨	自然遺物	土製品	その他	合計
I b		11	2	354	4	2	198				9				11	501
I d	2	13	2	243	49		360				21				8	701
II a	1	6	2	263	112	4	486		1	2	19	9		1	6	912
II b	14	7	238	221	97	7	594	5	4	1	28		1	2	5	1294
II c	10	12	32	242	43	4	425	1		1	26	1		2	6	803
III (近世雑地土)		2	10	18	7		34									71
IVa SR1b 整地土		1	4	18	13	2	11									49
V a	74															74
小計	101	52	290	1359	325	19	2108	6	5	4	100	10	1	5	36	4427

層位名	縄文土器	丸瓦・軒丸瓦	平瓦・軒平瓦	陶器	土師質土器	瓦質土器	磁器	石製品	石器	木製品	金属製品	銭貨	自然遺物	土製品	その他	合計
合計	106	109	578	2241	467	46	3273	28	5	21	118	10	1	21	67	7091

第2表 出土遺物総数量表

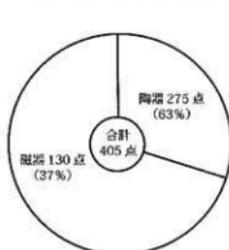
第4章 出土遺物と検出遺構について

第1節 出土遺物について

本遺跡では縄文土器、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、剥片石器、石製品、古銭、金属製品等、合計7094点が出土している。多くは小さな破片資料であるが、最も出土量が多かったのが、全体の約46%を占める磁器で、次いで約31%の陶器となる。本節では陶器・磁器を中心として土師質土器、瓦質土器、金属製品、木製品、瓦について述べる。

1. 陶器・磁器

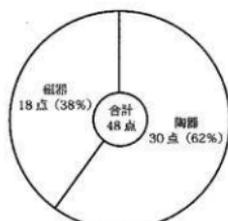
およその生産年代が判断可能な陶器・磁器は405点で、その内訳は、陶器130点(37%)、磁器275点(63%)となる(第97-1図)。17世紀の資料は48点(11%)、18世紀の資料は88点(21%)、19世紀の資料は269点(66%)となり年代を追うごとに資料数は増加する(第97-2図)。また、17世紀から19世紀の年代ごとに陶器と磁器の比率は、17世紀は陶器30点(62%)、磁器18点(38%)となり陶器が過半数以上を占める(第97-3図)。18世紀は陶器21点(23%)、磁器67点(77%)となり、陶器と磁器の資料数が逆転する(第97-4図)。19世紀も陶器79点(29%)、磁器190点(71%)となり、磁器の資料数が陶器の倍以上となる(第97-5図)。



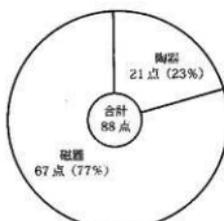
第97-1図 陶器・磁器の比率



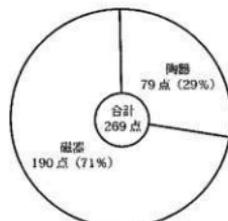
第97-2図 年代別出土遺物の比率



第97-3図 17世紀の陶器・磁器の比率



第97-4図 18世紀の陶器・磁器の比率



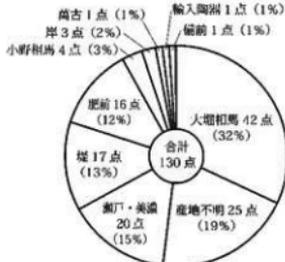
第97-5図 19世紀の陶器・磁器の比率

第97図 陶器・磁器の比率

(1) 陶器

陶器は、出土総数130点である。産地別では大塚相馬42点(32%)、不明25点(19%)、瀬戸・美濃20点(15%)、埴17点(13%)、肥前16点(12%)、小野相馬4点(3%)、岸3点(2%)、萬古1点(1%)、備前1点(1%)、輸入陶器1点(1%)等であり大塚相馬が最も多くみられる(第98-1図)。

年代別ごとの割合とその産地別では17世紀は全体の23%（第98-5図）で、産地別では、肥前50%、瀬戸・美濃23%、不明13%、岸10%、輸入陶器3%の順となる（第98-2図）。18世紀は全体の16%（第98-5図）で、産地別では、不明33%、瀬戸・美濃28%、小野相馬19%、信楽10%、堤10%、肥前5%、備前5%の順となる（第5-3図）。19世紀は全体の60%（第98-5図）で、産地別では、大塚相馬52%、堤18%、不明18%、瀬戸・美濃7点9%、高古1%の順となる（第98-4図）。器種別では17世紀と18世紀では銘々器（註1）が過半数を占めているが、19世紀にはいと共用器（註1）が増加する傾向がある（第98-6～8）。



第98-1図 陶器産地別比率



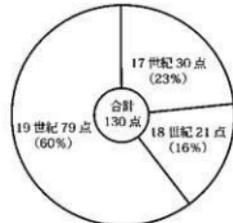
第98-2図 17世紀の陶器産地別比率



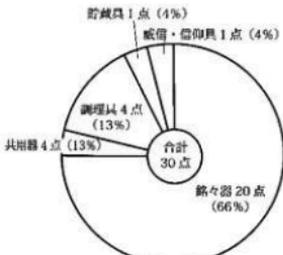
第98-3図 18世紀の陶器産地別比率



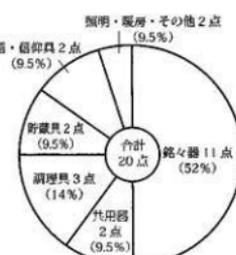
第98-4図 19世紀の陶器産地別比率



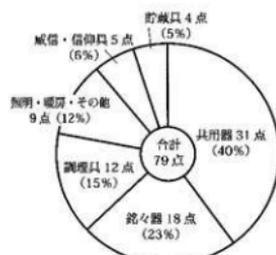
第98-5図 陶器年代別比率



第98-6図 17世紀の陶器器種別比率（註1）



第98-7図 18世紀の陶器器種別比率（註1）



第98-8図 19世紀の陶器器種別比率（註1）

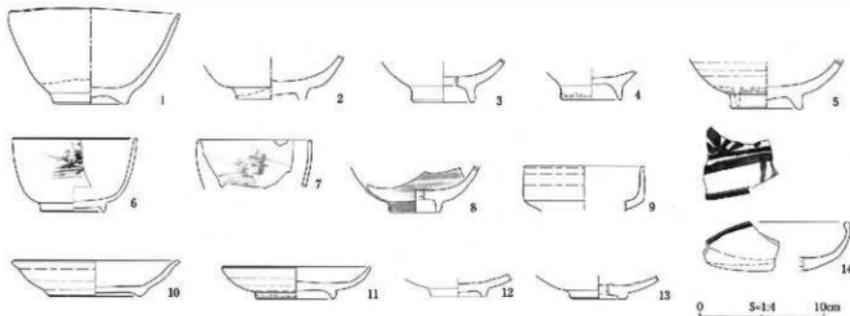
第98図 陶器・磁器の比率

註1) 器種の分類に関しては、銘々器（個、田）、共用器（牛瓶、湯瓶、燈籠）、調理具（地鍋、鍋、野篭具、瓶）、暖房・収納具（仏飯鉢、草履、香炉、煎茶・磁器・その他「瓦焼、打明茶、磁器、焼酎受け」等）とした。

第1節 出土遺物について

肥前

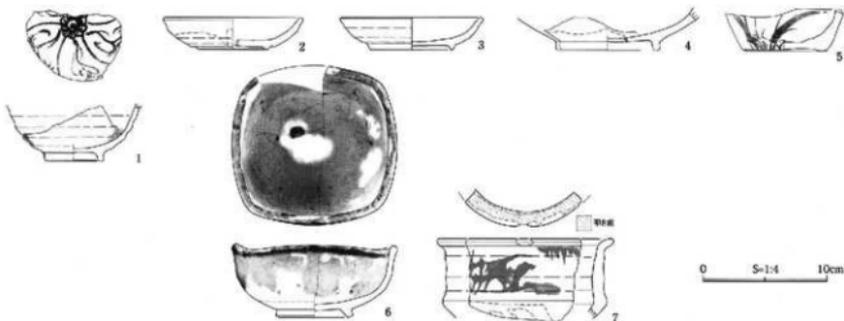
肥前の製品は出土数は16点で、いずれも17世紀から18世紀前半に生産されたものである。器種は碗(1～8)、向付(9)、皿(10～14)である。碗は、呉器手(3、4)、京焼風陶器(6、7)、刷毛目文の碗(8)等がみられる。1の碗は高台内に兜巾の隆起がみられ、高台の形状など、17世紀前半期に生産された陶器の特徴が見られ、佐賀県内野山北窯出土の碗等に類似する。6、7の京焼風陶器は17世紀の中頃から18世紀中頃に盛行した様式であり、佐賀県伊万里市大川内山に主要生産窯にち、鏝絵による山水文が施文される。8の刷毛目文の碗も17世紀の中頃に生産されたものである。14の皿は絵唐津の変形皿で、見込みに鉄絵で文様が施文される(註1)。



第99図 肥前

瀬戸・美濃

瀬戸・美濃という名称について本節では、美濃、織部、志野を含む総称として扱っている。出土数は21点で、17世紀から19世紀に生産されたものである。器種は碗(1)、皿(2～4)、鉢(5、6)、肩衝香炉(7)である。1は19世紀以降に生産された美濃焼の碗で見込みに鉄絵による花文が施文される。2、3、6はいずれも志野で17世紀に生産されたと考えられる。2、3は小皿、6は四方鉢で外面の釉薬の発色から鼠志野に似た特徴をもつ。6は17世紀に生産されたと考えられる織部焼の鉢で、外面に鉄絵による沢瀉文が施文される。7は17世紀に生産されたと考えられる肩衝香炉である。口唇部に敲打痕が観察されることから灰吹きに転用されたものと推測される。なお、2、3、6、7は17世紀中頃以降の大窯から連房式登窯への移行時期に生産されたものと考えられる(註2)。

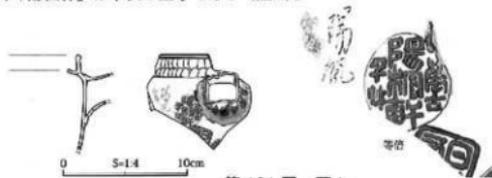


第100図 瀬戸・美濃

註1: 大塚 道二 1969 『肥前陶器』 ニュー・サイエンス社
 大塚 道二 2002 『国内以上の歴史花箱 肥前陶器の風通』 九州芸術工芸学
 会 編集 2000 『九州陶器の精華 魂・魂』 九州造形学
 会 編 2007 『江戸時代のやまもの 伝統と芸術』 京都府立
 総合文化研究所 文化財研究所 文化財センター
 編 2007 『美濃焼』 ニュー・サイエンス社

萬古（有節萬古）

萬古は元文年間（1736～41）に三重県朝日町で五左衛門弁山が開窯したと伝えられる。本遺跡で出土したものは萬古焼でも、弁山の萬古が廃絶して、しばらくの空白期の後、森与五左衛門有節と弟の森与平千秋により天保2年（1831）に再興された有節萬古と称されるものである。出土数は1点で、器種は急須の把手と受部の小片部分のみだが、「陽波」の手書文字と「陽楓軒（ようふうけん）」、「日本萬古」、「千秋」の押印があり森与平千秋の作と考えられる。なお、「陽楓軒」は千秋の堂号である（註1）。



第101図 萬古

備前

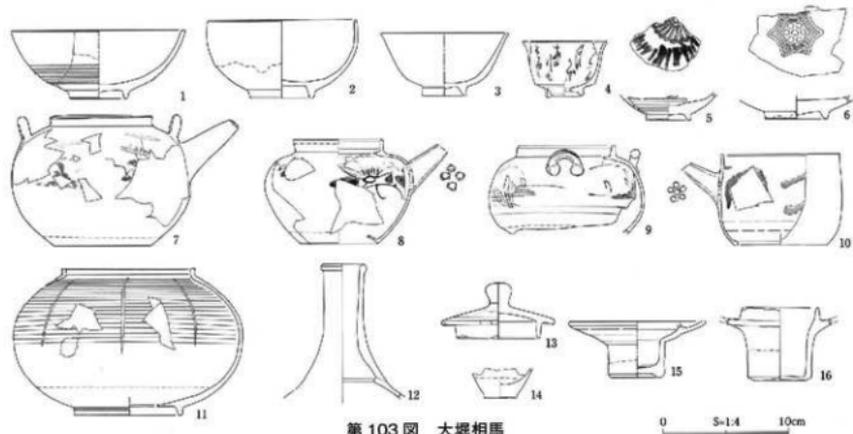
備前の出土数は1点である。18世紀初頭に生産されたものと考えられる鶴首徳利の底部から胴部にかけての破片である。表面に火樺があり、赤とべの塗布がみられる。造形的に献上手と考えられ、岡山県備前市の東3号窯等の出土遺物に類例がみられる（註2）。



第102図 備前

大塚相馬

大塚相馬は元禄年間（1688～1704）頃に開窯したと伝えられる福島県波江町に所在する民窯である。出土数は42点である。いずれも19世紀以降に生産されたものと考えられる。器種は灰釉、鉄釉の掛け分け碗（1～3）、文字文の碗（4）、見込みに印花文をもつ皿（5、6）、色絵灰釉山水文の土瓶（7～9）、イッチン書文様の土瓶（10）、鉢（11）、徳利（12）、土瓶の蓋（13）、まめ壺（14）、油受皿（15、16）等がみられる（註3）。



第103図 大塚相馬

註1：森野 真三 1981『日本のやきもの歴史 1 灰釉 伊勢のやきものP127～P132』平凡社
 註2：石井 啓 2008『江戸時代のやきもの 名産と風流 生活7 備前』新館主人兼戸倉文化振興財団歴史文化センター
 註3：岡本 浩人 1998『新製備前における近世製茶生産の展開』東北大学歴史文化研究所年報10
 丹野 健介 1981『日本のやきもの歴史 1 北陸道 東北 備前 伊勢のやきものP138』平凡社

第1節 出土遺物について

小野相馬

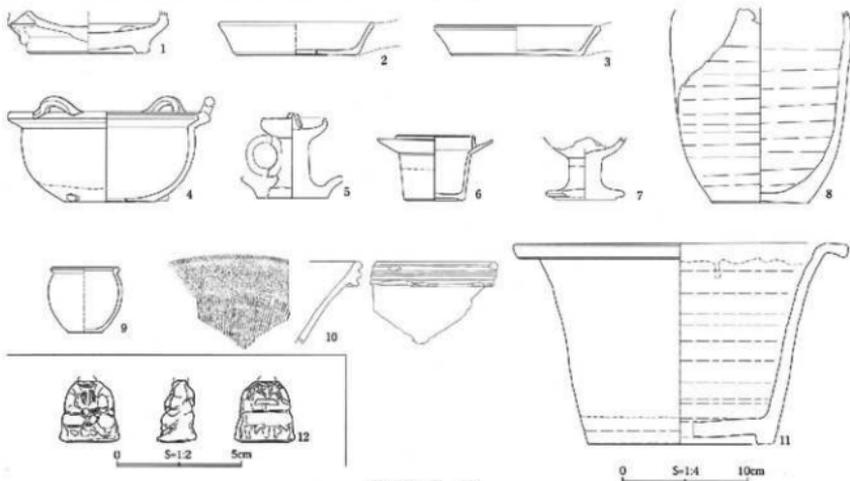
小野相馬は18世紀前半開窯したと伝えられる福島県相馬市小野地区に所在する民窯である。窯の調査が行われていないので詳細は不明である。出土数は4点で、いずれも18世紀以降に生産されたものと考えられる。器種は、碗(1~3)、皿(4)がみられる。4は見込みに印花文をもつ(註1)。



第104図 小野相馬

堤

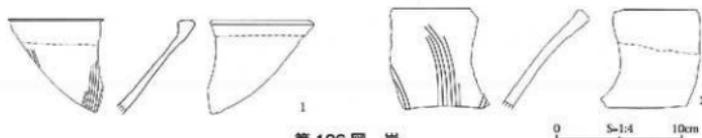
堤は元禄年間(1688~1704)頃開窯と伝えられる宮城県仙台市堤町所在の窯である。藩制時代には堤町近隣の杉山台に窯が所在していたことから明治初期までは杉山焼と称されていた民窯である。一時期献上品も生産していたといわれているが確証はない。出土数は17点で、いずれも19世紀前半以降に生産されたものと考えられる。器種は、壺(1)、焙烙(2、3)、土鍋(4)、乗燗(5)、油受皿(6)、仏飯器(7)、甕(8)、豆甕(9)、播鉢(10)、積木鉢(11)、土人形(12)等がみられる(註2)。



第105図 堤

岸

岸は17世紀前半に開窯したとされ、福島市飯坂に所在している。出土数は3点で、17世紀中頃に生産されたものと考えられる。器種は、いずれも播鉢である。1、2ともに口縁部に黒褐色の鉛釉を掛ける(註3)。

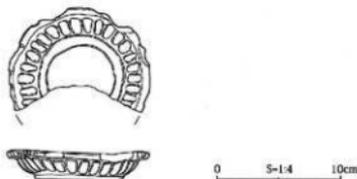


第106図 岸

註1 海原 進人 1990『福島県における伝統的窯業の概況』東北大学附属文化財調査年報 10
 註2 青森 洋 1990『福小窯業誌 巻16-18次(複製調査報告)』仙台市教育委員会
 牧原 隆 2005『仙台市文化財調査 報告書 出土品(複製)』仙台市教育委員会
 岸原 良介 2006『日本やまの集風』北条道 末広 天雄 岸のやまの9127-1281 平凡社
 註3 伊藤 正典 1990『金沢県 東北の陶器(図録)P158』雄飛町立博物館
 海原 進人 編 1996『仙台市文化財調査報告書』仙台市教育委員会
 海原 進人 2000『仙台市陶器の分布と編年』東北大学附属文化財調査年報 13

輸入陶器

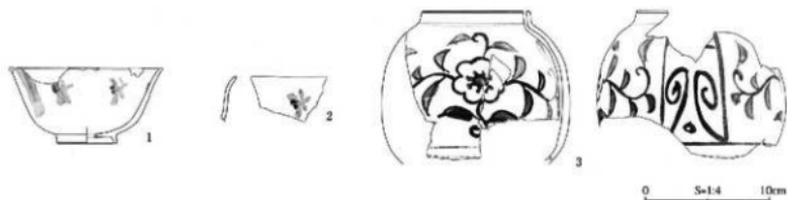
輸入陶器は1点のみで、華南三彩緑釉皿（型押）である。明末～清初頭（16c末～17c初頭）にかけて福建省、広東省で生産されたものである。生産窯は明確になっていない。緑釉が施軸されている華南三彩の出土例は全国的に少なく希少である（註1）。



第107図 輸入陶器

産地不明

産地を特定出来ない陶器の出土数は25点あるが、下図の3点は胎土が赤褐色で外面にあばた状の灰釉が施軸される等の共通性がみられる。また、1と2の碗は白濁釉による蜻蛉文が施文され、内面は白濁釉が掛流しされる。3の壺は1～2と近似した釉薬が外面に施軸され鉄絵で花文が施文される。内面は無釉でろくろ形成痕が残る（註2）。



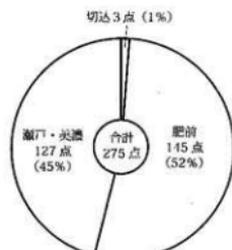
第108図 産地不明

註1：亀井 明徳「1986『明代華南三彩陶器のそとん詳解』 日本貿易陶磁史研究」 同朋社 註2：自治市立博物館学芸員 佐藤 邦氏の御指示による

第1節 出土遺物について

(2) 磁器

磁器の出土総数は275点である。産地別では肥前145点(52%)、瀬戸・美濃127点(45%)、切込3点(1%)であり、肥前が最も多くみられる(第109-1図)。年代別ごとの割合とその産地別では、17世紀の製品は全体の6%(第109-5図)で肥前が100%となる。18世紀の製品は全体の24%(第109-5図)で17世紀と同様で肥前が100%となる。19世紀の製品は全体の70%(第109-5図)で、産地別では瀬戸・美濃66%、肥前31%、切込2%の順となり、17、18世紀にはみられなかった瀬戸・美濃の資料が肥前の倍以上となり、切込も少量だがみられるようになる(第109-4図)。



第109-1図 年代別磁器産地の比率



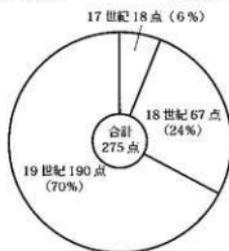
第109-2図 17世紀磁器産地別比率



第109-3図 18世紀磁器産地別比率



第109-4図 19世紀磁器の産地別比率

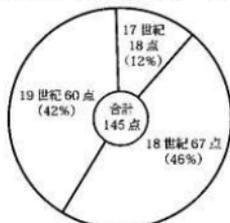


第109-5図 年代別磁器の比率

第109図 磁器の年代別比率

肥前

肥前の出土数は129点で、17世紀から19世紀のものがみられる。17世紀後半から増加しはじめ、「くらわんか手」等がみられる18世紀中頃には出土数が67点となり全盛にいたる。19世紀では出土数に、あまり変化はみられないが、19世紀の磁器全体の比率からみると、瀬戸・美濃が66%に対し肥前は31%と半数におお



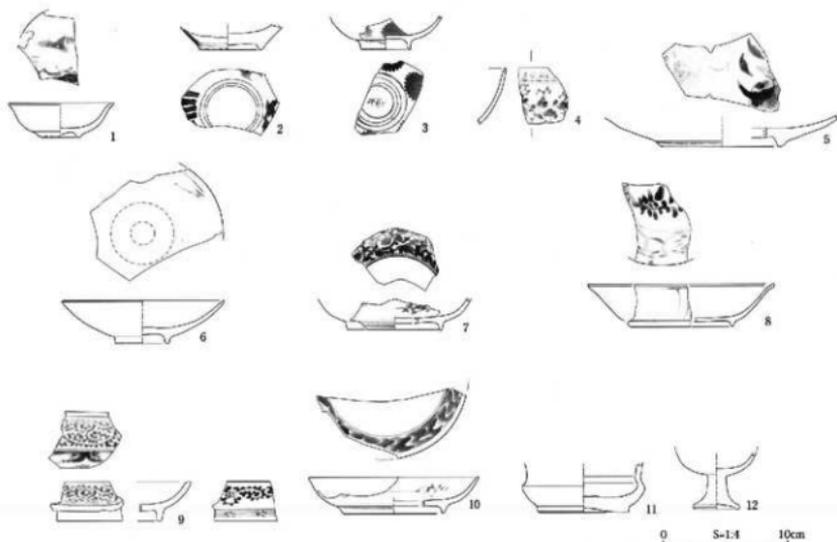
第110図 肥前磁器年代別比率

よばず、磁器全体の比率の面では減少していることがわかる。

(17世紀の肥前) 17世紀の出土数は18点で、全体の12%である(第110図)。器種は碗(1~4)、皿(5~8、10)、長角皿(9)、香炉(11)、仏飯器(12)等が出土している。1、2の碗は高台の皿付部分に熔着した砂がみられ初期伊万里の様相を示す。5の皿は型紙と吹墨技法がみられる。6の皿は見込に蛇ノ目軸割がみられ、熔着した砂がみられる。8の皿は見込に中国の明山手の模倣と考えられる文様が施文される。10の皿は口縁内側の文様が墨弾き技法がみられる。11の香炉は外面に青磁釉が施釉される。

(18世紀の肥前) 18世紀の出土数は67点で、大幅に増加する傾向を示し、全体の46%となる(表7)。前述の「くらわんか手」も数多く出土しており生活雑器として肥前磁器が生活に浸透してきているのがわかる。器種は碗(13~24)、小杯(22)、皿(23)、鉢(24、25)、手塩皿(26)、蓋付碗の蓋(28、29)、鉢の蓋(30)、御神酒徳利(31、32)等がみられる。特に碗の出土量が多く、焼継を行い修復後と思われる個体もこの時期からみられる。

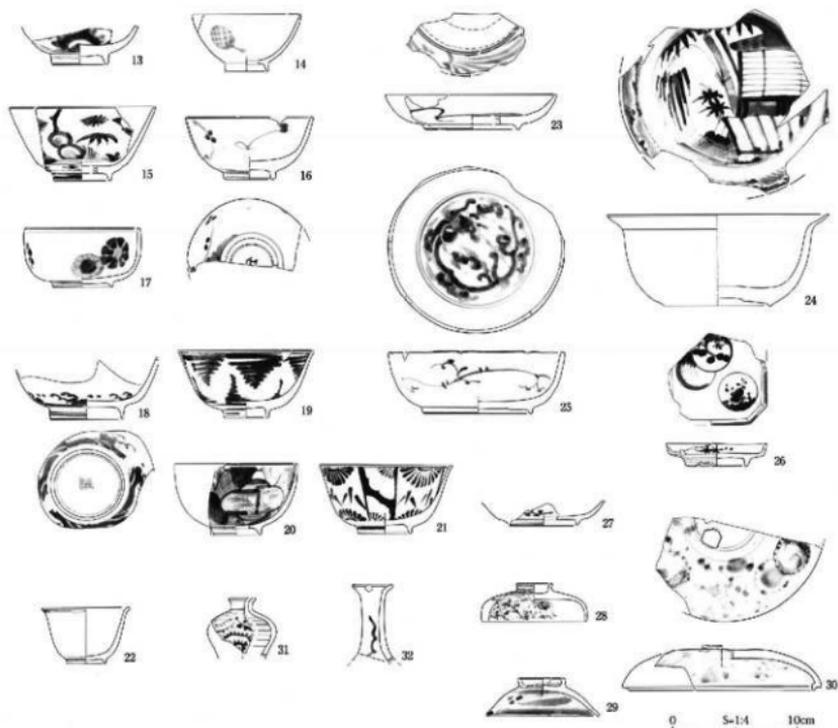
(19世紀の肥前) 19世紀の出土数は60点で、やや減少し、全体の42%である(第110図)。器種は碗(33~37)、皿(38~40)、紅皿(41)等が出土している。近代的な文様施文技法である銅版転写を用いた皿(39)等がみられる(註1)。



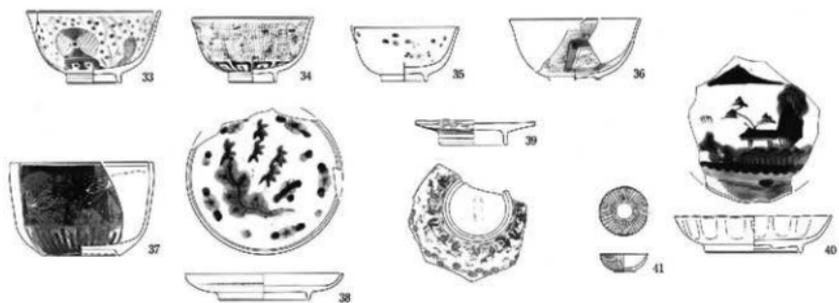
第111図 17世紀の肥前磁器

註1: 大塚 康二 1988「古伊万里」 別冊大塚 No.63 平凡社
 大塚 康二 1989「東洋陶磁」 シュエー・サイエンス社
 大塚 康二 1994「古伊万里の文様」 渡辺文雄社
 大塚 康二 2000「九州陶磁の精華 磁器の精華2 鉢・盤口・蓋付鉢・合子・水鉢・茶筒・茶壺」 九州芸術工科大学
 野上 達紀 2000「九州陶磁の精華 磁器の精華1 鉢・小杯・蓋・紅鉢・紅皿」 九州芸術工科大学

第1節 出土遺物について



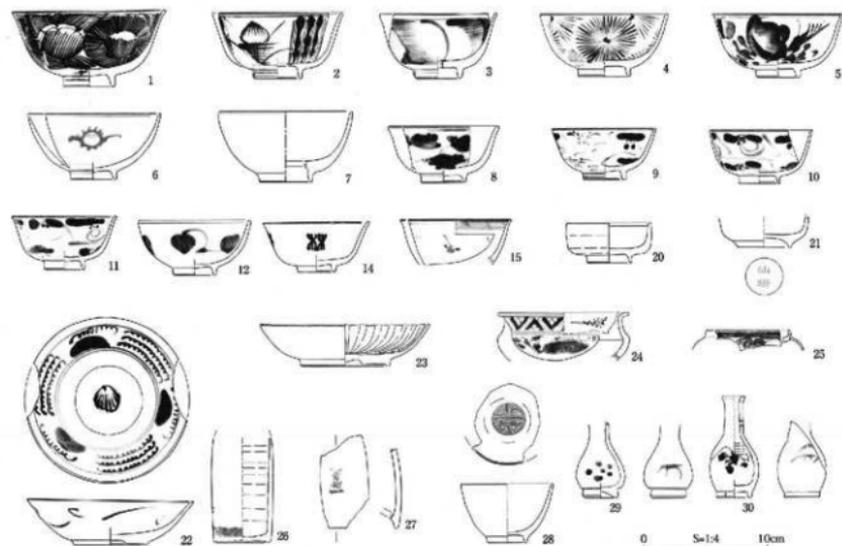
第112図 18世紀の肥前磁器



第113図 19世紀の肥前磁器

瀬戸・美濃

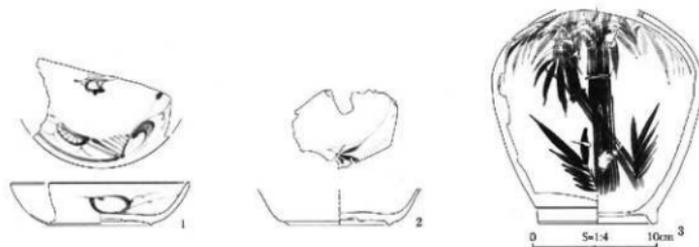
瀬戸・美濃の出土数は127点で、いずれも19世紀以降に生産されたものである。器種は、碗(1~21)、皿(22、23)、肩衝香炉(24)、急須(25)、徳利(26、27)、小杯(28)、御神酒徳利(29、30)等が出土している。染付の様様は、肥前磁器にも見られる火炎宝珠文(6)、雲芝祝寿文(9、10)、源氏香文(14)等がみられる。また、22の皿は胎土の色調、呉須の色調は異なるが、荒磯文とみじん唐草文の同一意匠のものが40点以上みられる。



第114図 瀬戸・美濃磁器

切込

切込焼は宮城県宮崎町で天保年間(1830~1844)に開窯されたといわれている。開窯年代に関しては諸説あるが、文献資料および磁器の記念銘から天保が最古である。安政元年(1854)には仙台藩十三代藩主伊達慶邦により藩直官窯となっている。出土数は3点で、いずれも染付で19世紀以降に生産されたものと考えられる。器種は皿(1、2)、徳利(3)である。3の壺の外面の竹文は細部まで精緻な筆書きで施文される。



第115図 切込

註1 佐藤 洋 1983『関小倉遺跡 第15~16次発掘調査報告』仙台教育委員会
 佐藤 洋 1985『豊川切込』陶磁研究 6 頁14号
 註2 佐藤 洋 1990『切込焼跡』宮城県博物館研究委員会
 外沢 眞介編 1978『切込 宮城県宮崎町宮崎町立山口館郷土館』東北大学文学部考古学研究所考古学資料集 第8号
 外沢 眞介 1981『日本やまの形成1北海道 東北 関東 宮城県のやまの形成』学芸社

2. 陶器と磁器のまとめ

近世において、陶器・磁器を合わせた出土数は17世紀から増加し、19世紀前半に最も多くみられ、土地利用の変遷に応じて陶器・磁器の出土数は増加していく傾向がある。17世紀の武家屋敷が造営された年代では出土遺物総数の11%、18世紀の御炭蔵が敷設された年代では21%、19世紀前半の御炭蔵が引き続き利用された時期では66%となる。

17世紀のものは内訳で、陶器が30点、磁器が18点で総数は48点である。陶器は、肥前が50%と過半数を占め、ついで瀬戸・美濃の23%となる。この内に唐津の変形皿、瀬戸・美濃の志野四方鉢、中国産の輸入陶器等の希少な資料もみられる。磁器は肥前のみで、これには初期伊万里も含まれる。また、この時期の遺物が遺構堆積土よりも遺構外から多く出土しているのは攪乱や上層の整地などで当該期の遺構が破壊されているためと考えられる。

18世紀のものは内訳で、陶器が21点、磁器が67点で総数は88点であり、陶器と磁器の資料数が逆転しはじめる。陶器は、産地不明が33%で最も多く、次いで瀬戸・美濃28%となり、肥前が50%から5%と大幅に減少する。また、小野相馬、堤等の地方窯の製品がこの時代からあらわれはじめ29%を占める。磁器は17世紀と同様に肥前のみがみられる。18世紀は肥前の生活雑器が全国的に浸透していく時期であり「くらわんか手」の碗、皿が目立つ。また、焼接を行い使用したものもみられる。

19世紀のものは内訳で、陶器が79点、磁器が190点で総数269点となり出土数においては最盛期を迎える。陶器は資料数が18世紀に比べると4倍近く大幅に増加する。産地別では大塚相馬が52%と最も多く、次いで堤18%となり、近隣の地方民窯で生産された製品の比率が70%に達する。特に、土瓶、甕等の共用器、焙烙等の調理具等の器種が目立つ。このことから、陶器の生活雑器は近隣地からの供給が盛んであったことがわかる。磁器は瀬戸・美濃が66%点と過半数以上を占め、次いで肥前31%となり、瀬戸・美濃が急激に増加し肥前の衰退が窺える。この時代は、肥前の磁器生産の衰退に伴う技術者の流出により、地方でも多くの磁器生産窯の開窯がみられる、その一つとして切込窯がある。本遺跡からも3点のみであるが、切込の資料が出土している。

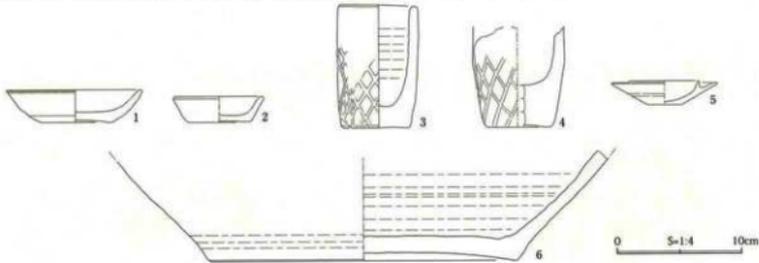
なお、19世紀の瀬戸・美濃の磁器皿は同じ文様のものが小片を含めると40枚以上出土している。これらは、胎土や呉須の色調が異なる等の違いがあり、一つの窯で生産されたものとは考えがたく、同一の仕様に基づく複数の窯で生産された可能性がある。また、この皿はこの時代に盛行した摺絵、銅版転写の印刷手等、ほとんど個体差のない量産品と異なりすべて手書きで文様が施文されているのも特徴である。発注元は不明ではあるが、仙台藩あるいは東北鎮台のいずれかが関わっていると推定される。

今回の調査で出土した陶器、磁器は17世紀から19世紀まで、隔絶することなくみられ、各年代により資料に特徴がみられた。このことは、近世の仙台城付近の土地利用の状況を考える上で貴重な資料と位置づけることができる。

3. その他の遺物

(1) 土師質土器

土師質土器の出土数は467点で、器種は、坏類(1, 2)、烧塩壺(3, 4)、灯明皿(5)、甕(6)等がみられる。3, 4の烧塩壺は18世紀以降に生産された在地特有のもので、器面に格子目状の工具痕を残すのが大きな特徴である。それ以外のものも在地産と考えられるが、詳細な製作年代は不明である(註1)。



第116図 土師質土器

(2) 瓦質土器

瓦質土器の出土数は46点で、器種は、獸脚蚊遣の脚部(1)、香炉(2)、焜炉? (4)等がみられる。製作時期、産地ともに詳細は不明である。なお、仙台城三の丸跡の調査において1の獸脚蚊遣と類似する資料が出土している(註1)。



第117図 瓦質土器

(3) 金属製品

金属製品の出土数は118点あるが、近代以降の製品が95%を占め、近世に生産されたと考えられるものは5%と少数である。また、残存部より年代を判断できるものは煙管の雁首部から肩部にかけての資料1点のみであり、脂返しが火皿の付け根から大きく湾曲する17世紀代の煙管の特徴を示す。真鍮を鍛造して製作されている(註2)。



第118図 金属製品

(4) 木製品

木製品は漆塗りの碗(1)と曲物の底部(2~5)が出土している。1は縦木取りの碗で見込みに漆が残存している。2~5は曲物の底部と考えられる。木材の木取りはいずれも板目取りである。木材の種類、産地、詳細な製作年代等は不明である(註3)。



第119図 木製品

註1: 藤田 政 1988『仙台城における土師質-瓦質土器の変遷』東北大学附属文化財調査年報9

註2: 古泉 弘 1992『日本の初期権管に関する覚書』『平井尚志先生古稀記念考古学論叢』2

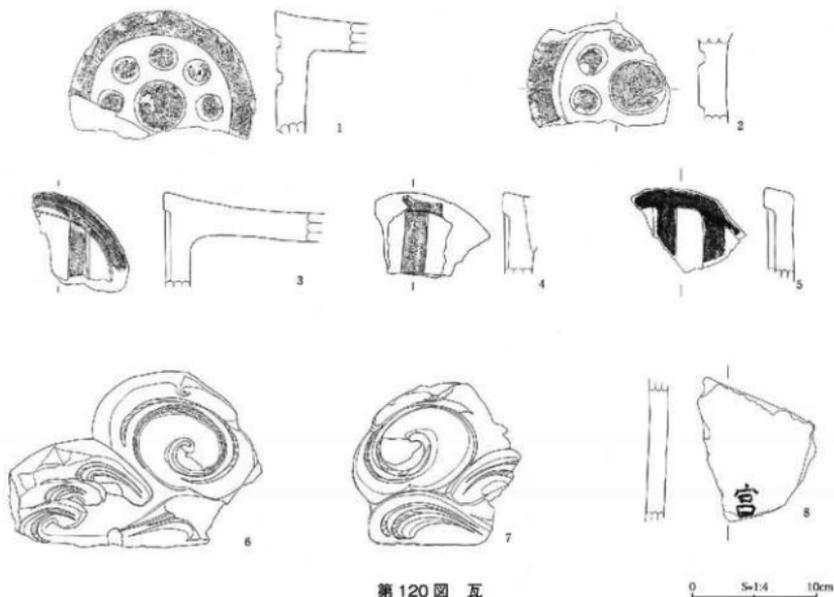
註3: 藤井 定實 1994『器物・ものとの人類の文化史』法政大学出版

橋本 眞吾 1979『なぐろ』法政大学出版局

古泉 弘 2001『国史』江戸考古学辞典 江戸の遺物 器物9967 江戸遺跡研究会編 新野野

(5) 瓦

瓦は丸瓦、軒丸瓦、平瓦、軒平瓦の総計397点をかぞえるが細片が多く、特徴を判断出来るものは11点のみで瓦総数の3%未満である。軒丸瓦(1~5)、鬼瓦(6、7)、棧瓦(8)の3形態がみられる。軒丸瓦の文様は九曜文(1、2)、三引両文(3~5)の二種類である。これらについては製作年代、産地についての詳細は不明である。6は雲形覆輪付の鬼瓦の左足の部分である。7は6と同様の雲形覆輪付の鬼瓦で右足の部分である。6、7共に型抜き後に細部を手作業で整形したものと考えられる。また、7については、裏面に腐食した丸釘が付着している。8の棧瓦には「宮」の字が刻印がされており、同様のものが仙台城跡の明治時代以降の層から出土している(註1)。このことから、明治以降に生産されたものと考えられる。また、「宮」の刻印の意味は不明である。



第120図 瓦

註1: 舟橋 佳子 1988『仙台城の瓦とその発見』東北大学附属文化財調査報告9
 工藤 昌太郎 監修 坪谷 邦弘 1976『日本の瓦屋敷』理工学社

第2節 検出遺構について

本遺跡では、近世～近代の遺構が検出された。第2節では、本遺跡の近世以前の状況から、近世～近代にかけての各時期の遺構について検討を加えたい。

1 近世以前

本遺跡の近世以前の状況を示すものとして、V層上面検出の沢跡(SR1c)があげられる。V層は、Ⅲ層及びⅣ層整地層が上層に堆積することから、武家屋敷造営前のおおまかな旧地形を反映しているものと思われる。ただし、全体に上層の削平を受けており、旧表土は検出されなかったため、近世以前の旧地形そのものではない。

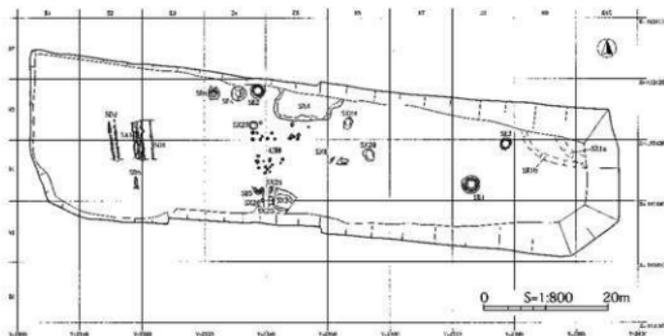
(1) 沢跡

沢跡はSR1cの1条が検出されている。最も古いところでは、寛文4年(1664)の「仙台城下絵図」に沢が描写されている(第2章 P.5 図3-2を参照)。それ以降、江戸時代を通して沢は表現され続けている。SR1cはⅣ層により継続的に埋め立てが行われ、徐々に沢幅が縮小している。沢跡を埋め立てるⅣb層、Ⅳc層からは出土遺物がなく、埋め立ての時期については不明であるが、上層のⅣa層からは数量は少ないが、18世紀代を主体とした陶器や磁器が出土している。そのため、この沢が埋め立てられた時期は17世紀代にさかのぼる可能性もある。

2 近世

近世の遺構面はⅢ層、Ⅳa層、Ⅳb層の各面が検出されている。V層上面で検出した遺構もあるが、出土遺物・配置などから近世と判断できるものはこの時期の遺構とした。調査区における近世の遺構の状況は、上層の第二師団以降の建物や大規模な整地により削平を受けており、著しく攪乱されている。Ⅲ層上面では柱列跡1列、溝跡3条、井戸跡3基、柱穴28基、性格不明遺構7基、沢跡1条が検出されている。またⅣb層上面では井戸跡1基が検出されているが、Ⅳa層上面では遺構は検出されなかった。

Ⅲ層とⅣ層については直接層位的新旧関係を捉えることができなかった。そのためⅢ層と、Ⅳa層もしくはⅣb層が同時期であるのか、または異なる時期であるのか明らかでない。Ⅲ層整地層においては、17～19世紀の遺物が出土しており、推定される年代に幅がある。Ⅲ層については、何時期かの部分的な整地層が含まれている可能性もあるが、ここではその年代を17世紀以降と考えたい。Ⅳa層は、18世紀代の遺物が少量ながら出土しており、



第121図 近世の遺構配置図

御炭藏遺構に伴う整地層であると考えられる。さらに両層の上層にも整地層が存在していた可能性があるが、近代以降に削平を受けており、失われてしまったものと思われる。

検出した遺構については近世として取り扱ったが、出土遺物の年代観からは近世から近代初期までのものを含んでいる可能性がある。

また、第1節でふれたように、出土遺物の年代のピークは17世紀中頃から後半、18世紀、19世紀初頭の3時期が認められる。これらのことを考慮に入れ、当遺跡の時期区分を仮定してみると以下ようになる。

この場所の土地利用の変遷は、おおまかにⅠ～Ⅲ期に区分できる。

Ⅰ期：武家屋敷のあった時期で、おおむね17世紀代の年代が考えられる（註1）。

遺跡内でこの時期のものとしてはⅣc層、Ⅳb層、Ⅲ層段階があげられる。

Ⅱ期：御炭藏のあった前半段階で、18世紀代の年代が考えられる。

Ⅳa層段階がこれに相当すると思われる。

Ⅲ期：御炭藏のあった後半段階で、19世紀から第二回園による整土・整地が行われるまでの年代が考えられる。

遺跡内では削平されてしまい、層的に確認することができなかったが、本来は整地層が存在していたと考えられる。

(1) 柱列跡と溝跡

調査区西側では柱列跡SA1と溝跡SD1、2、5が検出された。

SA1はSD1bの西側で検出され、上部にSD1aの石組が構築されていることから、SD1b段階における境界を示す何らかの施設であった可能性がある。遺物が出土していないため年代は不明だが、SD1bとの関係を考慮するとⅠ期の遺構と思われる。方位はN-5°-Wを示している。柱間は1.68m（5尺6寸）と1.77m（5尺8寸）と一定ではなく、検出されたピットも3基しかないため全体像は不明である。柱間は仙台城の調査で確認されているものとは異なり、一般的な寸法ではない。間隔が一定でないことなどから、比較的簡素なつくりであったと考えられる（註2）。

SD1は2時期の変遷が捉えられており、新しい方のSD1a（石組溝）は出土遺物の年代からⅡ期～Ⅲ期に存在していたものと考えられる。古い方のSD1b（素掘り溝）からは遺物が出土していないため年代は不明であるが、SD1aの年代から、Ⅰ期の遺構と思われる。SD1a・bの方位はN-7°-Wである。

SD2はSD1と同じ方位で、並走する素掘りの溝である。両溝の間隔は約3.6m（1丈2尺）である。遺物は出土しておらず、溝が開口した状態で使用された可能性は低いと思われる。SD2は、遺物の出土がないことや、掘り方の形状などから欄干状施設における基礎の布掘りと推定され、SD1a段階の境界に関係する施設の可能性がある。以上により、Ⅰ期：SD1b・SA1→Ⅱ期～Ⅲ期：SD1a・SD2という変遷が考えられる。

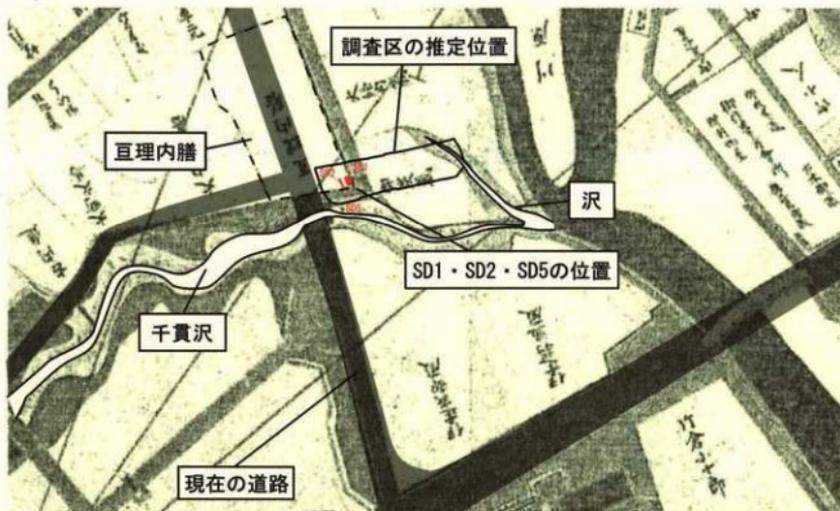
SA1、SD1、SD2について絵図の上から観察してみると、正保2・3年（1646～1647）の「仙台城下絵図」以降、近世を通じて描かれている道路、もしくは境界に関係する遺構の可能性がある。第122図は、天明6年～寛政元年（1786～1789）の「仙台城下絵図」と調査区の位置を合成したもののだが、これによると、SD1は道路西側欄溝の可能性が高い。道路の西側は17世紀代は富田忠岐、18～19世紀代は佐治豆腐家の敷地となっており、SA1は富田氏の、SD2は佐治豆腐氏の境界を示す欄列と思われる（註3）。

SD5はSD1、SD2と比べると規模も小さく、遺物も出土していない。しかし、方位がSD1、2と同様のN-7°-Wを示しており、道路もしくは境界に関係する施設の可能性がある。絵図との照合では多少のずれがあるようで、その性格は判然としないが、他の溝跡との関係からⅠ期ないしはⅡ～Ⅲ期に相当する遺構の可能性が高い。

註1：17世紀代に焼酎に原料していたのは小豆石臼門である。小豆石は小豆島産を主とするが、奥羽の七軒磨門は寛永9年（1632）、15歳の時に伊達藩で代官上総守の小幡となり、その地に小豆・取土石臼を建てた。伊達藩の成立11年（1671）、600石の保となる。

註2：東北大学歴史文化財調査センター「東北大学歴史文化財調査年報 18」2005 33頁

註3：豊に富田に所する富田内館（後富田内館）代官上総守、寛政年間（1799）の作は伊達藩の北沢に居住していた600石の大石親次十である大膳家の跡（大膳家御遺跡）で、内館は身も大膳家の敷子となっている。



第122図 絵図に見るSD1・2の推定位置(天明6年寛政元年(1786・1789)「仙台城下絵図」より)

(2) 井戸跡

井戸跡はSE2、SE3、SE5の3基が検出されている。SE2は調査区西側の北壁付近で検出された石組井戸である。遺物は堆積土中より18～19世紀代の大堀相馬産陶器、肥前産磁器等が出土している。出土遺物から、Ⅱ期以降の年代が考えられる。

SE3は、沢跡を埋め立てるⅣb層上面で検出された。遺物は出土していないため年代は不明であるが、Ⅳb層、Ⅳc層の年代を考慮すると、Ⅰ期の遺構の可能性が高い。

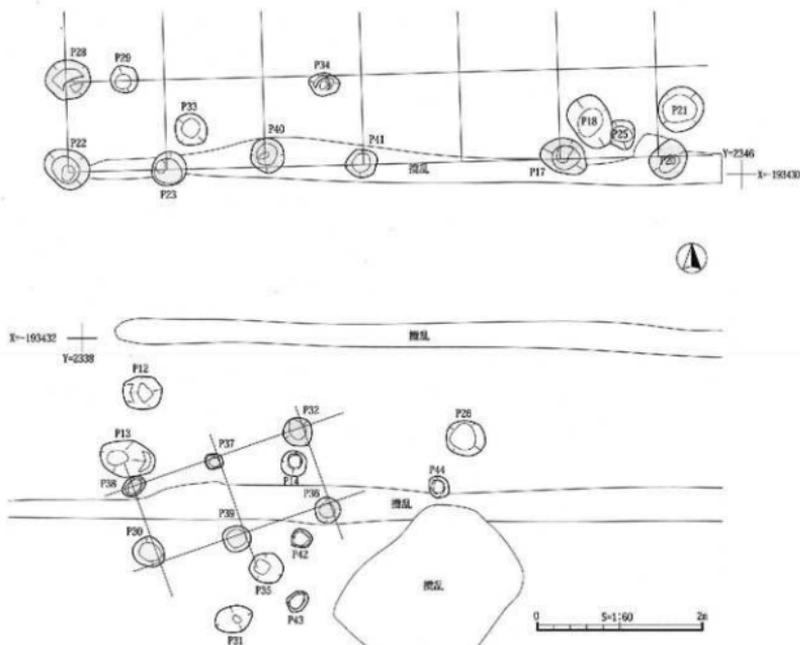
SE5は深さ1m程度の浅い井戸である。SE5は井戸としては浅く、底面が湧水点に達していないため、水溜等の施設の可能性もある。遺物は堆積土中より17世紀末～18世紀前半と思われる波佐見産の染付碗が出土している。出土遺物からⅡ期以降の年代が考えられる。

また、本文中では近代に帰属させたSE1、SE6の石組井戸がある。これらは検出面がⅡb層上面であり、遺物が出土しないか、堆積土中に近代の遺物や針金、鉄屑などがみられるため近代とした。しかし、両者の石組の構造や、井戸の鑿井後にⅡb層により井桁の周囲を整地される場合等も想定されるため、近世から近代まで継続して使用された可能性もある。特にSE1は近世にSB4によって埋められたものと考えられることから、鑿井の年代がⅢ期にさかのぼる可能性が高い。

(3) 柱跡

調査区中央付近では28基の柱穴が検出されており、18世紀代の遺物を伴うものがある。残存状況が悪く、明確な配列は見られなかったが、検出された柱跡から建物跡の推定を試みた。第123図は柱跡の分布状況から建物の配置を推定したものである。検出した柱跡は、大きく北と南に分けることができる。北側では、南北軸N1°-Wの6間×1間以上の建物が推定される。このうち、P17、P20、P40は根石を伴う。柱間は桁行で約1.2m(4尺)、梁行で約1.1m(3尺6寸)を測る。遺物はP20より18世紀の肥前産と考えられる染付碗、P20より19世紀の

第2節 検出遺構について



第123図 建物配置想定図

肥前産と考えられる紅土が出土しており、北側建物跡の年代は18世紀～19世紀代（Ⅱ期～Ⅲ期）が考えられる。

また、南側には南北軸N-19°-Wの2間×1間以上の建物跡が推定される。根石を伴うものは見られない。柱間は桁行で約1.1m（3尺6寸）、梁行で約1m（3尺3寸）を測る。遺物は出土しておらず、年代は不明であるが、北側建物と方位が異なることから同時期の存在ではないと考える。

柱間3尺6寸や4尺を基準とする建物跡は、仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4地点（註1）、平成18年度高速鉄道東西線関係遺跡（亀岡トンネル開削部）の発掘調査などで検出されている。これらの年代からもⅡ期～Ⅲ期の年代が推定される。絵図との照合により、道路東側の御炭藏に相当する部分で検出されていることなどから、御炭藏に関わる建物跡の可能性がある。また、北側建物跡では根石が見られることから、南側建物跡より堅牢なつくりであったとも考えられる。

（4）性格不明遺構

性格不明遺構はSX4、SX6、SX20、SX25、SX26、SX28、SX30の7基が検出されている。すべて調査区中央に集中して分布する。

SX4は北側に向かう緩やかに下る傾斜をもち、最も多様な遺物を伴う遺構で、17～19世紀中頃までの遺物が多く出土している。中でも陶磁器類は19世紀代のものが大半を占めており、遺物の出土状況からⅢ期に大量廃棄されたものと推定される。遺物は、色絵・イッチン技法など様々な文様構成をもつ大塚相馬産の土版や瑠璃釉

註1：東北大学博物館文化財調査センター「東北大学博物館文化財調査年報」2006 4尺の柱間を使う建物跡は二の丸北方武家屋敷跡第4地点の調査の結果（17世紀末～19世紀中葉）にみられる。また、3尺6寸の柱間を使う建物跡は同地点の2基（18世紀～19世紀中葉）において検出されている。

筒型碗、献上手の備前産徳利、森与平千秋の作による萬古焼急須、切込焼徳利等のほか、肥前産陶磁器、瀬戸・美濃産陶磁器が多量に出土している。

そのほか、SX6、SX20、SX25、SX26、SX28、SX30は形状が不整形で明確な立ち上がり認められない。このことから樹木等の抜根・整地跡、もしくは武家屋敷・御炭蔵関係の植栽痕と考えられる。SX20についても、遺構調査の段階で底面を削りすぎて平坦になっているが、本来は乱れており、これも樹木抜根によるものと思われる。SX6、SX28、SX30は遺物の年代からⅢ期と考えられ、その他の性格不明遺構については詳細な年代は不明である。

(5) 沢跡

V層上面で検出された沢跡(SR1c)は、近世に入り順次埋め立てられ、沢幅が狭まる。近世の沢跡はSR1b、SR1aの2段階が検出されている。

SR1bはIVb層、IVc層の順に埋め立てられ、沢幅が縮小した段階のものである。IVc層は大礫による土留めを伴う大規模な盛土である。IVb層は東に向かって緩やかに下る傾斜をもち、IVc層の上をテラス状に整地し面としたもので、IVc層と同時期に敷設されたものと思われる。SR1bの年代は、上部のIVa層の年代から1期と推定される。

SR1aはSR1bがIVa層により埋め立てられ、さらに沢幅が縮小した段階のものである。IVa層もIVb層と同様に東に向かって緩やかに下る傾斜をもつ。遺物は18世紀初頭以降と考えられる焼塩壺、17世紀初頭の志野丸皿、18世紀代の肥前産の鉢等が出土している。遺物の出土量は少量であるが、これらの年代から、IVa層の整地年代をⅡ期と推定することができる。

IV層の状況から、沢跡は2時期にかけて埋め立てられたと想定される。その普請の主となったものは、17世紀代は当地に居住していた小国氏が、18世紀代は藩が執り行ったと考えられる。

(6) 各遺構の時期区分

各遺構の所属時期を列記すると以下のようになる。

I期(武家屋敷期 17世紀代)・・・SA1、SD1b、SE3、SR1b

Ⅱ期(御炭蔵前期 18世紀代)・・・SD1a、SD2、SE2、推定建物跡2棟、SR1a

Ⅲ期(御炭蔵後期 19世紀代)・・・SD1a、SD2、SE1、SX4、SX6、SX28、SX30、推定建物跡2棟、SR1a

不明 SD5、SE5、SE6、SX20、SX25、SX26

これらのうち、SD1aはⅡ期からⅢ期にまたがって存在していた可能性がある。SD5についてはⅠ期ないしはⅡ～Ⅲ期の年代と思われるが、詳細な時期区分については遺物が出していないため不明である。また、柱跡から推定される建物跡についてもⅡ期～Ⅲ期の年代が考えられる。北側建物と南側建物については方位の違いにより時期差が想定されるが、その新旧関係を把握することはできなかった。

各時期の遺構分布から、I期において敷地東側の奥につくられた井戸は、Ⅱ期には推定建物跡の北側に移り、Ⅲ期には再び奥に戻るという空間利用の変化が見て取れる。また、抜根・整地と思われる性格不明遺構がⅢ期に所属していることから、Ⅲ期に改築等の再配置があった可能性がある。

第1節で触れた出土遺物のピークと、本館において推定した遺構の年代は、武家屋敷から御炭蔵へと変化する土地利用のありかたと整合する。調査区内は近代以降の削平によって大部分が失われているが、復元を試みると上記の様であったと推測される。

3 近代

近代の遺構面はⅡb層上面が検出されている。検出された近代建造物にはSB1、SB4、擁壁跡があり、これらは「仙台師管区経理部「各部隊配置図・国有財産台帳附図」口座番号2「仙台連隊区司令部第二師團兵器部庫下倉庫」(以下「国有財産台帳附図」と略す)に記載されている(第125図)。仙台師管区は昭和16年から使用され始めた名称であるが、この附図と対になる全体図には「大正11年」と書かれており、実際に作成されたのは大正11年と考えられる。そのため、Ⅱc層から出土している昭和15年の貨幣については、混入と判断される。

近代面の年代幅は第二師團が設置される明治21年(1888)～昭和20年(1945)までの58年間である。検出されたSB1については作り替えの可能性がある、2時期に細分されることも想定される。国有財産台帳附図が大正11年に作成されたとすると、それ以前の遺構は図面にでていないものがあると思われる。

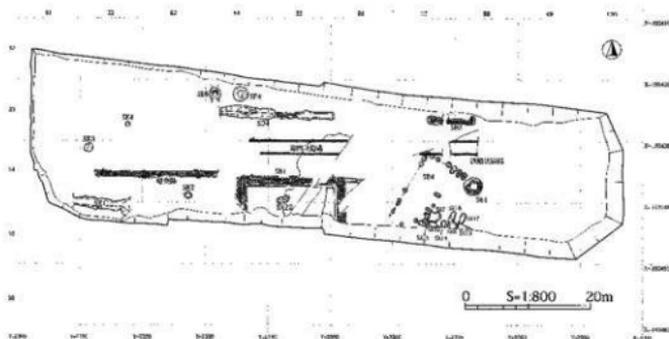
SB1は「荷造場」、SB4は「露天馬場」に比定される。また、SB4のコンクリート面の下からは、不整形の性格不明遺構が複数検出された。これらは露天馬場造成のための抜根・整地跡と考えられる。

(1) 建物跡

SB1は国有財産台帳附図に見られる荷作場に相当する建物である。コンクリート床面、壁面の基礎と思われる切石、その土台となるコンクリートや玉砂利が検出された。また、間知石を用いた雨落溝が検出され、清底面では丁寧に布石が敷き詰められていた。また、コンクリート床を除去すると、新たにコンクリートの間仕切りが検出された。この間仕切りを境に、西側では12個の整列した礎石が検出され、東側は玉砂利を敷き詰め基礎としており、構造の違いが観察された。これについては内部の利用方法に関する構造の違いと考えることもできるが、拡張の痕跡を明瞭に確認できなかったものの、本来礎石立建物があり、その後拡張するにあたってコンクリート床面を敷設した可能性が高いと考えられる。

西側の礎石部分ではⅡc層が検出されず、建物の拡張に伴いⅡc層の整地を行ったことも考えられる。この場合、Ⅱc層が第二師團設置にともなう整地層であるため、礎石建物のみは、可能性は低いと思われるもののⅢ期にさかのぼる別の遺構ということも考えられる。

また、国有財産台帳附図に見られる擁壁跡や、露天馬場と思われるSB4等も検出された。近代の図面に出てくる建造物跡が確認された。そのほか、道路状遺構、暗渠などが検出されているが、これらはSB1と方位を同じくしており、第二師團による同時施工と考えられる。



第124図 近代の遺構配置図

(2) 沢跡

近世以降の絵図・地図などに描かれ、調査区内でSR1a・bとして検出された沢跡は、直上に第二師団の整地土が堆積しており、近代に埋め立てられた状況が観察された。調査区の南東側では、沢の痕跡と思われる地形が残っている（第125図）。これは、明治26年「仙台市測量全図」、明治33年「最新実測仙台市全図」に同様の地形が記載されており、第二師団による埋め立て後の地形が現在まで残っているものである。また、国有財産台帳附図との合成図からみると、SR1a・b上にあたる位置に、直線で描かれた配水管のようなものが表現されており、第二師団が沢のあった場所を暗渠排水として利用していた様子がみと取れる。



第125図 調査区と沢跡・近代建物跡（「仙台師管区経理部『各部隊配置図・国有財産台帳附図』を赤色で合成」）

* 「仙台師管区経理部『各部隊配置図・国有財産台帳附図』は仙台市歴史民俗資料館の複製資料（複製民第127号）を参照し使用した。
 ● 調査の測量図は東武線開通地形図を使用した。

第5章 まとめ

1. 本遺跡では近世以前～近代までの遺構が検出された。近世以前の遺構としてV層上面の沢跡1条(SR1c)を検出した。近世以降から近代までの遺構として、IVb層上面で沢跡1条(SR1b)、井戸跡1基、III層上面で沢跡1条(SR1a)、柱穴列遺構、溝跡3条、井戸跡2基、柱跡、性格不明遺構9基を検出した。近代の遺構としてIIb層上面で建物跡3基、土坑3基、溝跡1条、井戸跡3基、暗渠1条、道路状遺構1条、性格不明遺構8基を検出した。総遺構数は41基である。

2. 出土遺物の総数は7094点にのぼる。遺物は縄文土器、瓦、陶器、土師質土器、瓦質土器、磁器、石製品、石器、木製品、金属製品、銭貨、土製品等がみられ、磁器が最も多く46%を占め、次いで陶器が31%となる。磁器は肥前・瀬戸・美濃、切込等がみられ、陶器は肥前(唐津)、瀬戸・美濃、萬古、備前、大塚相馬、小野相馬、埴、岸、輸入陶器等がみられる。

3. 近世以前の状況を示すものとして、調査区の東側で沢跡1条(SR1c)が検出された。この沢跡は、近世以降、継続的に埋め立てられており、沢幅は徐々に縮小していく。旧表土は上層からの攪乱により検出されなかったため、本来の地形は不明である。

4. 近世～近代初頭の遺構はI～III期に時期区分可能である。I期は17世紀代、II期は18世紀代、III期は19世紀代に相当する。

5. I期は当地に武家屋敷が建っていた時期にあたり、沢地形を盛土・整地した跡(IVc層、IVb層)、道路側溝や欄列の可能性のある遺構(SA1、SD1b)、井戸(SE3)等が検出された。SR1c沢跡は、盛土・整地され沢幅が縮小した段階のもの(SR1b)が検出されている。遺物は絵唐津、志野、華南三彩等の稀少品も出土している。

6. II期は当地に御炭蔵が造営されていた前半段階に相当する。前段階の道路側溝や欄列は位置を微妙に変えながら存続する(SD1a、SD2)。その他に、柱跡や井戸(SE2)等が検出されている。柱跡から2棟の建物跡が推定される。I期のSR1bはさらに整地されて沢幅が縮小する(SR1a)。遺物については、肥前磁器の生活雑器が主体を占め、焼接等の補修痕をもつ碗・皿類がみられる。

7. III期は当地に御炭蔵が造営されていた後半段階から東北鎮台が置かれるまでに相当する。道路側溝、欄列は引き続き存続していたと思われる(SD1a、SD2)。また、抜根・整地痕が検出され、敷地内の整備が行われた可能性がある(SX6、SX28、SX30)。調査区北側では当該期に多量の遺物を一括廃棄したと思われるSX4が検出された。遺物については、磁器は肥前に替わり瀬戸・美濃が主体となる。陶器は大塚相馬、埴等の近隣の窯で生産された生活雑器が増加する。

8. 近代においては、仙台師管区経理部・国有財産台帳附图にみられる建造物が同位置で検出された。特に建物の基礎(SB1)は、当時の建築物の施工技術を考える上で貴重な資料である。

付章 その他近代の出土遺物

川内 A 遺跡では、近代の遺物が多数出土した。その中から土管・銃弾・間知石について記載する。

これらの遺物は近代の生産・流通、軍隊の実態を示す歴史的資料であるが、本報告の中心から外れるため、付章として掲載したものである。

(1) 土管

川内 A 遺跡出土の土管は胴部形態から 2 類に分類できる。

I 類・・・直胴形式

II 類・・・Y 字形式

I 類は接続部形態から 3 類に分類される。I-1 類は接続部が L 字状に屈曲し、I-2 類は I-1 に類似するが接続部外形が朝顔形に広がる種類のもがこれに相当する。また、I-3 類は接続部内面に段を持たない。I-1 類は胴部の特徴からさらに 2 つに細分され、胴部に継ぎ目のないものを I-1a 類、胴部中位付近に継ぎ目のあるものを I-1b 類とした。II 類は 2 本の土管を Y 字に接合しているものを指す。接合部は粘土を厚く充填して補強している。接続部の形態は I-1 類と同形である。全て外面に施釉されている。

これらの土管は近代の堤焼産である。堤焼土管は大正～昭和頃に生産・流通の最盛期がある。今回出土したものは手轆轤で成形されており、昭和の土管は機械轆轤を用いるもの（精管）であることから、本遺跡出土の製品はそれより古い段階のものに位置づけられる（註 1）。

また、堤焼きの窯元、佐大窯の大正～昭和にかけての出荷台帳（註 2）には、「直 I」のほかに「T 字」・「L 字」などの規格化して生産したと思われる土管の記載が見られる。本遺跡で出土した土管に T 字・L 字土管は見られず、大正時代以前の製品の可能性が高い。

各種類とも混在して使用されており、また切り合い等からも年代の序列は把握できなかったが、これらの土管の年代は明治時代～大正時代とみることができる。

(2) 銃弾

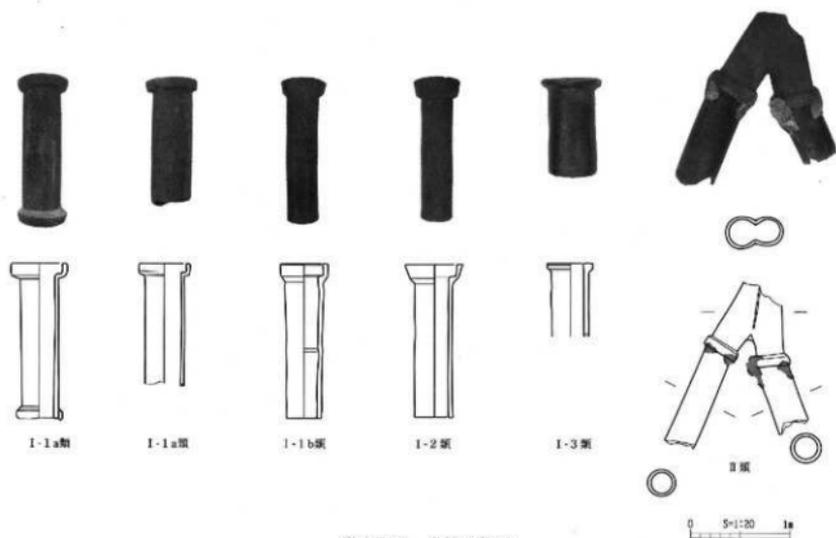
調査区の西側を中心に銃弾が多数出土している。第 127 図 - 1 は全長 76 mm、基部径 10.1 mm、口径 6.5 mm のもので、小銃、軽機関銃等に広く使用された。調査区の場所は近代に兵器廠であり、多量の銃弾を保管していたと考えられる。

(3) 間知石

今回の調査で出土した間知石は SB1 の雨落溝で使用されていたもので、外側 55 個、内側 54 個が出土した。第 124 図は雨落溝北西側で出土した間知石である。安山岩製のもので、控え長 36 cm、小口縦 31.2 cm、小口横 44.5 cm を測る。矢穴の位置は→で示した。

間知石は、近世以降の石垣等で使用される加工の施された石で、仙台城本丸では III 期石垣（17 世紀後半以降）にみられ、同三の丸では 18 世紀初頭～19 世紀代の間知石列が検出されている（註 3）。正面は方形または長方形を呈し、奥行き（控え）を角錐状に削るという特徴がある。石を削り出す際についたと思われる矢穴も、出土数の約 1/3 の間知石で観察することができた。小口横と小口縦がほぼ同比率になる正方形に近いものと、小口横が小口縦の 1.5 倍程度になる長方形を呈するものの 2 種類が見られる。出土比率は、全体の 6 割を前者が占めている。

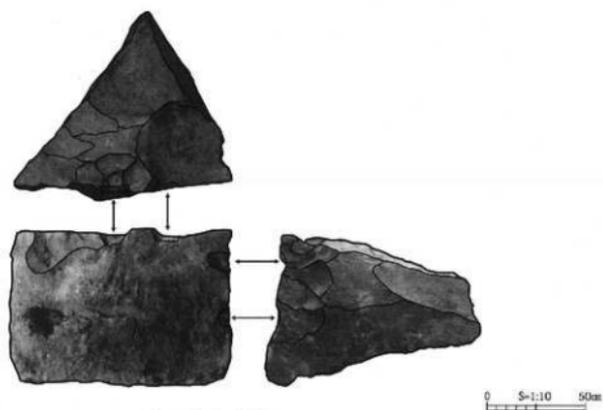
註 1：窯型の分類については大入マツタリ氏の調査結果を参考に示した。
 註 2：佐大窯北西側内側調査報告書 16 頁「堤焼窯元『佐大窯』内装所、昭和 1997 ほか
 註 3：佐大窯北西側内側調査報告書 17 頁「石垣（二九）」 報告書教育委員会、2003、13 頁



第126図 土管分類図



第127図 出土した銃弾



第128図 間知石

参考文献

- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 大橋康二・西田宏子監修 1988『古伊万里』平凡社
- 大橋康二 1994『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』理工学社
- 大橋康二編 2002『そば猪口事典』平凡社
- 角川書店 1994『宮城県姓氏家系大辞典』
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 九州近世陶磁学会 2002『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通を探る 第1分冊』
- 九州近世陶磁学会 2002『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通を探る 第2分冊』
- 坂田啓編 1995『私本仙台藩士事典』創栄出版
- 汐留地区遺跡調査会 1996『汐留遺跡』
- 芹沢長介ほか編 1981『日本やきもの集成 1 北海道 東北 関東』平凡社
- 満岡忠成ほか編 1981『日本やきもの集成 6 近畿 (II)』平凡社
- 仙台市教育委員会 1985『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集
- 仙台市教育委員会 1986『柳生』仙台市文化財調査報告書第95集
- 仙台市教育委員会 1997『養種園遺跡』仙台市文化財調査報告書第214集
- 仙台市教育委員会 2000『沼向遺跡第1～3次調査』仙台市文化財調査報告書第241集
- 仙台市教育委員会 2002『仙台城跡 1 - 平成13年度調査報告書 -』仙台市文化財調査報告書第259集
- 仙台市教育委員会 2003『仙台城跡 2 - 平成14年度調査報告書 -』仙台市文化財調査報告書第264集
- 仙台市教育委員会 2004『仙台城跡 3 - 平成15年度調査報告書 -』仙台市文化財調査報告書第270集
- 仙台市教育委員会 2004『仙台城跡 4 - 平成15年度調査報告書 -』仙台市文化財調査報告書第271集
- 仙台市教育委員会 2005『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査(1)概要報告書』仙台市文化財調査報告書第289集
- 仙台市教育委員会 2006『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査(2)概要報告書』仙台市文化財調査報告書第302集
- 仙台市環境計画課編・松本秀明監修 2001『せんだい空中写真集 - 社の都のいまわかし』仙台市環境計画課
- 仙台市史編さん委員会 1994『仙台市史 特別編1 自然』
- 仙台市史編さん委員会 1995『仙台市史 特別編2 考古資料』
- 仙台市史編さん委員会 2004『仙台市史 通史編5 近世3』
- 高倉淳ほか編 1994『絵図・地図で見る仙台第一輯』今野印刷株式会社
- 高倉淳ほか編 2005『絵図・地図で見る仙台第二輯』今野印刷株式会社
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1993『東北大学埋蔵文化財調査年報 6』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1994『東北大学埋蔵文化財調査年報 7』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997『東北大学埋蔵文化財調査年報 8』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2000『東北大学埋蔵文化財調査年報 13』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2005『東北大学埋蔵文化財調査年報 18』
- 中川久夫他 1960『仙台付近の第四系および地形 (1)』第四期研究 1
- 兵庫埋蔵文化財調査会 1996『日本出土銭総覧』
- 宮城県文化財保護協会 1990『切込窯跡』宮崎町文化財調査報告書第3集

写真図版

— 遺構写真 —



1. 航空写真は仙台市博物館蔵の資料を借用し使用した(承認番号第14号)。
2. 照合には仙台師管区経理部「各部隊配置図・国府財産台帳附図」を使用した(無人蔵。仙台市歴史民俗資料館よりコピー(仙歴民第127号)を借用し掲載)。

図版1 遺跡周辺航空写真(昭和20年5月25日・米軍撮影)および第二師団建造物との照合図



1. Wc層及びSR1a・c (西より)



2. SR1c完掘状況 (南より)

図版 2 沢跡



1. IV層白断面 (南より)



2. IV層 土層の状況 (南東より)



3. IV層 焼土層出土状況 (南より)

図版3 沢跡及び整地層IV層



1. SE3 堆積土 (南より)

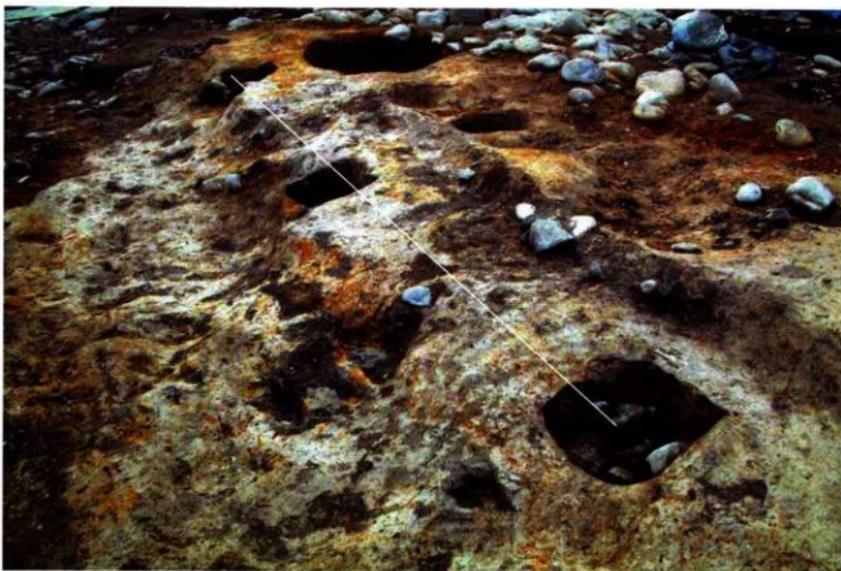


2. SE3 及びIV層 (南より)

図版4 IVb層上面1



1. SE3 石積状況 (南より)



2. SA1 完備状況 (北東より)

図版 5 IVb 層上面 2・III 層上面 1



1. SD1b 完掘状況 (北より)



2. SD1a 完掘状況 (南より)

図版 6 Ⅲ層上面 2



1. SD1b 堆積土 (南より)



2. SD2 堆積土 (北より)



3. SD2 完備状況 (北より)



4. SD5 完備状況 (北より)

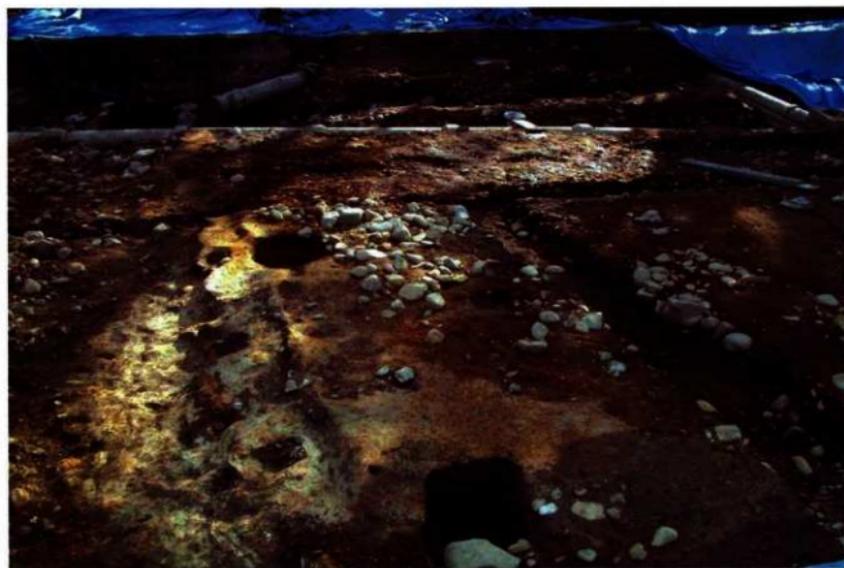


5. SD5 堆積土 (北より)

図版 7 III層上面 3



1. SD1a・SD2 完備状況 (西より)



2. SD1b・SD2 完備状況 (北より)

図版 8 Ⅲ層上面 4



1. SE2 完備状況 (南より)



2. SE2 増積土 (南より)

図版9 III層上面5

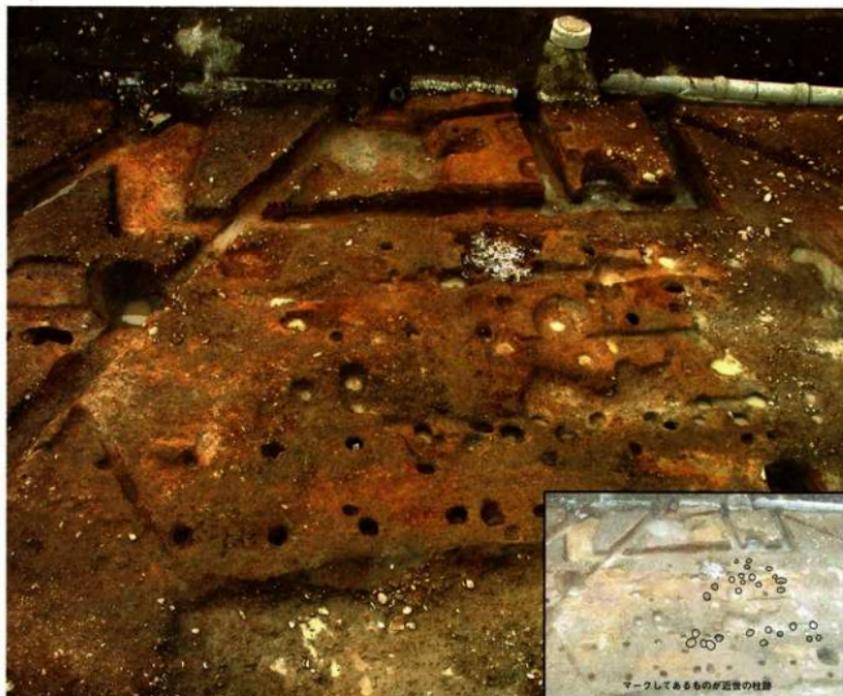


1. SE5実態状況 (北より)



2. SE5埋積土 (北より)

図版 10 Ⅲ層上面 6



1. 柱跡全景 (北より)



2. 柱跡 P18遺物(蚊遣り鉄脚)出土状況 (南より)

図版 11 Ⅲ層上面 7



1. SX4 遺物出土状況 (南より)



2. SX4 遺物出土状況 (南より)



3. SX4 遺物出土状況 (南より)



4. SX4 遺物出土状況 (南より)



5. SX4 埴輪土・糠状況 (南東より)

図版 12 III層上面 8



1. SX4 完備状況 (西より)



2. SX4 増積土・西側 (南より)



3. SX4 増積土・中央 (南より)



4. SX4 増積土・東側 (南より)

図版 13 Ⅲ層上面 9



1. SX6 完備状況 (西より)



2. SX6 堆積土 (西より)



3. SX20 完備状況 (東より)



4. SX20 堆積土 (東より)



5. SX24 完備状況 (西より)



6. SX24 堆積土 (西より)



7. SX25 完備状況 (南西より)



8. SX25 堆積土 (北より)

図版 14 Ⅲ層上面 10



1. SX26 完備状況 (北より)



2. SX26 埋積土 (北より)



3. SX27 完備状況 (北より)



4. SX27 埋積土 (北より)



5. SX28 完備状況 (北より)



6. SX28 埋積土 (西より)



7. SX30 完備状況 (南より)



8. SX30 埋積土 (南より)

図版 15 Ⅲ層上面 11



1. SB1 コンクリート床面状況 (東より)



2. SB1 コンクリート床下玉石状況 (東より)

図版 16 IIb 層上面 1



1. SB1 四方基礎玉石状況 (北東より)



2. SB1 四方基礎掘り上げ状況 (北東より)



3. SB1 雨落溝西側状況 (西より)



4. SB1 雨落溝東側状況 (東より)



1. SB4全景 (北西より)



2. SB4柱材出土状況 (西より)



3. SB4柱材出土状況 (西より)



4. 擁壁基礎玉石状況 (南西より)

図版 18 IIb層上面 3



1. SK2 完掘状況 (北より)



2. SK2 堆積土 (北より)



3. SK3 完掘状況 (北より)



4. SK4 完掘状況 (北西より)



5. SD4 石積状況 (南より)



6. SD4 完掘状況 (西より)



1. SE1 石組状況 (南より)



2. SE1 埋積土 (南より)

図版 20 IIb 層上面 5



1. SE4 完備状況 (南より)



2. SE6 石輪状況 (南より)

図版 21 IIb 層上面 6



1. SE4 堆積土 (南より)



2. SE6 堆積土 (南より)



3. SE6 断ち割り状況層 (南より)



4. 調査跡全景 (北東より)

図版 22 IIb 層上面 7



1. 道路状遺構全景 (西より)



2. SX1 完備状況 (東より)

図版 23 IIb 層上面 8



1. SX8、13、16、17完備状況 (北西より)



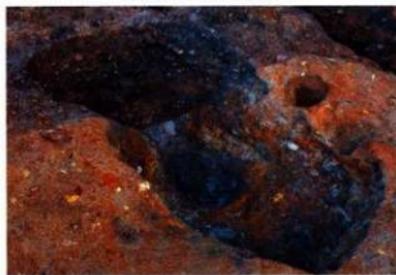
2. SX12完備状況 (北西より)



3. SX14完備状況 (北西より)



4. SX22遺物出土状況 (北西より)

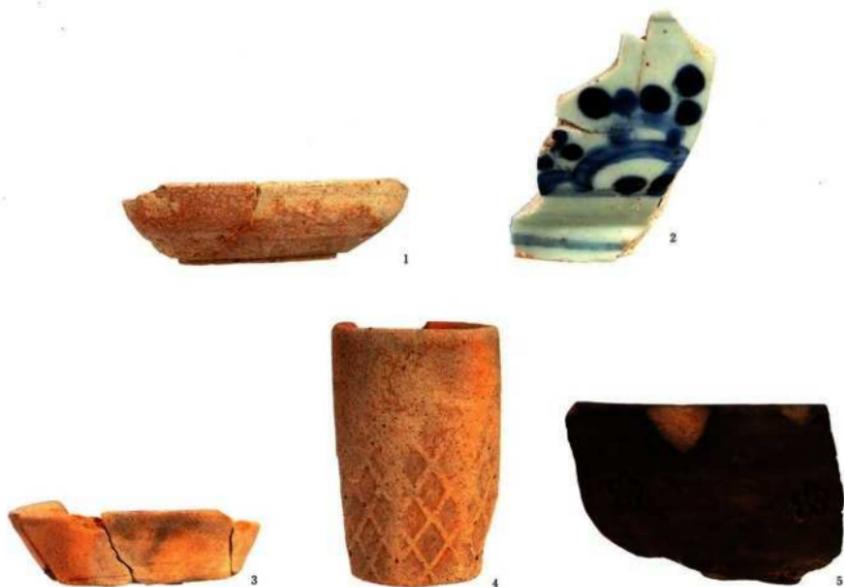


5. SX22完備状況 (北西より)

図版 24 IIb 層上面 9

写真図版

— 遺物写真 —



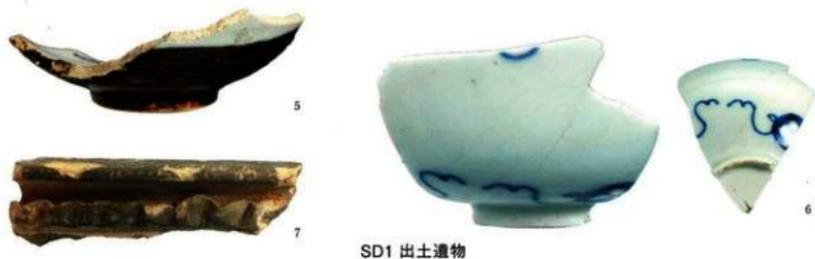
SR1 出土遺物



SD1 出土遺物

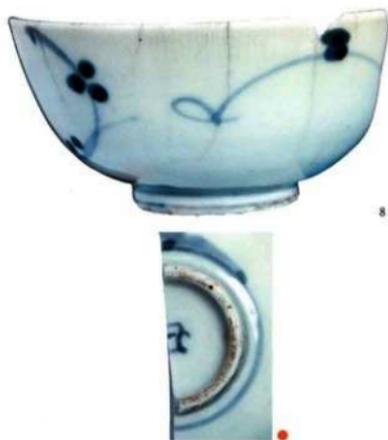
凡例 ●見込み ●底部

図版 25 SR1 出土遺物及び SD1 出土遺物 1



図版 26 SD1 出土遺物 2 及び SE2 出土遺物 1

凡例 ● 見込み ● 底部



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 27 SE2 出土遺物 2



13



●



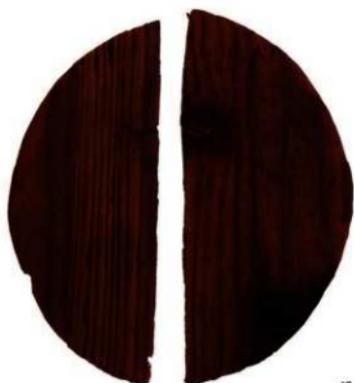
14



● 15



16



17



18



19

图版 28 SE2 出土遺物 3

凡例 ● 足込本 ● 底部



SE5 出土遺物



P17 出土遺物



P18 出土遺物



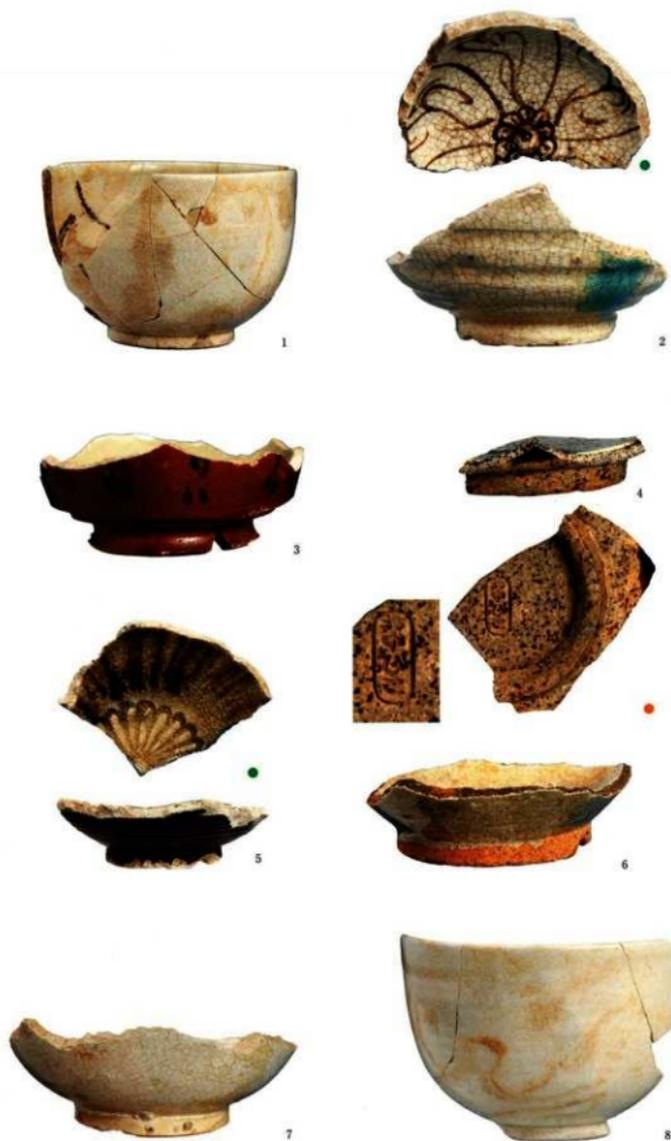
P20 出土遺物



P23 出土遺物

凡例 ● 見込み ● 底部

図版 29 SE5 出土遺物及び P17・P18・P20・P23 出土遺物



图版 30 SX4 出土遗物 1

凡例 ● 见込み ● 底部



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 31 SX4 出土遺物 2



16



17



18



19



20



21



22



23

图版 32 SX4 出土遺物 3

凡例 ● 見込本 ● 底部



24



25



26



27



28



29

凡例 ● 見込み ● 底部

図版 33 SX4 出土遺物 4



图版 34 SX4 出土遺物 5

凡例 ● 见标本 ● 底部



86 ~ 109



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 35 SX4 出土遺物 6



图版 36 SX4 出土遺物 7

凡例 ● 见込み ● 底部



●



52



●



55



56



53



●



●



54



●



57



●

凡例 ●見込み ●底部

図版 37 SX4 出土遺物 8



図版 38 SX4 出土遺物 9

凡例 ● 見込み ● 底部



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 39 SX4 出土遺物 10



74



75



76



78



77



图版 40 SX4 出土遺物 11

凡例 ● 見込木 ● 底部



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 41 SX4 出土遺物 12



112



113



114



115



116



117



118



119

图版 42 SX4 出土遺物 13

凡例 ● 見込み ● 底部



120



121



122



123



124



125



126



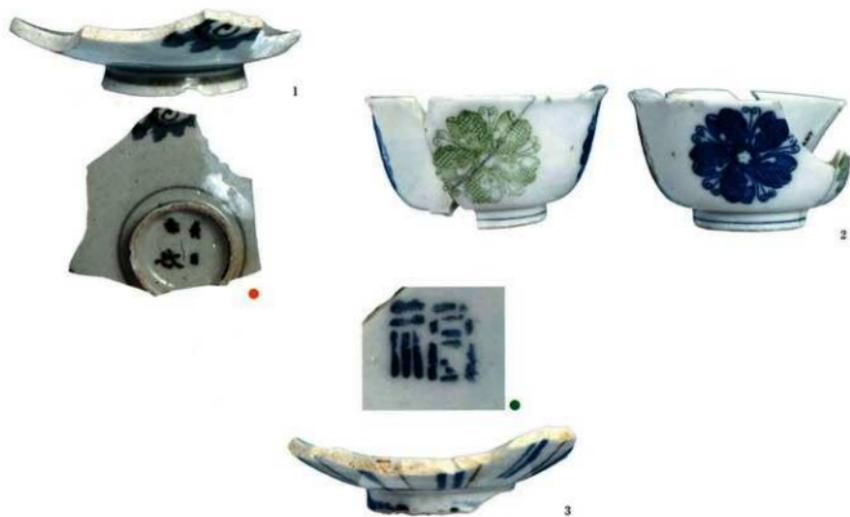
127

凡例 ● 見込み ● 底部

図版 43 SX4 出土遺物 14



SX6 出土遺物



SB1 出土遺物

図版 44 SX6 及び SB1 出土遺物

凡例 ● 見込み ● 底面



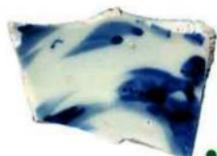
凡例 ● 見込み ● 底部

図版 45 SD4 出土遺物 1



图版 46 SD4 出土遺物 2

凡例 ● 見込み ● 底部



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 47 SD4 出土遺物 3



图版 48 SE1 出土遗物



SX1 出土遺物



SX7 出土遺物

凡例 ● 見込み ● 底部

図版 49 SX1 及び SX7 出土遺物



SX13 出土遺物



SX17 出土遺物



SX22 出土遺物

図版 50 SX13・SX17 出土遺物及び SX22 出土遺物 1

凡例 ●見込み ●底部



SX22 出土遺物



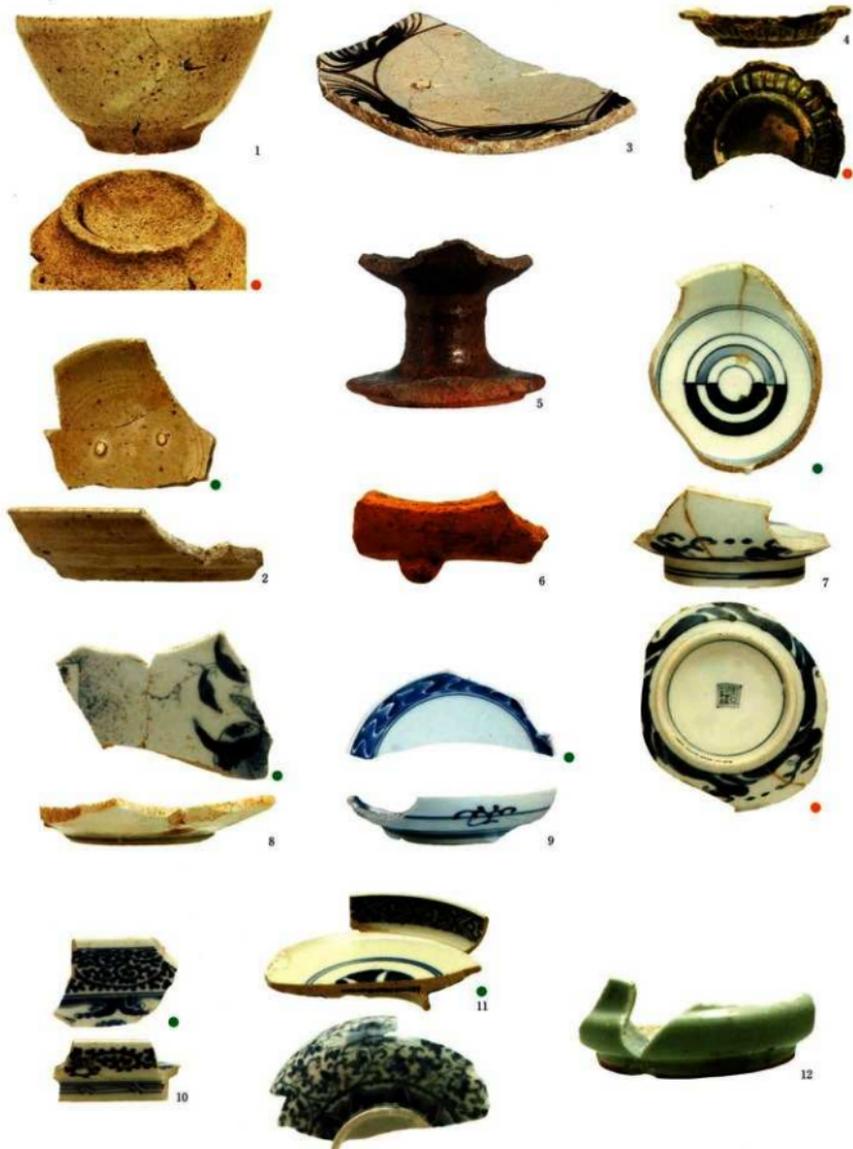
SX28 出土遺物



SX30 出土遺物

凡例 ● 見込み ● 底部

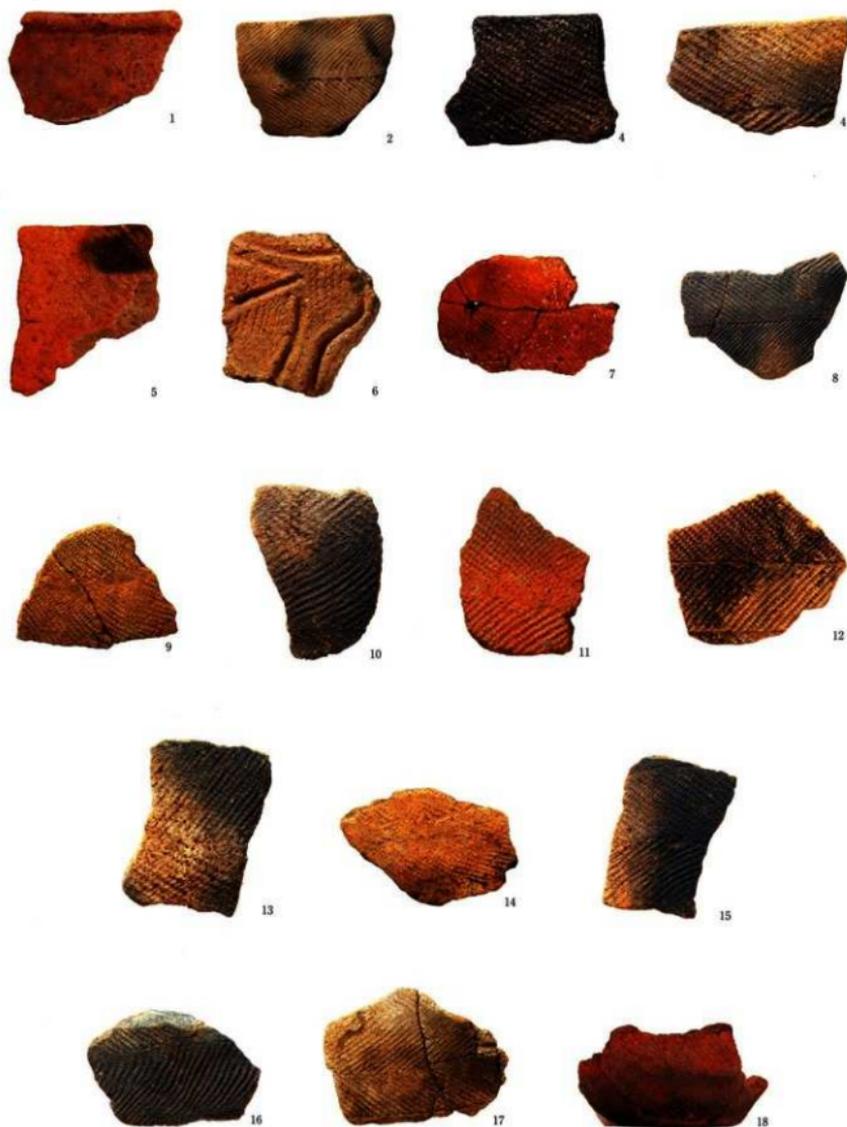
図版 51 SX22 出土遺物 2 及び SX28・SX30 出土遺物



图版 52 Ⅲ層整地層出土遺物

凡例 ● 足込み ● 底部

出土遺物写真



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 53 基本層 Va 層出土遺物



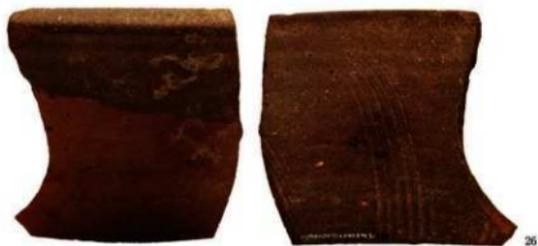
图版 54 基本層 I ~ II 層出土遺物 1

凡例 ● 見込み ● 底部



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 55 基本層 I ~ II 層出土遺物 2



図版 56 基本層 I ~ II 層出土遺物 3

凡例 ● 見込み ● 底面

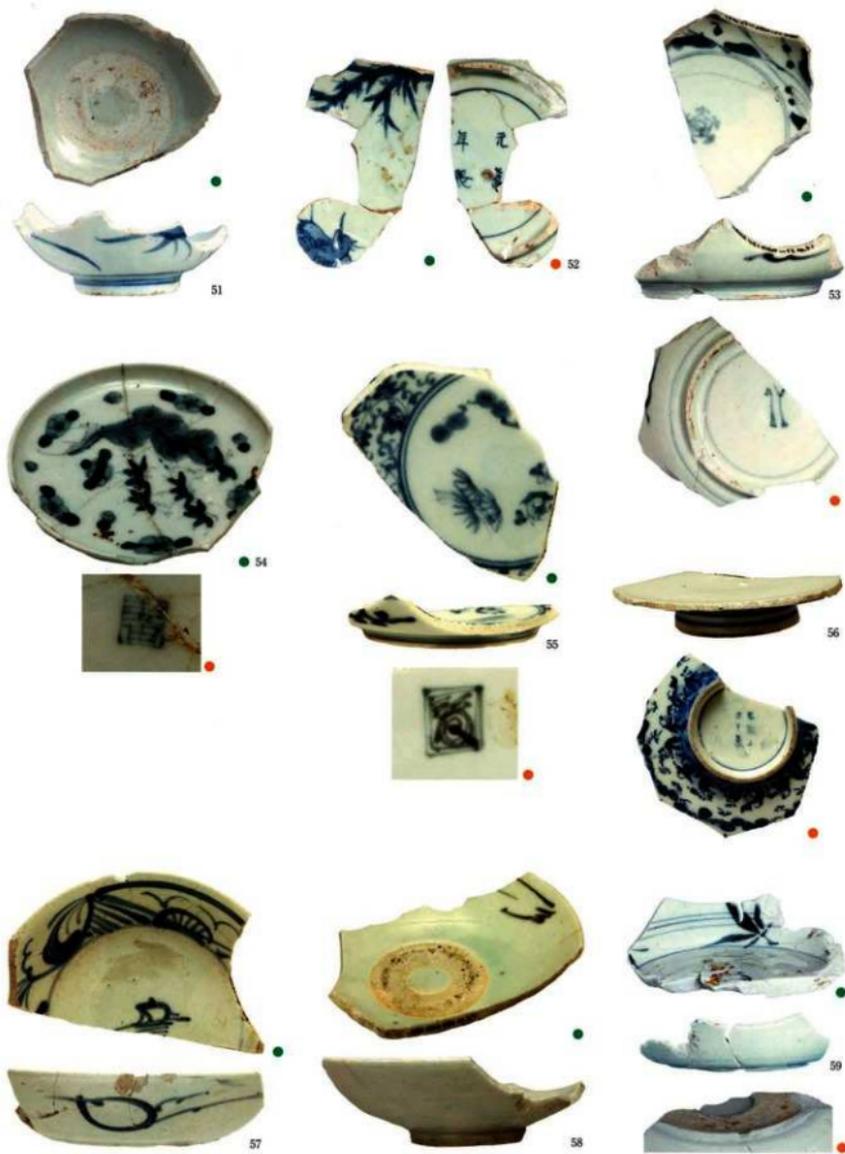


図版 57 基本層 I ~ II 層出土遺物 4



図版 58 基本層 I ~ II 層出土遺物 5

凡例 ● 見込み ● 底部



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 59 基本層 I ~ II 層出土遺物 6



图版 60 基本層 I ~ II 層出土遺物 7

凡例 ● 見込み ● 底部



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 61 基本層 I ~ II 層出土遺物 8



図版 62 基本層 I ~ II 層出土遺物 9

凡例 ● 見込み ● 底部



凡例 ● 見込み ● 底部

図版 63 基本層 I ~ II 層出土遺物 10



图版 64 基本層 I ~ II 層出土遺物 11

凡例 ● 見込み ● 底部

報告書抄録

ふりがな	かわうちAいせき-せんだいしこうそくてつどうとうざいせんかんけいせいせきはくつちょうさほうこくしょI-							
書名	川内A遺跡-仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書I-							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第312集							
編集者名	佐藤甲二 竹内俊之 守谷健吾 土橋尚起 小林孝彰							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL 022 (214) 8893~8894							
発行年月日	2007年 2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市区町村	遺跡番号					
	<small>みやぎけんせんたいし</small> 宮城県仙台市 <small>あおば区あおばやま</small> 青葉区青葉山 <small>ふたつちのうらな</small> 2丁目地内	04100	宮城県 01033	38° 15' 37"	140° 51' 24"	2005.6.13 ~ 2006.1.27	1973㎡	仙台市高速鉄道東西線建設事業に伴う発掘調査
かわうちAいせき 川内A遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
	散布地 城館跡	縄文時代 江戸時代 明治時代	井戸跡 ピット・溝跡 盛上整地遺構 建物跡	縄文土器 近世陶磁器 瓦 土製品 木製品				

仙台市文化財調査報告書 第312集

川内A遺跡—仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ—

2007年2月

発行 仙台市教育委員会
宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号
文化財課 022 (214) 8893~8894

印刷 株式会社 東北プリント
本社 仙台市青葉区立町24-24
工場 仙台市若林区鶴代町5-80
TEL 022 (263) 1166

